
仮面ライダーディケイド～version改～

氷雲しょういち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド〜version改〜

【Nコード】

N4600K

【作者名】

氷雲しょういち

【あらすじ】

その昔、ある世界でライダー大戦が行われた。

そこからずっと後の世界で、再び世界が滅びようとしていた。

そこに仮面ライダーディケイドとなり、門矢士が世界を守ることを青年から言い渡される。

超変身！キバって行くぜ！俺も、参上！運命の切り札をも、掴み取れ！

本家ディケイドと違い、各世界の原典に沿いつつの作品です。

そして、おかげさまで、総計読者数9000人突破！総計アクセス数30000アクセスも突破いたしました！！

また、感想もユーザー登録なしでできるようにしましたので、どうぞどなたもお気軽に「ご意見・ご感想等」をお寄せください。

#1 プロローグ・ストーリー（前書き）

2009年の2月から8月末、平成の仮面ライダーの10周年を記念して放送された仮面ライダーディケイド。

二話構成の無理やりさを感じつつも付き合っていると、映画に丸投げされ、正直がっかり。また、このライダーの原典の細かい設定に沿っていないものがほとんどでした。それにもがっかりしてしまつたので、この、原典になるべく沿った作品を作ってみることにしました。しかし、ディケイドの設定を大きく変えている部分が少々見受けられます。それでもいい、という方はどうぞ先にお進みください。

また、文才があるとは思っていませんし、高校に行きながらでの連載のため更新は遅いかもしれませんが、気長に付き合ってください。と、幸いです。ちなみに、一つの世界は、一気に簡潔まで出すようにします。（逆に言えば、一つの世界が完成するまで更新はストップさせるつもりです）

では、僕なりのディケイドを、どうぞ。

#1 プロローグ・ストーリー

そこは、とある世界の辺境。静かな大地が広がっていた。太陽は照りつけていたが、気温はさほど高いわけではない。上々だ。

——だが、そんなことは関係ない。

爆発を起こした、彼ら——仮面ライダー達には。

ドーーーーーン!!!!

穏やかな地に爆風と爆炎が広がる。

そこから駆けてきたのは、——大人数の仮面ライダー達であった。ある者は剣を、またある者は銃、ロッド、鞭……総員、武器を構えたりして戦闘態勢である。

前からクウガ、アギト、龍騎、555、剣……各軍の首領だ。後ろには、威吹鬼、ガタック、ゼロノス、イクサ、アクセルなど、各々の軍が誇る屈強な先鋭たちも揃っていた。彼らにとっては万全の状態だ。

ライダー達も、一部を除いて、勝機あった。いくら強者とはいえ、これほどの戦力を差し向けられれば、倒せぬものなどいない、と。ましてや、敵はたったの一人である。勝たないわけがない。いや、勝ちしか見えていなかった。と言っても過言ではない。

だが、彼らのその幻想は、粉々に打ち砕かれた。

『ATTACK RIDE PRESURE』

ライダー達の大多数は、その電子音とともに地面へ叩きつけられた。重力が数倍に跳ね上がったのだ。

元々、戦闘種族しかないこの世界はなぜか地球とは比べ物にならない重力である。動けるものはそうはいない。

「なんだ、これは?!」

「ダメだ……動けん……」

その中で這い上がったものは、——

『TRIAL』 『Clock Up』 『ザコーゾ ザコーゾ』 『ABSORB・FUSION』
各々の能力・技を駆使した十数人。それは先鋭や首領ばかりで、普通の戦闘なら圧勝だが、今回ばかりは相手が相手である。とても勝ち戦とは思えない。

そして立ち上がった先鋭たちは、全速力の半分ほどしか動けない体を奮い立たせ、相対す敵・マゼンダのシルエットのライダーに向かつていった。

マゼンダのライダーは、無言で先鋭たちをあしらう。全て素手である。

立ち上がった先鋭を一掃すると、彼の視線は自然と首領たちへ向けられた。

マゼンダのライダーは一枚カードを取り、バツクルに入れる。

『ATTACKRIDE SRUSH』

手に持っていた薄いケースを剣にし、一歩ずつ静かに歩き始めた。彼には『PRESSURE』の力などどうでもいいらしい。首領たちは雄叫びを上げ、駆け出した。

——数秒後、彼の周りに首領たちの屍が無惨に転がっていた。

全てを斬り伏せると、マゼンダのライダーは、無言でそこを立ち去った。

1―門矢士

ここは光写真館。俺は今、受付のナツミカンを前にして話している。

「おい、ナツミカン」

「夏海です。土くん、いい加減に家賃払ってくださいよ。3か月分も滞納してるんだから」

「お前は細かいことを気にしすぎだ、ナツミカン。小皺が増えるぞ」

「し、皺なんかできる歳じゃありません」

「じゃあ、恋人ができないなら、どうだ」

「ぐっ……」

「よし、勝ちだ」

と上弁に話している俺は、門矢士。20歳でカメラマンだ。

話し相手は、ナツミカン。本名は、光夏海。この写真館の受付をしている。

ここ光写真館は、ナツミカンの祖父・光栄次郎が営むなぜかうまいコーヒーの店だ。とはいえ、実際は写真の現像などをするしかない写真館だ。客の数も、はっきり言って少ないと見える。

しかし、栄次郎の出すコーヒーは（副職でもないらしいが）案外うまい。

「とにかく」

ナツミカンは机を打った。

「家賃払えないなら、即刻出て行ってください。もともと貸家でもないんですから」

「俺は出て行ってやってもいいが、俺の滞納分はどうする気だ」

「そんなの、……どうにかします」

「よし、わかった。なら俺が払ってやる。写真を撮りまくって、金をため、家一件買えるくらいにな。つまり――」

ここで振り向きざまに、ナツミカンに人差し指を向けてビシッと

「出世払いだ」

――キマッタ。

だが、

「土くんのまともな写真なんか、今まで一枚たりとも見たことがありません。本当は写真撮るの、下手なんじゃないんですか？」

と払われる始末だ。

「はあ、何度言ったらわかる、ナツミカン」

と呆れたふうに言いながら、左肩に手をやるが、やめてください、

とまたも払われた。

「俺がうまく写真を撮れないんじゃない」

「この世界がこの俺に撮られたがらない、って言いたいんでしょ。どうせ」

「わかってるなら、言うな」

「でも、それって土くんの言い訳じゃないですか」

「うるさい」

そう言いながら、するりとナツミカンを追い越して、ナツミカンの怒号越しに玄関を出る。

そこで3、4人とすれ違った。

——写真館の客なんて、珍しいな。

そんなことを考えたものの、

別に関係ないかと思ひ直し、いつもの、近場の公園へ向かった。

2「光夏海

うるさい、と捨て台詞を残して出て行く土くんに、無駄だとわかっていながら、「待ってください」というのも虚しいなあ。

はああ、とため息をつきながら、また机につく。

門矢士。ふらっと町に現れて、そのままこの写真館に居ついた男。未だに何者なのか、何をしたいか、なんて何も話さない、本当に迷惑な奴だ。

机の上にある土くんの話の間に少し冷めてしまったコーヒーをすすり、念のため、カウンターへ移った。

すると、ドアのベルが鳴った。

客かな、と思案してみると、

「ちよつと、何よ、この写真！」

——半分当たりだ。

ピンボケ写真を見せられ、そう思った。

ピンボケ写真は土くんの商売だ。

「おいっ、じいさん。俺はこんなピンボケ写真の現像を頼んでんじやねえ」

と、奥からもガラの悪い怒鳴り声が飛び込んできた。

どうやら、おじいちゃんも責められているらしい。

奥へ言ってみると、3人がおじいちゃんを囲んでいる。

さすがに対応慣れしているはずのおじいちゃんも3人同時に責められ、困っているようだった。

「おじいちゃん」

仕方なく、おじいちゃんに助け舟を出す。

「おお、夏海。これ、見てくれ」

と、さっきの人と同じようなピンボケ写真を差し出された。

——やはり、こっちもか。

「ちよつと、すいません。これ、もしかして、土くんが撮った写真ですか？」

と聞くと、

「そうそう。写真撮りましようかなんて声かけてきたから、モデルやってあげたの！」

「世界で一枚だけの写真だ、とか言ってるさあ！」

「わざわざ受け取りに来てやったわけだ。それで受け取った、これ、なんだよ！」

「まったくさあ」

「映ってねえし」

「ひどくねえ？」

と男2人に女2人の被害者たちは口々に文句を言う。

それを聞きながら、すべての写真を回収する。

そして、文句が一通り済んだ頃、わざと大きくこう言った。

「ひどい！これはひどすぎます！」

と、受け取った写真は土くんの失敗写真箱に投げ捨てる。

「でもみなさん、これはなかなか芸術的だとは思いませんか？」

とおじいちゃんが言うけど、

——それ、逆効果だよ、と萎える。客の反応はもちろん、

「私の顔って、こんなにひどいってこと？ひどいじゃないのよ、おじいさん！」

「いやいやそういうわけじゃなくてね」

と予想通りだ。

とはいえ、これ以上被害者たちの対応に苦難するより、本人を連れてくることに決めた。

「もう、今日という今日は……」

腕を鳴らしながらドアへ向かう。

「こんなのにお金を払うつもりはねえぞ」

「かまいません」

と、被害者に言いながら歩く。

「夏海、どこ行くんだい？」

「土くんを呼んできます。どうせ、いつもの場所でしょうし」
そう言い終わると同時にドアを閉めた。

3―土

俺は今、公園で風景を撮っている。

パシャッパシャッ、パシャッパシャッ

公園にある木、遊具、人、空、雲……ありとあらゆるものを撮る。だが、どれも歪む。木も人も空も雲も、この世界のすべてが歪む。この世界は、俺のいるべき世界じゃないのか？

歪んだ写真を撮るたび、そんな疑問が俺の頭をよぎる。

そこへ一人のヤクザみたいな服装をしたおっさんが現れた。

「おいっ、そのボウズ！」

うるさいので、無視してやった。

「おいっ、ボウズ！！こつち向けや！！」

声が一段と大きくなったので、

「ん、なんだ？」

と、反応くらいはしてやる。

「こんな写真に俺様の大事な金を払えるかよっ!!!」

「こんな写真!？」

ホントは別段驚きはしなかったが、条件反射で叫んでしまった。さすがに決まりが悪かったので、頭を下げるかわりにカメラから手を離す。首から提げるタイプにしていたので、落ちはしない。

「お前言ったよなあ?!俺のすべてを撮ってやるって。それがこんなハチャメチャな写真かよ!!!」

まあ、わかりきっていたが、一応、写真を確認する。

——やっぱりだ。

「まただめだった、か」

「ああん?なんだとコラッ!テメエ、最初からまともに取るつもりなかったってのか、コラッ!!!」

——全くうるさい奴だ。

奴のほうがいつの間にか手から離れた写真を拾いながら、相手が殴りかかるのをよける。

「なんで、こんな写真を撮ってたんだ」

さっきの交わしでっすだけ認めたのか、ほんのっすだけ低姿勢になった。

「うまく撮れないんだ。俺はこの世界のすべてを撮るつもりだが、この世界がそれを拒む。だから、取れるようになるまで一枚でも多く撮るだけだ」

「ほう、生意気な」

そう奴が言った頃、足音が近づいてきた。

「あの、すいませんでした!」

——ナツミカンか。

「何しに、」

「土くん、くらいなさい。光家秘伝の笑いのツボ!」

しまった、と思うのも遅く、笑いのつばを押された。

「アッ、アハハハハッ、アハハハハハッ」

——なんだこの馬鹿笑い……自分でも聞いてて嫌になる。

奴のほうも、「なっ、なんだよ、てめえ」などと言いながら後ずさりしてやがる。

「夏海、てんめえ……アハハハハッ」

「本人も泣き笑いながら謝っておりますので……」

——お前のせいだろうが！

「本当に、申し訳ございませんでした！」

奴のほうも、とうとう俺の不気味さに恐怖してスタスタと帰った。俺は、奴らが去って少ししてやっと笑いが止まった。

「おい、ナツミカン。ハアハア。笑いのツボってこうやって使うものじゃないだろ」

「そんなことより、もういい加減に反省してください。店にも土くんの被害者がいます」

「どうでもいい」

「逃げないで聞いてくださいよ。……ところで、なんであんな変な写真ばかり撮ってるんですか？」

「別に、変な写真を撮ろうとしているつもりはない。俺はただ、俺の世界を撮りたいだけだ」

「土くんの世界？でも、それがどうしてあんな写真に？」

「知らない。知る気もないが、俺はこう解釈している。世界が俺に撮られたがっていないんだ。勝手に写真のほうが歪んじまう」

さすがに夏海のほうも、えっ、と不思議そうな顔を向けた。

4―夏海

街も人も 光でさえも俺から逃げてく。ここは、俺の世界じゃないのかもしれない

あなたの 世界？

まあ、俺に写される資格を持った世界ってこった

一瞬不思議には思ったけど、とにかく と、私は始めた。

うちの写真館をあなたも代理店みたいに扱うのは、いい加減にやめてください。迷惑です。宿賃にフィルム代、客や私たちへの感謝

料込みで……

と、なぜか持ち歩いていた電卓で計算し始めるのを、土くんが手で払って制した。

まあいい。だいたいはい、わかった

だいたいじゃなくて、と反論しようとした。しかし、その刹那、事態は起こった。

ピッピピッ、ビリッ、バチッ、バチンッ！！！！！！

何かが弾けるような音がした。巨大な風船が割れるような音だった。

しかし、実際に割れたのは、もつとひどいものだった。

音による衝撃で視界を塞いでいた手をゆっくりと解くと、淡い灰色をしたボールのようなものが私と土くんとの空間を遮断していた。手で触ろうとするが、すぐ手前で壁のように硬いものがあつて、触れることすらままならない。もちろん、壁のようなものの方は押しても体当たりしてもビクともしないようだった。

そこでようやく事態の一部を理解できた。空間が遮断されたのだ。なにものかの手によって。

「土くん！土くん！！返事してください！！土くん！！！！」

音は届いていないようだ。土くんのほうも慌てていて、口元から察するに叫んでいるようにも見えたが、一切聞こえない。

やがて、土くんのほうの空間は、一気に暗闇に染まった。

「土くん！！！！土くん！！！！どうしたんですか？！！土くん！！！！」

あちらのほうも何か危険なことが始まっているのかもしれない。助けなくちゃ！と思ったが、自分のいる状況を思い出して愕然とする。

叫んでも意味がないのは承知だが、届いてくれるのなら、何だっとする。奇跡よ、起こってくれ！

そう本気で願ったのは、何年ぶりだろう……。そんなことを考え

たら、さつきよりほんの少しだけ落ち着いた。

それなのに、

「ギャーーーーーッ!!!!」

悲鳴を聞いた。

それだけで、恐怖が一気にぶり返した。

その時、背後で明らかにこの世のものとは思えない怪物と遭遇した。

「ファッ、ファンガイアだ!!」

そんな叫び声を聞いた。

ファンガイア?と考えにふける余裕は、今は無い。

必死で逃げる。足をできる限り前にやる。

バリントという音がして横を見ると、次々と人が空中から降ってくる怪物の牙に毒されたように無色になり、無残にも砕け散っていく。

その光景に吐き気を催しそうになったとき、またもあのベールが向かってきた。走っていたこともあり、避けられるものではなかった。

ベールは、私や周りの人々を一気に飲み込んだ。

ブワウウン

ベールがかかる瞬間に手で頭を覆い、目を瞑っていたが、何も害が無いことを感じて目をゆっくりと開けて、再び周りを見渡した都会であつたであろう場所が荒野のように荒れていた。

ダダダダダッ

銃の音がした。

ズッダーン

大砲の音もした。

すべて自分の後ろで起きていた。

「だっ、だめだ。本当に、本当に不死身でいやがる!」

銃や大砲を構えていた人たちは顔に恐怖の色がにじみ出ている。
「なっ、なんなんだよ、こいつら、」

大砲を向けられているほうに目を向ける。さっきまでとは別の怪物たちが、のうのうと立っていた。

その怪物たちは、――

「アンデッド!!」

そう叫ばれたのを察知してか、いきなりアンデッドたちは歩きだした。

人も逃げはじめた。私も走り始めた。

すると、数秒経った時、逃げていた人のうち3人が止まった。

「こっ、こいつ、カテゴリー8のバッファローアンデッドだ!!」

「くそっ!」

「助けてくれえ!」

逃げているみんなは足を止めなかった。私も必死に罪悪感をぬぐいながら走った。

ほかの者も次々と燃やされたり、瞬間移動で迫ってきたアンデッドに殴り殺されていた。

それらを見送った後、またもベールが迫ってきた。

二度目だったが、また目を瞑った。

土くんの無事を祈りながら――。

5―土

時空が割れた。そうとしか言いようが無かった。それがどんな効果を生むかなどまったくわからなかった。

「ナツ、ミカン?……おい!ナツミカン!ナツミカン!」

どんなに叫んでも、ナツミカンに届いている様子は無かった。何度も叫んでいるうちに、周りの景色は一気に暗闇に包まれ、ナツミカンの顔も徐々に見えなくなっていた。

壁のあった所から少し離れて、様子が変わるのを待つ。

そのうち、明るくなって視界も少しずつ開けてきた。

俺がいたのは、公園の中だった。

そこには、赤髪の青年が立っていた。彼は、赤い髪であること以外は至って青少年、という顔立ちであった。

「こんにちは。いえ、お久しぶりです。門矢士さん」

——久しぶり？

「俺にはお前みたいな妙な髪した知り合いはいない。お前は、誰だ？！」

そういうと、青年は驚いた表情になった。

そして、人差し指を顎に添えて、

「まだ、変身はしていないのですか？」

そう言った。

「変身？」

そう疑問をそのまま言うと、またも怪訝な顔をした。

それをスツと律儀な顔に戻して、こう言った。

「……分かりました。やはり、まだ記憶は戻っていないようですね。一度変身すれば、徐々に戻ると聞いていたのですが」

「わけがわからん。ちゃんと説明しろ。世界が割れたのは、どういうことだ。お前らの仕業か。お前は誰だ。変身とか、記憶とか、どういうことか、隅から隅までしっかり説明しろ！」

かなり冷静な雰囲気と言ったつもりだったが、落ち着いてくださーい、と制された。

すると、青年は、ゆっくりと人差し指を顎から空のほうへ向け、見上げた。

「いいですか、門矢士……いえ、ディケイド、今日が、始まりの日です」

そう青年が言い終わった後、またも景色が少し暗くなって、

「上を御覧なさい」

と青年は言った。

言われるがままに上を向くと、なんかのホログラムなのか、宇宙から見たような立体の丸い地球があった。

その地球が2つに増え、4つに増え、ついには10にまで増えた。

「10の、地球……？」と、心無く呟いた。

「これが、あなたの渡らなければならぬ世界の数です」

青年は、いつの間にか手をポケットに入れて、言った。

「10の世界を渡る、だと？」

「そう、10の世界を巡らなければならない」

俺は頭に理解させようとしたが、状況把握だけで、正直、精一杯だ。

「まあ、今はまだ分からなくてもいいですよ。変身を終えた後、また会いましょう。では、ご旅行を、お楽しみください」

そう青年が言い終わったと気づいたとき、俺の前にはもう奴の姿はなかった。

代わりに、景色が次々と変わっていった。

そして、その変化が一気に落ち着くと、ベールの向こうにある廃屋のすぐ近くに、ナツミカンがいた。

ナツミカンは、異形な化け物に襲われていた。

「おい、ナツミカン！ナツミカン！！」

ベールに張って、懸命に叫んだ。

どうやら、届いたようだ。

ナツミカンは、こつちに気づいて、泣き笑いで走ってきた。

「土くん、無事だったんですね！よかった」

「無事って状況か、これ?!」

辛うじて会話がつながる。

現にナツミカンの前には灰色をした3体の化け物がいる。

奥の方で人が剣で刺されて、そこにいたほとんどは灰と化した。

その中の生き残りは、一度倒れて数秒すると、すぐに起き上がって化け物になりかわっていた。

「つ、土くん」

こちらに背中を向けて、ナツミカンは言った。明らかに怯えていた。

化け物は、ゆつくりとナツミカンのほうへ歩き出した。

「くそっ、いったい、どうすれば、……どうすれば、助かるんだよ……！」

意味のなかるう叫びをした。

そのとき、ベール越しにいるナツミカンの手に持っているものに目が言った。

見たこともないはずだが、なぜか懐かしく感じた。

「ナツミカン、もしかしたら、俺が救えるかもしれない」

「えっ」

「その、手に持っているやつを俺に渡してくれ！」

ナツミカンは、あわてつつ、それを差し出した。

「でも、このベールが……」

「通り抜ける、きつと」

なぜか無意識にそう言った。

言われたナツミカンは、持っていたものを差し出した。それはベールを通り抜け、ナツミカンの手だけが元の場所へと引き戻されていた。

物は、カメラをイメージさせるものだった。

俺は、もう一つの箱の、カードケースのようなものの中にあつたカードを取り出し、前に出して、こう言った。

「変身！」

そう言つて、カードをカメラ状の物体の中に入れて物体を手で抑えるように軽く押した。

『KAMEN RIDER DECADE』

体の感覚が次々と変わり、——マゼンダのライダーとなった。

変身が完了した途端、ベールは固まり、砕け散った。

化け物たちにそれが当たり、化け物たちは一時的に吹き飛んだ。

ナツミカンも倒れこむ。

「大丈夫か、ナツミカン」

見下ろしながら、そう言つて、化け物たち——オルフェノクたち

に目を向けた。

「おい、——俺が、相手だ！」

化け物共、と付け加えてやった。すると、オルフェノクの真ん中にいたやつが高笑いし、左にいたやつ影が現れ、こう言った

「ふっ、なにいつてんのさ。俺たちの相手なんか、務まらないよ」

と言って、サイヤバツフロア、ムカデのような姿をしたオルフェノクたちが、走って向かってきた。

俺は、カードケースから、また一枚取り出し、カメラに入れた。

『KAMENRIDE 555』

『COMPLETE』

俺は、ファイズになった。

その状態で数人を蹴散らすも倒すにはいならず、さらに奥にいたオルフェノクたちが向かってきたので、さすがに苦戦した。

仕方ないか、と呟き、俺はカードケースからおもむろに一枚取り出し、さっきと同じようにカメラに入れる。

『FORMRIDE 555 ACCEL』

と、言う音声とともに、胸のフォルムが裂け肩に行き、目の色も赤に変わり、全身の光が黒くなって、変身が完了した。

時計のスイッチを入れ、『START UP』の音声とともに景色が一気にスローモーションとなり、10秒の間に、足からの円錐状の赤い光を放って目標をポイントし跳び蹴りを放つ、クリムゾンスマッシュを全オルフェノクに放ち、倒した。

オルフェノクたちは、青い炎をともしながら形が崩れ、灰となった。

「くそ……」

倒されたやつの中のいったいが、そんな捨て台詞を残していった。そのすぐあとにアクセルフォームの時間制限が来たようで、『Reformation』という音声とともに体は、元のファイズの姿に戻り、そのままライダーの姿に戻った。

だが、俺には大きな疑問が残っていた。

——俺はなんで、このカードを選んだ？

そんな疑問の解も思い当たらぬまま、気づくと、すぐそばに、乗れ、と言わんばかりにバイクがあった。

「来い、戻るぞ」

とナツミカンに言った。

6―夏海

「来い、戻るぞ」

そこにいたのは、あの、いつもの土くんだった。でも、さっきまで怪物たちと戦いを繰り返していたのは、いつもの土くんではない気がした。どこか、遠い世界の、知らない人のように思えた。

なにより、あの妙な二つの物だ。

あんなもの、見たことがないはずだが、なんだか見つけた瞬間、妙な感覚に陥ってつい拾っていた。

——これを守らなくちゃ。

そんな妙な義務感を背負っていた。

だが、それがあんなものだったとは……。

「おい、ナツミカン」

いつの間にか、ボーっとしていたようだ。

「大丈夫か？」、と言われるのを、「大丈夫です」となんとか返す。土くんが運転するバイクが、発進し始めた。

帰る途中で、倒れた人たちがたくさんいた。

かわいそう、と思うこともできない。死体と化したもののほとんどは、むごいものや灰になってしまったりしているものがほとんどだったからだ。

「キャッ！」

条件反射で叫んだが、一瞬状況がつかめなかった。だが、その間にも真後ろに怪物が迫っていた。

人間だった人がゆっくりと怪物の姿に変わっていった。

「や、やめて！来ないで！」

士くんは、すぐに駆けつけてきた。

「さがれ、ナツミカン」

そう言つて、ケースからカードを取り出し、腰につけた物に入れて、「さーて、こいつはワームでいいよな。無言だし」と言つた。

そして、物から『KAMENRIDE KABUTO』という音声流れ、士くんは、まるでカブトムシのような顔をした別の姿になった。

「よし、行くぞ」

と、意気揚々と戦いに走るも、次々とかわされる。

敵の怪物のほうは、高速移動をしているようだ。

「ちょこまかと」と士くんは言いながら、また別のカードを取り、物に入れた。

『ATTACKRIDE CROCK UP』と言つて音声響いて、気がついたら、ワームは既にいなく、士くんは元の戦士の姿となっていた。

すると、同時に変身が解除され、元の、人間のときの士君の姿に戻った。

「だけど、なぜだろう？なぜ、

「なんで俺は、戦い方を知ってるんだ？」

士くんは呟いた。

どうやら、当人である士くんですら知らないらしい。

そんなことを考えた刹那、士くんがぐらりと倒れかけ、岩に寄りかかった。

「だいじょうぶですか」と駆け寄ると、「いい。大丈夫だ」と士くんは私の手を放つて、また立ち上がった。

その刹那、景色がまた変わった。だが、さっきまでのようにベールが襲ってきたわけではなく、暗くなっただけだ。

「なんだ、またか」と言う士くんのことを尻目に、

「ここがどこかは、いまはまだ、どうでもいいことです。」と、

青年のような声がした。

そうかと思うと、世界は公園に変わっていた。そこにある噴水の塀のところまで男が立っている。

「こんにちは、いや、こんばんは、ですかね」と、青年。

「そんなことどうでもいい。この状況を説明しろ」

「おや、ベルトとなるバックル、カードの入ったブッカーは手に入れたでしょう。まだ記憶は戻っていないのですか？」

と青年が訊くと、土くんは神妙な顔になり、

「……いや、たぶん、戻った」と一言言った。

「そうですか。とはいえ、まだ変身は一度目のはず。蘇った記憶は、まだほんの一部でしょう。世界を回るうちに完全に思い出します」
そう言っただけで去ろうとする青年に、土くんが「待て！」と叫んだ。

「おい、お前、俺を、この記憶をどこまで知っている？」

さすがに話の意味まではわからないものの、かなり大変なことを話しているのだらう、とは見当がついた。

いいですか、と青年が口を開く。

「この世界は未熟、未完成だったために、もう少しで砕け散るところでした。もし、あなたを見つけなければなら、この状況を止める気にはならなかったでしょう。しかし、この世界といくつかの他世界の波長が同時に狂い、”空のベール”が現れてしまいました。それは、まだいつものことです。念を入れて、そのベールの現れたいくつかの世界を探し回り、不本意にも、あなたを見つけることができました。ディケイドの適合者・門矢士さん」

そう言っただけで青年が指を鳴らすと、空中に地球が11個並んだ。もちろん、映像だろうが、幻覚とも思えた。

そんなことを思いながら見上げているうちに、青年はまた話し始めた。

「あなたは、このいくつもの世界をめくらなければなりません。そして、破壊と創造をしてきてください。さすれば、この世界も救われます。まあ、創造は破壊からしか生まれません。……残念極まりな

いですがね」

青年は言い終えると、手を下ろした。先ほどまで、右手の人差し指は天を指していた。

「なぜ俺だ？」

土君の最大であろうその疑問は、青年は少し微笑んだだけで答えることはなかった。

——世界はまた、いつもの写真館の目の前に遷り変わっていた。

フー土

記憶で、眼前に広がっていた光景は、岩山が多くある砂丘のような場所だった。

辺りを見回すと、自分の後ろに数え切れないライダーとモンスターの屍が転がり、生き残りとなったものが立っていた

貴様が、デイケイドか

生き残りのライダーらしきものが言った。

ああ

俺は、生返事をする。

そうか。……死ね！！

ライダーの生き残りが一斉に駆け出し、俺のほうへ向かってきた。俺を襲うつもりらしい。

驚きはしたが、恐れはなかった。体が無意識に動き、向かってくるライダーを悉く屍に変えていった。

おのれえ、デイケイドー！！！！！！

その言葉が耳に残った。

その記憶は、最後の一人を見送る手前で途切れた。

——そんな中、ライダーが一人、立ったままで身動きすらない奴がいた。

その記憶がよみがえったのは、変身を解いた直後だった。一瞬体の意識が飛び、ふらついた。

——奴の言っていた記憶は、こんなものなのか？

驚いた。だが、驚いたはずなのに、なんとなく奥底で納得したような感覚があった。

写真館に戻ると、じいさんがテレビをいじっていた。いつの間にか帰ってきていたらしい。

「土くん、記憶が戻ったって、どういことですか？」

「さあな」

さすがに真実は言えず、あえて無視する。

ナツミカンは、怪訝な顔をしながらも、それ以上追求することはしなかった。

「土くんは、今から10の世界を巡らなければならいって、言われてましたよね」

「そうらしい」

「私も行きます」

耳を疑った。

「お前は行くな」

「あんな怪物たちを見て怖気づく人じゃありません。そりゃあ、恐くはありましたけど……」

「行くな！」

ナツミカンは、俺の怒号に驚きを隠しきれていなかった。

俺は、心配なのだ。あの記憶を見る限り、俺はライダーを襲うことになる。いずれは周りのやつも、ナツミカンでさえ襲わないとは限らないのかもしれない。そう思ったら、連れて行く決心は固まらなかった。

「行きます！土くんがなんと言おうと、私は行きます！」

ナツミカンは叫んで、そういった。

言い返そうとしたが言葉が見つからず、ふとナツミカンの真剣な目に、目がとまった。

——そうか、こいつも心配して……

「だって、あなたが家賃を滞納したままなんですから。このまま踏み倒さないとも限りませんし」

言葉の裏には、きつと心配の二文字があるのだと、俺は想像した。それが間違いであっても、少なくとも、ナツミカンが真剣に行きたいとは思っているのは分かった。

「ああ、夏海に土くん、お帰り。土くん、テレビ直してくれないかい？」

じいさんが呑気に言った。

「ん？ああ」

そう言つて、テレビの裏へ回る。

「そういえば、どうやって別の世界へ行くんですか？」
とナツミカンが聞いてきた。

——あつ。

「……聞いてない」

「忘れたんでしょう」

「いや、聞いていないんだ」

——あいつ、あんなに俺が世界を救うとか強調しながら、肝心なことを！

「おお、土くんもどこかに旅に行くのかい？」

じいさんがまた呑気に問う。

ああ、と生返事をしながら、俺のテレビを修理する手はいつの間にか止まっていた。

「まあ、ひとはさ、みんな旅人だよ」

そうついいながら、じいさんがテレビのリモコンを手につった。

俺のほうは、テレビの裏から、机に移動していた。

テレビが点く。

『ただいま、未確認生命体を確認された現場の上空にいます。警察の車は、あつ、ありました。未確認生命体が警察と交戦している模様です』

聞き覚えのない話に、吸い取られるように顔を向けた。

そこには、明らかに人間とは異形の化け物が、確かに銃を使う警察と戦っていた。

警察のほうは数では1対15で有利だったが、苦戦していた。交戦の映像がアップされた。

『かなり苦戦している模様です』
と、見たままを伝える。

化け物が歩き始め、警察のパトカーまであと5メートル、というところで、誰かが走ってきた。

『あ、あれは、未確認生命体第4号です！』

そこで走っていたのは、——赤い目と赤いフォームを身に纏った戦士、仮面ライダークウガだった。

#1 プロローグ・ストーリー（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます。

仮面ライダーデイクイドへ改め、どうでしたでしょうか？

ここまででやく1万字以上ありました。ご苦勞様です。

最終話まで一通り終わりましたら、（誤字脱字などを10回以上確認して）改訂版を作っておこうと思います。とはいえ、設定は絶対変えない予定です。（でも、高校は卒業している可能性大）

この連載作品は、まだまだ続きます。4月には次の世界を出すつもりです。（最後まで読んでくださったなら、次が誰の世界か、お分かりでしょう）まだ飽きておられないなら、次回もお楽しみください。

では。

#2 クウガの世界「記憶」(前書き)

前回の宣言どおり、なんとか書き上げました、クウガの世界！
サブタイトルは、各世界にあわせるようにしています。

で、この前書きはたいてい長いので、飛ばされてもかまいません！
(でも、二行くらいは見てね)

ただ、作者、これ早く作れたのは、小1だったかに、見ていた記憶
がありまして、動画見たら思い出したっていう態でして、次回から
どうしよう、と思っっている作者であります。はい。

でも、ちゃんと頑張っって作っていこう！と思えるように頑張っって作
りました！

ここからは、原典になるべく沿いながらも、ストーリーそのものは
完全オリジナルで行かせていただきました！（好きなキャラが出て
ない、とかこのキャラこんなじゃないってのは、お問い合わせく
ださい。次回作のために反省します）
って、やっぱり長くなっちゃった。

では、渾身の、『クウガの世界』、どうぞ！！

#2 クウガの世界「記憶」

青年は、空港であぶらをつっていた。なんとなく、知り合いの考古学者に会いに行くことを決まっていたのだ。この飛行機を見終わったら行くか。と勝手に決め、しばらくして最後の飛行機を見送った。出発しようとした彼の前に、見たところ5歳くらいの少女が現れた。

少女は迷子らしかった。母親を探していたのだ。

青年は、泣きじゃくる少女に得意な技の一つ・けん玉を見せてあげた。

少女は泣き止み、彼のけん玉を見ることに真剣になった。

その少女の姿を見て、うれしくなった。彼は、悲しむ顔は嫌いであつた。

やがて少女の両親が現れ、少女は青年に、ありがとう、と言った。青年は最後に、一番の得意技・笑顔を贈った。

1―士

『未確認生命体4号が、警察を襲っていたと思われる23号を倒しました！』

『桃井さん、ありがとうございました。――以上、オレジャーナルのほうから急遽依頼で行っていた桃井玲子さんでした』

テレビ番組が次のニュースに移った。

見終わっても一瞬固まり、ナツミカンのほうが早く口を開いた。

「今の、この世界のライダーでしょうか」

「ああ。だろうな」

あのライダー・クウガは、記憶に出てきたライダーだ。生き残りのほとんどが俺を倒しに来る中、奴だけが動かず、佇んでいた。

俺が最後の一人を見送るまで、奴は動かなかった。

——— そいつが、始めの世界か。

「あのライダーはいつたい……」と、ナツミカン。

「あれは、クウガだ」と呟くように言った。

それを聞いていたはずのナツミカンが、

「あ、土くん、机の上に本があります」

と、近くの机を指差した。

そこへ駆け寄ると、『世界図録』という白い表紙の辞書のような本があった。ライダーと書かないのは、後々入ってくる人や爺さんへの配慮かもしれない。

表紙をめくると、目次があり、『1 - クウガの世界』とあった。もう一枚めくると、クウガの世界という題で、色々な情報が書かれていた。

『仮面ライダークウガ（適合者：五代雄介）

”西暦2000年。長野山九郎ヶ岳において謎の遺跡が発掘。しかし、遺跡へ向かった調査団は何者かによって全滅させられる。調査団殺害犯の手がかりを得るため遺跡を調査していた長野県警刑事・一条薫の前に、無断で遺跡に入ろうとする若い男が現れる。その男は冒険家・五代雄介と名乗った。

やがて復活した異形の者たちが長野近郊に出現し、人々を無差別に襲い始めた。遺跡からの出土品であったベルト状の遺物から、雄介は戦士のイメージを感じ取り、冒険家の勘に従い腰にそれを装着する。すると雄介の体は、気合と共に装甲に覆われていく。変身した雄介は怪人に立ち向かい、苦闘の末に敵を退け、一条に向けて得意のサムズアップをきめた。”

それが、クウガ再誕の始まりである

……………」

という概要の他にもさまざまな情報が記されていた。

「この、”周辺の人”って何でしょう？」

「それは、クウガの適合者・五代雄介ってやつの中のいい奴とかそんなのじゃねえのか？」

そこには、こうあった。

『周辺人物

・一条薫：長野県警の刑事。クウガの正体を知る人物の一人。クウガの正体を知っている。未確認生命体に何度も遭遇し、同種の事件を集中的に扱う本部の未確認生命体合同捜査本部に派遣される。射撃の名手で、高性能ライフルなども使いこなす。堅い性格で、民間人である雄介を戦いに巻き込むまいとするも、戦いを通じて強い友情で結ばれる。めったに笑わず、たまに笑みをこぼすと周りから驚かれる。雄介と同じく責任感が非常に強く、未確認生命体との戦いで何度も大怪我をしながらもそれを押して現場へと赴く。未確認生命体殲滅後は長野県警に戻った。』

他にも、多くのものについて描かれていた。

つまり、こいつらと今から会うのか。

「どうします？ここに長野県警ってあるし、そこに行きます？」

——恐らく、それが一番手っ取り早いのだろう。

「ナツミカン、バイクで行くぞ」

「あ、はい」

「おや、夏海、土くんとおでかけかい？」

「はい」

「いつてらっしゃい」

「いつてきます！」

そういうと、ナツミカンはあわてて靴をはき、笑顔で写真館を後にした。

2―夏海

バイクのエンジンをふかし、私たちは長野県警に向かった。

「ここが長野県警か。普通の警察署だな。この世界の事件の舞台なのに、もつと荘厳なものかとおもっていたんだがなあ」

「そんなこと言わないの、土くん」

私たちは、受付に向かった。

「すいません、一条薫さんはいらっしゃいますか？」と聞くと、

「えー、どちら様でしょうか？」

受付の人がそう言った。

「えっと私たちは、」

といいかけたところで、土くんが、

「週刊誌のものだ」

と、横入りしてきた。

受付のほうは、

「週刊誌の方たちは、報道部のお進み願いますが、よろしいでしょうか」

と話した。

「ああ」と土くんは短く答えて、奥へ進んだ。

ズバズカと奥へ進む土くんの袖を掴んで、とめた。

「ねえ、土くん！報道部に進むより、一条さんに会った方がいいんじゃないんですか」

とコソコソ話すると、土くんはサラッとこう言った。

「安心しろ。さっきの図録で長野県警の配置図があった。もう頭に入っている。報道部へ進むと見せかけて、会いに行く」

——大丈夫だろうか、この人という。

そんなことをつくづく思った。

そして、土くんはその言葉通り報道部に行くと思せかけて、エレベーターをわざと捜査班の階に上げた。

私は、やっぱり、と呟く。

エレベータが、捜査班の階に着き、妙な音を立てて、ドアが開いた。

ドアの先には二人の刑事がいた。

「おや、誰だい？ねえ、杉田くん、この子通していいのか」

と、年配の刑事さんが不思議そうに言った。

「邪魔だ。どいてくれ」

と土くんが彼を押しつけていこうとすると、もう一人の頭の薄い刑事さんが、

「おいつ、ここは警察だ。それに松倉さんは、」と言いかけたのを、
「松倉貞夫。警視庁警備部長で57歳。未確認生命体合同捜査本部
の本部長をしている、だろ」

スラスラ言いかけた。

一瞬固まり、杉田さんは、待て！と止めようとした。

そこに、

「何だ、騒がしい」

と、図録で見た顔が現れた。

土くんはすかさず「あんたが一条薫さんで、間違いないよな」と
いった。

一条さんは見る見る怪訝な顔になる。まあ、無理もない。

それを見て、間髪をいれず、「私たちは、週刊誌の、」というの
を土くんがまた横から、

「桃井玲子の同僚だ」

と、躊躇なく嘘をつく。

「ああ、週刊誌の、オレジャーナルのどこか。報道班への誘導な
ったのか、そこ行け。7階だ」

と、エレベーターのほうを指されるも、土くんはひるまず続ける。

「未確認生命体4号について、」

「あいつは味方だ。それは、今までの功績を見ても明らかだろう。
お前らの目は節穴か？」

——ひどい言われようだと、自分のうそを棚に挙げて考えてしま
う。

「いや、未確認生命体4号、ひいては五代雄介についてお聞きした
い」

一条さんの目が見開かれた。そして、スーツと醒めたのか、言った。

「わかった。会わせよう」

それを聞いた杉田という刑事が「おいっ、一条?!」と慌てた。それを松倉さんが腕で制し、

「いいのかい、五代君に合わせて」と聞く。

「ああ」と一条さんは短く答えた。

三人はエレベーターで地下の階に降り、一条さんの車に乗った。車に乗ると、「どこへ行く?」と土くんが聞いた。

「軽井沢のカフェだ。さっきちょうど電話があつてな。行くつもりだった」

私は、シートベルトを締めながら言う一条さんに恐る恐る言う。

「私たちを、そこへ連れて行ってもらってもいいんですか?」

これには土くんも「おいっ、ナツミカン!」と横から言ってきた。一条さんは、その言葉に間髪をいれずに、「いや、」と言い、こう続けた。

「大丈夫だ。君たちは、五代の、未確認生命体4号の正体を知っているようだ。それだけで行かせる価値はある」

「……俺たちが敵かもしれないのに、か?」

そう土くんが言うと、一瞬私たちをにらんで、こう応えた。

「仮に敵だとして、俺を襲うつもりなら、上であつたときに襲える。それに、未確認生命体と同等なら、署へ来たときに一気に抹殺するだろう。それに、敵ならクウガにしか、五代にしか手に負えんだろうからな」

言い終わると、徐々に車を発進させた。

私たちは、軽井沢のカフェへ向かった。

3 - 五代雄介

軽井沢のカフェ『ユリリン』に着いたとき、一条さんからまたも

ようやく買った携帯に電話がかかってきた。

二人の客を連れて行く、だそうだ。

車の音がするから、きつとこっちに向かっているのだろう。

オレはコーヒーを注文して、少しずつ飲み始めた。

飲みながら、ふと初めての变身のことについて考えた。

ベルトとは、あの最初の事件が起った九郎ヶ岳遺跡へ行ったときに、オレのほうへ光を見せた、かなり印象のあるものだった。

ビルの中で蜘蛛のような化け物・未確認生命体1号が襲ってきたとき、

<桜子さん、隠れてて>

と、桜子さんを放って、

<付けてみる！>

と叫んだ。

今思うと、馬鹿のことを言っているものである。

化け物がほかの人を襲っている間に、ベルトのほうへ飛び込み、吸い込まれるように装着した。

そのあと光を発し、しばらく化け物に襲われている間に、体の装飾が一気に変わった。

最初の変身は白い戦士で、未熟だったものの、人間態のときに比べて、遥かに全能力が上がった

そして、1号を倒し、警察の一条薫さんを助け、親指を立てて見せた。

そのあと、12時間もの爆睡の中、あの記憶を見た。

そこにいたのは、あの遺跡にいたのとは別の、もちろん俺とも別のクウガだった。

ある紫の一人の戦士に向かっていた。

おれは、クウガの意識に乗り移っていたようだが、感覚は完全にそこにいるクウガのほうだった。

おまえは、ディケイドか？

俺の周りにいたうちの一人が、目の前の戦士に問うた。

ああ

と、ディケイドと呼ばれたマゼンダの戦士はそっけなく言った。

そして、周りは一斉にディケイドのほうへと駆けて行った。俺は、一人佇んでいた。動けなかった。

——動け！動けよ！！

と、自分の体にそう言い放つも、やはり気が動転したのか、全く身動きができない。

だが、自分の体を見たとき、なぜか納得した。

オレの体は、クウガだったが、見たこともない姿だった。黒い戦士だった。

オレは、高みの見物をしていたのだ。

先ほど周りにいた戦士はディケイドになぎ倒されている。

やられた一人が、倒れながらオレにこう叫んだ。

おいっ、クウガー——！！貴様あ、なぜ、なぜ我らと戦わぬ！！

それを聞くや否や、オレはプラズマ光線らしきものを放ち、それにトドメをさした。

そして、周りの戦士がすべて倒れたのを確認すると、オレは咆哮し、ディケイドに向かった。

哀れなライダーだ

奴は、そう言った。

その記憶を見て、俺は一気に戦うことが怖くなった。

そして、次のコウモリみたいな化け物・未確認生命体3号と戦うことになった。

しかし、今度はほとんど歯が立たなかった。そして、一条さんも傷を負った。

その後行った病院で一条さんは、オレにこう言った。

くもつでしゃばるな。あくまで君は民間人なんだ>

そこで、くでも、>とオレが言くと、胸ぐらを掴んで静かに、こ

う諫めた。

<君が、戦う力を得たと思うのは勝手だ。だが、君に戦う義務はない。市民を守るのは、警察の仕事だ。中途半端にかかるな！>

胸が痛んだ。オレの見た記憶は、どれもそのときまで変身した白い戦士ではなく、赤い戦士だった。中途半端な闘争心が、それを呼んだのだと、俺は推測した。

そしてその後の戦いで、みんなに笑顔でいてほしい、と言う一心で、オレは、ようやく赤い戦士・クウガになった。

それが、俺がクウガになった経緯だ。

あのライダー・ディケイドとの戦闘の記憶は、今でもたまに蘇る。
——それがオレの記憶である。

考えながら飲んでいると、いつの間にか眠っていたようだ。

——どうりで記憶が鮮明に見えるわけだ。

時計に眼をやると、そろそろ来るころの時間になっていた。そう思ったとき、ちょうど一条さんの乗る黒い車がついた。

中から一条さんと一人ずつ男女が出てくる。男のほうは、少々派手なナリをしているが、女性のほうは、なんともおとなしそうだ。近づいてくるのを見計らって、三人に「こんにちは」と挨拶をする。

「よお、五代」と一条さん。

「こんにちは」と女性。

男は、無言だった。

女性のほうがすぐに

「ほらっ、土くんも挨拶してください」と叱る。

「俺は、挨拶をする趣味はない」と、男。

一条さんは、二人にかまわず、こう紹介をした。

「こちらの男性は門矢士さん。女性のほうは光夏海さんだそうだ」
光さんは「よろしく」と頭を下げたが、今度も門矢さんは何もし

ない。

オレは、すかさず名刺を取り出し、「オレは、こういうものです」と二人に手渡した。

「ほう、名刺を作ってるのか」

と、興味もなさそうに門矢さんはオレの名刺を一瞥した。

でも、光さんのほうは、ちゃんと見てくれていたらしく、「技つて、すごいですね」と笑いながら言ってくれた。

一条さんはまたも二人を無視して、「五代、」と始めた。

「この二人は、週刊誌の方なんだが、」

「違う。ホントは、別にオレなんかには勤めぢやない」

門矢さんが横入りしてきた。一条さんは、予想していたのか、（まあ、いつものことだが）さほど驚く様子もなく淡々と続けた。

「この二人が、お前のこと、未確認生命体4号について聞きたいそうだ」

一瞬思考回路が飛びかけたが、少し考えて、

「えっと、ほかの人には秘密って条件でなら、いいですよ」

——一条さんが連れてくるぐらいだから、なにかあるかもしれない。だからこそ、会うことを承諾したのだ。

「じゃあ、何か注文をどうぞ。全部一条さんがおこってくれますから」

と言うと、「おいつ、五代！」と久々に睨まれながら怒られた。

「じゃあ、」と光さんが言いかけたそのとき、草むらが揺れ、グロンギが現れた。

『ゴラゲダチ ゾ ボソギデジャス！ バンギヤギソ、リントゾロゾー！』

オレはそれを目で捉えると、すかさずこう言った。

「一条さん、この人たちを安全なところへ！」

それを合図に一条さんは、「こっちだ！」と奥のほうへ手招いた。オレは、「変身！」といって、クウガに変身した。

グロンギが、一条さんが二人を奥にやるのを、見つめていた隙に、

オレは速攻をかけ、攻撃をした。相手も、それなりに応戦した。しかし、敵は少しずつスピードを上げ始め、いきなり逃げる様子を見せた。オレは即刻、超変身で青い戦士になった。このフォームは、ジャンプ力やスピードに優れているので、使い勝手がいい。

追い続け、途中で拾った鉄の棒から変わったロッドで止めを刺そうとしたとき、突如、あいつが現れた。――ディケイドだ。

「ディケイド……」

そう呟いて、オレは、思わず手を止めてしまった。

その瞬間を狙って、グロンギがオレの腹を殴り、オレは飛ばされた。

そして、ディケイドに気づいてないのか、油断して、グロンギは攻撃の手を休める。かなり消耗していたようだ。

その隙に、グロンギの真後ろで、奴はカードらしきものをベルトのほうにセットして、『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DECADE』という音が聞こえたと思ったら、グロンギに奴の強力な蹴りが当たり、消滅した。

「ふう、終わりか。案外あつけない奴だったな」

などと奴は言った。

俺は、ゆっくりと体を立て直し、奴のほうを向いた。

奴はのんきに「大丈夫か」などとほざいた。

オレは、無我夢中で奴のほうへ走り、拳を挙げた。

4 - 土

<こつちだ！>という一条の言葉を見殺して、俺はすかさずカメラを取り出す。

それを見た一条は、半ば憤慨しながら俺のほうへ詰め寄り、<なにやっている！こつちへ来い！！>

と叫んだ。

俺はそれすら無視し、戦闘をカメラに収めた。

<これがクウガか……>

などと柄もなく呟いてみる。

——うん。いい絵になる。

そんなことを思っていると、いつの間にか近づいていた一条が俺の腕をつかむ。

< 来い！！>

激しく言う一条の手を振り払いながら、

< 俺は、ライダーだ。いざとなったら、変身する。まあ、今からするつもりだが>

と、俺は言った。

さっきの週刊誌の嘘はもちろんのごとく見抜かれていたのだから、こちらでも予想していたかと思ったが、意に反して、一条はさっきまでで一番の驚いた顔を見せた。

——これを撮ったら、面白い写真になりそうだ。

などと考えてみる。

その考えにも飽きて、俺は、ブッカーからカードを取り出し、デイクライドに変身した。

< 変身！>

さっき、このグロンギは『ゴラゲダチ　ゾ　ボソギデジャス！　バンギャギソ、リントゾロゾー！』つまり、『お前たちを殺してやる！感謝しろ、人間共！！』と言っていた。それが、無性に腹が立つ。

——お前レベルに倒されるかよ！

俺は、ゆっくりと二体の闘いを観戦し、クウガが青いドラゴンフォームとなったところで、一気に近づいた。

すると、クウガが何かを呟いて、いきなり攻撃の手を止めた。

その隙を見計らって、グロンギが攻撃。終わると、グロンギも動きを止めた。グロンギの方はかなり体力を削ったらしく、また、俺に気づいていないらしい。

——一撃でしとめるか。

そう考え、素早く『FINAL　ATTACK RIDE』のカード

を取り、バツクルに収める。

そして、『FINAL ATTACK RIDE DE DE D ECADE』の音とともに、俺は飛び上がり、蹴りの構えを取る。そのときになって、ようやくグロンギが俺の存在に気づいたようだったが、もう遅い。

俺の蹴りは、一直線にグロンギの胴体を貫き、グロンギは爆発とともに消滅した。

俺は、ため息をして、「案外あつけない奴だったな」とボソッと呟く。

そして、クウガのほうを見ると、——奴は俺に向かって、走ってきたのだった。

奴は俺に向かって右拳を上げ、殴りかかってきた。その拳を何とか左手で受け止める。

すると奴は、こう叫んだ。

「現れたな!! 悪魔・ディケイド!!!」

俺は、一瞬であの戦闘の記憶を回想した。そこでは、生き残りを倒した後、クウガと対峙するところまでが補充されていた。

——ライダー同士の闘いで記憶が戻る、か。皮肉なもんだ。

率直に思った。

その時、クウガは、右拳の力を緩め、ラッシュをかけてきた。

一応、

「なぜ俺の名を知る？」

と聞いてみるが、聞く耳を持たない。仕方なく応戦する。

奴の攻撃を受け止めながら、俺はまたこんなことを質問した。

「俺と戦ったことはあるのか？」

すると、奴の攻撃がワンテンポずれた。もちろん、今までの一心不乱な攻撃からすると、作戦ではない。動揺しているのだろう。すかさず俺は、こう続ける。

「俺は、ディケイド。そうとしか聞いていない。お前とは確かに戦

った、ようだ。記憶の中でしか、その戦闘を体感していない。なに、なぜお前は俺にそこまでの憎しみをこめて俺に向かってくるんだ？」

そこでようやく、（戦いながらではあったが、）奴は喋りだした。「俺もまだ記憶の中でしかお前と闘っていないし、会ってもいないだが、お前を倒せと仲間と言われた。記憶の中での仲間に」

その言葉を皮切りに、俺は賭けを始めた。

「記憶の仲間が確かなものとは限らない。お前の記憶はあいまいになっっていて、装飾された可能性だってある」

「そんなことは関係ない。記憶の中で、お前は何人もの戦士を倒していた。それだけでお前を悪と断じるに値する」

「神にでもなったつもりか」

「誰にも哀しい顔をしてほしくないだけだ！！」

最後に奴はそう叫んで、大きく構えた拳を俺に投げた。

その拳で俺が吹き飛ばされている間に、奴は「超変身！」と叫んで、紫のタイタンフォームに変身した。

そしてそのまま突進してきて、俺を建物の壁に押しやった。

俺は、ふっと小さく笑い、こんな言った。

「通常の赤のマイティフォーム、超スピードの青のドラゴンフォーム、超感覚の緑のペガサスフォームに、超怪力の紫のタイタンフォーム。そして、全ての強化版、ライジングフォーム。どれも強力だが、……俺には勝てない」

「うるさい！」

奴は一気に向かってきて、再びタックルをかまそうとするが、俺が先に避けて、建物のほうが半壊する。

俺は銃のカードを取り出し、バックルに収め、『ATTACK RIDE BRUST』を発動した。

俺が銃を構えると、奴のほうは、すかさず超変身でドラゴンフォームになり、先ほど使っていたロッドで俺の銃弾を弾いた。

「やるな」と、一応褒めてやる。

すると、途中からはぐれていた一条が、

「おいっ、五代！グロンギが現れた。現場に向かうぞ！」
と叫んだので、五代は少し黙ってから悔しそうに、

「……はい。今行きます」

そう言って、俺のほうを向き、こう言った。

「お前との相手は、そいつを倒してからにする」

「ああ。構わない」

そう言って、奴は変身を解き、一条のほうへ向かった。俺も変身を解いて、すぐに後を追った。

一条と五代、ナツミカンと俺とで、車で現場のビルの影へと急いだ。

着くと、なにやら医師らしき奴がいた。

「おお、椿。お前もいたのか」

「久々に現場に来たのさ、一条。こいつも面白い能力だ」

そう言って椿という男は、足元の死体を見た。

「腕の骨、筋肉、腱がきれいに抜かれている。そして、」

と、奥のほうにある死体を指す。

「あっちのほうでは、足の骨、筋肉、腱。もう一つは、腰と腹部をやられていた。そっちは腸とか臓器も抜かれていた。きれいな体構造をしていたのだろうに。しかし、血管はほとんど傷ついていないんだ。もっとも、殺害のためか、うち1人は腹部をやられていたが、ちなみに、まだ心臓と胸にある骨とかはまだ抜かれていない。これをどう見る？一条」

「俺は、まず、血管を傷つけずにそんなことを成しえるには、かなりの技術が必要だと思う。そして、心臓を抜かれている奴がいないのなら、まだ犯行は終わっていないだろう」

「ああ。だな。あと、こんなものを端のほうで見つけた」

と、椿の手から差し出された袋の中にあっただのは、小さな石だった。「そこに小さくではあるが、文字らしきもんがある。桜子さん、だっただけ？あの人に解読頼んどけ」

そう言つて、椿は一条にそれを託し、立ち上がった。

「もう行くのか？」

と聞く一条に、椿はこう言つた。

「ああ。どうせ解剖の必要はなくなった。残りは後から来る助手に任せるよ」

そして、雄介の前で立ち止まり、

「最近顔見ないけど、大丈夫か」

「あ、はい。バリバリ大丈夫っス」

と、得意そうに雄介が親指を立てた後、「そうか。」と椿は少し微笑んで、去つていった。

「なんだつたんでしょねえ。あの人」とナツミカン。

「あの人は、椿秀一さん。解剖解剖つて、うるさいけど、よくオレの体を診てくれる人なんだ」と雄介は簡単に説明した。それにしても、

——こいつ、ディケイドの正体を知らないんじゃないのか？

先ほどの車の中では悶々としていたが、奴より後に乗ってきた俺を見ても、何も言わなかった。2人になれるときにも、話はなかった。

——後で、の戦いで話すか。

そう考えた。

そのうち一条が、

「おいっ、五代。クウガになつて、探していてくれ。俺は、こいつを沢渡さんのところへ持つていく」

その言葉に雄介は頷き、ペガサスフォームで変身し、散策を開始した。

雄介を一瞥して、一条は俺たちに

「じゃあ、俺は行く。光さんたちはどうする？」

と聞いた。

「あ、行きます」とナツミカン。

俺は、

「見学しとくよ」
と言ってやった。

5・夏海

グロンギを探す緑のクウガになった五代さんとそれを見学する土くんを残し、私と一条さんは城南大学へ向かうことになった。そこで沢渡桜子さんが考古学研究室で古代文字を解読しているらしい。

「桜子さんって、雄介さんの正体を知っているんですか？」

「ああ。というか、最初に五代の変身を見たのは、沢渡さんだ。もつとも、一番あいつを心配しているのは、あの人だ」

そういうと、話すことがないのか、後は黙りっぱなしでハンドルを操作し続けていた。

私のほうは、仕方なく窓越しの景色ばかりを見る。

その途中で、少しのどが渴いてきた。そういえば、写真館に戻ってから、何も飲んでいない。

ちよつとすまなさそうにこう言う。

「すいません、一条さん、喉が渴いたので、その自動販売機で何か買ってもいいですか？」

「あ、ええ。ちよつと待つてくださいね」

と言って、一条さんはゆっくり車を止め、助手席のドアを開けてくれた。

「ありがとうございます」

と私が頭を下げると、一条さんも頷いてくれた。

——優しい人だ。

私は車を降りると、そのまま一直線に自動販売機に向かう。

とりあえず、温かいコーヒーを購入する。

そのまま車に戻ろうとしたとき、あの現象が訪れた。

ボールが現れたのだ、今度は、一条さんの目では視認できないように、私が消えたことに気づいていないようだ。

「また！！」と私は叫んで、ボールを叩く。どうやら、前と同じよ

うに壁のように硬い。

私は仕方なく現象が収まるのを待とうとするが、モンスターが現れることを思い出して、怖くなったが、樹木に囲まれた広場に現れたのは、帽子を被ったおじさんだった。

「あなたは？」

と聞くと、おじさんは、

「私は鳴滝だ」

と短く答えた。

そして、鳴滝さんはゆっくりと何かを語り始めた。

6・土

俺がクウガに変身した雄介を見学すると言ったのを聞いて、一条は一瞬と惑ったが、先ほどの変身を思い出したのか、少し納得した様子でナツミカンを車に乗せて、発進させた。

俺のほうは、奴のほうを見る。

奴がゆっくりと見回していたそのとき、背後の気配に気づいて、見てみると、――グロンギが立っていた。

「危ない！」

と俺は叫んで、雄介を押し倒した。

雄介のほうは驚いて、倒れこみ、何とかグロンギの攻撃を避けられた。

「いた！」と言って、雄介のほうはベルトに手をかざし、ライジングドラゴンフォームとなり、敵に向かっていく。

グロンギは、

『ボセバ ゲリザギバス・ゲゲル！ラスパ ゴラゲゾ ダゴグボドグ バギデギジョグベンバボザ！クウガ ゴラゲゾ ボソギデジャス！』

と言った。

「ふん、『これはセミ・ファイナルゲーム（準決勝）だ！まずはお前を倒すことが条件なのだ！クウガ、お前を殺してやる！』か」

俺の言葉を聞いて、雄介が「えっ」と言って振り向いた。

「あなた、なんでこいつらの言葉を……」

その言葉を見殺しして、俺はグロンギに向かってこう言った。

「ゴラゲサボ　ゲリザギバス・ゲゲルパ　バビバギサボジョグベン
ゾ　リダガバギド　ギベバギドビブ。ギブサバンゼロ、ビチギグギ
バギバ？」（『お前らの準決勝は何かしらの条件を満たさないと
いけないと聞く。いくらなんでも、厳しすぎないか？』）

グロンギは、俺に驚きながらも聞いていた。

「ゴンバボドパ、ビガラビパ　バンベギバギ。ビガラ、バゼグロン
ギボ　ボドダゾ　ザバゲスボザ？ギンギユボ　グロンギバ？」（『
そんなこと、貴様には関係ない。貴様、なぜグロンギの言葉を話せ
るのだ？新種のグロンギか？』）と、グロンギ。

「ゴセパ　グロンギドパチガグ。ゴセパ——ディケイドザ」（『俺
はグロンギとは違う。俺は、——ディケイドだ』）

そう言いながら、カードをバツクルにセットし、今度はクウガと
グロンギの前でディケイドに変身した。

「ディケイド……お前が、ディケイドだったのか」と雄介。

「ああ」と短く答える。

すると、グロンギが再び口を開いてこう言った。

「ゴラゲゾ　ガサデソ　デビド　リドレジョグ、ディケイド。ザガ、
ゴセダデゾ　ドレスボドバゾ　ゼビパギバギ。」

意味は、

『お前を新手の敵と認めよう、ディケイド。だが、俺たちを止める
ことなどではしない。』

驕りの高い奴だ、と思った。

そこに、雄介が話しかけてきた。

「おいっ、ディケイド。いや、門矢さん」

「なんだ」

「オレは、あなたを信用できない。けど、今は共闘する。それでい
いますか？」

「良いに決まっている」

この二言三言だけで、俺たちは互いに協力することを承諾した。そして、雄介が向かっていき、グロンギに攻撃を加えている間に俺が銃のカードを発動させる。

『ATTACK RIDE BRUST』

そして、その音声を合図に、雄介がグロンギから離れ、そこへ俺が銃弾を放つ。

ダダダダダダッ

グロンギは、ボロボロながら辛うじてこつ言い残して爆散した。

『ン・ダグバ・ゼバパ ジビビ レザレス。ガドパ、ドビゾラツボリザ』

意味は、”ン・ダグバ・ゼバは直に目覚める。後は、時を待つのみだ”と。

——ン・ダグバ・ゼバは、最強のグロンギのことであつた。

#3 クウガの世界「哀別」

1 - 土

グロンギを倒した俺と雄介は、変身を解除し向かい合った。

「ディケイドだったとは……驚いた。」

「ああ。だろうな」

そう言っ、歩き始めると、雄介はすれ違ふときに、

「オレは、あなたと戦いたくない」と言った。

そして、俺のほうに振り向いて悔しそうにこう続けた。

「それでも、……戦わなくちゃならないのかな？あの記憶の二人のように」

「仕方ない、と言えばその通りだ。だが、記憶を辿ることが正しい道とは限らない。運命を己の手で切り開くこと、運命を作り出すことも、俺は必要だと思っている」

と簡単にアドバイスしてやる。

「行きますか？神社にでも」

「そこでやりあうのか？」

その問いには無言でやり過された。

——この世界は、無言な奴が多いなあ。

などと思っ

た。そして、俺と雄介はそれぞれのバイクにまたがり、神社へ向かっ

た。そこには、既に先客がいた。——神社の真ん中で倒れたナツミカ

ンだった。

「ナツ、ミカン？……！ナツミカン……！」
叫びながら、ナツミカンに駆け寄る。意識はないようだが、息はあ

った。ひとまずホッとし、雄介に、
「悪い。やりあうのは、また今度だ。とりあえず、一条に電話しろ。

探してるかもしれない」

俺の言葉に雄介は頷き、携帯を探し当て、一条にかけた。電話をかけ終わると、雄介は俺に向かってこう言った。

「安心した。あなたが根っからの悪じゃなくて」

フンツ、と鼻で応え、俺はナツミカンを抱きかかえようとした。

その瞬間、――あのボールが現れた。

中から現れたのは、サイのようなやつとカメレオンのような二体のライダーだった。

「やあ」とカメレオンライダー。

「ねえ、ゲームしようよ」とサイライダー。

「お前達は、いったい……」

と雄介が聞くと、

サイライダーのほうは、「ん？ ガイだよ」

カメレオンライダーは「ベルデだ」

と名乗り、それを皮切りに敵の2人は駆け出し、俺たちは迎え撃つ体制になった。

「じゃあ、オレはガイを！」と雄介。

「じゃあ、オレはベルデか」とゆっくり言いながら、俺たちは同時に変身した。

「変身！」『カメンライド デイクイド』

ガイとベルデはベルトのデッキからカードを取り出し、ガイのほうは左肩のアーマー部分、ベルデは左太股にある召喚機にカードをセットした。

『STRICKVENT』という音で、ガイにはサイの頭のような武器、

『HOLDVENT』という音で、ベルデにはヨーヨーのような武器が飛んできた。

雄介はドラゴンフォーム、俺は銃を使う。

俺たちは、各々で必死に戦った。

2 - 夏海

ベールが現れた時、私はまた目を瞑ってしまっていた。やはり、先刻の出来事が目から離れない。

ベールの感覚がなくなり、目を開けると、今度は樹木に囲まれた広場だった。

そこには、帽子をかぶりメガネをかけたおじさんがいた。おじさんは、私が眼で捉えてすぐに、こちらを向いた。

そして、こっちに向かって歩きながら、おじさんは言った。

「やあ、光夏海くん」

私は当然の如く問う。

「あなたは誰ですか？」

おじさんは言った。

「鳴滝という。別に君に危害を加えようとか、そんなことは考えていない」

手を前で振りながらそう言った。そして、こう続けた。

「ただ、君に警告を、と思ってね」

「警告……？」

私は鳴滝さんの言葉を反芻する。

「そうだ。警告だ」

と、鳴滝さんは自分の胸の前で両手の指を絡ませながら、強調した。

いいかい、と鳴滝さんは始めた。

「まず、君はこの世界の人じゃないね」

「はい」と正直に答える。

ここでは、さすがに嘘をついても何のメリットもない。それに、誤魔化されないような雰囲気、鳴滝さんにはあった。

「そして、門矢土くんもそうだね」と鳴滝さん。

「はい」と私。

「いいだろう。この世界に来てしまったことは仕方がない。誰がそうしたかは私にも未だ明確ではないが、ある現象がこれを引き起こしたのは間違いない。そしてそれはライダー達に、特に、ディケイ

ドに深く関連している」

「ディケイドに……」

私は、士くんや五代さんのことを思い浮かべた。

「私はね、夏海くん。君は早くディケイドから、つまり門矢士くんから離れるべきだと思う」

驚いて、私は訊く。

「どうしてそんなことを言えるんですか？」

すると、鳴滝さんは少し黙って、こう言った。

「いいかい。落ち着いて聞くんた、夏海くん」

私は唾を飲み込み、耳を傾けた。

「仮面ライダーディケイド・士くんが世界を壊そうとしている。私は彼を、この現象を止めるために現れた。私はなにがなんでも、彼を倒してでも止める義務がある。事情は言えないがね」

私は困惑した。

「しかし、私では止める機会が少ない。そして、彼を止めるに足らぬ可能性も無くは無いんだ。そこで、夏海くん」

鳴滝さんは、声を大きくして言った。

「君に協力してほしい。彼を手にかけるなどといった馬鹿げたことは言う気が無い。ただ、彼を止めてほしい。説得してほしいんだ」

鳴滝さんは私に言った。

「世界を、守ってほしい」

私の記憶は——そこで途切れた。

3 - 士

オレと雄介、ガイとベルデは、同等の力だった。

ベルデが『CREARVENT』で透明になると、クウガと代わり、雄介がペガサスフォームとなり、戦う。俺は剣でガイのストライクベントに応戦する。

「クッ」

ベルデが雄介に動きが読まれていることを知ると、『COPEV

ENT』でクウガの銃を使って攻撃し始めた。

そして、雄介は時間ぎりぎりでもとのマイティフォームになり、俺と代わる。ペガサスフォームは時間が短いらしい。

俺は、『ATTA CKRIDE IMV ISIBLE』で透明になり、背後から剣で斬る。

雄介も、ガイをライジングタイタンフォームで圧倒する。

全とうまく回っているように見えた。

そこへ人影が現れた。——ベルでとガイの動きが止まり、ベールも現れ、二体は何も言わずにそこへ駆けていき、消えていった。

人影は帽子を被り、メガネをかけた男だった。

「やあ、門矢士くん」

男は、不気味な笑みを浮かべていた。

「変身を解きたまえ。君たちに危害を加えるつもりは無い」

その言葉通り、俺と士は、ゆっくりと変身を解いた。

「じゃあ、士くん、君に話がある。——大事な、話だ」

「……いいだろう」

雄介が、「士さん?!」と言うのを無視して、雄介にこう言った。

「雄介、こいつは俺に用があるらしい。さっきのベルデとガイって奴とも関係ありそうだしな」

雄介は、何か言いたそうだったが、少し考えて、こう言った。

「じゃあ、光さんを担いで一条さんのところに行ってくる」

その言葉に、俺は短く「ああ」とだけ言った。

雄介が、どこかに行つたのを確認して、俺は鳴滝のほうへ歩み寄つた。

「で、俺に何の用だ？」

「そうかわからないでくれ」

——怒っているつもりは無い。

では話そう、と始めた。

「まず私は、鳴滝、というものだ」

「そんなことは、どうでもいい」

「ああ。そうだね。君にとってはどうでもいいことだ。……では、土くん、いやディケイド、はつきり言おう。君の旅は、ここで終わりにしたまえ」

鳴滝は、そう言った。そして、少し間を空けて、こうも言った。

「君は、世界を壊す。そして、この世界も壊れかけている。例えば、今目覚めるはずでなかったものを目覚めさせたり、居てはいけな者を蘇らせてしまう危険性がある。思い当たることは、あるかい？」

そう言われて真っ先に思い浮かべたのは、先ほどのグロンギがつぶやいていたことだ。

『ン・ダグバ・ゼバパ ジビビ レザレス。ガドパ、ドビゾラツボリザ』

意味は、”ン・ダグバ・ゼバは直に目覚める。後は、時を待つのみだ”。

ン・ダグバ・ゼバとは、最強のグロンギのところである、と図録にはあった。

つまり、今目覚めるはずでなかったグロンギが目覚めてしまった可能性があった。

鳴滝が言いたいのは、そういうことだろう。

俺が黙っていると、鳴滝はゆっくりと、

「あるみたいだね。思い当たる節が」

「……………」

「君は、目覚めさせてはいけないものを目覚めさせてしまった。この世界の命も残り少ないだろう」

鳴滝はそう言つと、後ろを向いて、こう言った。

「あちらの世界の戦士とも戦ったようだね」

「ベルでとガイの事か」

「そうか。では、もう帰るとしよう。この世界にはもう居れん」

鳴滝はそう言つと歩き始め、さらばだ、と言いつ残して去っていった。

俺は神社に一人、取り残された。

4・五条薫

<俺を……助けたのか？>

そう問うと、未確認生命体2号である白い戦士は、親指を立てて見せた。これは、遺跡にも来た五代雄介と名乗る青年の癖だった。

翌日の昼に、ファミレスでカレーを食べいた彼を見つけ、話を聞いた。

<君は、夕べ、>と切り出すと、

<はい！あの蜘蛛みたいなやつと戦いました！>と親指を立てて見せた。

それを見て、答えは出た。

その後すらすらと話す彼に、<なぜそうなった？>と聞くと、
<いや、成り行きって言うか、遺跡で幻を見て、そのとおりにベルトをつけたら、嘘みたいに入っちゃったんですよ>

と答えた。できれば嘘にしてもらいたいものだと思った。

<なぜそんな軽率なことをした？！>と怒鳴ると、一瞬ためらいつつも、

<求められた気がしたんです。あの蜘蛛みたいなやつと戦って>
と、真剣な目をしてそう言った。

今、彼の感情の構造を知っている俺ならわかる。その戦いとは、彼にとって、苦しいことだと。

五代から、いつの間にか消えた光さんの行方を聞き、俺は沢渡さんのところにいた五代の妹さんに椿から受け取った石を預け、五代が向かった関東医大病院へ向かった。

病室を回ると、予想通り、五代、椿、光さんが一堂に揃っていた。

「五代、門矢さんはどうした？」

何の気もなくそう訊いた。

「ああ、たぶん神社だと思いますよ」

と、五代は心なしか暗い声で言った。

——何かあったのだろうか？

とは思っても、ズカズカと訊きにいく術は持ち得ない。五代が話すまで黙っていたように思った。

ましてや、医者である以上、少しは気づいているであろう椿を差し置いて、聞き出すのもおかしいと言える。

「ところで、この光夏海って娘の鎖骨、」

「かわいい、などと気持ちの悪いことを言っなよ」

「なにをいつている、一条。かわいいではない。解剖のし甲斐がありそうだ、と言いたいだけだ」

こいつの変質振りはすごいものがある、とつくづく思っていたが、今日もすごい。

五代は、依然黙ったままだった。

「さっきの石は沢渡さんのところにやったから、後で言っていこい。」

五代「

「あ、はい」

椿からは、「少し寝ればすぐに目が覚めるだろう」と言われ、俺と五代はその病室にしばらくいることにした。

「ところで、心臓を抜かれた奴とか、いろいろ抜いていった未確認生命体は見つかったのか？」

「あ、いや、どうだろう。オレはそれらしい奴は見ませんでしたよ」と、五代。

俺も首を横に振る。

そうか、と言って椿は病室を後にした。

五代も黙っているの、持ち歩いていた手帳を取り出すと、病室のドアが開き、門矢さんがすごい剣幕で入ってきた。

「ナツミカンはどうした？！」

「ここで寝ている。しばらくすれば、直に目が覚めるとのことだ」

「……そうか」

そう言っ、手近にあった椅子に彼は座った。

五代が口を開こうとしたとき、俺の電話が鳴った。

「一条だ」

『笹倉です。未確認生命体が出現しました。場所は、』

「ちよつと待つてくれ」

と、急いでペンを取り出す。

「いいぞ」

告げられた場所は、長野県警に近い有名なショッピングモールだった。不幸にも、今日は祝日で人が多い。もしかしたら、敵はそれを狙ったかもしれない。

俺は一通り聞くと電話を切った。

「五代！未確認生命体だ！車で連れて行く。行くぞ！」

「は、はい！あ、門矢さんは？」と五代。

「ああ。行く」

と彼は言った。

俺と五代と門矢さんは三人で病院を後にした。

ショッピングモールに來ると、既に二十数人はやられていたようだ。

県警が必死に銃弾を撃っているが、いつものごとく無駄に終わる。そして、防弾機を盾に警察が後退をするも、すぐに追いつかれ、一人がやられた。

未確認生命体は、警官の胸に出血も出させずに手をつ込み、こう言った。

『ゴラゲボ ギンゾグ、ギダザギダ。ゴラゲボ ギンゾグバ、ダグバビ グベツガセスボザ』

そして、取り出した奴の手元を見ると、真っ赤に染まっていた。

——こいつがさっきの椿が言っていた未確認生命体か！

「あいつ、なんて言ってるんすか、門矢さん？」と五代。

「お前の心臓、頂いた。お前の心臓はダグバに受け継がれるのだぞうだ」

俺は未確認生命体用に開発された特殊弾”バスター2500”ニイゴーマルマルを取り出し、撃つ。それが放たれる間に、門矢さんと五代は戦士へと

変身した。

「俺が、威嚇で、この追尾弾でお前たちを避けながら撃つ！お前たちは、心置きなく突っ込んで行け！」

そう言つと、少し首を動かしただけで、二人は走り出した。

——まさかこの未確認生命体があんな事態を起こすなんて、思いもしなかった。

5―雄介

「俺が、威嚇で、この追尾弾でお前たちを避けながら撃つ！お前たちは、心置きなく突っ込んで行け！」

と、一条さんは言つた。

——それ、大丈夫かなあ……。

と、本音は思いながらも、一条さんが撃つんだから！と考えを改めた。

オレと門矢さんは小さく頷いただけで、奴に向かつて行つた。

「俺は剣を使う。お前は？」

「じゃあ、オレも剣で……間違つて撃たれてもいいように」

「タイタンフォームか。長時間し続けて、白のグローイングフォームになるんじゃないぞ！」

『ATTACK RIDE SRASH』の音声とともに土さんは剣を手に取つた。

「奴の能力はまだ分かつてねえ。迂闊に近づきすぎんなよ！」

と土さんは叫んで、奴に剣撃を与える。オレも紫の金の戦士になり横から雷の力を持った剣撃を放つ。

そして、未確認生命体の背中の中ほに一条さんの撃つた弾丸が入る。

『ビガラ、ジヨブロ……』

「貴様、よくも！」だ！」

門矢さんが即刻奴の言葉を訳す

『ログ"グベツギボギギビ"パゴバシビチバギ……。ガギゴボグ

ベツギバ ゴラゲビ ギデジャスクウガ！！』

と、奴が言った刹那、門矢さんがこう叫んだ。

「奴の腕から避ける！雄介！」

オレは奴の腕を避けようとしても避けきれず、顔に当たった。

そのまま、顔面へのショックで吹き飛ぶ。

門矢さんは叫んだ。

「大丈夫か！雄介！」

「だ、大丈夫つす」と、オレは頭をクラクラさせながら言った。

「こいつの能力は、たぶん腕を通り抜けさせることだ！だが、お前には効かないみたいだな」

と、門矢さんは言った。

『クウガ、ゴラゲビバ ゴセガラボボグショブパ ビバパギジヨグ
ザバ。……ギギザソグ、ゴラゲボババシビ ガボビンゲンゾ ギベ
ビゲビ ギデジャス！』

門矢さんは訳すのを忘れて、バツと一条さんのほうに首が動いていた。そして、再び叫んだ。

「一条！気をつける！！！」

すると、未確認生命体は一条さんのところへ走り出した。

「待ちやがれ！」と門矢さんは叫んで、カードをバツクルに入れる。

『ATTACK RIDE BRUST』という音声でカードケースを銃に変えて、奴に撃つ。

「雄介！！一条を守れ！！」

オレがゆつくりと体勢を整えようとすると、門矢さんはこう続けた。

「一条が狙われてる！！！」

オレは一条が狙われていることを理解すると、即座に体勢を整え、マイティフォームで拳を放った。

それでも、敵の走るスピードのほうが上回り、オレは「超変身！」と叫んで、ドラゴンフォームになって何とか追いつく。

オレのロッドが何とか届くも、いずれも倒すにはいたらず、門矢

さんの銃撃も届かなくなった。

そして、オレが10回ロッドを振るった刹那、

——グロンギの奴が消えた!?

と思った。

しかし、違った。超高速で一条の目の前に回っていたのだ。

奴は言った。

『ゴラゲグ ガギゴソ ギベビゲザ』

” お前が最後の生贄だ”

なぜか奴の言っている意味が分かった。

そのまま奴は一条の胸の辺りに手をつ込み、一条は吐血をした。

『ガサダザ、リント』

”さらばだ、人間”

奴は最後にこう言っ、一条さんから腕を抜いた。

オレのほうは、意識が飛んだ。

6―土

グロンギの奴は言った。

＜もう＞”受け継ぎの儀式”は終わりに近い。最後の受け継ぎは、お前にしてやる、クウガ! ! >

クウガへの攻撃に失敗した後、こうも言った。

＜クウガ、お前には俺様の能力は効かないようだな。……いいだろう、お前の代わりにあの人間を生贄にしてやる! >

——一条が狙われる!

思考回路がそこまで行くと、俺は敵に銃を撃ち、奴を止めようとした。

そのまま雄介にも、一条を守るよう叫んだ。一条も走り始める。必死に行ったが、駄目だった。俺の銃が届かなくなり、途中でグロンギが瞬間移動をして、——一条は、やられた。

そのとき、同時に雄介は仰向けに倒れた。

俺は、雄介たちの元に向かって走り出した。

しかし、俺の脚は爆風に持っていかれた。雄介のアルティメットフォームの爆風で。

「お前、アルティメットフォームに目覚めたというのか、クウガ」と、奴は言った。

「ああ、そのようだな」と、俺は遠くから返す。

雄介は咆哮の勢いをなくすと、グロンギのほうへ走って行き、雄介の右の拳撃はグロンギの左腕を吹き飛ばし、左の拳は腹の中にめり込んだ。

次に、再び雄介の右腕がグロンギの右腕に降りかかるうとしたとき、奴は避けようとして腹に命中し、右胸が消し飛んだ。

そして、最後に雄介の左手がグロンギの頭に当たり、頭も吹き飛んで爆散した。

俺はゆっくりとした足取りで、雄介のほうに近づいていった。

「雄介、大丈夫か？」といいながら。

すると、雄介はこつちを向いて、こう呟いた。

「潰す……潰す倒す潰す！！！！！」

——暴走してやがる？！！

そう考えるのにさほど時間はかからなかった。

雄介は両腕を広げ、俺のほうに向かって、駆け出した。

7 桜子

自分とついこの前会っていた調査団5人が全員即死。その一報は、五代君が例の遺跡から帰ってきた後、後に会った一条さんに聞かされた。

一気に眠れなくなってしまった。

それなのに、五代君は、変なものに変身し、変身が終わったかと思ったら、12時間もの爆睡だ。

連れてきたファミレスで起きてきた五代君に、
「こつちは眠れなかったよ。あんなもの見せられて、変なのに襲われて、その上、五代君まで姿変わっちゃってる」

と、苦言をはきながらも、一応「ねえ、大丈夫なの？」と聞いておく。

「うん。まあ、いいんじゃない。死なずにすんだし」となどと、――
軽すぎる。

「変身したまま五代君じゃなくなっちゃうんじゃないかって、メチヤクチャ不安だったんだから」

と、こちらは本音。すると、言われた言葉は、

「なんかね、その気になると、あの戦う姿に変わるみたい。で、その気がなくなったら、元に戻った」

などと、またも軽い口だ。「わっかかりやすいよね」と、お墨付きだ。

沢渡さんに、また解析を頼んでくれ。今回は、この石だ。未確認生命体が襲ったと思われる場所に、落ちていた。また新しい情報を得られるかもしれない。よろしく頼む

と言っていたと五代君の妹さん・みのりちゃんは言った。

おっとりとはしているが、保育士をしたりポレポレを手伝ったりと、頑張り屋なところは認められると思う。

「桜子さん、コーヒーついできますね」

「あ、ありがとね」

ついでに気も利く。五代君とはえらい違いだ。

で、解析を任せられたこの石。どうやら、妙なことを書いていそうなのがムンムンするのだが……。

『……ワレ ココ シルス ニ……』

そのあとから、訳すと、こうあった。

『白き闇が復活せし時、すべてのグロンギは目覚める。白き闇は、幾人もの生贄により体を作り、やがて世界を破滅へ導くものとなるであろう。破壊者とともに』

生贄も白き闇も破壊者も、詳細が分からずじまいではあったが、そのデータをワープロやエクセルとかに保存して、私はパソコンを閉じる。

みのりちゃんとのひとときのゆったり時間を楽しむためである。
冷たい事実には、まだ気づいていない。

後でかかって来た電話やテレビでは、こんな一報が届けられた。

——有名ショッピングモールにて未確認生命体同士が連続襲撃と抗争。そのなかで、5人の警官、47人の一般庶民と、抗争の真っ只中にいた警官・一条薫氏、死亡。未確認生命体4号・クウガつまり、五代君の逃亡。残ったのは、未確認生命体に殺されたものの屍と最近発見された4号と同種の未確認生命体だけだったそうだ。そしてあるテレビでは、同時にこんなニュースも取り上げられていた。

『未確認生命体0号と称されるものが町に出没し、彼とともに何百もの新たな未確認生命体の人々を襲っています!!』

これを言い終わった直後、キャスターらテレビ局の人たちや近くの人たちは謎の電撃によって、——一瞬で無に帰ったらしい。

#4 クウガの世界「激戦」

1 - 土

——事態は、そう、最悪だった。

グロンギは倒したものの、一条は守れず、雄介も暴走し、俺も雄介にやられてボロボロになった。

目覚めると、関東医大病院の中にいた。椿という男の勤務先らしい。

起き上がると、前々からいたのか、椿が話しかけてきた。

「よお、門矢君。調子はどうだい？」

気軽に話しかけてきた。そんな椿に暗い声で聞く。

「一条はどうした？雄介は、どうしたんだ？！」

椿の顔から血の気が失せた。そして、ゆっくりと口を開いた。

「いいか、落ち着いて聞け」

その時点で何が起こったかわかった。いや、正しくは、あれが夢でなかったことが分かった。

「そうか。一条は本当に死んだんだな。雄介も、逃げたのか」

その問いに、椿は悲痛な目をして、「ああ」と答えた。

「なら、雄介を助けに行くだけだ」

と言って俺が立ちあがろうとしたとき、回復したらしいナツミカンが病室に入ってきた。

「土くん、おとなしく寝ていてください」

「うるさい。病み上がりはもう一度ベッドに行け」

「土くんなんて、病んでる真っ最中じゃないですか！」

そう言いながら、ナツミカンは、ベッドから出ようとする俺を必死に止めようとした。

そして、椿もこう諫めた。

「いいかい、土くん。君にも”力”があることは、一条やこの娘からも聞いている。しかし、五代君にやられた傷は浅くない。それに、

今町では大量の未確認生命体がうろついている。0号が出たという噂もある」

俺は目を見開き、椿を見た。

「本当か？」と訊くと、「ああ」と、椿はそっけなく言った。

「0号って、土くん、もしかして、……」とナツミカンの言葉を、繋いだ。

「ああ。0号ってのは白い闇。グロンギの中で最強の奴だ。そいつが目覚めてしまったってことだろう」

そして俺は、考えにふけはじめた。

「おいっ、あんたたち何言ってるんだ？」

と、椿のほうは困惑している。

そこへ、ナツミカンがハッと何かを思い出したらしい。

「あ、さっき五代さんが忘れてしまったらしい携帯にこんな留守電があつたんです」

「おいっ、他人の電話、勝手に聞いて大丈夫かよ」

「いや、でも……とりあえず、聴いてください」

そう言われて受け取ると、聞いた。

『五代君、石の解析、半分くらい終わったの』

あの現場で拾った石のことか、と椿が呟く。

『一条さんの電話がつかないから、五代君のほうに連絡入れとくね』

この電話の主は、まだ一条の悲報を聞いていないらしい。

『これねえ、結構なこと書いてるわよ』と言って、はじめた。

「」 白き闇、生贄とともに復活する。白き闇、幾十もの生贄を欲す。白き闇が復活せし時、ともに黒き戦士も目覚めるであろう。黒き戦士と白き闇は、いずれぶつかり、決戦となる。決戦の終わりしとき、全ての決着は、着く」だそうよ。すごいわよねえ。古代の人たちがこんな文残すなんて。それにしても、白き闇は分らないけど、黒い戦士って、前に五代君が言ってたやつじゃない？あ、あと今未確認生命体と戦ってるそうね。テレビでチラッと見たけど。これ聞く

ころには終わっちゃってるかもしれないけど、無事、祈ってます。
じゃあね』

そう言って、電話は切れた。

——今この電話の主は、どういう心情でいるんだろう。

「まず、この電話の人に今の状況を伝えて、この石について聞きましよう」

とナツミカン言ったが、椿はこういつて制した。

「いや、もうテレビで状況のほうは見たはずだ。それに、今石について聞くのも、残酷だろう。大切な人が二人も同時にいなくなっただからな」

これには、俺も同意見だった。

一条がグロンギに殺され、雄介は暴走して逃亡している。その惨劇を知っている俺ももちろん語りたくはない。だから、

「俺は、雄介のところへ行く」

「だが!」「土くん!」と、椿もナツミカンも止めようとする。

それを、「俺は!」と怒鳴って払う。そして、こう続けた。

「……俺は、一条を助けられなかった。雄介も暴走して、それを止められなかった。責任を感じてるわけじゃない。だが、グロンギも出てきて町が廃れていくのを、指咥えて見ることができるほど、俺は馬鹿じゃない」

俺は、痛みをこらえながら、点滴の管を外し、病院を後にした。

雄介を見つけるのは、案外容易いことだった。

2「夏海

私は、鳴滝さんと話した後、いつの間にか眠っていたようだ。起きた時には、少し前に会った一条さんの友人と聞いた椿さんだけが立っていた。

やあ、光さん。目が覚めたようだね

そのまま、軽く問診があった後、

くもっ少しだけ寝てな。一条や門矢君たちが来たら、起こすから>

といわれ、仕方なく寢床に戻る。

士くんが運ばれてきたと言われたのは、その直後だった。

士くんは、顔やお腹のほうに痣をつけて帰ってきた。敗れたらしい。

<光さん、一つ先に言っとく。きつと、門矢君は知っているだろうから、彼には言う必要が無いだろうが、>と、念を押され、身を構えた。だが、椿さんからの言葉には、ほとんど意味が無かった。

一条さんの悲報に、五代さんの失踪……たてつづけに言われ、少し混乱した。

話し終わってしばらくすると、士くんの目が覚めた。彼の顔は見たことも無いくらい真っ青だった。<……俺は、一条を助けられなかった。雄介も暴走して、それを止められなかった。責任を感じてるわけじゃない。だが、グロンギも出てきて町が廃れていくのを、指咥えて見ることができるほど、俺は馬鹿じゃない>

彼には、相当な自責の念が絡んでいた。そして、それを言い終わると、独りでに病室を出て行った。

「行つてやりな」

椿さんは言った。そして、こう続けた。

「俺には、彼とは付き合いが短すぎる。だが君なら、少しは回復するんじゃないのかい？」

私は、その言葉に押されるように病室を出て行って、士くんのあとを追った。

いや、本当は、出たすぐに士くんが立ち止まっていた。

「士くん！私も、」

そう叫ぼうとした。その刹那、彼が立ち止まっている理由が分かった。

士くんの目の前には、――黒いクウガが立っていた。

黒いクウガは呟いて、叫んだ。

「倒す！潰す！全てを壊す！！」

「お出ましか」

士くんはそう言うと、ブッカーからカードを取り出し、バツクルに入れて、ディケイドに変身した。

『KAMENRIDE DECADE』

変身した士くんはゆっくりと黒いクウガを見据え、こう言った。

「雄介、俺が、——お前を止める!!」

その言葉に呼応するように、五代さんであろうクウガは叫んだ。

「うおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!」

そして、クウガは両腕を広げて駆け出す。

『ATTACKRIDE SLASH』の音声で、士くんも右手で剣を握り、走り出した。

クウガが左拳を振るい、それを士くんが剣で受け止め、そのまま払って士くんは左拳で腹を打とうとする。それをクウガが右手で止める。

そのまま、殴り合い状態になる。

「うおおおおおお!!!!!!!!」 「だああああああああ!!!!!!!!」

二人の叫びが耳に響いた。

そこへ、意外にも、鳴滝さんが現れた。

「やあ、夏海くん」

「鳴滝さん、何しに来たんですか?!」

「私は何もしない。この世界の末路を見ておこうと思ってね」

鳴滝さんはそう言うと、二人の闘いを見据えた。

「いいかい、夏海くん。もし士くんをこのままにしておけば、あんなふうなライダーたちは全滅し、世界は滅びてしまう。もう一度言う。士くんを止めるんだ」

鳴滝さんは、前よりも強く力をこめてそう言った。

私は少し考えて、こう言った。

「私は、……私は、士くんが世界を壊してしまうとは思えません。彼は、みんなを救おうとしている」

——そう、一条さんも五代さんも救おうとしていた。

「そんな士くんをとめることなんてできません！」

そう言くと、鳴滝さんは悲しい目をしてこう言った。

「そうか。まあ、いい。まだ気が変わる余地はある。真の悪が誰かを知るのも、そう遠い話ではないだろう。じゃあ、私は退散するでしょう」

言い終わると、鳴滝さんは消えてしまった。

二人を見ると、まだ闘っていた。

そして、二人がそれぞれの右拳で顔を殴ったその瞬間、時は止まった。クウガ、五代さんのほうが倒れたのだった。

士くんは言った。

「雄介、行くぞ」

3―雄介

グロンギが消え、一条さんが倒れた瞬間、オレの意識が飛んだ。

——一条さんを守れなかった。

その無念が胸を裂いた。そして、オレは暴走を起こした。

門矢さんを倒してしまった。そして、民衆まで襲おうとしたが、意識が保ち、ぎりぎりで食い止めた。その足で、未確認生命体たちを10体ほど倒していった。そしてそのまま、関東医大病院へ行った。

そして、門矢さんと再び戦って、やっと意識が元に戻った。

目が覚めたのは、それからしばらくしたあとだった。

予想通り椿さんが立っていて、近くには光さんや門矢さんの姿もあった。

「気がついたか。五代君」と椿さん。

「あ、ありがとうございます、椿さん」

「礼なら俺に言わないで、門矢さんに言ってくれ。お前が回復したのは、この人のおかげだ」

そういわれて門矢さんのほうを見ると、ちょっと嫌そうな顔をし

ていた。わざとであろう。

「ありがとうございます。門矢さん」

「礼はいい。とっとと行くぞ。ダグバたちが暴れている」

オレは飛び起きた。ダグバの名は、依然別の記憶で見たことがあった。最強の生命体・白い闇といわれるン・ダグバ・ゼバ。

「あいつが、いるんですか?！」

「ああ、復活したらしい。ほかのグロンギどももウジャウジャいるぞ」と、門矢さん。

「救急の治療もしたし、怪我してるんだから行くな、とはもう言えないよな」と椿さん。

オレはその言葉になるべく元気をこめて、「はい!」と言った。

椿さんにドアのほうへ促され、オレと門矢さん、光さんは椿さんの車でダグバのいる場所へと向かう。

町に着くと、すでに雷が落ちていた。いや、違う。ダグバの率いた集団が雷を起こして、町を壊滅させていたのだ。

「はじめよう、最後のゲゲルだ!」

ダグバは叫んだ。すでに人間の言葉を話せるらしい。そういえば、未確認生命体の一部は、人間に乗り移る場合があると、聞いた。

後ろには、50体以上の未確認生命体があった。

「やつぱりウジャウジャいるもんだなあ」

門矢さんは言った

「門矢さん、オレは、」と言いかけると、

「門矢さんじゃなくて、土でいい」と言われた。

オレは、ちょっと驚いたが、すぐに笑って、こう言った。

「オレと一緒にこいつらとしてもらっていいですか、土!」

「おう!」

そう言って、二人で同時に変身をした。

腰の前で手をかざしベルトを出現させて、赤の金のクウガに変身。士は、『KAMENRIDE DECADE』で、ディケイドに変

身した。

そのとき、ようやく敵たちはオレたちに気づいて走り出した。オレと士も走り出し、戦いを挑んだ。

カブトや鳥のような敵を右から左からなぎ倒す。

士の協力もあってか、敵は10、20と次々爆散していった。

残るは、ダグバのみとなった。

4―士

「貴様らを殺す！」「貴様なんぞに負けてたまるかあ！」「小童がああ！」

そんな怒号を耳に受けつつ、俺と雄介はグロンギを倒した。

そして、残るはダグバのみだ。

そう思って前を向いたとき、体に電気を感じた。奴の能力で感電したのだ。

雄介もそれを浴びたらしく、俺も雄介も変身を解かれてしまった。俺たちは地にひれ伏していた。

「どう？本来の自然発火能力には及ばないけど、感電する気分は？」

「ぐっ」「くそっ」と俺と雄介は半ばボロボロでいた。

「ハハハッ、君たちが僕を目覚めさせてくれたんだってね。あ・り・が・と」

俺と雄介が白い服を着た、おそらくダグバの人間体であろう青年を見上げた。

「オレたちを……どうする……つもりだ」と倒れたままの雄介。

ダグバは笑いながらこう言った。

「殺すよ。遊びながら♪殺して楽しいじゃん」

俺たちは地の小石を握った。

「あ、そういえば、見たよ。さっきの君たちのゲゲル。面白かったよ♪あ、ゲゲルってゲームのことね。同士討ちなんて、最高だったよ。」

雄介が歯を食いしばる音がこっちにまで聞こえてくる。

「乗り越えようとしてもしないお前は、俺がここで倒してやる」

「きみ、いったい誰なんだい？」

「俺は……通りすがりの仮面ライダーだ……覚えておけ……！」

そう言つて、俺は雄介とともに変身した。俺は『ATTACK RIDE』の剣を掴み、雄介は赤い目のアルティメットフォームに変身した。雄介は、ようやくコントロールできるようになったらしい。

「クウガに、ディケイドか。面白い」

その言葉を皮切りに、俺たちは向かい合つたまま駆け出した。

雄介は拳撃、俺は剣撃を浴びせる。ダグバは蹴りで俺たちと距離をとろうとする。

その途中で、ブツカーの辺りに変な感覚があつて、そこに手を伸ばした。

新たなカードを取り出した。

3枚のカードには新たな力が宿っていた。

「行くぞ、雄介！ファイナルフォームライドだ！」

雄介は隣に来て、俺を一瞥してから、「はい！」と叫んだ。

そして、俺が新しいカードを一枚バツクルに挿入する。

『FINAL FORM RIDE KU KU KU KUGA』
その音声とともに、隣にいた雄介は、ゴウラムに似た形状になった。

そして、もう一枚カードを挿入する。

『FINAL ATTACK RIDE KU KU KU KUGA』

と言う音声とともに、雄介がダグバを両アゴで捉え、一度天に舞つてから急降下し、ディケイドの跳び蹴りで挟み潰した。

ダグバは死にはしなかったものの、「ぐああああああああ……！！！！」と言う叫び声をあげ、かなりのダメージを負つたようだった。

「雄介、止めと行こう」

「はい」

俺は剣を握り、雄介はアルティメットフォームで走り出した。

「「「うおおおおおおおおお！！！！！！」」」

そして、次の瞬間、勝負は決した。

俺の剣と雄介の拳が、ダグバの胸を貫いた。

「お……のれ、……クウ……ガ………ディ……ケイド」

とダグバが呟いた後、奴は爆散した。

激戦は、終結した。

5―雄介

「本当に、ありがとうございました！」

オレと椿さん、桜子さんは一堂に集まって、光さんと土に礼を言った。

「いえ、こちらこそ、いろいろありがとうございました」と光さん。

「本当、うちのみのりも呼ぼうと思ったら、保育所が大変だって言うし」

とオレがブツブツ言っていると

「あ、いえ、妹さんには別に迷惑かけられてないし」

と光さんが慌てる。

「あ、そうっすよね。オレが一番迷惑かけました！すいません！！」
と言いながら、わざと大きく腰を折る。

「あ、いや、そういう意味じゃなくて」

と、光さんはさっきよりもさらに慌てた。

そんな彼女に”笑顔”を贈る。

それを受けて、彼女も微笑んだ。

今度は、土のほうに顔を上げる。

「土、本当に、お世話になりました！！！！」

そう言って、90度以上腰を曲げる。

2秒ほどして、上から土の声が降ってきた。

「今から文句を並べてやるから、頭を下げっぱなしにしてろ」

「でっ！マジッすか？！！」

オレが顔を上げようとすると、土が抑えてきて、頭が下がる。

「ちよつ、土さん！待った待った待った！！オレの全ての技駆使しても、これ無理すよ！！」

「じゃあ、お前の2001番目の技にでも登録しろ」

「2000まででいいんですってば！！」

そう俺が叫ぶと、周りは大爆笑に包まれた。

この居心地は、本当にいい。そう改めて思った。

未確認生命体はダグバを倒した後、ニュースにならないくらい、出てこなくなかった。とはいえ、数日にいたいは出てくるので、クウガをやめるわけにはいかない。

士たちとも、本当にお別れとなる。

「じゃ、本当にありがとうございます。士！」

「ああ」

そう言って互いの右手を握った。

「ありがとう。そして、さ」といいかけたところに、

「だが別れは言わんぞ」と土が制した。そして、こう続けた。

「またいつか会える、そう思ったほうが楽しいだろ。じゃあ、また・な」

そう言って後ろを向き、土は歩き出した。光さんは礼をしてから土を追った。

俺たちも、——おやつさんたちの待つ、ポレポレへと戻った。

6―夏海

私たちは、五代さんたちと別れ、写真館へと戻った。

「おお、夏海、土君、戻ったんだね。結構長い間出てたみたいだけど、大丈夫かい？」

おじいちゃんは何も無かったかのように訊いた。

「うん、大丈夫だったよ、おじいちゃん」

私は笑顔でそう言った。

鳴滝さんの話を聞いたときは、どうなるものかと思っていたが、大丈夫だと、今の私は思う。

——もしなにかあるようだったら、止めるべきとも、正直思う。

ダグバというグロンギとの闘いするときこそクウガとなった雄介と共闘していたが、その前の闘い——クウガが暴走してアルティメットフォームと戦っていたときの土くんは、恐かった。

私は、そんなことを考えながら土くんを見る。

土くんは気配に気づいたのか、私を見て言った。

「よしっ、ナツミカン、この調子で次行くか」

「って、どうやって行くのかわかってないくせに、どうやって行くつもりですか」

と毒づく。

土くんは、グッ、と言って少しうろたえる。

「大丈夫だ。少し待とう。ここだって、待ってたら、自然にここに着いたんだから」

とか何とか言いながら、土くんはソファに座った。

「そんなものですかねえ」

と、私も隣に座る。

「まあ、二頭追うものは一頭も得ずって言うしね」

おじいちゃんは自信満々に言うが、

「おじいちゃん、それ少しだけずれてる」

と私は言う。

「そうかい」

と、おじいちゃんとはける始末だ。

「じゃあ、テレビでもつけるか」

と、土くんがテレビのリモコンに手を伸ばした。

しかし、リモコンを操作するも、テレビがつかない。主電源も付いている。

「付きませんねえ」と私が言うと、

「誰かの陰謀か」と土くんも言った。

そう言っていると、後ろのほうであの図録が輝いた。それを開くと、目次のほうに新しい文字が浮かんだ。

『仮面ライダーキバ』とあった。

「次は、……キバか」

私は、外を見た。

バイオリンの音がやっとなつたテレビから流れてきた。きれいな旋律であつた。

#4 クウガの世界「激戦」(後書き)

長い長い文章の完読、おつかれさまです。

今回は、まだディケイド本編やゲームの映像とか以外で、一切情報を持っていないバンパイアさんの世界。

作者、大変そうだなあ、と思っています。

構想どころか、まだウィキペディアでしか見てませんので、わかりませんが、構想できたら、一気に書くっていう派なので、とっとと情報収集してきます！

今回は5月までには書けたらなあ、と思っています。一応現役高校生なので。受験生じゃなかっただけ、まだましかな。

今回はもつといい作品書けよっていう皆さんのお言葉を聞きながら(というかあったら?)、がんばります!(↑とかなんとかいいながら、4月中に終わったりするんじゃない。どうだろう)

感想や誤字脱字・キャラの大幅なブレ・(前の世界でも)登場させてほしいキャラなどいましたら、お寄せください。(ちなみに、周る世界の順だけは、既に決定しておりますので、あしからず)

では、次回もお楽しみください！

「リボン」の雲雀、「ブリーチ」の日番谷などでペンネームを決めた若干高2の、作者・氷雲しょういち、でした。

#5 キバの世界「序曲・彼方からの鎖」（前書き）

作者、1話目作成時に、全話1万字を突破しようと思って頑張った
ら、3話目にして無理になり、ここにきて、「この話（1話目）、
1万じゃ入らなくなってしまった……。いいや、ちよつと無理しち
やえ！」ってことで無理しちゃいました。

そして、更新やっぱりかなり早くなりました（でも皆さんにとって
は遅いですね。すいません）

作者、最初に「世界ごとに更新するって言ったのに、アクセス解析
で、初投稿作品なのに案外アクセスが多いことに驚いて、（もちろ
ん、精度は落とさぬよう）早めにやっちゃおうと思い、やっぱり一
話ずつ更新しちゃってます。（ご安心ください。構成は書いていま
すので、終わりがメチャクチャとか分からないなんてのはなりま
せん）

それに、今回のキバは一切見たことのない作品でしたので、正直苦
戦しました。でも、いいものになっていると思いますよ！

では、『仮面ライダーディケイド』version改』キバの世
界編に入った第5話です！どうぞ！

#5 キバの世界「序曲・彼方からの鎖」

”竜頭蛇尾”って言葉があるが、できれば人生くらい、逆の”大器晩成”で行きたいものだ。太く短くつてな！つて、それとは違うっけ？

そういやあ、王の継承者としての運命を背負わされる渡に関して、その器があるのかないのか、……はああ……つてオレが疑っちゃいけないよな。オレは信じなくちゃならねえ。信じて、あいつに力を与え、いずれ立派な王になるようにしなくちゃな！

つつつても、まだキバになって1週間経ったかどうか。仲間になるガルル・バツシャー・ドッガとも会っちゃいない。

しかも、まだ明確な自分の意思で闘いに参加していない、つとか言ったこともあつたっけか。

そんなんじゃ、まだまだ真の帝王にはなれねえぞお、渡！

1―士

『仮面ライダーキバ』

図録を開いてそれを目にしたとき、あの頭痛が俺を襲った。そして、その場に倒れこんでしまった。

「士くん?!」「大丈夫かい、士君?!」

ナツミカンとじいさんの声が一気に聞こえなくなった。

また記憶が、俺を襲った。

再び荒野に俺は立っていた。しかしその荒野は、クウガのいた荒野とはまた別のところで、大きな岩が見下ろしていた。

目の前には、今度は、100以上にも思えるモンスターとライダーの軍勢が並んでいた。

ライダーの一人が言った。

<我々は、ライダーとモンスターの連合軍。帝王様の命で、貴様を消しに来た、ディケイド！>

<何だと？>と俺は言う。

別のライダーが歩み出た。

<貴様を倒しに来たといったのだ、ディケイド>

<——やってみろ、出来損ない共>

俺は、なぜかやつらを挑発した。

<この状況で威勢がいいなあ、ディケイド>

<……………>と、俺は黙る。

<お前が50万もの戦士を葬ったと聞いたが、それはデマカセである>

<どうだろうな>と俺ははぐらかす。

<もしデマカセでなくても、貴様はここで終わりにしてやる>

<安心しろ。——それは、叶わない>

俺がそう言ったのを皮切りに、敵の軍は一斉に走り出した。

俺と敵の軍の間に、突如として閃光が走り、黒い扉が表れた。ノ

ブの周りにだけ赤い線でエレキギターの絵があった。

そして、一人のライダーが現れたかと思った刹那、再び閃光が走

り、——記憶が飛んだ。

——彼方には、金色のライダーと黄色いライダーがいた気がした。

俺は目覚めると、ソファで寝かされているのに気づいた。

「あ、土くん！目が覚めたんですね！」

と、俺が起きたことに気づいたナツミカンが駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？」

「ああ。大丈夫だ……また、記憶、か……」

俺は無意識にそう呟いた。最後が聞き取れなかったのか、ナツミカンは不思議そうに顔を覗き込んできた。

それを、「いい」、と言って払い、こう訊いた。

「図録には、何か手がかりがあったのか？」

「いえ、特にはどこっていうのはいんです。それに、情報が異常に少なくて」

そういいながら、ナツミカンが図録を持ってきて、俺がそれを受け取る。

『仮面ライダーキバ 適合者・紅渡』

まず、説明しておく。これは1986年とその22年後の2008年が同時に主題として回っているほかの世界にはまず無い、二つの時空が独立しつつも関わりあい、同時の進行がなされることで正常に動いている数少ない世界の一つなのである。』

そして、” はじまり ” のところには、こうあった。

『1986年。世では人間の生命エネルギー・ライフエナジーを吸って生きるモンスター・ファンガイア族が暗躍していた。人間に化けるそれに気づいた数少ない人々がファンガイアと戦いを繰り広げていた。ある日、腕利きのファンガイアハンター・麻生ゆりは標的であるファンガイアを追い詰めるも、彼女に惚れたらしい1人の天才バイオリニストの乱入により取り逃がす。そのバイオリニストとは、紅音也。彼はこれにより、ファンガイア存在を知ることとなる。』

それから22年経った2008年。Googleにマスクという奇妙な姿で出歩く、怪しげな青年がいた。彼の名は紅渡。音也の息子である彼は、父の遺した最高のバイオリン「ブラッディ・ローズ」を超えるバイオリンを作るためにバイオリン職人として修行を続けていたが、他人との接触を極端に嫌う自称「この世アレルギー」で、内気な性格のためさまざまな場所でトラブルを起こしていた。

そんなとき、22年前に逃がしたファンガイアが再び出現。ゆりの娘であるファンガイアハンター・麻生恵が戦いを挑むも、圧倒され危機に。その時「ブラッディ・ローズ」の弦が突如として震え始め、それを聞いた渡は本能的にファンガイアの元へ。奇妙な姿をしたコ

ウモリ・キバットが渡に噛み付いた瞬間渡の身体は鎧に包まれ、異形の姿「仮面ライダーキバへと変貌を遂げた。」

長い文をようやく読み終え、顔を上げると、ナツミカンが言った。

「一応、この”周りの人”のカフェに行きます?」

”周りの人”の欄に『木戸明』というカフェ・マル・ダムールのマスターの名があった。

「そこか」

そう言っ、また出ようとしたら、じいさんが言った。

「今度は、早く帰って来るんだよ」

じいさんはいつも通りの笑顔を浮かべていた。

2―夏海

「あ、そういえば、土くん」

バイクに乗る途中で私は言った。

「なんだ、ナツミカン」

「このバイクって、ディケイドに変身しているときも使ってますけど、このバイクで合っているんですかねえ」

「……知らない」

そう言っ、また私を後ろに座らせ、バイクを走らせた。
心地よい風が流れた。

木戸明さんがオーナーをしてるという”カフェ・マル・ダムール”に着いて、中に入ってみると、10人ほどの先客がいた。その中にはもちろん、図録に載っていた人もいた。キバの適合者・紅渡さんもだ。

「いらっしやいませ!」

そう言っ、出迎えてくれたのは、麻生恵さん。カフェの店員ではなかったはずだが、と思っっていると、出迎えを済ますとサツと紅さ

んの方を向いて、「君ねえ!」と叱責し始めた。魚がどうこう言っている。

「君、いったいなにがしたいの?! 私の食べ残しの魚の骨なんか盗んで!」

ギョツとしている私を他所のに、奥にいた人が話し始めた。野村静香さんだ。

「ちよつと、コーヒーの迷惑です! 私たちは、オーナーに礼をしに来たんですよ!」

「何の礼よ!」

「あなた様の机のおかげで商売繁盛してますって!」

「商売ってまだ3件あったかどうかでしょう」

「それは……」と野村さんは後ずさる。

「だいたい、お母様、子供に他人の魚の骨盗ませるとは、どういうご教育を?」

これは、嫌味だろう。野村さんは14歳。紅さんの母親であるはずは無い。

「それは……ねえ……」と野村さんは、少し勢いをなくした。

そんな女の戦いに土くんが横入りをしてきた。

「いい大人が中学生をいじめるか。ああ、恐い世になったもんだ」と、いつ頼んだのか、コーヒーをすすりながら言った。

「い、いじめですって?!」

麻生さんは激昂する。協力や調和といった言葉が好きな女の人なら、当たり前だ。

「これのどこが、いじめよ!」

「相手が嫌な思っている。しかもあんなのほづが明らかに一方的だ。だろ?」

と土くんは、奥の野村さんに同意を求める。野村さんは、小さく頷いた。

それを見た土くんが、

「相手が嫌と思えば、いじめだ」

「喧嘩はどう説明するって言つのよ!」

「喧嘩ってのは双方がいがみ合い、互いにいじめあっていることがそれだと思っている。それでどうだ」

麻生さんは、「うるさい!」と捨て台詞を吐いて、店を後にした。彼女の電話も鳴っていた。

周りがざわざわし、静かになったところで、

「ありがとうございます」

4歳くらいの少年のように、20歳である紅渡さんが礼をした。

「僕、間にいるのに、何も声かけられなくて……」

おどおどした口調だ。静かな性格なのであろう。

そして、紅さんは聞いた。

「あの、お礼させてもらっていいですか?」と紅さん。

土くんが「じゃあ、」と明らかに何かを要求しているのを制して、私はこう聞いた。

「ああ、じゃあ、まずオーナーさんはどこですか?」

「オーナーさんは、友達に会いに行っているそうです」と野村さんが答えた。

「そうですか」と私が言うと、土くんは立ち上がり、

「ちよつと来い」

と言って、紅さんを持ち上げた。

「えっえええええ」と紅さんは驚いてか、半泣き状態。野村さんも当然止めようとしていた。

「用がある」

そういつて、土くんは店を出ようとした。私も当然止める。

「土くん、理由は?」と私が聞くと、

「ナツミカン、化け物が外にいる。こいつと倒しに言ってくる」と小声で言った。

私は少し考えてから、頷き、土くんたちを通した。紅さんは不本意だろうけど。

そして私は、野村さんの説得に身を投じた。帰ってきてください

よ、と念は押しといた。

3―紅渡

恐い人に連れて行かれる。

――恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い！！

そう思っていると、すぐにドアが開き、店から出された。

――こんな恐い思いしたくないよお。

と、そう思っていると、あの記憶を久々に思い出した。

最初の変身が終わると、いきなり僕は倒れた。貧血かと思ったら、そうじゃなかった。

記憶が雪崩のように流れ込んだ。

――そこは、荒野だった。大きな岩が見下ろしていた。

目の前には、今度は、100以上にも思えるモンスターと自分のような鎧のようなのを纏った人たちの軍勢が並んでいた。

人が言った。

<我々は、ライダーとモンスターの連合軍。帝王様の命で、貴様を消しに来た、ディケイド！>

<何だと？>と奥にいる、ディケイドという人が言った。

別の人の小さな足音がして、言葉が聞こえた。

<貴様を倒しに来たといったのだ、ディケイド>

<――やってみろ、出来損ない共>

ディケイドの声は、なぜか軍勢を挑発した。

<この状況で威勢がいいなあ、ディケイド>

<……………>と、ディケイドは黙る。

<お前が50万もの戦士を葬ったと聞いたが、それはデマカセである>

<どうだろうな>とディケイドははぐらかす。

<もしデマカセでなくても、貴様はここで終わりにしてやる>

<安心しろ。――それは、叶わない>

ディケイドがそう言ったのを皮切りに、軍勢は一斉に走り出した。ディケイドと軍勢の間に、突如として閃光が走り、黒い扉が表れた。ノブの周りにだけ赤い線でエレキギターの絵があった。

軍勢は、先ほどの閃光でほとんど全滅した

そして、ドアの中から一人の人が現れたと思った刹那、再び閃光が走り、軍勢は全滅。残ったのは、なぜか金色の鎧を纏っていた僕だけだった。

ドアから現れた人は黄色を纏っていた。僕たちは向かい合っていた。

彼は、後ろのマゼンダの人をちらりと見て、

「ごめんね、ディケイド。こいつは、僕がやる」

と言って、前を向いた。

その直後、彼は走り出した。僕も、無意識に戦闘体制に入り、彼を迎えた。

彼の初撃を腕で防いだ時点で記憶が飛んだ。

あれは、とにかく恐かった。

あんな夢、二度と見たくない、と願ったら、叶ったのか、よくある悪夢の繰り返しは無かった。

でも、これも怖い。

世の中は怖いものだらけ、汚いものだらけであると教わったが、本当に怖いものだらけだ。

そう思っているうちに、建築しかけのビルに着いた。いや、正確には士くんと呼ばれたこの人が止まっただけである。

「出やがったな」

士さんが言った。

前を見ると、——ファンガイアだった。

「おいっ、渡、キバになれ」

士さんは言った。僕は、耳を疑った。なぜなら、まだキバのことはキバットくらいしか知らない、と思っていたからだ。

僕はここでやっと連れ出した意味を理解できた。

「えっと、は、はい」

と、僕はおどおどしながら答えた。

キバが飛んできて、「おっしゃー、ガブツ」と手の甲を咬んだ。

そして僕は、キバに変身した。

「じゃあ、キバっていこうぜえ、渡！」というキバツバットの言葉を一瞥し、僕はファンガイアに向かった。

まだ未熟すぎるために蹴りのみをし続ける。腕を使うときにも、遠心力で腕のほうをぶつけるだけだ。

一応、キバツは「いいぞお、渡！その調子だ！」と励ましてくれる。

僕のほうは本能的に戦っていて、結構無意識である。

何度かの蹴りを入れ、お腹にも一発蹴りを入れた。

相手のファンガイアは木にぶつかり、唸りながら頭を抱えた。

「じゃあ、終わらせようぜ、渡！」

とキバツが言うのを合図に、僕は右腰のウェイクアップフエッスルを取り出し、キバツに挿す。

すると、キバツは「ウェイクアップ！」というコールをし、僕の右足の拘束具を外した。周囲は一気に夜になった。僕は空高らかに飛び上がり、相手に飛び蹴りを食らわせた。

ファンガイアの足元にはキバの紋章が浮かび、ファンガイアは碎け散った……はずだった。

しかし、ファンガイアは苦しんではいるものの、生きていた。

僕は、驚いている間にファンガイアに殴られた。

そんな僕の前に、マゼンダ色の影が現れた。それは、——ディケイドと言われていた人だった。

4―士

俺は、ナツミカンの反対を無視して、店を出て、ファンガイアを迎えた。

俺は、渡にファンガイアを任せ、傍で腕に傷を負っていた恵の元に行った。

「大丈夫か、恵」

恵は近くに來た俺に目を丸くした。

「なんで、あなたがこんなところに?! っていうか、なんで恵?!」

「縁だ。たぶんな」

俺がそう言うと、麻生は黙り込み、俺は腕の止血の続きをした。

「……あなたは、運命を例えるとしたら、何に例える」

「なんだ、いきなり……それは、お前と渡のことか」

「ちっ、違うわよ。単に聞いてみてるだけよ」

「お前はどうかんだ?」

恵は少し黙って、こう言った。

「私は……鎖。鎖に例える」

俺は頷く。

「運命って言うのは、決められたものでしょ。決められたものに縛られるから、鎖」

恵は、最後を強調して言った。

「あなたは?」と訊かれ、俺は少し考えてから言った。

「俺は、運命を道路にでも例えるかな」

「道路?」

「ああ。人そのものは、車かな。未熟なものは案内がいるし、その案内に従うばかりだ。間違った場合は、迂回ルートかなにかの処置が必要だ。それにある程度の挑戦者は、案内をあえて無視して違う道を通り、人生を変える。もちろん、どの道を選んでも、止まってもいい。そう、思うがな」

恵はずっと俯き、聞いていたようだった。

「そう。道ね」

俺は止血が終わると、こう言った。

「じゃあ、俺は行く。用事があるんでな」

そういうと、恵は少し戸惑って、「待って！あそこには、」と焦り気味に言って、ハッと黙った。

ファンガイアのことを言いたくないのだろう。

「ファンガイアがいるんだろ。知っている」

俺が言つと、やはり目を丸くした。

俺は、恵を一瞥して渡の方へ走り、ファンガイアとの戦闘のため、いつものごとくバックルにカードを挿入し、ディケイドに変身した。キバの元へ行ってみると、途中で景色は夜になり、キバはキバフォームでの必殺技「ダークネスムーンブレイク」をファンガイアに食らわせていた。

——今回は出る幕無しか。

と思っていると、ファンガイアは余裕で立っていた。

少々は驚きつつも、俺は奴を倒しにかかった。

敵のほうは俺に気づくと、素早く攻撃にはいった。

そして戦ってみると、意外にも素早い攻撃であった。ディケイドの状態では間に合わないほどだった。

——仕方ねえか。

そう思つて、ブッカーから再びカードを取り出し、バックルに入れた。

『KAMENRIDE KUGA』

という音声で俺はクウガになり、次のカードを入れる。

『FORMRIDE KUGA DRAGON』

という音声でクウガのドラゴンフォームになった。

そして、ロッドを使いつつ攻撃にかかったが、突如敵は左腕を自ら砕き、逃走した。

「待て！！」

と俺は追うも、無駄だった。——奴は瞬間移動でもしたかのように姿を消した。

「逃げられたか」

と、俺はクウガの変身を解き、ディケイドの状態になって、渡のほ

うを向いた。

すると、キバはいきなり殴りかかってきた。

キバットのやつが、「デイケイド、なぜここへ来た！お前、悪魔なんだろうが！！」と言っていた。

——「こんな奴にまで」俺・デイケイド「悪魔」思想が広まっているのか。

と驚いた、というか、呆れた。

「おま、お前を倒す！」

渡は噛みつつ、言った。

キバは、足技を多用し、回し蹴りを何度も決めた。

「くそっ」と俺は、腕で蹴りを防ぎながら言った。

そして、蹴りでキバを遠ざけ、その隙にまたブッカーに手を入れ、二枚続けて入れた。

『KAMENRIDE KUGA』『FORMRIDE KUGA TITAN』

で、クウガのタイタンフォームに変身した。動きは鈍いが、ダメージはかなり軽減される。

そして、タイタンフォームの武器であるタイタンソードを一振りした。

「ぐああああああ！！！」

と、渡はかなりのダメージを負ったようだった。

そして、素早くデイケイドの姿に戻り、

『アタックライド ブラスト』の音声を聞きながら銃を構え、渡の頭のほうに向けた。

「あっ」と渡が気づくも、遅かった。

俺は、「これで、俺の勝ち、かな」とだけ言って、銃を納めた。

「なんで、止めを刺さなかったんだ」と渡は聞いた。

「俺の役目は殺しじゃないからな」と俺はいい、変身を解いた。

渡はおそらく目を丸くしただろう。俺がデイケイドだったなんて、ってな。

「あなたが……」

と渡が黙りこむと、

「恐え〜。恐かったぞお、渡ううう」とキバットがベルトから外れて言った。

渡も、変身が解ける。

黙っている渡をよそに、俺は言った。

「俺は敵のつもりはない。敵なら、今ので撃ってるしな。話を、聞きたいだけだ」

と言って、手を出した。

渡は俺の腕に？まって、立ち上がった。

その直後、「ぐっ！！」と言って口をふさぎ、いきなり苦しみだした。

「どうした？！」

俺は慌てて駆け寄る。すると、渡は右手で口をふさぎ、左手で頭を支えながら言った。

「この世アレルギーです。なんていうか、この世界の全てを見るのにも触るのにも、免疫機能つてのが過剰に反応しちゃって、ホントはマスクを外したりしても駄目なのに……。まだ治ってなかったんだ……。下手したら、死にます！」

俺は、少し呆れ気味にこういつてやった。

「それは、お前の家なら治せるか？」

「……ばい。だぶん」

俺は、はあ、とため息をついてから、おもむろに携帯を取り出し、ナツミカンに電話をした。

渡の家に行くように、と言った。

俺と渡は、渡の家に行った。そこでまた驚いた。

渡の家は屋敷っぽい家で、写真館の隣にあったのだ。

「まさか、お前の家がうちの隣とはな……」

「ばい……ぼくぼどぼぎまぢだ」

——この世アレルギーだったので、言葉もしゃべれなくなっただか。
「とにかく、お前の家行つてマスクとつて来い。俺は、写真館にひとまず戻る」

「……ばい」

それだけ言つと、渡は自分の屋敷に戻つた。

俺は写真館に戻る。

そこには、カフェのマスターとじいさん、ナツミカンに静香がいた。じいさんたちは、「コーヒーは豆が命」とか「いや、作る側の技術が命」だとか、コーヒー漫談を繰り広げていた。

「なんだ、お前たちもいたのか」

「ここでおいしいカフェオレくれるつて言うから」と静香。

「落ち着こうつて言つたんです」とナツミカンが助け舟を出すように言う。

一通り聞いてから、俺は言つた。

「カフェオレとは、子供だな」

「なんですつて！だいたい、あなたが渡を連れて行くから」静香が怒る。あまり恐くはない。

その言葉の途中で、渡が入ってきた。マスクをしていた。

「こんにちは」

「あ、渡君！」と、静香が駆け寄る。

さっきのカフェでの話といい、かなり仲のいいようだ。そういえば、さつき恵はこいつを「お母様」とか言つてたっけ？

渡はポケットと「バイオリンの写真なんかありますか？」なんて聞いている。

俺は率直に「ない」とだけ言つてやる。すると、渡の奴は悲しげな顔になつて、

「ええ、無いんですか」

と半泣きだ。

「じゃあ、土さん、父のバイオリンも持ってきたので、写真とつてください」

といつの間にか持ってきていたバイオリンを左手に持って、渡は言った。

「いいだろう、一枚10万な」と俺は冗談で言った。

渡は、「え〜、そこまでお金持っていないです」と少し涙ぐみながら言った。

「えっと、私が出します」と静香が言い始めたので、「嘘だ。金はいらん」と言ってやった。

そして、一枚の写真を撮ってやる。

——そういえば、雄介のほうも撮ってやったなあ、と今更ながら思い出す。

雄介の写真は、クウガの世界からの帰り際に、あいつの得意技であるサムズアップをさせ、撮った。指示はしていなかったが、一番の得意技・笑顔もしていた。俺の歪んだ写真には、笑顔でサムズアップをしている雄介と彼の肩に手を乗せた一条がいた。

現像したら渡そうかとも思ったが、現像する前にキバの世界に来てしまった。残念だ。

写真をパチリと撮り終わると、俺は「ここに着たばかりなんだ。できれば、ここの世界について、教えてもらいたいものだ」と言った。

すると、渡は跳ね起きたように「何だ、そういうことだったんですね！それなら、言ってください。案内します」と言ってきた。

俺は、「この世アレルギーでか？」と軽く返してやった。

5ーキバット

「ここの世界について、教えてもらいたいものだ」

ディケイドだった奴がそう言った。オレはそれを聞くなり、渡に案内するように言った。

二人のほうが話をしやすい。そう踏んだのだ。

そうして静香がまたトヤカク言うのを払って、家を出た。

「本当に大丈夫か？外に出て」とディケイド野郎。

「大丈夫ですよ。たぶん」と渡。

そう話していると、横から猛スピードで自転車が突っ込んできた。それに乗っていた少女が叫ぶ。

「キヤーーーーーー！！！！どいてええええーーーーー！！！！」

しかし、そんなものを避けられる渡ではない。ディケイド野郎は避けられたが、渡はまともにぶつかった。オレは、渡から離れ、宙へ行く。

一応、そこから「大丈夫かー、渡ー」と言ってる。

ぶつかった少女も頭を押さえて「いたたた」と呻いたあとにすぐ、「大丈夫ですか？」と言っていた。

少女の自転車には、手前に「西洋洗濯舗 菊池」とあった。

少女は、渡が呻きながら起き上がるのを見てから、言った。

「すいません。私、鈴木深央といいます。クリーニング店のアルバイトをしていて、自転車で洗濯物を運んでいたんですが……途中の坂でスピードが一気についてしまって……」

オレは、少しため息をついて、渡を見下ろした。

そこへ、先ほど取り逃がしたファンガイアが現れた。

「逃げる！」とディケイド野郎はいい、渡を起こした。

「獲物だ、渡！キバっていくぜ！」

そう言っただけは無理やり手の甲を出させて、かぶりついた。渡をキバにした。

『KAMENRIDE DECADE』

ディケイド野郎も変身し、渡たちはファンガイアと対峙した。

「いけるか」「はい」

と、二人がかけあった時、——ドアが現れた。

中からは、髪を少し茶色に染めた物腰柔らかそうな青年が出てきたのだった。

そいつは、こう言った。

「やあ、ディケイド。遅れてごめんね。やっと君のいるところに来れたよ」

ディケイド野郎は、青年に、「危ない！！」と言った。ファンガイアが接近していることを言った。

青年は「大丈夫、大丈夫」と言っ、腰のバックから一枚のカードを取り出して、腕時計に翳して言った。

「変身」

『KAMENRIDE ROAD』の音声で、青年はロードって奴に変身した。

両腕・両足に水色の車輪を付け、顔には横に黄色い4枚のカードのような線、黄色い腕時計には一つのボタンとルーレットの様なものが付いていた。

青年・ロードはもう一枚カードを腰のベルトにあるカードケースから引き、腕に翳した。

「ごめんね、ファンガイア。君は僕の邪魔が過ぎる。そして、僕やこの子みたいな音楽家を襲ってしまった。音楽を汚してしまったことで、僕に処刑されるんだ」

『ATTACKRIDE RORINGBUSTER』と言う音声でロードの足元からファンガイアの足元までにレールが引かれた。そして、ロードは言った。

「君の道は、これで終わりだ」

ロードの右腕の車輪が黄色く光り、ファンガイアのほうへ向けると、光が黄色い球体になり、車輪が回るとともにファンガイアのほうへ放たれた。

ファンガイアはその光球を10発全弾まともに暗い、爆発した。

煙が去ると、そこにはステンドグラスが散らばっていた。

すっかり黙り込んで立っていた渡の隣で、ディケイドも黙っていた。

そこへ、鳴滝と前に言っていたおじさんが現れ、二人の隣に来て言った。

「とうとう現れたか、ロード……きさまもディケイドも……ここで終わりだ。いや、この私たちが終わらせる」

その言葉を聞くや否や、灰色のカーテンが突如として現れ、デイド・オレと渡は一気に吞まれた。――視界は一気に暗くなっていた。

#5 キバの世界「序曲・彼方からの鎖」（後書き）

『仮面ライダーディケイド〜version改〜』第5話「序曲・彼方からの鎖」、完読ありがとうございます。そして、どうでしたでしょうか。楽しんでいただけたなら幸いです。

さて今回は、私が作らせていただきましたオリジナルのライダー・仮面ライダーロード入れさせていただきました。

ええ、そうです。元手は電王です。（キーワードはもちろん道）でも、もちろんディケイド仕様にしてありますし、ディケイドの関係者です。ディエンドファンの方、すいません。もう少しお待ちください。

ちなみに、ロード君の役は、（僕の中で！一応、僕・の・中・で・は、です）……………NEWSのメンバーで、俳優もやっていらつしやる手越 祐也さんをイメージしています。はい、すいません！ファンの方、嫌だという方、すいません！もし適役っぽい人がいらつしやったら、ご指名ください。（なお、オリジナル以外のキャラクターは全て原典の人格・役者さんをイメージして作成しております）

もちろん、ほかの（いまや前でも結構ですよ）各ライダーの世界で、「ぜひ、この人いれて（出して）！」ってのもお待ちしています。（ちよこつと話題を変えてみる）

で、あと数人オリジナルを入れるつもりです。ええ。ラストはすっかり変えてみせます！（最初もまるつきり違うしね）

ちなみに、最後の世界まで突入したあと、これもまたオリジナルの移動をします。どうぞ、お楽しみに！

では、次回もお楽しみに！

#6 キバの世界「変奏曲・ねじれの連鎖」(前書き)

前回1万を越え、ちょっと区切り悪いなあと思って、最後を無理やりにした作者です。いけませんね。ちよいと反省。

今回は目標の1万いけなかった。(まあ、本気で訂正すればできるのかもしれませんが)

僕の学校が、あと約一週間で始まるので、なるべく、一話でも多くお届けしたくて！(だったら前書きを短くして、早く打て)

キバの3話目はたぶん一週間後以降になると思います。すいません。

さて、今回はキバ第2話です。(みなさん、ちゃんと読んでくれて、本当にありがとうございます)

前回はオリジナルのライダー、仮面ライダーロードが現れ、いきなりどこかへ飛ばされた士たち。ここからは、現代と過去の世界を行ったりきたり。ただし、今話のみにします。(キバの世界では)

では、どうぞ

#6 キバの世界「変奏曲・ねじれの連鎖」

1 - 深央（現代）

教会で、私はこんなことを誓った。

「深央、誇り高き、ファンガイアのクイーン。なんじよ、キングに
対し、永遠の忠誠を誓うか」

「誓います」

教会ではそう言った。誓わなければ、何をされてもおかしくない。
誓わざる終えなかった。

別に、ファンガイアであることは嫌なわけではなかった。キング
である太牙も嫌いではなかった。

でも、どことなく妙な感じが疼いていた。それはなんだったんだ
ろう、と考える。

思いついたその理由は、あの夢だった。

優しく、あたたかい眼差しを送ってくれる人。私は、彼のことは
かり考えてしまう。好きになってしまったようだ。

しかし、彼はおそらく人間だろう。いや、それ以前に、文字通り
彼は夢の人だ。

ファンガイアだったらいいかと思い、一度太牙の目を盗んで、彼
を探した。つくづく私もバカだと思う。だが、見つけられるファン
ガイアの中にはいなかった。ならば、もう愛することはできない。
人間とファンガイアは恋愛関係に至ってはいけないと、いつも厳し
く言われている。

——諦めなくては。

そう思った矢先、彼がいた。

「逃げる！」

私の自転車にぶつからなかったほうの男性が言った。
目の前には、ファンガイアがいたのに、だ。

私は、理由もなく逃げる振りをした。木影に隠れることにした。そこから見ていたら、男性達は2人とも変身した。カードを使っていたほうは、話からして、ディケイドというらしい。もう一人のコウモリの機械を使っていたほうは知らない。

そして、二人が戦闘体制に入ったところで、黒いドアが表れた。ノブのほうにはバイオリンの絵がついていた。

中からまた男性が出てきて、彼は腕時計とカードで変身した。

『KAMENRIDE ROAD』

そして、瞬く間にファンガイアを倒した直後、また新しい男が現れた。彼はいきなりカーテンのようなものを出して、最初の二人の男性を消した。

カーテンが過ぎ、”ロード”というものに変身していた人は、変身を解き、言った。

「こんにちは。鳴滝さん」

メガネをかけた男は言った。

「やあ、和泉君、だったね」

「はい。和泉雄一郎、またの名は、仮面ライダーロードです」

鳴滝、と呼ばれた男は、クスツと笑って言った。

「そうか。仮面ライダーロード。道、か。ところで、ひとつ聞いた、雄一郎君」

「なんですか？」

「なぜ、今私が放った時空を移動するベールを受けて、なおも土君や渡君のように時空を移動せずにここに留まることができるんだい？」

和泉、と名乗った男性は笑顔でその問いに答えた。

「僕は、道、ですから」

鳴滝さんは怪訝な顔をした。それを確認するかのように間を取り、和泉さんは続けた。

「鳴滝さんたちは少し違うみたいだけど、各世界の人たちは縦にのみ存在することができる。ディケイドである土は、横にのみ移動で

きる。道である僕は、自らレールを引いて、点として、縦にも横にも、時空を超えて移動できるんです」

そこまで言い終えると、鳴滝さんは少しずつ目を見開いた。そして言った。

「そうか。時空を超えられるから、無理やり時空を移動させる技なんか通じないのか。納得したよ」

それを聞いて、和泉さんは再び口を開けた。

「でも、安心して、鳴滝さん。今から、僕も士たちのところへ行くから」

それを聞いて、鳴滝さんはほくそ笑み、こう返した。

「そうだね。安心したよ。なにしろ、手違いで民間人である土君の関係者・光夏海、という娘と一緒に巻き込んでしまったようだね。君がいれば、安心だ」

和泉さんは口を一文字にした。

「では、私はもう行くとしよう。色々忙しいものでね」
そう言うのと、鳴滝さんは後ろを向いて歩き出そうと、一歩踏み出した。

「そうですか。では、ひとつ、僕から忠告です、鳴滝さん」

鳴滝さんは、バツと振り返った。

「もう我々は準備が整っている。そちらはもう壊滅寸前にまで追い込んでいますよ」

「……そうかい。それは、君達の一味もこちらに入り込んでいる、と考えていいのかい？」

鳴滝さんがそう聞くと、和泉さんは、ハハッと笑ってカードを取り出し、腕時計にかざした。

『ATTACK RIDE TIME TRAVEL』

その音声で、和泉さんはカードの塔に包まれ、消えた。

鳴滝さんは、それを見届けると、フツと口だけで笑って再び前を向いて歩き出した。先ほどのカーテンは、また突如として現れ、鳴滝さんを飲み込み終わると、すぐに消えてしまったのだった。

——私はしばらく、そこで腰の抜けたままだった。

2・夏海（過去）

静香さんと話して外に出ると、再び目の前にあのベールが現れた。ベールは静香さんをすり抜け、私に向かってきて、呑み込んだ。

私が目を開けると、ファンガイアが横を向いて苦しんでいた。恐怖が頭に上ってくる間もなく、ディケイドである土くんの飛び蹴りが横から来た。

続いて、両手を広げたキバである渡さんが「あああああ！！」と言いながら走ってきた。そして、彼の右腕がファンガイアのお腹に、文字通りめり込んだ。

そのまま吹き飛んだファンガイアの行き先に、一人のライダーのような人影が見えた。

それは、図録で見たイクサというライダーだ。

彼は、イクサベルトにナックルフェッスルを読み込ませ、『E・X・A K N U・C K・L E R・I・S E・U・P』の電子コードが響いた。

そして、イクサは右手の武器で、ファンガイアを粉碎した。

「ふう、危なかったぜ」

と、土くんは変身を解きながら言った。

「ですね」と、渡さんも言う。

「おいっ、なんとなく共闘したが、——お前ら、なにもんだ」

渡さんより少し、いや結構チャラけた男性——音也さんが言った。土くんは頭を少しかいて、言った。いや、正確には言おうとしたとき、渡さんが横入りしてきた。

「僕は、……僕は紅渡。その、………あなたの、息子です」

一瞬あたりは静寂に包まれた。

音也さん、渡さんの顔をじつと見て、訊いた。

「紅家特有の得意技、できるのか」

渡さんは、へっ、と言う。

それを見て音也さんは「これだ」と、つま先立ちをし、さらに指2、3本で立ち、歩いて見せた。

土くんは目を見張り、私は無意識に手をパチパチ叩いていた。

音也さんは得意げに、「ご喝采ありがとうございます。お嬢さんと言った。」

そして、渡さんのほうに目を向けると、なぜかその技ができていた。笑いながらであった。

「どうですか」と渡さん。

音也さんは悔しそうに「まだまだあ」と唸るように言った。

そして、私達の周りを2人はつま先で歩いた。

ドッダン！！

2週目ほどしたところで渡さんが何かに目を奪われた隙に、土くんが足を出し、二人とも、転んだ。

さすがにこれには、「なにやってるんですか」と突っ込む。

「痛いですよ、土さん」と腰をさすりながら、渡さんは言った。

「バイオリンとはいえ、よそ見していたお前が悪い」

と、土くんは渡さんの頭を小突いた。

音也さんは、土くんと渡るさんを見て、訊いた。

「おまえ、こいつの価値わかるのか？」

渡さんは音也さんのほうを向いて微笑み、「ええ」と短く応えた。

「ブラッディ・ローズ。あなたが、父さんが魂を込めて、祈るように作った最高のバイオリンだって聞いてます」

それを聞いていた音也は少しずつ目を見開いた。

「いいだろう、お前を息子として認めてやる。とりあえず、うちに来るか？ 渡と、えっと土くんと、えっと……お嬢さんはどなた？」
と、私に手をやって訊いてきた。

「私は、夏海。光夏海です」

「よし、じゃあ行くか」

そして、4人は歩き始めた。

話をした。長い話だ。ほとんど渡さんと音也さんしか話していない。

「ところで、士くん」と音也さん。

「士でいい。渡もな」と士くん。

「オーケー。じゃあ、士、一つ訊くぞ」

「一つな」

その言葉に音也さんは「はいはい」と答え、真剣な顔をして言った。

「渡は未来から来たと言った。お前もたぶん未来から来たんだろう。だが、さっきの姿を見る限り、お前はキバでもファンガイアでもない。いったい何者だ？」

その問いに、士くんは立ち止まり、寂しげな顔で言った。

「さあな。俺も訊きたいくらいだ」

そう言つて、また一歩踏み出した。

ブワアアアウウウウウ。

そこへ、黒い蒸気のようなものが固まって目の前に降ってきた。

中からは、黒い服を纏い、冷たい笑みを浮かべた男が現れた。

「やあ、紅音也」と男。

「キング！」と音也さんは目を見張つて、言った。

3人は身構え、渡さんはキバットを、音也さんはイクサナツクルを、士くんはバツクルとカードをそれぞれ手に取り、

「ガブツ」『KAMENRIDE DECADE』『READY

FOST ON』

——変身した。

「未来のキバ、か。だが、お前たちに用はない。こいつらに遊んでもらえ」

と、キングが言いながら変身すると、あのベールがまたもややって来て、二体のライダーを出した。

体は緑、目は赤のライダーと体は灰色、目は白のライダーが現れた。

「どうせ、俺たちは日なたの道を歩けない」

「汚してやるっ！太陽なんて！！」

そう言うと、緑のライダーは渡さんに、灰色のライダーは土くんのほうへ走っていった。

緑ライダーは渡さんの目の前で立ち止まり、「俺はキックホッパー。お前は？」と聞いた。

「キバだ」と渡さんが答えると、「そう」と短く言って蹴りを放った。渡さんは懸命に腕で防いだ。

そして、渡さんは得意な足技を駆使して奔放した。

灰色ライダーの方は土くんの顔面にパンチを放った。土くんはまともに食らって、吹き飛んだ。

「くっ、こいつパンチ野郎か」と、言いつつ立ち上がり、「腕力には剣で斬る」と、カードを一枚引いて、バツクルに挿入した。

『ATTACK RIDE SLASH』で、ブッカーを剣にして戦った。

私は、——見ているだけだった。

3―音也（過去）

あの時、ゆりに氣をとられているうちに化け物に出会った。ファングイアと聞いた。

そして、いつの間にかライダーシステムの話を聞き、イクサになった。

俺はゆりたちを、人の音楽を守ろうと決めた。

そして、今、俺はキングと戦っていた。

奴の強さは想定外すぎて、やられている瞬間さえ見極められなかった。

「ホッパーども、案外やるな。あの男のライダーだと聞いて、信じられなかったが。まあまあやる」

ボロボロになっている俺の横で、奴はのんきに言った。

「こっちに集中しろや」と、俺は奴の足を掴んだ。

「ふっ、いいだろう」と奴が笑って言うのを聞いたとき、電撃を感じた。

「ぐああああああああああああ！！！！」

俺は苦しむ。俺の息子らしい渡は、自分の鬨いそっちのけで「お父さん！」とこっちを向いて叫んだ。

その隙を縫って、キックホッパーとか言っていたやつが渡に回転蹴りを放った。それは渡の胸に直撃し、渡は吹き飛んだ。そしてそのまま大木にぶつかり、気を失ったようで、変身が解けてしまった。「ふん、腰抜けか」と相手の方は鼻で笑って、土の方を向いた。

「手を貸そうか」とキックホッパー。

「いい」とパンチホッパーが言った。

俺のほうは既に体を動かさずにいた。変身は解けてしまった。

キングは興味を失ったように、「ぐうああ」と唸る俺をけり、転がした。

そして、土のほうを一瞥し、渡のほうへ目を向けた。

「それでは、気を失う前に貴様の息子を処刑してやろう」

その言葉を聴いて、俺は「待て」といいながら、腕をつきながら腰を上げた。

奴は「ほう、まだ動けるか」などとほざいた。俺は懸命に立ち上がりながら、こういった。

「いいか、……キン……グ。……息子に……手を上げていいのは……親父だけなんだよ……」

「立ち上がれるのか。——よからう。お前を先に潰す」

その言葉を聞くと、俺は再びイクサナックルをつかみ、走り出した。

バチバチンッ

電気が流れるような音がし、黒いドアが現れた。

中からは、茶髪の青年が現れた。

そしてドアが消えると、青年は後ろを向き、キングに言った。

「ごきげんよう。ファンガイアの王・キング」

「ごきげんよう。君は誰かね」とキングは聞いた。

青年は微笑み、「僕は和泉雄一郎。またの名は……」とカードを取り出し、腕時計にかざして言った。「――仮面ライダーだ」

『KAMENRIDE ROAD』

その音声で和泉と言う青年は仮面ライダーロードなるものになった。

「悪いけど、まず君より先に彼らを倒すよ」と言いつつ、キックホッパーとパンチホッパーにかなり苦戦している土を見た。

そして、和泉は再びカードを出し、腕時計にかざした。

『KAMENRIDE IMPERAR』

すると、蜘蛛のような仮面をした戦士・インペラーがドアから現れた。

「お前を倒し、僕は幸せになるんだ！」

と彼は叫び、ベルトにあるデッキから一枚のカードを引き、右足の脛にある召喚機のようなものの中にカードを入れた。

『ADVENT』

その音声で5体ほどのレイヨウのようなモンスターが現れ、パンチホッパーに攻撃を始めた。

「お前は俺が倒す」と言いつつ、またもカードを入れ、

『APINVENT』の音声で大きなドリルのような武器を手に、インペラーはキックホッパーに向かっていった。

土は、俺たちのほうを向き、「おまえ……」と呟いた。

やがてモンスターとインペラーはホッパーたちを圧倒し、『FINALVENT』の音声で、インペラーは必殺技らしきものを放ち、キックホッパーは体が動けなくなったようだった。

そしてパンチホッパーはモンスターに翻弄されている間に土に背後をとられ、

『FINAL ATTACKRIDE DE DE DE DEC

ADE』の音声でライダーキックをともに浴び、瀕死に追い込まれた。

そこに、先ほど来たベールが戻ってきて、キックホッパーたちを回収していった。

そしてようやくロードとキングが戦いを始めた。だが、ロードが『ATTKRIDE RORINGBUSTER』を放つと、キングは一瞬怯んだ。

「どうしたんです？キングがその程度ではないでしょ」

とロードは挑発した。キングはそれに対し、

「フンッ、生意気な子どもだ。だが、確かなかなかやるな。しかし、まだ一気に攻め滅ぼす時期ではない」

そう言つて、キングは突如――姿を消した。

俺と渡は、土や和泉の手で俺の家へ連れて行かれ、治療を受けたのだった。

4―真夜（現代）

私は、いったんバイトの洗濯屋に戻ることにした。

「タツくんがもうすぐ戻ってくるだろうから、これだけでいいよ」と言われて預かった洗濯物もほとんどに土がついてしまっていた。

もちろん、私の着ていた服は無事だ。これは、店長の菊池さんからもらった。

「マリちゃんが帰ってくるまであげとく」と言つて、もらった、真里さんの服らしい。

そして、私は真理さんにすごく似ているらしい。そういえば、まだ真里さんとは一回も会ったことがない。

私は戻った。

予想通り店長からは一切嫌味はなかったが、タツくんと呼ばれる乾さんからは少し注意された。

「まあ、気分転換でもしてきなよ」

店長は言つた。私はゆっくり頷き、外に出た。

——あの店長は、用済みとは言わないでくれるんだな。
それだけはうれしく思えた。

私は、あれを誓った教会に行った。どうせ、ほかに面白いところなどどこにもない。

教会に戻ると、ビジョップがいた。彼はピアノを弾いていた。
彼は言った。

「太牙は、まだ未熟だ。ゆえに、いまだキングにはふさわしくない。もう一度、復活し、悪の限りを尽くしてください、キング。わが同胞たちよ、キング復活のために、かつて集めしライフエナジーを結集させよ！」

彼がそう言うのと、宙に浮いていた、それまでファンガイアたちが集めていたであろうライフエナジーの大群が一つに集まり、一気に地に落ちた。

それは爆炎を生み、燃えさかる炎の中からそれは現れた。——母に聞いた、バッドファンガイアだ。

そして、ビジョップはさらに膨大な数のファンガイアを蘇らせ、地上に降ろした。

「まだ足りん。ゴットの完全なる復活にはまだまだライフエナジーが必要だ。蘇りし我が同胞たちよ、ライフエナジーを人間どもから貪りとるのだ！」

ビジョップはピアノを叩き、やがて立ち上がった。

バッドファンガイアが、ビジョップの元へ行った。

ビジョップは振り返り、バッドファンガイアに頭を下げた。

「キング、バッドファンガイア・リボーン。我が君。どうぞ、私めにお力を授けてください」

ビジョップがそう言うのと、バッドファンガイア・リボーンはビジョップの胸に腕を貫かせ、ビジョップの持っていたライフエナジーが体から放出され、バッドファンガイア・リボーンに取り込まれた。ビジョップはその場にうつ伏せ、——息絶えた。

私は、走ってそこを立ち去った。

5 - 土

キング、パンチホッパー、キックホッパーとの戦闘で負傷した俺たちは、音也と渡の家へ向かった。

そこには、恵の母・ゆりがいた。

「音也、音也なの?!」

彼女はそう叫びながら出てきて、音也を見ると、絶句した。

「一体、これは……」

「キングと戦ったんです。そちらの少年二人も」

と、背中に音也を抱えたロードの奴が言った。名は、来る途中で聞いた。和泉雄一郎というらしい。

ナツミカンは、俺の左側で追ってきていた。

和泉は、「それから」と続けた。

「私と茶髪の少年を抱えている彼はまだ大丈夫ですが、抱えられている方のお二方はかなりの傷を負っています。手当てはできますか？」

和泉の言葉を聞いて、ゆりは頷き、家の中へ走った。

ナツミカンも「私も手伝いに」と中へ駆け込んだ。

音也は「ううん」と唸り、渡は気を失ったままだった。

俺は、中で渡を降ろすと、一気に気を失った。

視界には荒野に岩が4つ並んだ場所にいた。その岩には赤、青、黄、紫の仮面を被ったライダーが立ち、後ろには50ばかりのライダーらしきものが集まっていた。

<ウオッシャー!!! やつらの隊長を討ち取ったぜえ!!!>

岩に立ち、剣を持ち、赤い面をしたライダーが叫んだ。

<でも、まだ一人。あと何人いると思ってるの>

ロードを手に、青い面をしたライダーが赤いライダーに問うた。

<うるせえなあ、いいじゃねえか。安心しろ、俺の必殺技でどいつ

でも斬ってやるよ>

<しかし、なんじゃ、まだ残党があるで。とつと全員しとめようや>

斧を持った、黄色いライダーが言った。

<だいじょーぶ。僕が全員この銃で撃つてあげるよ>

ピストルを持った紫のライダーが言った。

ドドドドドドドドッ

地面が揺れ、大量のモンスターが現れた。

<なんだ、まだこんなにいたんだ>と青のライダー。

<まあ、いいんじゃないの。また遊べるし>と紫のライダー。

<仕方ないのお>と黄色のライダー。

<そんじゃあ、やろうぜ！てめえら！！>と赤のライダーは叫んだ。それと同時に、彼らの後ろで構えていたライダーたちが<オオオオオオオオ！！>と同調した。

しかし、その刹那、後ろにいたライダーたちが消えた。否、全滅させられたのだった。

その場には一本の剣を携えたライダーがいた。そして、すぐに消えたのだった。

<なっ、なに！！><なんじゃ？！！><！！？>>

ライダーたちを消した爆炎のなかから、俺は歩いて出てきた。

<テメエは、><おぬしは、><まさか><もしかして>

<！！！！！！！！！！>>>>

俺は奴らの背後に瞬間移動し、カードを取り出し、バツクルに入れた。

『ATTACK RIDE ILLUSION』

俺は分身を作り、4人全員を相手にした。

——全員を倒したところで、記憶は飛んだ。

俺が目覚めると、ベッドが足りなかったのか、床に布団が敷かれ、そこで寝ていた。

「あつ、起きたんだ」と和泉。

「大丈夫？」とゆり。

ゆりの傍らには、音也がいた。起きて話をしていたようだ。

「ずいぶん長い失神だね。記憶でも見てた？」と雄一郎。

俺は、何も言わず起き上がるだけだった。

そこへ、一人の女が走って入ってきた。

「音也！聞いて！キングが、キングが死んだわー！」

そこにいた全員が耳を疑った。

「なん……だと、真夜」

音也は跳ね起き、真夜と呼ばれた女に訊いた。真夜はゆっくりと頷く。

「キバットが暴走して、キングが苦しんで、いきなり倒れて、そして……爆発したの」

全員が絶句した。先ほど戦っているときには、まさか自爆するなんて思いもしなかった。

そう思っていると、雄一郎が言った。

「ああ、ねじれちゃったか」と。

雄一郎は人差し指を天に向け、ドアを出現させた。

そのタイミングで渡が目覚める。

「あ、お父さん、お母さん」

渡は起き上がり、真夜と音也を比べるように見た。

それを雄一郎は一瞥し、

「では、真夜さんに音也さん、土に渡君、このドアに入ってください。時空を飛んで、渡君たちがいた現代に戻ります」

皆、耳を疑った。

「いいですか、皆さん。キングはこんなときに死ぬはずではありませんでした。ましてや、キバットのせいでは……。これは、我々現代にいたものが来たことにより生じた、ねじれの連鎖です。そしてその連鎖は現代にも響き、今キングはバッドファンガイア・リボーンとして復活し、ビジュットも死にました」

「ビジョットが……」と真夜は悲しげに呟いた。

「今から、あなた方で時空のねじれを正しに行きます」
そう言って、扉の方へ手招いた。

「じゃあ、行くか。音也、渡」

「軽い口をきくな、土。こんなかじや、最年長だぞ、俺は」と音也。
「お母さん……」と真夜を見ながらの渡。

真夜のほうは、首をかしげている。事情を知らないのだから、無理もない。

雄一郎が、「さあ、夏海さんも」と、ナツミカンの手をとる。

俺は黙って渡の手首を掴み、ドアの方へ歩きだした。

渡は、黙って物寂しそうに母親を見ながら付いていった

「さよなら」

渡は最後にそういい、ドアを通った。

ドアに入ると、そのまま現代に戻ってきたようだった。

現代は——火の海になっていた。

#6 キバの世界「変奏曲・ねじれの連鎖」(後書き)

「仮面ライダーディケイド」version改」第6話(キバの世界第2話)、どうでしたでしょうか。楽しめました？

今回、基盤(流れ)はすぐできましたが、実際書くとき字数が少なく感じ(いや、十分長いという方もおられるでしょうが)、急遽キングと対面させ、地獄の奴も呼びました。

さて、次は現代で復活したキング・バッドファンガイアリボーンとの戦いです。(次短くなっちゃうかなあ、と思っている作者)感想、批判、^{はてあやまは毎々毎々}などなど待ってまーす。

次回も頑張って書きますので、お楽しみに！

#7 キバの世界「合奏曲・帝王の目覚め」(前書き)

みなさん、お待たせしました。(いや、別に待ってない?そんなこと言わないで、ね)

ようやくできました、キバの世界3話目。

試験終了のその日にアップですよ、みなさん。誉めてください。(

↑ 誉めるべき……なのか……)

ちなみに今度からは本当に通学しながらの更新になるので、遅くなるかもしれませんが、ご了承ください。

今回も、目標の1万字はやっぱりいきませんでした、結構キリのいいものにできました。(よくできた)

今度の世界も一応未見だけど、映画で情報がかなり(いい情報が)稼げそうなので、また頑張ります!

ところで作者、一応小説をアップした後に1度だけ完成品を見に行くんですが、前回のあとがきの途中がすごいことになってました。

”かつこ”にした部分が、なぜかルビに……。驚きました。次からちゃんと気をつけながら”かつこ”をつけようと心がけた作者です。

さて、今回は過去に行き、キバである渡の父、音也に会い、ロードとともに現代に帰るまで。

で、今回は現代の描写のみとなります。

では、『仮面ライダーディケイド』version改』第7話「帝王の目覚め」、どうぞ。

#7 キバの世界「合奏曲・帝王の目覚め」

1―渡

「お母さん」

そう呼んでも、お母さんは首を傾げるばかりだった。それはそう
だ。状況が飲み込めるはずはない。

そう思うと、なぜか自然にその言葉が出た。

「さようなら」

悲しかったが、精一杯我慢した。

ドアを通過する途中で、お父さんはそれを察したのか、

「後で、ちゃんと話してやるよ」

と言ってくれた。僕は、母親と再び決別したのに、温かい気持ちだ
った。現代の母は、1年前に急死したのだ。

僕は土さんの手をゆっくり解き、お父さんを越して走り出した。

そして出た世界は、まさに地獄と言うにふさわしい世界だった。

周りは火の海、家はほとんどが崩れ去り、半壊であろう家も全壊
に見えるほどだった。

人間は逃げ惑い、ファンガイアはライフエナジーを息を吸うよう
に吸収していた。

「こりゃあ……」とお父さん。

「ひどい」と夏海さん。

みんな口々に呟いた。僕だけが口を開け、呆然としていた。

「おいっ、お前ら、何してる。とっとと変身して、こいつらを片付
けるぞ」

と土さんは、そう言うつとブッカーからカードを取り出し、バツクル
に入れた。

『KAMENRIDE DECADE』の音声で土さんはディケ
イドに変身した。

それを見たお父さんも、「そうだな」と言い、イクサナツクルを取り出した。

『READY FOST ON』の音声でイクサに変身した。
「いくぞ！」

土さんが言い、お父さんと土さんはファンガイアの群れに走った。それでもぐずぐずしていた僕にキバットが、

「おいっ、渡、早く変身していこうぜ」と言うのに対し、僕は、「う、う……ん」とボソツと言った。

それを見かねたキバットは、手に無理やり噛んで変身させた。

「渡、悪いが無理やり行くぜ！ウエイクアップ！」

僕はキバに変身し、ファンガイアの群れに向かった。

『IXA KNUCLE RISE UP』という音声でお父さんの右手がファンガイアの胸に叩き込まれ、ファンガイアは割れた。そこへ、いつの間にか変身していた和泉さんが現れ、お父さんに襲い掛かっていったファンガイアにローラーを胸に当て、それでできた割れ目に手刀を食い込ませて、割った。

「ありがとな」とお父さんが言いかけたが、それを無視して和泉さんが「いいですか、」と始めた。

「そのブラウクン・ファングでは、一回一回に時間がかかります。しかし、今あなたには、現代版の最高技術を載せたイクサのシステムにしています。本当の現代版は、このセーフモードから変身させると負担がだいぶかかりますが、今回は特別に一切負担のないようにしています」

そういうと、和泉さんはお父さんの仮面を指した。

「シールドを開けるように念じてください」

そういわれ、お父さんは黙り込んだ。

そして、すぐにシールドが開いた。

その瞬間、爆風が起こり周りにいた15体ほどのファンガイアが砕け散った。

「それがイクサの現代版のモード、バーストモードです。そして、

そこに銃があるでしょう」

と、下に落ちた銃をさした。

「このマガジン部をグリップ部に収納することで、中心部から赤い刀身が伸び、剣型のカリバーモードに移行します。ここからは、感覚です」

そう言っ、和泉さんは指を鳴らし、ドアを出した。
すかさず士さんが叫ぶ。

「おいっ、お前尻尾巻いて逃げるつもりか!!」

それを聞いた和泉さんは、「まさか」と振り向き、言った。

「ライダーは一人出しとくよ」

言いながらカードを二枚取り出して、連続で腕時計にかざした。

『KAMENRIDE RIRE』

『ATTACKRIDE SWINGVENT』

すると、ドアからエイを模した人が鞭のようなものを持って出てきた。

「運命は、自分で決める!」

ライア、と呼ばれた人はそう言っ、ファンガイアに鞭でビシバシ叩いて回った。4回ほど当たったところで、ファンガイアたちが散る。

そして和泉さんは、「いいかい、士」と士を呼んだ。

「あいつらをちゃんと倒してきてね。僕は用事があるから、次の世界で待つてるよ」

そう言っ、ドアとともに消えた。

僕は、向かってくるファンガイアを一体一体回し蹴りで割っっていた。

そして士さんは銃と剣、お父さんは剣、僕は回し蹴りでほとんどを倒したところで、ライアのデッキがいきなり燃えだし、ライアは苦しみながら魂が抜けるように消滅した。

燃えさかる炎から出てきたのは、士さんが言っていた、鳴滝さんだった。

2・夏海

「ここにいてね」と言われたので、黙って隠れていたが、様子が心配になって戦況を見た。

和泉さんがライアというライダーを残して消え、ライアがやられたと思ったら、どうやらあの人の仕業だったようだ。

炎から鳴滝さんが出てきた。

「やあ、土君に渡君。また会ったね」

「鳴滝……」と、土くんは思わず呟いた。

鳴滝さんは、渡さんに向かって言った。

「君は、ファンガイアをどう思う」

「えっ」といい、渡さんは頭を抱えた様子だった。

「君のお母さんもファンガイア。その同族と戦うことに何のメリットがある？意味があるというんだい？」

「そっ、そんなの」

戸惑う渡さんにさらに鳴滝さんは言った。

「君はファンガイアを襲いたがらないのは、この現状を見れば明らかだ。君が一番、戦う意思がないと見える」

「でも、僕は、」

渡さんはそこからとうとう、言葉をなくした。

「結局、そこにいる父親と同じ運命を辿らなければならないというバカみたいな義務感で動いているんじゃないのかい？君の父親と自分と同じような存在だと過信しているのではないのかい？君はこの戦いから離脱するべきだと、私は考えるが」

そこまで言うと、鳴滝さんは腰の後ろに手を回した。

そのタイミングで、音也さんが口を開いた。

「いいか、鳴滝っていうんだったな」

鳴滝さんは異端児を見るように、音也さんを見た。

「俺はこいつに運命を辿れとも言ってねえ。てめえの言う馬鹿みたいな義務感で動けとも言ってねえ。ましてや、俺と同じ存在になれ

などと馬鹿なことはいわねえ」

音也さんは拳を挙げ、しっかりと握り締めた。

「俺は人の音楽を守る。それだけだ」

その言葉に鳴滝は笑い、言った。

「それは君の意思だろう、音也君。僕は渡君に聞いているんだ」

そう言って、渡のほうを見た。

「もう一度聞こう、渡君。君は運命に振り回されるばかりでいいのかね？」

鳴滝の一言を聞いて、俺は無意識に言った。

「ちがう」

鳴滝は、恨めしそうに俺のほうを見た。

鳴滝が、「君には聞いて……」といいかけたところで俺がさえぎった。

「運命つてのは決められたものを意味する。けど、こいつは自分の意志で動き、自分の意思で戦っている。今はまだ明確な考えは浮かんでいないかもしれない。だが、運命を自分で変えようとしている奴を邪魔していい者は一人もない。お前もだ、鳴滝。——渡の人生は渡が自分で決断する」

鳴滝さんは土くんの言葉に微笑を浮かべ、スッと消えてしまった。

「ここでおまえの旅も終わりだ、ディケイド」

その鳴滝さんの言葉が聞こえなくなると、残っていたファンガイアたちが爆散し、ライフエナジーが残った。それは一つに集まり、あとから出てきた者に吸収された。

残ったのは、私に土くん、紅家の親子、そして——復活したキング、バッドファンガイア・リボーンだった。

3—土

鳴滝の退場を見計らったように残っていたファンガイアたちが爆散した後に現れたのは、復活したキングだった。

やつは現れたと思ったら、いきなり渡に一撃拳撃を浴びせた。

渡は、瓦礫の方に一気に突っ込み、変身が解けた。

そして、追い討ちをかけるつもりなのか、キング、バッドファンガイア・リボーンは渡のほうへ歩み寄った。俺と音也は、奴を止めるため、一気に走り始めた。

そこへ、思わぬ援軍がやってきたのだった。

「この人を傷つけないで!!」

現れたのは、過去に行く直前で会った、鈴木深央という娘だった。彼女は、左の掌をバッドファンガイアに向けた。掌には何やら紋章があった。

「ここでクイーンの座なんて、諦めたって構わない! 私は、この人を守りたい」

深央はそう叫び、紋章のあたりから、クイーンが使うと書かれていた「制裁の雷」を放った。

それはバッドファンガイアに当たりはしたものの、ほとんどダメージを受けていないようだった。

そして、バッドファンガイアは「ウオオオオオオオ!!!!!!」

と咆哮し、右手の鉤爪に赤いエネルギー刃を灯し、深央にぶつけた。深央は肩を斬られて倒れこんだ。

バッドファンガイアは止まることなく、もう一度渡に向かって行きながら、右手に赤いエネルギーをこめた玉を作り出した。

そこでようやく渡は起きた。しかし、渡の足が瓦礫に挟まり、動けなくなったようだった。

「渡!!!」と俺は叫ぶ。

そして、バッドファンガイアはエネルギー波を放ち、渡に当たったと思われた。しかし、あいつがなんとか、止めに入っていた。ガッキーン

剣にエネルギー波が当たり、鉄の音が響いた。

あいつは、イクサカリバーで息子への攻撃を防いだのだった。止めに入ったのは、——音也だった。

「おいっ、前にも言ったる、キング——息子に手を上げてもいいの

は、親父だけだつてなあ!!!」

そう叫ぶと、音也は無謀にもバッドファンガイアに向かっていった。右手にイクサカリバーを掴んでいた。

音也は金色のフェッスルをベルトに挿し、ベルトに『IXA C ALIBUR RISE UP』という音声 flowed。そして、音也は燃えさかる太陽を背に剣を振り下ろした。『IXA JUDGEMENT』だ。

それは光を纏い、ぼつどファンガイアを一刀両断した。

しかし、バッドファンガイアは大きく唸っただけであった。

奴の拳が音也を捉えた。そして、音也は吹き飛び、イクサの変身も解除された。

「音也——!!!」

俺は叫んだ。

そのまま俺は単身バッドファンガイアに向かっていき、剣を振るった。

「グアアアアア——!!!」

「だあああああ——!!!」

必死に剣で応戦するも、やはり、奴のパワーのほうが数枚上手^{うわて}だった。

俺は吹き飛ばされた。

そこへ歩いてくる人影が見えた。——渡だった。

4 - 音也

キングに倒され、変身も解除してしまった。土も一人戦うも、やはりダメだった。

「くそっ」

俺はもちろん悔しかった。土をグツと握った。

渡のほうを見た。まだ気を失っているものだと思った。

しかし違った。渡はムクツと起き上がり、言ったのだ。

「キバット、いくよ」

？世のキバツトはサツと渡の右手に収まり、「キバツていくぜ、渡！」と言った後にガブツと手を噛んだ。

そして、続けてくるものがいた。龍の形をした物だった。

「びゅんびゅん！」とか言いながらの、軽い登場だった。

「お前は、タツロット？！」とキバツトが言い、そいつは答えた。

「そつ。ボクは魔皇龍タツロット。ワタルの感情が昂ぶったんで来たんだ！ボクは、ワタルの、キバの力を解き放つんだ」

「僕の、力を解き放つ？」

「そつ。今のキバは全身に封印の鎖・カテナで力を拘束されている。だから、その力を解放させるのが、ボクの役目なんだよ！」

そついいながら、タツロットという龍は渡の周りを飛び回った。

「じゃあ、やるよ！ファイナル・ウェイクアップ！！」

そつ言つと、タツロットはキバの足、腕、胸の鎖を砕き、究極覚醒と言つものをさせた。

タツロットは左腕に止まった。

「行くよ！エンペラーフォームでテンション、フォルテッシモ！！」とタツロットは言った。

渡は、金色のキバ・エンペラーフォームになった。

そして、土が倒れたと同時に歩き始め、キングの方へ向かった。

「ぐあ？」

キングが渡の方へ目を向けた瞬間、渡は右腕をキングの腹に叩き込んだ。そして休む間もいれずに右足で蹴りをいれ、キングが飛んだ。

俺の元には、キングに仕えていたはずのキバツト？世が来た。

「お前……何しに来やがった……この、蝙蝠もどきが」と俺が聞くと、

「蝙蝠もどきとは、言い草だな。俺は、お前に力を与えに来た。あいつのようにな」とキバツトは言った。

それを聞いて、俺は、「何言つてんだよ……バカいってんじゃねえ……キングなんかに使えていた野郎に力なんざもらう気はねえ」

と言いつつ起き上がり、

「でも……」と立ち上がった。

「そんなこと、言つてられねえよな！」と俺は言った。

「……ああ。ありがたく思え」とキバットも言った。

「ヘッ、行くぜ!!!」

そう言つて、俺はキバットを掴み、左手に噛ませた。

「絶滅タイムだ!!!」

そのキバットの言葉で俺はキングの鎧だった、ダークキバに変身した。

そして、渡の隣に来た。

「お父さん、大丈夫なの？」と渡は生意気に言った。

「へっ、大丈夫だよ。息子が頑張つてんのに、かつこわりいところ見せられねえな」

俺はそう言つて、構えた。

「こいつを倒すぞ、渡」

「はい、お父さん」

俺たちは、キングに向かっていった。

5―士

俺が倒れているうちに、渡も音也も復活し、それぞれエンペラーフォームのキバ、ダークキバに変身していた。

「俺も、負けてられねえな」

そう呟いたとき、ブッカーが輝いた。カードを取り出すと、キバのカードだった。

「よし。……いくぞ、渡!!!」

俺はそういい、バツクルに2枚続けてカードを入れた。

FINAL FORM RIDE K I K I K I K I V A

FINAL ATTACK RIDE K I K I K I K I V

A

その音声で、バッドファンガイアと戦っていた渡は、キバットを

模した巨大な弓・キバアローに変身した。

そして、弓の弦を引き、ヘルズゲートを解放し、

「音也！避けてくれ！」

と叫んだ。

「キバって行くぜ！」とキバットが叫び、必殺技・デイケイドファングを発動した。

それは地面を揺るがせ、矢が大きな波動となりバッドファンガイアへと向かっていった。

バッドファンガイアは、それをまともに喰らい、「グアアアアアアアアアア！！！」と苦しんだ。

そして俺は、キバの”ファイナルフォームライド”を解いた。

「行こうぜ。俺たちの技で」

「はい、土さん」と渡。

その言葉で一旦止まり、俺は言った。

「おいっ、渡、土でいい」

渡は俺の方を向いて、言った。

「わかりました。土」

俺は、「その敬語が……まあ、いい……」と言いながら、カードを引いた。

渡は、タツロットのロットを回した。

音也は黒いフェッスルをキバット？世に挿した。

『FINAL ATTACKRIDE DE DE DEC
ADE』

『WALE UP FEVER』

『WAKE UP？』

それぞれの音声が鳴り響き、3人はライダーキックの体勢に入った。

「行くぜ！！！！」

3人は同時に飛び上がり、バッドファンガイア・リボーンにそれぞれ、俺の”デイメンション・キック”、キバエンペラーフォーム

の”ダークネス・ムーンブレイク”、ダークキバの”キングスバースエンド”をぶつけた。

それらはバッドファンガイアを貫き、俺たちの技が終わると、奴は「グハアアア！！！」と叫んで、爆散した。

——俺たちは、奴を見送って、変身を解いた。

6 - 深央

——あの人が飛ばされた。

それを認識した途端、私の思考回路は飛び、気づいたときにはもうキングに倒されていた。

「ここでクイーンの座なんて、諦めたって構わない！私は、この人を守りたい」

私はそう叫んだらしい。無意識ではあったが、きっと本心だろう、と思った。

私は叫んだあと、手の紋章からあの雷を発した。しかし、それでも復活したキングには敵わなかった。

そして私はキングのなされるままに吹き飛ばされた。私の記憶は

——そこで終えた。

目が覚めたときには、キングは倒されたようで、私はベッドに横たわっていた。

「大丈夫ですか、深央さん」と渡さん。

「はい」と私は短く答えた。

「よし、俺もそろそろ立ち去るか」

と、渡さんに少しだけ似た人が言った。

「え、お父さん行っちゃうの？」

「あんま居過ぎないほうがいいんだろ、土」

「ああ、だろうな」と、土と呼ばれた人は答えた。

渡さんに似た人は渡さんの父親らしい。

「でも、どうやって……」とこうもりメカみたいなロボットが言った。

するとそれを見ていたかのように、白いこうもりロボが現れた。
「はーい、みなさん」

みんな一斉にそちらを見た。

「私はキバーラ。キバットの妹なの」とそれは言った。

「……は？！」「……」とみんなは驚きながら言った。

「親戚の縁は私の縁でしょ。私がこの音也って人とキバットのお父さんを過去に戻してあげるわ」

とキバーラは言った。

そう言っ、音也の肩に乗り、黒いこうもりロボも乗ったのを見計らっ、消えた。

赤と金色のこうもりロボはそれを追うように叫んだ。

「俺の妹っ、誰なんだよーーーー！！！！！！」と。

7 - 渡

お父さんは過去へ帰った。

<別れたくないよ、お父さん>

キングを倒してすぐに僕は言った。

でも、お父さんは、

<甘えるな。お前の人生は、お前だけのものだ。しっかり噛みしめていけ>

と言っ、家へと一緒に戻った。

僕はそのときに、頷けていたのだろうか。

僕は、土にもさよならを言った。

寂しかったけど、涙は見せなかった。

深央さんは、僕たちと暮らすことになった。まだ新たなキングが生まれたら大変だからっ。

静香さんは少し怒っていたけど、家族が増えたことは素直にうれしかったようだ。

僕は、いつもの生活に戻ったんだ。

でも、ひとつ土からお土産をもらった。バイオリンを持った僕の

写真だった。

8 - 土

俺たちは渡に写真を渡し、別れを言って写真館に戻ることとなった。

「土くん、写真あげちゃってよかったですか？」

「あれは写真を取ってもらいたがった奴に渡すもんだ。だいたい、コピーはとってある」

俺がそう言くと、ナツミカンは笑いながら俺を見て言った。

「写真集でも作りましょうね」

俺は、「ああ」と短く答えた。

心の中で、俺が全てを壊さなかったらな、と付け加えたのであった。

俺は全てを破壊するらしい。記憶の中に出てきた雄介も渡もこちらも壊していた。そして、キングと戦った後のあの記憶のことも気になる。

しかし、今はまだ人を大きく傷つけてはいないんじゃないのか、と思った。

俺は、写真館に向かった。

——すると、写真館の風貌が一気に変わっていた。いや、正確に言おう。写真館がなくなっていた。

跡には、電車らしきものがあつた。

「なんだ……ここ」と言葉を失う俺の隣で、ナツミカンも声を失っていた。

そして、しばらく固まった後に「入ってみます？」とナツミカンが聞いた。

俺は答える代わりに電車のドアを開いた。

すると、中は写真館と同じ装飾が施されていた。そこでコピーを運んでいたじいさんがいつもどおりの「おかえり」を言った。

俺たち二人は「ただいま」と同時に言った。

そして、コーヒを飲んでいたのは、物腰の落ち着いた男だった。

「おや、この方たちがあなたの同居人ですか？ 栄次郎さん」

「ああ、そうだよ。デンライナーのオーナーさん」

じいさんはそう言った。

そして、オーナーが奥のドアを指し、

「あちらのドアに行ってみてごらん」と言った。

言われるがままにドアを開けると、赤・黄・青・紫の鬼がいた。

「なっ、なんだなんだデメエ、誰の許可を得てここに着やがる」と明らかに脅し口調の赤。

「オーナーがさっきあつちのほうに行っただろ、きつとオーナーだよ」とため息をつきながら青。

「えっ」と驚く赤。

「見とらんかったんかい、モモタロス」と黄。

「悪かったな」と赤。

「もう、モモタロス、バカなんじゃないの。あ、ゴメーン。バカだったか」と紫。

「んだとっ、テンメエ!!!」と赤は紫に掴みかかった。

俺は周りを見渡して呟いた。

「ここは、電王の世界……」と。

俺たちを乗せ、——デンライナーはいつの間にか発進していた。

#7 キバの世界「合奏曲・帝王の目覚め」（後書き）

さて、「帝王の目覚め」やキバの世界はどうでしたでしょうか。満足していただけなら幸いです。

で、次の世界は、たぶん”ライダー”の言葉を使って検索してここに来られる方の大半がこよなく愛しているであろう、電王です！！（実は前話で出した士の”記憶”でちよっとネタバレしていた。文字数と”記憶”を出すタイミングを考えて）

しかし、今度の世界はすんつつつごい情報量が多いので、すいません。先に言っときます。全部は処理できないと思いますけど、ご了承ください！！（もちろん、やれるだけやります）

作者自身、ディケイド本編の「電王の世界」はとても面白い印象だったので、頑張りたいと思っています。

ちなみに、分かってるかもしれませんが、士の”記憶”は、最後の最後まで読まないでも次の世界が分かる、かもしれないという独自のネタバレです。（独自……なのか？）

あと、もう一つネタバレポイントがありますが、各世界の熱狂的ファンならお気づきになられるかもしれないですね。次回では、おそらく、これまた半分くらいの方が分かると思います。（君、伏線って言葉知ってる？）

そういえば、ロード君の名前、気に入ってくれたでしょうか。呼びやすいものを選んだつもりです。

で、本当は電王の世界で出そうと思ったんですが、ここで出したのは、実は理由があります。

なんでかはもちろんここでは言いませんが、考えておくと楽しいかもしれませんよ。

クウガは出さずに、キバで出て、電王でも出るのはなぜか。

答えはまだまだ後に出すつもりです。

あ、ディエンドはあと電王の次か、さらにその次には出します。

そして、もう一つ。この小説をお気に入りに入れてくださった方、評価をしてくださった方、ありがとうございます。

書き始めたばかりで、（しかも初投稿作品で、）自分的にもまだまだ情景描写、バトルの描写を強化しないとなあと思っています。そんな文章で、（しかもこんなに長いのに、）ありがとうございます。そして、この小説を読んでくださっている方々もありがとうございます。

今後もこれらを励みにしてがんばって生きます、いや行きます。（死ぬなよ〜）

では、次回の電王の世界もどうぞ、おたのしみに。

#8 電王の世界「僕に釣られて、お前は泣いた……だけど、他には聞いてない」

高校に行きながら、なんとか頑張っている作者です！執筆も頑張ってるつもりです！

さて、お待ちどうさまで、電王の世界1話目できました！……ええ、タイトルは決め台詞の集合体（またの名を寄せ集め↑1ヶ月目なのに、怠けすぎではないか？作者よ！）です。このタイトルだけで来られた方もいるんじゃないんですか？

作者、学校も本格的に始まり、大変ですが、それを無視して、更新頑張ります！！（いや、最低限の勉強はしろ！）

新しい世界を描く前には、情報を得て、必ず三話分の構成ができてから書き始めるので、遅くなります。すいません。

えっと、あんまり長すぎると飽きられるような（いや、既に長いか）気がするので、後書きでバシバシ書きます！（いや、そういう意味ではないか）

では、「僕に釣られて、お前が泣いた……だけど、他には聞いてない」（題、長いなあ）をどうぞ！！

#8 電王の世界「僕に釣られて、お前は泣いた……だけど、他には聞いてない

デンライナーを見たのは、僕が定期券みたいな忘れ物を届けに言ったときが最初だ。

そして、それに驚きすぎて忘れ物を届け忘れて、で、届けに戻ったら、また来た。しかも、道のド真ん中に。すごい。

で、そこから出てきた女性が言った。

「ねえ、パス拾ったでしょう。それ、私のなの。返してくれるかなあ」

と言った。

僕は、自転車をこぎながら、「落とし物は交番に言ってください」と言った。気が動転していたんだと思う。その僕の背後には、砂が飛んでいたらしい。

そして、交番へ行く途中、先刻会った不良と再会した。

「ねえ、僕たちの仲間の鍵、どこかしらねえか」

そう言った。そして、もちろん「知らない」と答える。すると、殴ってきた。

そのうち、死ぬかもなあって思った。

その時、不良の足を止めた。そう思った刹那、不良は飛び、遠くの木に引っかった。

そして、僕は髪に雷を帯びさせ、言った。

「——俺、参上」

そう言っつて、不良を叩きのめし、棒で威嚇した。そして、「見てろよ、俺の必殺技」

と僕は言っつて、棒を振り上げた。

そして振り下ろす瞬間に僕は止めた。

「なにしてんだよ、止めんじゃねえよ」

それは言った。

「誰、君？」と僕は聞いた。

「誰でも良いだろ！」とまた棒を振り上げた。

「ダメだよ！！」

僕は叫んで、僕に戻った。

その後、あの電車の女の人に会った。

「あのパスを使って、電王に変身して！そして、あいつと戦って！」
彼女は前にいた怪物を指して、そう言った。

僕の中にいた怪物にも説得され、パスを出した。

「早く！！」女性の言葉に押され、「変身！！！」と言った。

ベルトが出現し、何気なくパスを通した。——僕は電王になった。
しかし、最初になったものは、白と黒の姿で、僕は恐くて逃げ
ばかりだった。そして、どんどん攻められるうちに、あの僕の中
いた怪物が言った。

「おいつ、俺と変われ！お前は引つ込め」

「どうやって引つ込むの？」

「知るかよ、そんなこと」

そう言い合っているうちに、女性が言った。

「ベルトのボタンを押して！！」

僕はオドオドとボタンを探して、押した。すると、音楽が流れ、
赤い電王になった。

そして、僕は、彼は言った。

「俺、再び参上！！！！」

僕はベルトについた部品で剣を作り、斬った。

「俺は、こういうのがやりたかったんだよ。相手は関係ねえ。最初
からクライマックスだぜ！！！！」

僕は言って、瞬間にさっきの怪物を斬っていく。

そして、いつ間にか「俺の必殺技、パート2」と言い、最後まで
斬った。

僕が変身を解いてすぐ言った言葉は、「恐かった」だった。

デンライナーに乗ると、赤・青・黄・紫の鬼らしき異型の生物がいた。

「だいたい、テメエ、オーナーの許可あれど、俺の許可がねえだろうが！」

この赤いのはさつきから許可許可とうるさい。

「うるさい、赤」と俺が言うと、

「！！テンメエ、色で呼ぶんじゃねえ！！！」と赤。

「さつきからうるさいんだよ、君は」と青。

「慣れとる俺らがそう思うんじゃ。他のやつがそう思うんは、当たり前じゃろう」と黄。

「ってゆーか、その色で呼ぶのって、デジャブだねえ。ついこの前もジークに呼ばれてたし」と紫。

と流れるように4人は言った。

机を見ると、図録があった。

「それ、なにになに？」と紫。

「そんなものあったのかい？」と青。

「何や、妙なオーラかましとるのう」と黄。

「てんめえ、無視すんじゃねえぞおお」と赤は叫んだ。

それでも無視して、図録を見た。

『仮面ライダー電王（適合者：野上良太郎）

2007年の現代、時間の改編を企てる侵略者イマジンと、これを阻止するために戦う仮面ライダー電王・野上良太郎、そして力を貸す味方イマジン達が戦う世界である。

イマジンとは憑依した人間との間にその望みを叶えるという「契約」を結び、「契約完了」により望みにまつわる記憶を呼び覚まし、そ

れを利用し過去へ飛び破壊活動を行うことで時間を改変してしまう。それに対抗できる電王に変身できるの者は、時間改変の影響を受けない特質の持ち主「特異点」のみ。だが時の列車・デンライナーに乗って未来から来た女性ハナが見出した特異点・良太郎はひ弱で気弱、しかも不運続きと一見かわいそうなだけの者である。

そんな良太郎に憑依して力を貸すのが、モモタロス・ウラタロス・キンタロス・リュウタロスといった強烈な個性を持ったイマジン達。彼らが憑依することで良太郎は能力だけでなく、性格も一変。彼らの力と良太郎の正しく強い心によって、電王はその力を発揮する。そして過去へ飛んだイマジンを追って、電王もデンライナーで過去へ飛ぶのだ。

そうして戦いを続ける良太郎の前に、仮面ライダーゼロノス・桜井侑斗と名乗る青年やイマジン・デネブ、そしてジークというイマジンも現れる。そして、良太郎も少しずつ成長していく』

とあった。

そして、”ライダーに憑依するイマジン”の欄を見た。

” 1・モモタロス

良太郎に最初に憑依した赤いイマジン。強く格好よく戦うことをモットーにしている。また、短気かつ好戦的だが、涙もろく良識もある程度持っているなど、単純で憎めない性格。純情な面もたまに見られる。”

とあった。

「要は、プリン好きで犬嫌いなくせに犬で、少しバカか」

「んだと！」

赤、いや桃太郎、いやモモタロスは言った。

そして、下を見ながら、青を指差した。

「青のウラタロスは、器用で冷静、頭の回転も速いが、キザな詐欺師。あと、釣り好きな漁師か」

「フンッ、まあ、そういうこともね。君みたいなのと言われるのは、あまり気分のいいものではな、」

俺は青・ウラタロスの言葉を無視して黄を指した。

「黄は、キンタロス。人情深く世話好きのため、契約を守る。そして、責任感も強いが、力加減が無茶苦茶で、”泣き”に弱いし、眠るとまず起きない、冬眠しかけの熊か」

「まあ、そんなところのお」

そのまま黄・キンタロスから指を紫に移した。

「で、紫がお眠りが効き過ぎて、起きた時には一緒に入っていたはずのウラタロスたちが既に行動。で、かわいいものの好きで、無邪気な割には凶暴で、気分屋で甘えん坊で、子供っぽい龍、か」

「まあ、当たってるかなあ」とのリユウタロスの言葉に、全員が、

「「「大当たりだろ」」」

と言った。

そこへ、妙な音楽が流れた。1台のラジオからだった。

そこからは、

『こんにちは。園崎若菜のヒーリングプリンスです！』
と流れてきた。

「オーオー！！来た来た！！」とはしゃぐモモタロス。

「なんじゃい、もうそんな時間かい。昼寝するかの」と横になるキンタロス。

「なんですか、これ？」

とナツミカンが聞くと、ウラタロスが答えた。

「これね、モモタロスが最近ハマっているラジオ番組。園崎若菜って娘のやつなんだ。僕には、この娘のセンス、分かんないけどね。」

「ほう」と俺は短く言った。

『では、2通目。モモタロスさん』

「ウオオオオオ！！！！俺のだああああ！！！！！！」

と、モモタロスは椅子と机を踏み台にして立ち、拳を挙げた。

『モモタロスさん、か。フフツ。桃太郎みたいで、可愛いお名前ですね』

「可愛いのか、そうかー！！！」とモモタロスは拳を握る。

『えー、俺は若菜さんのファンです。いつも応援しています。』

まあ、ありがとうございます。で、俺は若菜さんが昔流していたあの曲・”クライマックスジャンプ”が大好きです。他の仲間にも聞かせてあげたいので、今度誘ってみるつもりです”ウフツ。はい、宣伝お願いしますね、モモタロスさん。では、モモタロスさんが好きな、あの曲・Climax Jumpを、もう1度。どうぞ』

その言葉が彼女から出るなり、モモタロスは、ラジオの前に正座をして聞き始めた。

やがて、音楽は始まった。

盛り上がっているモモタロスをよそに、ウラタロスは本をとり、キンタロスは寝、リュウタロスはi-podを聞き始めた。

そして、俺は唐突に聞いてみた。

「おいっ、ジークって誰だ？ここには4人しかいないのか？」

「ああ、鳥さんね！」とリュウタロス。

「手羽野郎だろ、奥にいるよ」とモモタロスはラジオに耳を傾けながら言った。

残り二人も口々に言っている間に、奥のドアが開いた。

白い腕はナツミカンの方に伸び、白い手はナツミカンの顎の傍へ来た。

「やあ、お嬢さん」

と、羽をつけたやつが言った。ナツミカンは、気味悪く思ったのか、少し仰け反った。

「気安くプリンスと、呼んで構わん」

そいつは宙で手を仰ぎ、そう言った。

素直で純粹ではあるが、大抵自分中心主義で、「プリンス」と名乗るの白鳥である。ちなみに、つい最近産まれたばかりらしい。

「貴様は何者だ？」とジークは俺に聞いた。

俺が答えようとしたとき、「もう、ジーク、まってよ。まだ話が……」と言って出てきたのは、電王の適合者・良太郎だった。

若菜嬢の流していた音楽は、サビに入った。

2・良太郎

僕は、電王に変身してモモタロスと代わった。

そのとき、僕はある”記憶”を見た。

そこは荒野に岩が4つ並んだ場所だった。その岩にはモモタロスやウラタロス、キンタロス、リュウタロスが憑いた状態の4人の電王が立ち、後ろには50ばかりの電王に似た人達が集まっていた。
＜ウオツシャーー！！やつらの隊長を討ち取ったぜえ！！＞

岩に立ち、剣を持ち、モモタロスが叫んだ。

＜でも、まだ一人。あと何人いると思ってるの＞

ウラタロスがモモタロスに聞いた。

＜うるせえなあ、いいじゃねえか。安心しろ、俺の必殺技でいつでも斬ってやるよ＞

＜しかし、なんじゃ、まだ残党がおるで。とっとと全員しとめようや＞

キンタロスが言った。

＜だいじょーぶ。僕が全員この銃で撃ってあげるよ＞

リュウタロスが言った。

ドドドドドドドドッ

地面が揺れ、大量のモンスターが現れた。

＜なんだ、まだこんなにいたんだ＞とウラタロス。

＜まあ、いいんじゃないの。また遊べるし＞とリュウタロス。

＜仕方ないのお＞とキンタロス。

＜そんじゃあ、やろうぜ！てめえら！！＞とモモタロスは叫んだ。

それと同時に、彼らの後ろで構えていた人たちがくオオオオオオ

オオオ！！！！>と同調した。

しかし、その刹那、後ろの人たちが全滅させられた。

その場には一本の剣を携えたライダーがいた。そして、すぐに消えたのだった。

<なっ、なに！！><なんじゃ？！><うそ！？> エッ！！

爆炎のなかから、マゼンダのライダーは歩いて出てきた。

<テメエは、><おぬしは、><まさか><もしかして>

<<<<ディケイド！！！！！！>>>>

ディケイドはモモタロスたちの背後に瞬間移動し、カードを取り出し、バツクルに入れた。

『ATTC KRIDE ILLUSION』

ディケイドは分身を作り、4人全員を一気に相手にした。

ウワアアアア グアアアアア クソオオオオ ダアアアア

アア

——全員を倒しされたところで、記憶は飛んだ。

そして、瞬く間に怪物は倒された。

本当に、恐い印象しかなかった。でも、それは何度も繰り返された。

僕は次々と仲間になったイマジンたちが倒されていくその映像は、すごく過酷だった。

それにおびえるたびに、モモタロスたちは、僕を励ましてくれた。モモタロスたちも、この記憶を持ってるらしい。

僕は、いつも「ありがと、頑張る」とだけしかいえなかった。そして、一人の記憶をこぼしてしまったことで、余計に電王に変身することを真剣に考えた。

そして、僕は少しずつ成長していった。

そんな僕がいつものように、デンライナーに乗っていると、変な男の人と女の人があった。

「うわぁ、ひっ、人？！」と驚くと、

「何言っただ、良太郎。変人があるのはしかたねえだろ。オーナ

「もいるんだし。そうそう、こいつらはオーナーが通したらしいぜ」とモモタロスが言った。

「あ、そうなんだ……」と僕は言った。

オーナーは、正体が分からない。けど、不思議な人だ。厳しいよ
うな、優しいような……しっかりしているような、天然なような……
でも、なんとなく支えになった。

僕は、そんなオーナーの不思議なオーラを思い出して、男の人と
女の人に心を許した。

「えっと、で、あなた達は誰で、なんでこんなところにいるんです
か？」と僕が聞くと、男の人が言った。

「俺は門矢士、こっちはナツミカン」

その言葉に、すかさずナツミカンさんが「光夏海です！」と横入
りした。

「えっと。なんでこんなところに……」

そう聞くと、士さんは軽く息を吐いて、一気に言った。

「早めに済ませたい。おまえが野上良太郎、電王だな」

僕は固まった。モモタロスたちも一斉に士さんに眼を向け、キン
タロスも跳ね起きた。

「……どう、して、それを？」

僕は必死に言葉をつないで聞いた。

すると、士さんは、「それはな」といいながら何か、カメラに似
たものを取り出した。

「俺も、ライダーだからだ」

そう言い放った。

ライダーという言葉は分からないが、電王に近い存在であること
は、いくら頭の悪い僕にでも理解できた。

そこでウラタロスが立ち歩いてきて、士さんの目の前で止まった。

「ふうん」

ウラタロスはそう言いながら、士さんを目でゆっくりと眺めた。

「なんじゃ、面白いやつじゃのう」

「うん、僕もそう思う」

と、キンタロス・リュウタロスは口を揃えた。

それを聞いたモモタロスは、バンツと机を手で叩き、言った。

「俺は、あんまり納得できねえぞ」

そう言つてウラタロスを押しのけて、土さんの前に立った。

「俺たちの仲間になりえるかどうかなんぞ、拳か剣を交えりゃ分かる」

拳を握り締めながら、モモタロスはそう言った。

「やるか？」と土さんは挑発し、

「おもしれえ」

とモモタロスは言つて、僕のほうを向いた。

そして、僕のほうへズカズカと歩いて来て、僕に憑いた。

僕は、モモタロスの精神を持った良太郎になった。そして、顔を上げて、いつもの台詞を言った。

「俺、参上」

3・ナツミカン

赤い鬼のようなモモタロスが良太郎さんの中に入った。その瞬間、良太郎さんの雰囲気が変わり、髪も、赤いメッシュの入り、逆立ったものに変わった。そして、

「俺、参上」

と彼は言い、土くんにつっ込んできた。

土くんは軽々とそれを避け、拳句の果てに足を引つ掛けられて、こけた。

それを見ていたキンタロスたちは、モモタロスの果てを笑い、言つた。

「おう、おもしろいのう。久々に取り合うかい」

とキンタロスが言つと、

「いいねえ、それ」

とリュウタロスも同調し、

「オツケイ」

とウラタロスも言った。

そして、3体は姿を消し、光になって良太郎さんに憑いた。

良太郎さんの髪は赤いメッシュから金色のメッシュになり、長髪を後ろに束ねた形になっていた。

「まあ、おもしろいもんじゃのう。これで久々に外に出てみたいもんじゃわい」

そう言ったかと思うや否や、良太郎さんは目を見開き、いきなり俯いた。

顔を上げると、顔の左半分を覆う紫色のメッシュとウェーブのかかった髪になり、茶色い帽子とヘッドホンをつけていた。

「ねえ、彼女あ」

と、良太郎さんは指を私に向けて、言った。

「友達になつてもいい？」

その問いに答えるために考えようとすると、すかさず良太郎さんは言った。

「答えは聞いてない！」と。

それを聞いたや否や、また良太郎さんは目を見開いたが、俯く間もなく、髪が変わった。

「オイッ！テメェら、首引つ込めてろ！！俺がこいつと話してんだ！！」

「こやつと話すことは平等じゃろう」

「そうだよねえ」

「うるせえ！！ダメだダメだダメだ！！」

そんな悶着のあと、また俯いた。今度は、いつの間にか白いメッシュのかかった髪になっていた。

「満をまして、降臨！」

手を広げて、良太郎さんは言った。

「貴様ら、私を差し置いて、頭が高い！頭が高いぞ！特に赤！！」
それを言い放った時、また赤のメッシュに変わった。

よるとだいたい時間がずれている気がしたが、デンライナーを使用していたので、その影響だろう、と勝手に解釈した。

俺たちは、とりあえず喫茶店に入った。

そこには既に男性の先客が結構いた。図録に載っていた、尾崎正義と三浦イツセーももちろんのごとく、いた。そして、良太郎の姉であり、「ミルクディッパ―」のオーナー・野上愛理だ。

図録どおりのマイペースらしく、コーヒーを入れるのに集中しているのか、良太郎と一緒に入っても「いらっしやい」としか言わなかった。

一度入ってから彼女は顔を上げ、「あ、良太郎」と言ってから、コーヒーを注ぐのをやめて、

「はい、絆創膏」と言って、絆創膏を持ってきた。

これに対して良太郎は、「いつも怪我するわけじゃないよ」と抗議するが、そう言いながらも、頬にさっきこけたときにできた傷が付いていた。愛理は、そこに絆創膏を貼った。

「はい、手当て終了。今日はどうしたの？おでこにも何かの跡があるけど」

「あつ、これはね、さっきこけちゃって」

と良太郎は言った。

そう、確かにこけたのだ。ただし、何もないところで。

デンライナーを降り、「ミルクディッパ―」へ向かう途中、何もないところでつまずき、

<わああああ>と言いながら、派手に橋の何もないところでこけ、なぜか落ちていた（とはいえ、誰かが飛ばしたのである）ガムをでこに貼り付けた。

また、途中で前から歩いてきた犬にあれをかけられ、話しながら歩いていると電柱にぶち当たった。

——どれだけ不幸なんだよ……。

と本気で思った。

「まあ、良太郎君の不幸さはすごいものがありますからねえ」

「不幸の神にでもなりそうです。おそらく、ガムでも頭に飛ばされたでしょう」

と、三浦と尾崎は言った。まさに凶星だ。

「ハハハッ」と良太郎は苦笑した。

愛理がカウンターへ行き、「コーヒー、飲むでしょう?」と言った。たしか、図録によると、あの奥には、彼女に惚れた男性客たちのプレゼントが「忘れ物」として店の一角に積まれているはずだ。時間はずれても、おそらく今もあるだろう。

そこへ、突然誰かが入ってきた。

「おいっ、良太郎はいるか?！」

と、入ってきたのは、桜井侑斗だった。

侑斗は、俺とナツミカンを一瞥し、良太郎の腕を取った。

「おいっ、良太郎、イマジンだ」

と、小声で言い、ドアの方へ引つ張ってきた。

「コーヒーいらないの?」

と背後から愛理の声が聞こえたが、俺とナツミカンは、良太郎たちについていったのだった。

良太郎を引つ張った侑斗は、町の公園で止まった。公園には、幾人かの子供とその親らしき人がいた。

侑斗は、ベンチに座っていた青年を指し、「あいつが憑かれたようだ」と言った。

青年は無気力に空を見上げていた。

良太郎は近づき、「あのう、怪物に会いませんでしたか? 砂の」と聞いたが、青年は無言だった。

「こいつはフリーターらしい。案外、凄腕のな」と侑斗は言った。

「なんで、今日は情報があるの?」と良太郎が聞くと、侑斗は何かを言おうとした。しかし、何かの光が侑斗の中に入り、侑斗は頭を振り下ろした。

そして顔を上げると、緑のメッシュがかかった髪になっていた。侑斗のイマジン・デネブが憑いたようだ。

「いやあ、それがですねえ、リュウタロウさん」と軽くボケをし、「良太郎ですけど……」と良太郎は即座に、しかし優しく突っ込んだ。

「願いを聞くことはできなかったんですが、あの男、”就活も頼みたい”と言っていたんです。だから、フリーターであろう、と考えたわけです。とはいえ、それ以外にほとんどこれと言った情報がなかったんですが」

と、そこまで言い終えると、侑斗は元の顔になり、「うるさいつ、デネブ！余計なことを言うな！！」と言った。

良太郎は、そんなご機嫌斜めの侑斗に恐る恐るこう聞いた。

「”就活についても頼みたい”って言ったんだったら、就職以外の願いなんじゃあ……」

それを聞いて、侑斗は服をきっちりしてから一つ席をした。

「いいか、情報は現時点でフリーターであると言っただけだ。その情報に沿ったほうが良いだろう」と侑斗は冷静に分析したようだが、その程度は俺にでも分かった。

俺は、青年の足元に落ちていた手帳を拾いあげた。

そこには、『（有）工藤土木株式会社・現場班・渡部康太』とあった。

「土木工事をやっていたんですね。この渡部さんって人」

とナツミカンは俺の方からそれを見て、言った。

俺は、「ああ」と短く応答した。

「じゃあ、任せて」と良太郎は言い、天を見た。

「キントロス。お願い」

良太郎がそう言うと、光が良太郎の方に降ってきて、良太郎は俯いた。顔を上げると、金のメッシュをつけ、後ろ髪を束ねていた。キントロスが憑いたらしい。

「よっしゃー、行くかいのお」と良太郎は言い、俺たちは青年の勤

めていたらしい会社が工事をやっているところに行った。

5 - 良太郎

結局、渡部さんは”工藤土木株式会社”の現場監督以外に、”風都幼稚園”という幼稚園で保育士、”ルッセル・ジュネール”という妙な名前の音楽教室の仮教師をしていた、と分かった。

すごい幅広い仕事の選択だった。

”工藤土木株式会社”では、現場に行つて、聞き込みついでに、「いやいや、聞き込みに答えてくれたお礼じゃけえ。気にせんで良いですわ」と、現場の人が止めるのを聞かずに、キンタロスが仕事を手伝った。軽々と砂の袋を抱え上げ、現場の人からは驚きと賞賛の声が上がった。

”風都幼稚園”では、リュウタロスが憑き、「赤ちゃん」と一緒に遊んでいた。聞き込みそのものは、主に土さんたちがやっていった。

”ルッセル・ジュネール”では、ウラタロスが憑き、先生とともにピアノを協奏したり、バイオリンの弦の手入れ、生徒にピアノを教えるなど、細かいことを器用にこなした。とはいえ、「僕と釣りでもしませんか？」と女の先生を口説きながらではあったが。

そして音楽教室の先生から、「渡部さんには彼女さんがいたと思います」と言われた。

「その人と会っている様子はなかったんですが」とウラタロスが聞くと、

「それが、……その彼女さん、事故で亡くなつたと、新聞で知りました」

僕たちは一斉に口をつぐんだ。そのまま、先生は言った。

「それで、その日から彼はすっかり来ることが無くなり、事情を知っていた生徒たちは心配していました。なにしろ、たまに彼女のことかを聞いてくる生徒にはほとんど話していたそうですし」

「それほど、思いは深かつた、って解釈でいいのかな？」とウラタ

ロスは聞いた。

「はい……」と先生は言った。

それを聞いて、僕はこう考えた。

あの青年の彼女が亡くなったことで、彼女を蘇らせることが願いになったのでは？と。

僕たちは話しながら再び青年のいた公園へ向かった。

「まあ、なんとも酷な話ですなあ」とデネブ。

「でも事故って、ホントかわいそうだね。あの渡部さん」と僕。

「しかし、よくある話ではあるな」と土さん。

「そうですね。でも、私は強くても、弱くても良いから、自分抜きでも生きてほしいです。彼女だったら、ですけど」と夏海さん。

そんなふう話し、公園に着いた。そこには既にイマジンがいた。青年の隣には、女の人が立っていた。

「事故を無かったことにした」とイマジンは言い、青年は涙を流した。

「イマジン……！」と侑斗が叫ぶも、

「ハハハッ、ついに開いたぞ！記憶の扉……！」

とイマジンは喜んで叫び、青年の背中に入ってしまった。

すかさず青年にパスをかざすと、『2008年12月25日』と出た。（きつとクリスマスプレゼントを渡す直前か直後で、余計に答えたのかもしれない。）と勝手にドラマみたいなことを考えた。

僕はデンライナーを呼び出し、バイクに乗って、ライダーパスに挿入して、過去へ向かった。なぜか、土さんたちも一緒だった。

僕たちは、過去へ向かった。

#8 電王の世界「僕に釣られて、お前は泣いた……だけど、他には聞いてない

「僕に釣られて、お前が泣いた……だけど、他には聞いてない」(やっぱり長い)、どうでしたでしょうか。楽しんでいただけましたか？満足していただけるものでしたら、うれしいです。

今回、結構中途半端なところで終わっちゃった気がぬぐえませんが、さすがにイマジン5体(＋少しジーク)のかけあいを書くとなると、さすがに長い。10000字前後で考えていたのに、1話目の構想(予定)を全部書いたら、15000字にはなりそうだったので、さすがに寸止め(僕でさえ、読むの飽きちゃいそうだから)。ディケイド・電王・ゼロノスは変身できませんでした。期待していた方すいません。(次回には必ず変身させますので、それなりにご期待を。)本当は、今話の終わりはもっともっと後なんです、たぶん2話目のラストまで引つ張りそうです。

それにしても、構想ができていたとはいえ、微調整を加えながら、学校に行きながらで打つので、結構お待ちになるかもしれませんが、よろしく願います。

そして、ここでちよこつとしたお知らせ。

今回、この電王の世界を考えながら、この小説全体の構想・話数を考えたところ、合計約80話になりそうです。(うん。相当長い。でも、設定を考えると、削れそうな世界が何一つ無いんです、これが)

と言うことで、ふと考えた。さすがに2部か3部には分けようと！(その前に高校に行っている間に終わるのか？これ)

ということ、すんっっごい長いですが、……気ままにお付き合いください。

で、ここで二つほどお礼。

またも評価ポイントを頂き、ありがとうございます。お気に入りに入れた方もいらっしやったようで。

また、”うーやんさん”や”肇河翔一さん”感想を入れてくださり、ありがとうございます。

もちろん、まだまだ感想や賞賛、批判、改善点や登場させてほしいキャラ（これはライダーのものに限ります）など、ありましたら、どうぞ気軽に書きください。

皆さんの一言（いや、二言三言でも）、待っています。

そして、もう一つ。

いきなりですが、今回なぜここまで遅れたかと言うと、（そりゃ情報収集とかがかかったのはもちろんだけど、）実は、今回の話を投稿した4日後が、小説の開始から1ヶ月になるからです！パチパチパチパチパチパチパチパチパチ（本当は、1ヶ月記念とかしたかったんですが、塾とかが重なって…無理そうなので。ハハッ）皆さん、本当にありがとうございます。評価も上げてくれたり、お気に入りに入れてくださったり、そしてなにより、（実は僕の処女作ともいえる）この小説を読んでくださり、本当に、本当にありがとうございます！！ちなみに、そう現在（2010年4月18日）までの総アクセス数は約6000アクセス、ユニーク（見に来てくださった人の人数）は約1400人となりました。

では、皆さんの励ましを元に、また楽しみに来てくださる方のためにも、今後も執筆（および最低限の勉強）を頑張っていきたいと思っています！！今後もよろしくお願いします。

では、描写の強化を心がけているつもり、未熟ながらも皆さんに支えられている作者・”氷雲しょういち”からでした。

#9 電王の世界「最初に言っておく……貴様、頭が高い！」（前書き）

お待たせしました！『仮面ライダーディケイド』version改
『第9話、電王篇第2話「最初に言っておく……貴様、頭が高い
！」が出来上がりました！（この題は決め台詞をまとめたものた
めにちよいと無茶があります）

長かった。書くの。

シナリオは電王篇の第1話を書き上げる少し前に完成していたんで
すが、やっぱり1話目の最後を押して作った（1話目が以上に長か
った）ために、過去最高字数になりました。（たぶん）

電王は、未見の作品の中で最も見たい作品でして、2話目を書いて
いる途中でようやく電王本編のラスト3話を一挙に見ました。

すんごい泣けるでえ。（byキンタロス）

本当に、ウラタロスたちとの別れ（ちょっと違う）がかっこよかつ
た！

それを見て、僕も負けずに頑張ろう、と思いました。

さて、今回は、バトルバトルバトルです。

最初は、過去に飛んだ良太郎・侑斗・土がイマジンとバトル、です。
展開が一部メチャクチャさがあるのは、素人ですから。（いや、そ
れでまとめちゃいけないだろ！！↑モモタロス談）

では、そんなこんなで、はじめます。お前の涙は、このティッシュ
で拭いとけ！（キンタロス談）

「最初に言っておく……貴様、頭が高い！」をどうぞ！

#9 電王の世界「最初に言っておく……貴様、頭が高い！」

1 - 土

過去に来た俺たちは、ナツミカンをデンライナーに残し、外に出た。

外に出る一瞬前に、俺は、すぐにカメラを取り出した。良太郎とモモタロスを撮っておこうと思ったのだ。

イマジンたちを背景にして良太郎を撮る。

「なんだよ、いきなり！」とモモタロス。

「驚いたなあ、写真かい？」とウラタロス。

「なんや、目がパチパチするのう」とキンタロス。

「僕はジーンとするよ」とリュウタロス。

「私は大丈夫だ。羽で少し光を吸収させたからな」とジークも言ったが、

「でも、それって写真に顔が映らないってことなんじゃ」と良太郎が突っ込んだ。

みんな、笑っていた。俺は、「あとで現像しといてやる」とだけ言っ、一気にイマジンの目の前に来た。

「どうして、来るんですか？」と良太郎がイマジンを目の前にしてで、今更ながら聞くのを、侑斗が遮り言った。

「あんた、俺たちと同種なんだろう？」

驚く良太郎をよそに、俺は笑って、「ああ」と肯定した。

それでもやはりオドオドする良太郎の隣で、侑斗は俺を見据え、「そうか。……だが、ここは俺たちに任せろ。行くぞ、良太郎」と言っ、イマジンのほうに向いた。

良太郎はまだオドオドしながらも、ベルトを取り出し、腰に装着した。

そして、二人はパスを取り出し、バックルにかざすように通した。良太郎は右上の赤いボタンを押した。

『SORDFORM』『ALTAORFORM』と言う音声で良太郎は電王・ソードフォーム、侑斗はゼロノス・アルティルフォームになった。

「俺、ようやく参上!!」

俺は、しばらく見学になる。

目の前のイマジンは、黒い馬のような姿をしたイマジンだった。

「この、俺、ブラックイマジンの力を侮るなよ!!電王!!」
とブラックイマジンは叫んだ。

それに対し、電王となったモモタロスは、「ヘッ、すぐに俺の必殺技でしとめてやるぜ!!」と言い放った。

ゼロノスとなった侑斗は、「俺の邪魔だけはしないでくれよ」と言った。

「オウッ、気をつけてやるが、テメエも俺の邪魔すんじゃねえぞ!」
とモモタロスが言うのを合図に、二人はイマジンに向かって駆け出した。

モモタロスは「ソリヤソリヤソリヤ!!」と言いながら、ブラックイマジンのデンガッシャーで斬りかかる。

侑斗もゼロガッシャーで背後から斬った。そのうち、途中で離れ、パスを取り出してバツクルにかざした。『FULL CHARGE』という音声で、ゼロガッシャーが雷を帯び、ゼロガッシャー・サーベルモードの必殺技・スプレンドッドエンドを放った。

ブラックイマジンはそれをまともに喰らい、やつは胸を押さえて苦しんだ。

そこへ、今度はモモタロスがデンガッシャーを持ち、「次は、俺が行くぜ!!」と、バツクルにパスをかざした。

『FULL CHARGE』という音声でデンガッシャーを両手に持ち、

「行くぜ、俺の必殺技パート2!!」

と言って、振った。エクストリームスラッシュという技だったと思う。本当は。

そして、ブラックイマジンは、苦しみながら両手を一度組んでから、ジークのようにサツと広げた。

すると、ブラックイマジンの足元の影が丸くなり、半径は15メートルほどにまで一気に広がった。

そして、それは電王とゼロノスの足元にも及び、いきなり二人は足だけが地に着きつばなしになってしまった。

「なんだ、こりゃ?!」

「う、動けん!!」

それはあり地獄のようなものだった。

「クッソー!!」と叫ぶモモタロス。

そこに「僕がやってあげる」とリュウタロスが言った。

そして、電王は右上の紫のボタンを押して、『GUNFORM』という音声で、フォームチェンジした。

そして、銃で何とか応戦する。それでもブラックイマジンはギリギリで避け、手から光を放ち、二人を圧倒した。

それを見て、俺は「俺の出番か」と、バツクルを装着し、カードを取って挿入した。

『KAMENRIDE DECADE』という音声とともに、デイケイドに変身した。

そのまま、ブラックイマジンの前に走って行く。

「貴様!!」とイマジンが気づいたものの、俺の蹴りで黙らせた。

俺は、黒い影を踏まないように、なんとか外側で着地した。

銃で対抗していたモモタロスと侑斗も固まった。

「お前……門矢か?」と侑斗は聞いた。

俺は、「ああ」と背中を向けたまま、答えた。吹っ飛ばされたブラックイマジンは、俺に目を向け、訊いた。

「貴様、何者だ?」

「俺は門矢士。デイケイドだ」

俺以外の全員が息を呑んだ。そして、ブラックイマジンは、高笑いをして、こう言った。

「いいだろう、いいだろう！！この俺が相手になってやるよ、デイケイド！！」

手を広げたまま、奴は走ってきた。影も同時進行で向かってくる。
——手を広げないと、影が出せないんじゃないのか？
と考えながら、もう一枚、カードを引いた。

『KAMENRIDE KIVA』

その音声で、俺はキバになった。

そして、また一つカードを引いて、バツクルに入れる。

『FORMRIDE KIVA BASHAR』の音声で、今度は緑のキバ・バツシャーフォームになる。

そして、魔海銃・バツシャーマグナムでブラックイマジンを撃ち、手を閉じさせた。

その瞬間に持っていた、もう一枚を入れる。

『FORMRIDE KIVA DOGABAKI』の音声で、ドツガ・バツシャー・ガルル・キバの全ての能力を兼ね備えたキバ・ドガバキフォームになった。

そのまま、イマジンに突っ込み、瞬間的に放った拳を奴の腹に収めた。

そして、最後にもう一枚取り出し、入れた。

『FINAL ATTACKRIDE KIKIKIKI』

その音声とともに、俺は飛び上がり、飛び蹴り・ダークネスムーンプレイクを放った。

奴は、腕を広げたまま、「クソッ、……カイ……様」と呟いてから、爆発した。

そして、奴の能力である影は消え、モモタロスたちは自由になった。

その刹那、電王、いやモモタロスは、俺に斬りかかってきた。

俺は、キバのキバフォームの状態で、何とか受け止める。

モモタロスは呟いた。

「そうか、てめえが、ディケイドだったんだな」と。
俺は、「そうだ。それで、どうする？」と挑発する。

「俺がお前を、悪魔であるディケイドを倒すだけだ！……！」
と、モモタロスは叫び、狂乱したように剣撃を放つ。

その迫力は、相当なものだった。

——ああ、俺はここでも悪魔扱いなのだ。
と思った。

そして、幾らか斬った後、いきなり蹴りで距離をとり、パスをバツクルにかざした。

『FULL CHARGE』

「行くぜ！……俺の、必殺技！……！」

と叫ぶや否や剣を振り下ろす。

それをギリギリでかわしたが、そのまま横にも振ってきた。

俺は、カードを2枚引き、そのままバツクルに入れた。

『KAMENRIDE DECADE』 『ATTACKRIDE
SLASH』

そして、ブツカーを剣にして、何とか受け止めた。そして、全身全霊の力を込めて振り払う。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

「はあ、はあ、はあ、はあ」

2人はかなり消耗していた。しかしモモタロスは、またも剣を振って、こっちに向かってきた。

それを手で止めたのは、ゼロノスだった。

「話をしてみましょう、モモタロスさん。この人にも、事情と言うものがありますように」

時間は、ちょうど11時10分になっていた。

2・ハナ

落としていたはずのパスを持っていた青年は、次に見つけたときにはイマジンに取り付かれていた。

「やっぱり……」

そう呟き、しばらく見ていると、やはり彼に憑いたイマジンは彼の精神をのっとった。

しかし、しばらくして、「ダメだよ!!」と彼は叫んだ。

「……押さえ込んだ」

驚いたことに、彼はイマジンの力を上回り、精神を取り戻したようだった。

それだけでなく、少し話すとやはり特異点であることは明らかで、電王に変身し、イマジンを倒して見せた。

私と彼は一緒にデンライナーに戻った。それが、始まりだった。

私はシャワーの栓を閉め、寝巻きを着た。そして、デンライナーの奥にある風呂を出た。

「おや、長風呂だったね、久々に」とウラタロスが言った。

「セクハラよ」と私はさらっと棘を持って返す。

そこへ、モモタロスが現れた。さっきイマジンを倒しに行っていたようだ。それにしても、なぜかこの空気が重い。

「一体どうしたっていうの、キンタロス？」

そう聞くと、キンタロスは目を閉じてダンマリしたままだった。仕方なく、モモタロスに聞くことにした。

「ねえ、モモタロス」

しかし、「うるせえ」と腕を払われた。それでもめげずにもう一度前に出て、肩を揺すった。

「ねえ、モモタロス、一体どうしたって言うのよ?!」

すると、モモタロスはようやく顔を上げ、「うるせえ……って……」

怒鳴るのかと思ったら、いきなり固まった。

そして、後ろを向き、こう怒鳴った。

「オイッ、ハナクソおん……な……。……なんだって、テメエ、ネ

ネネツ、寝巻きになつてんだ!!」

どうやら、燃えているようだ。これでは、話はそうそうできそうにない。

そこで、最終手段としてウラタロスに聞いた。

「一体、何があつたの？」

すると、ウラタロスは、右手を顎にやつて言った。

「うーんとね、ハナさん——悪魔が出たんだ」

——悪魔ではないのか、あんた達は……、とでも言ってみたかったが、長年一緒にいて助けてもらったこともあつたので、さすがに言わない。

「悪魔？」と一応聞く。

すると、ウラタロスは、真剣な雰囲気で、

「そう、悪魔。ディケイドって言う奴で、良太郎や僕らの記憶の奥底でよく見る奴だったんだ。そいつが、来た」

と言った。

「そいつとモモタロスが戦つたつての？」と私はまた聞く。

「そう。ハナさんの寝巻き姿に興奮して入るけど、そいつと戦つて、一応神妙な心境だと思うよ」

私はため息をつきながら、「そう」とだけ言った。

そして、フンツと鼻息を出してから、ナオミちゃんに「もう寝るね」といった。

「はい、分かりました」

とナオミちゃんは言い、腕に巻いた大量の腕時計をギシャギシャ言わせた。

私は、寝室へ向かう。後ろでドアの開く音が聞こえた。

——たぶん、良太郎だろう。

そう思ったが、私は振り返ることなく、客室を後にした。

3——良太郎

11時11分11秒、デンライナーが僕たちの前に来た。侑斗は、

調べたいことがあるからゼロライナーに乗る、と言って、別れた。

「乗っても良いのか？」と彼は言った。

僕は、「たぶん、いいと思いますよ」と答えた。彼は悲しげな目をしていた。

俺たちがゆっくりと中に入ると、——はつきりとは分らないが——しかめっ面をしたモモタロスたちがいた。

俺は全員を一瞥してから、席に着いた。

そこへ、確かナオミといった客室乗務員がコーヒーを持ってきた。「どーぞ」と、ナオミはそれを差し出した。

ああ、ただけ言つて、しばらく手をつけずに黙っていると、「飲めよ」

と、モモタロスが言った。

俺は、すつと手を伸ばし、コーヒーを飲んだ。

感想としては、そう、——最悪だった。

昔、何度か自前でコーヒーをついで飲んだこともあったが、それらのどれよりも酷いものだった。

「悪いが、ここまでだ。飲めるのは」

そういうと、モモタロスはいきなりキレて、こう言った。

「んだとつ、テメエ！！！！ナオミの注いだこのウマすぎるコーヒーが飲めねえだと！！！！」

それを聞いた良太郎は、

「でも、ハナさんも飲めないはずだよね、……このコーヒー」

と静かに突っ込んだ。場を壊したくないのだろう。

「ああん？！！そんな事言つてんじゃねえ！！！！注がれたもんくねえ、ちゃんと飲めっつーてんだよ、俺は！！！！！！」

と咆哮するようにモモタロスは言った。

そして、モモタロスは言い終わると、ムスツとして足を組み、近くの机に座った。

それを見て、ウラタロスが言った。

「君は、……いや、君が”仮面ライダーディケイド”……なんだね」

「ああ」

「僕たちには、君が僕たちを倒そうとした記憶がある。そのことに君は覚えがあるかい？」

俺は黙ったきりだった。

記憶はある。だが、覚えはない。不思議な感覚だ、

「君は、僕たちの敵だと、認識させてもらっても構わないかい？」

その問いに、俺は即刻、

「違う！！！！！」

と叫ぶように否定した。

イマジンたちは驚くことこそなかったものの、しっかりと睨みを利かせていた。

「でも、僕たちや良太郎たちにもお前さんに倒された記憶が残つちよる。それはどう説明するんじやい」

俺は黙り込んだ。どれが説明できるのなら、とつくに言っているところだ。

やがて、全員がダンマリとすると、ナツミカンが入ってきた。

「えっと、お話中でした？」

と、ナツミカンは聞いた。

「いや、終わった。つい先程な」

と、答えたのはジークだった。

俺は、ジークの言葉をさえぎるように「オイッ、待て！！」と叫ぶ。

しかし、ジークは、

「よいか、門矢士……私にも微かではあるが、その記憶はある。その記憶がある限り、我々は互いを信用できんだろっ」と返した。

その通りであると、俺も思った。俺は、久々に歯を食いしばった。「じゃあ、お二人にも寝室が余ってないか、オーナーにでも聞きに行こうか、リュウタロス」

とウラタロスは言って、扉の方へ向かう。

「オイッ、良太郎、ちょっと話すぜ」とモモタロスも腰を上げて、立った。

俺は、「待てよ！！！！！」と叫んだ。

その刹那、突如としてデンライナーにあのボールが舞って来た。デンライナーはボールに突っ込むように吸収され、モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、ジーク、そして良太郎までもがボールに飲み込まれた。

俺とナツミカンだけは、デンライナーに残されたままだった。

「さっきのボールは……」

と口を開けっ放しにしているナツミカンをよそに現れたのは、鳴滝だった。

「やあ、土くん」

鳴滝は、帽子に指をつけて言った。

「何の用だ」

俺は当り散らすように言った。

すると鳴滝は、ククツと笑って、こう言った。

「いや、今回は刺客を送るつもりじゃない」

鳴滝は手を振って、そう言った。そして、こう続けた。

「警告だよ」

「警告？」とナツミカンが聞いた。

「いいかい、もうすぐこの電王の世界は崩壊する」

「そんなの、わかんねえじゃねえか」

俺はそう反発した。鳴滝は人差し指を頭に前にやり、デンライナーの天井を指した。

「いいかい、電王はもうすぐ死ぬ。良太郎君はおるか、モモタロスやウラタロスといった仲間のイマジンどももだ」

俺は驚愕して、「なんだと？！！」と叫んだ。

鳴滝は、落ち着いた風に言った。

「電王が倒されれば、イマジンは野放しになる。それはもちろんゼロノスで止めることはできん」

そこからさらに続けようとした鳴滝に、「待て！」と言った。

「誰が電王を倒すんだ」

と俺は聞いた。

すると鳴滝は悪しき笑みを浮かべてこう言った。

「ライダーだ。地獄のな」

それを聞くと、俺の念頭に浮かんだのは、ベルデ・ガイ・キックホッパー・パンチホッパーだった。

「あいつらを総動員するのか」

俺は尋ねる気も無いままに呟いた。

しかし、その問いに鳴滝は答えた。

「あいつら？ああ、ベルデたちが。いや、今まで君に送っていた地獄のライダーとは段違いの強さを誇る、幹部クラスの戦士だ」

俺たちは、謎の単語に疑問符を撃っていたが、鳴滝は最後まで言い終えた。

「そう、我々の仮面ライダーだ」

鳴滝は、そこまで言い終えると、フツと不敵な笑みを浮かべていきなり消えたのだった。

それと同時に、デンライナーは大きく揺れはじめたのであった。

4ー良太郎

デンライナーが謎のベールに飲み込まれて、僕やモモタロスたちはどこかへ来させられてしまった。

「ここは、どこだろ」

僕はぼんやりと呟いた。

地面には、灰色のコンクリートが広がり、なぜか地平線が見えなかった。

周りにはモモタロスたちが、気を失って倒れていた。僕は揺すって起こそうとした。

そこでモモタロスたちに触れると、いきなりモモタロスたちは砂と化した。

僕が戸惑うと、モモタロスたちが起き上がっていった。

「どうせ、俺たちはオマエみてえな特異点に憑こうが憑くまいが、イマジンなんだ。元来、この体の方が居心地良いんだよ」と言った。

そこへ、一つの足音が聞こえた。右側から、漆黒の服を着た男の人が歩いてきた。

「だ、誰？」

と僕は聞く。

男の人は、髪をかきあげ、言った。

「お前が、電王か？」と。

僕は、戸惑いながらも、「はい」と答えた。

すると、男の人は、ポケットに右手を突っ込んで、

「俺は、如月洗牙きあらぎ じゆがだ」

そのまま、手をポケットから出し、カード入れみたいなものを出した。そこには、黒いデッキに狼のような紋章が入っていた。

それを手に取り、僕に見せた。

「俺は、仮面ライダーウルグ。お前を倒すものだ」

そう言つと、如月さんはデッキを前に突き出し、「変身」と呟くように言った。

するとベルトが現れ、『KAMENRIDE』の音声流れ始め、デッキをベルトに付けると、『WOLG』と発せられた。

両頬に一本ずつ、頭の方に三本のカードのようなものが刺さった状態の、青白い狼のような、仮面ライダーウルグというものに変身したのだった。

右手には、剣を携えていた。

僕もベルトをつけて、「モモタロス！」と呼んで、電王になった。

『SORDFORM』の音声流れた。

「俺、参上！！」

そう言ってから、デンガッシャーも剣にする。

そこに至って、ウルグは口を開いた。

「孤独に生きる俺の運命、お前を倒すのも、俺の運命だ」

そしてウルグは剣を構えた。

それと同時に、モモタロスは駆け出し、剣を縦に振り下ろした。それをウルグはやすやすと受け止める。

そう思うや否や、ウルグが消えた。いや、僕の背後の、かなり遠くの方に回っていたのだ。

「無限一刀流 1の型 ……」

と呟きながら、ウルグは橋ってこっちに向かってきた。剣は右手に持たれ、横に斬る構えであった。しかし、認識できたのはそこまでだ。

ウルグは、超高速で向かってきて、デングァッシャーで防御しても、弾き飛ばされるほどの威力で剣は横に振られた。

「…… 初 一閃」

そう聞こえたのは、痛みが自分のお腹に走った瞬間であった。

僕は大きく弾き飛ばされ、変身が解けてしまった。

「痛い」とモモタロスはなぜか実体化して頭をさすっていた。

そうしていると、「次は僕が！」とウラタロスが憑いて、電王に変身した。

『ROD FORM』

「君、僕に釣られてみる？」

ウラタロスはそう言つと、右手でロッドを振り回し、ウルグの剣に対抗した。しかし、彼の剣の技術と勢いはすさまじく、僕の攻撃のほとんどが弾かれた。

いや、それどころか、スピードそのものについていていなかったのだ。

「もう一匹行くか」とウルグは呟き、剣を両手に持ち、左から突く体制になった。

「無限一刀流 33の型 ……」

ウラタロスは、タイミングを見計らってロッドで弾くつもりらしかった。

そして剣が伸ばされた刹那、ウラタロスはロッドを胸から下に降ろした。それでタイミングが合うはずだった。

しかし、剣はほんのゼロコンマ数秒タイミングがずれ、僕はまともにも右のお腹に剣を喰らった。

彼の右手は空振りですばまれ、左手に剣を持ち替えて突いていたらしかった。

「……月つき 篠月しのづき」

彼はそう呟いた。

僕は、また変身が解けてしまった。

「次は俺かいのう！」

と今度はキンタロスが僕に憑き、変身した。

『AXE FORM』

「行くでえ！」

僕は、デンガッシャーの斧で、いきなり剣を叩き落した。

ウルグは無言で、剣を拾い、斧を止め続けた。

どうやら、今度はこちらに分があるらしい。

そう思ったところで、再びウルグが口を開いた。

「どうやら、さすがにお前相手ではパワーが少し足りないか」

それを聞いて、キンタロスは得意そうに、

「俺の強さは泣けるでえ」と言った。

「そうか……」とウルグは呟き、デッキからカードを一枚引いた。

それを剣の挿入部分に入れる。

『ATTACK RIDE SORDEVENT DARK LIGHT』

という音声が流れ、ウルグは自分の剣を鞘に納めた。そして、天から降ってきた包丁のような形の黒く大きな剣を手にとった。

「お前のような奴には、このダークライトのほうで力の差を思い知った方がよい」

と彼は言い、大きく振り上げてから、

「全てを破壊しろ……斬波さんぱ!!」

と呟いてから、一気に降ろした。

すると、剣からどす黒い光が放たれ、僕のほうに向かってきた。キンタロスは「なんや、これ?!」と驚きながらも、負けじとデングツシャーで「うおおおおお!!!」と叫びながら、それを受け止めようとした。

しかし、案の定受け止めきれず、吹き飛ばされ、やはり変身は解けてしまった。

「次は私が行くとするか」とジークがしぶしぶ僕に憑き、「変身」と言つて、電王に変身した。

『WING FORM』

翼が閉じられ、「降臨!」とジークは腰の後ろに手を当てて言った。

そして、二つのデングツシャーを二刀流にした。

それを見て、「おまえには、これだな」とウルグは言い、デッキからまたもカードを引いて剣に収めた。

『ATTACK RIDE SORVENT WEIKE』

その音声とともに剣を収め、またも天から降ってきた剣を手にとった。さっきとは打って変わり、青く細い剣だった。

「行くぞ」と言つて、ウルグは剣先を僕に向けた。

「何を私に向けている。無礼だ! 恥を知れ!」とジーク訳の分からないことを言った。

「いいから、まずはこの人を倒そう。それが先だよ」と僕は言った。

「いいか、良太郎、彼はプリンスである私に向かって剣先を向けたのだぞ。無礼だとは思わんか!」とジークは言った。

「ジーク、今はあの人を倒そう、そうすれば、いくらでも従えることができるんだから」と僕はなだめた。

「ほう、それはいい」とジークは言つて、「では、成敗!」と走つてウルグに向かっていった。

剣先を向けたままのウルグは、その瞬間にこう呟いた。

『豪流滝雨』

そして、剣先からものすごい勢いの水が溢れ出て、僕に向かって

きた。

ジークはそれを避けようとしたが、避けきれず、受け止めようとしても、水であることでデンガツシャーを弾かれるだけに終わった。そして、ウルグの技・滝雨をともに受け、またも変身が解除された。

「最後は僕か」とリュウタロスは無理やり僕に憑き、電王に変身した。

『GUNFORM』

「お前を倒すけど、良いよね！答えは聞かないけど！」

リュウタロスはそう言いながらデンガツシャーを銃にして、ウルグに撃ち始めた。

ウルグは、先ほどのダークライトを振り捨て、元の剣を取り出して、

「無限一刀流 3の型 初 球斬」

と呟き、剣撃が球体状にも見えるほどの素早い剣さばきで応戦した。しかし、こちらは防御する必要がなく攻撃を繰り返し、2、3発は相手に当たるようになった。

「くっ」とウルグは苦言を吐いたかと思うと、またデッキに片手を伸ばし、カードを一瞬で剣に入れた。

『ATTACKRIDE SORDEVENT FOG』

その音声にあわせて、ウルグは銃弾を一発弾き、僕の頭に当てた。「イッタア」とリュウタロスが怯んだ隙に、持っていたほうの剣を鞘に収め、地面から出てきた方のフォッグを手にとった。

「お前にはこいつの方が相性が良い」

そう言って、剣先を僕に向けた。その瞬間に、リュウタロスは、

「お前を倒すって言ったじゃん！」

と言いつつ、銃弾を放った。

すると、とっさにウルグはこう呟いた。

「五幻 変幻刀の二 妖刀」

そして、フォッグの剣先がいくつにも分裂して伸び、リュウタロ

スが撃った銃弾を見事に全て叩き落して見せたのであった。

「ウツソ……」といいながら、リュウタロスはひたすら撃っていく。やがてウルグのフォッグがリュウタロスの銃撃のスピードを上回り、――剣は僕を貫いた。

「へへッ……やられ、ちゃった」とリュウタロスは呟いた。

フォッグが僕から抜けると、すぐに変身が解けた。

――死んだんだ。

そう思ったが、変身が解けても、僕は生きていた。

周りには、痛みで唸っているモモタロス・ウラタロス・キンタロス・ジークがいた。

リュウタロスだけがいなかった。

「リュウタロス？……リュウタロス?!」

僕は辺りを見回したが、目に入ったのは、ウルグだった。

「リュウタロスなら死んだ」

と言って、手に持っていたカードを見せた。そこには、リュウタロスに写真があった。

「お前たちは俺たちに倒されると、こうやってカード化される。もう一つ例を挙げるのならば、」

と言いながら、ウルグは消え、ジークの前に立った。

「――こんな風にな」

そう言っ、て、ジークにフォッグを刺した。僕が叫ぶ間もなく、ジークはカードになり、地面に落ちた。

それをウルグが拾った。

「もちろん、ライダーもカードになるが、それは俺のやることじゃない」

ウルグはそういいながら、カードの砂埃を払った。

「だが、運が良かったな、良太郎。先ほどの攻撃はお前に当てたつもりだったが、憑依していたリュウタロスがかばったようだ」

僕はその言葉を聞けずに「リュウタロス……ジーク……」と言いながら、途方にくれていた。

そんな僕をウルグは哀れみをこめた目で見て、

「もう何を言っても無駄なようだな。あとで他のイマジンどもも倒すつもりだが、まずはお前だ」

そう言つて、まっすぐに剣先を僕に向けた。そして、上に振り上げて、

「さらばだ」

その言葉と同時に振り下ろした。

そこへ、倒れていたはずのキンタロスが現れる。キンタロスは、己の体にウルグの剣撃を受け、

「グアアアアアアア！！！」と呻いた。

僕はそれに気がつく、キンタロスが倒れるのを支えた。

「キンタロス！！！！」

そしてキンタロスの体から光が散っていく。それを見て、「キンタロス！！！」とまた叫んだ。

キンタロスは、

「ハハッ、これが俺の最後かい。ある意味笑えるのう」と初めて細い声で言った。

「キンタロス、ダメだ！！！死んじゃあ、ダメだ！！！！」と僕は叫ぶ。

そんな僕の頬にキンタロスは手を当て、こう言った。

「大丈夫や、良太郎。お前は強い。俺を拾ってくれたときから、それは確信しちよる」

「でも、リュウタロスにジークに、おまけにキンタロスまで失えない！！！！」

「ハハッ、そうじゃのう、失うことは辛い。じゃが、安心せい。俺はいつでも、お前の味方や」

最後にキンタロスは「じゃあな」と言つて、カードになつて落ちた。

「また守られたか。まあ、こいつもカードになつたんだ。手間が省けた」

とカードを拾い、フォッグを収め、最初の件を取り出した。灰色の剣を。

「これは、俺の相棒、クラウドだ。こいつで仕留めてやる」

とクラウドズを右に振り、

「無限一刀流 41の型 真真・一閃」

と唱え、クラウドに光を込めて、左に振った。

その刹那、僕の視界は一気に右に移動した。気づいたときには、大きく右側に突き飛ばされていた。

「アアアアアア！！！！！」

と叫んだのは、ウラタロスだった。

僕を突き飛ばし、ウルグの剣撃からかばったのだった。

「ウラタロス!!!!!!」

僕は叫んで駆け寄ろうとした。だがウラタロスはそれを右手で制止し、言った。

「僕は、君を助けようと、したわけじゃ、ない……でも、こいつの攻撃を、喰らって、やったんだから、……早く、逃げなよ」

とかすれた声で僕を諭した。もう息が切れている。

「待ってよ、ウラタロス……！ 死なないで……！」

僕は叫んだ。力の限り。そして走っていこうと立ち上がる。そして一歩踏み出したとき、

「逃げると言ってるだろう……!」

ウラタロスが叫んだ。

僕は立ち止まり、動かなかった。後ろからは、モモタロスの気配がした。ウラタロスは、気にせず話し続けた。

「だから、嫌だっただよ、……君に、憑き続けるのは。……いつも気持ちよく、釣れるくせに、……肝心な、ときには、ぜんぜん釣れない。……そんな君が、大嫌いだったんだよ」

そういい終わると、ウラタロスはウルグを見て、右手で胸を押さ
えながら立ち上がった。

「君は、僕たちを、倒そうと、してるんでしょ。早くやりなよ。嘘」

泣きしかしたこと無いから、早くしてよ」

ウルグはターゲットマークをウラタロスにあわせ、クラウドを振り上げた。

その隙にモモタロスが僕の腕を取る。

「モモタロス！」と僕は驚く。

「……じゃあな、ウラタロス」とモモタロスはウラタロスに言った。ウラタロスはこちらを見ずに、「バイバイ、先輩」といった。

「ウラタロス……」と僕は最後に呟くと、ウラタロスはこちらを見て、心なしか微笑みながら、右手で小さく手を振った。

その瞬間に僕は、一筋の涙を落した。

そしてウルグは剣を振り下ろし、——ウラタロスまでもがカードになってしまった。

僕は、泣きながら果ての無いコンクリートを駆けたのだった。

#9 電王の世界「最初に言っておく……貴様、頭が高い！」（後書き）

長いのに、お疲れ様です。そして、読んでくださり、ありがとうございます。
ざいます。電王好きにはちょっと残念でしたかねえ。すいません。
楽しんで、いや、泣けるでえ、と思えましたか？

あと電王篇はあと1話ございますよ！（まだ書き終えてないけど！）

で、“記憶”を入れるのは、いつ入れようかなあ、と思っていましたが、たぶん終わりがけかなあと思う作者・氷雲しよういちでございます。

学校生活もこなしながらなので、幾分更新が遅いと感じられるでしょうが、それでも良い、と感じられるようなものを書き上げよう、と思った作者です。

さて、今回はタロスたちがモモタロスを除いて全滅してしまいました。
た。

今度は電王篇最終話で、「俺たち、最強！」（仮の題）の予定です。
ので、それまでお待ちを。

では、いつも読んでくださる皆様に感謝しながらキーボードを叩く
氷雲しよういちでした。

#10 電王の世界「俺たち、最強！」（前書き）

お待たせしました、電王篇最終話、完成しました。

やっぱり、一話、押しすぎたなあ。今話だけで文字数が15,000字近くあります。（↑やりすぎ）

今回は、構想はもともできていましたが、次の世界につなぐ”記憶”が作るのに時間かかりました。（ヘトヘト）

さて、もうすぐうちの学校、試験の週でございます。ので、更新を早めます！（嘘です！たぶん遅くなります。）

ちなみに、今回の電王の世界で新しく出てきたオリジナルライダーの俳優さんは、ドラマ「花よりだ男子」や「ライアーゲーム」、映画「ワルボロ」や「イキガミ」に出演・主演をされております松田翔太のつもりでございます。ええ、勝手です。勝手ですが、誰かモデルがおられると書きやすいので。

あ、それと、ウルグのキャラや技については、大半が小学校時代の手遊びで作ったものでございます。（笑）

技名に関しては、ジャンプの「リボーン」などから発展させていたかったです。

で、いろいろ言っていないで、とつとと本編読ませろ、とでも言われそうなので、切っておきます。

では、「仮面ライダーディケイド」version改」第10話「俺たち、最強！」を、どうぞ。

#10 電王の世界「俺たち、最強！」

1ーモモタロス

とり憑いた奴は、不良に襲われていた。殺されてはいけないので、仕方なく、助けた。

「――俺、参上」

「こいつは俺の契約者だ。ここまでやられて黙ってるわけにはいかねえな。いいか、俺に前振りはいねえ。最初から最後まで、徹底的にクライマックスだ」

「覚悟決めとけよ」そう言うと、不良共はうるたえ、後ずさりをした。

そして、瞬く間に不良どもを片付け、話を聞くと、憑いた相手は特異点だった。なんてこった。

だが、あとで現れたイマジン不倒すのは楽しかったぜ。俺の必殺技パート2も出せたしな。

そしてその後からも何度も良太郎と関わっていくうちに、奴の強さも見出せた。また、ほかのイマジンも良太郎に憑いて、その分活躍の場は少なくなっちまったが、楽しい仲間だとは一応思う。

この旅が楽しいと感じてきたのであった。

良太郎がカメに送った叫び声は、もはや声にもなっていなかった。リュウが良太郎の身代わりで消え、手羽野郎も目の前で消され、クマとカメに至っては、敵であるウルグの攻撃から良太郎を庇って消えてしまった。残ったのは、良太郎と俺だけだ。

手羽野郎がやられるのを見て、「僕が奴を釣るから、先輩は良太郎を！」とカメが有無を言わずに言った時からそんなに経っていないはずだ。

俺はカメが囿になっている間に、良太郎の腕を掴んで、ともに逃げることしかできなかった。相手は、強すぎる。

必死で走る俺たちの後ろから、大股でゆつくりと狼野郎が歩いてくる。

そして、奴の剣・クラウツに一枚のカードを入れた。

『ATTACK RIDE SORVENT DARK LIGHT』

その音声で降ってきた大きな刀・ダークライトを、手に取る。

ウルグはそれを構えてから、こう呟いた。

「悪いな、とつと消えろ」

そのままウルグはダークライトを振り上げ、こう言った。

「飛来・斬波^{ひらいざんぱ}」

その言葉とともに、奴はダークライトを横に振った。

すると、先ほどの斬波が飛び、俺たちの目の前に落ちた。

ダアアアアン!!!!!!!!!!

それは大きな爆発を呼び、俺たちは、ウルグの少し前まで吹き飛ばされてしまった。

「終わりだ」とウルグは言い、カードを引いて、ダークライトに挿入した。

『FINAL ATTACK RIDE WO WO WO WOL
G』

その音声を合図にダークライトを消し、クラウツを抜いた。

「無限一刀流 100の型 ^{ルイン} 滅 ^{ダークホール} 破滅ノ闇」

その言葉とともに、俺たちの周りは膨大で巨大な斬り傷が浮かび、俺たちも大きく傷つき、その場でひれ伏した。

俺は、良太郎を助けたときの傷もあり、もうほとんど動けず、良太郎も頭に傷を負い、体中にも多くの傷ができた。

「モ、……モモタロ、ス」

良太郎の声はかすれていた。俺の方は、声を出すことすらできない。

ウルグは、それでも止まらずに剣を構えたままこちらに向かってきた。

「これでまだ生きているとはな……信じられん。さすがは長だ」

俺は必死に体を動かそうとした。良太郎を逃がすために。

「モモ、タロス、……逃げて。逃げて、士さんたちの、……ところへ」

と良太郎は言いながら、立ち上がった。

そして、ウルグに向かってこう言った。

「僕、が、相手だ」と。

しかし、その言葉をギリギリで吐きながらも、良太郎の四肢は震え、今にも崩れそうだった。

「バカ野郎、リュウに手羽野郎、クマにカメに助けてもらったくせに、なに死のうとしてやがんだ……！」

俺は必死に叫び、良太郎の手にあったベルトとパスを掴んだ。

「俺がやる……！！！」と、そう威勢よく言い、動けない体を必死に揺すって、ベルトを巻いて、パスをかざした。

『S O R D F O R M』

そして、電王に変身する。

「だ、ダメだよ！モモタロス……！逃げて……！」

かすれた声の良太郎を制し、俺はデンガッシャーを組んだ。

「チッ、やりずらいつたらないぜ。ライダーになられちゃ、加減してお前を出さなきゃならないだろ」

そう言って、奴は俺を見据えた。

「まあ、いい。長が一人減ってもたいしたダメージは無かるう」

その言葉とともに、剣を鞘に収め、カードを取った。

「一気に片付ける」と言って、カードを剣の挿入部に入れた。

『A T T A C K R I D E S O R D V E N T F O G』

その音声で、リュウを倒した剣が降ってきた。

ウルグはそれを手にし、俺に剣先を向けた。

「行くぞ。——五幻・変幻刀の二 妖刀」

その技もリュウを倒した技だった。たしか、剣先がいくつにも分裂して、こちらに向かってくるものはずだ。一本分だけなら防げるかもしれないが、とても避けきれるものではなかった。もちろん、

動けるときに、だ。今は動けもしない。おそらく、ほぼ全てのざんげ気をこの胸に受けるだろう。

俺は、それを悟って、ヘッと笑った。

「クソッ」

俺はそう呟いて、奴に突っ込んで行っただが、途中でバランス感覚もおかしくなり、倒れてしまった。変身も解けた。

「お前の終焉は、俺が決める。じゃあな」

奴はそう言うのと、剣を分裂させた。俺は、――斬られた。

ザザザザザザザザンツ

無数の剣が当たる音がし、俺は既にあの世にいるものだと思った。だが、全身の痛みはほとんど抜けていなかった。

「危ねえじゃねえか、お前」

聞き覚えのある声が、俺の上から降ってきた。俺は顔を上げ、そいつを見た。

俺たちを守ったのは、――デンライナーに乗った士たちだった。

2―士

良太郎たちがあのオーラに飲み込まれた。

<良太郎！モモタロス！ウラタロス！キンタロス！リュウタロスにジーク！>

俺がそう叫び、ナツミカンがあたりを見回した。

やがて鳴滝が現れ、不吉なことを医って、消えた。

そのときになって、デンライナーが大きく揺れた。

外を見ると、脱線していたようだった。

<クッ、ナツミカン！これ、脱線してる！！>

そう言うのと、ナツミカンは荒れた髪を手で止め、

<どうやって止めるんですか？！>

と叫んだ。

――止め方を知っているのなら、とつくに止めている。

そこで、図録を必死に広げ、デンライナーの頂を見た。デンライ

ナーの手前の方に、これ进行操作するバイクがあると知った。

俺は、<土くん、どこへ?!>と叫ぶナツミカンの声を背にし、デンライナーの奥に駆け込んだ。そこでバイクにまたがり、バイクを操った。しかし、バイクは一向に動く気配が無い。

<クソッ、どうすりや良いんだよ、全く!!!!!!>

俺がそう叫んで、ペダルの上で地団駄を踏んだ。そんな俺の後ろで、ドアが開いた。

——ナツミカンか……。

そう思って振り向いたが、違った。ドアから現れた相手は、雄一郎だった。

<お前が、どうして……>

と呟いた俺の腕を雄一郎は無言で掴み、ドアの方へ引っ張っていった。

<おいっ、雄一郎?!お前、俺をどこに、>

と俺が吠えるのを無視して、雄一郎は、俺をナツミカンの元まで連れてきて、手を離れた。

<黙ってて、土。今からこれをゼロライナーのレールまで移動させる>

そう言っ、雄一郎はバックからカードを取って、腕時計にかざした。

『KAMENRIDE ROAD』

そのまま、雄一郎は、ロードに変身した。

<このアタックライドは、かなりの力を使うんだ、しかも、この規模のものとは……。さいあとりあえず、歩いたり、立ったりしないで。できれば、できるだけ動かないで>

そう言っ、雄一郎はバックルからカードを引き、腕時計にかざした。

『ATTACKRIDE SPECIAL MOMENT MOVE』

その音声とともに、俺の視界は一気に暗くなり、そして再び明る

くなくなった。

俺はデンライナーの外を見た。相変わらずの無簡素な砂の近くを走っていた。ただ、一つ違っていたのは、デンライナーがゼロライナーの後ろにつき、レールの上を走っていたことだった。

<今のは、特殊瞬間移動だ>

今のはなんだ、という俺の問いを聞く前に雄一郎が言った。

<俺の能力は、なにかを移動させることができることなんだ。人や小さいものなら、ドアで移動させられるけど、これだけのものを移動させるときは、こうやってアタックライドで補うんだ>

そう言いながら、雄一郎は変身を解いた。

<オイッ、なんでお前たちが……？>

と、ドアが開いて現れたのは、ゼロライナーから来た様子の侑斗だった。

そして、それに続いて、アヒルのようなイマジンらしきものも現れた。

そいつは、オヤッ、と言って俺の手を掴んだ。

<いや、門矢さーん、その節はどうもー！！>

>コラッ、デネブ！勝手にでしゃばるな！というか、そこのお前は誰だ？！<

と雄一郎を指したが、デネブと呼ばれたイマジンは侑斗の手を押し下げて、こう言った。

>コラ、侑斗、人を指差してはいーけーまーせーん<

それを見てから、雄一郎は事務ごとを片付けるかのように、>ねえ、侑斗さん<と低い声で呼んで、こう続けた。

>このデンライナーは君が見る通り、ゼロライナーに連れて行かれるようになってる。それで、いまから、150年後の未来に行かせてもらおう<

俺やナツミカン、侑斗も驚いた顔を見せた。

>なぜか、などと聞いても答えてくれそうにないな<

侑斗の言葉に雄一郎は頷き、侑斗はゼロライナーの方へ戻った。

やがて、ゼロライナーとデンライナーは砂の空間に浮かんた穴を通り、――電王と良太郎の前まで来た。

ボロボロの良太郎と誰が変身しているのか分からない電王が、俺やロードに似た狼のような奴ヤラられていた。

ザザザザザザザザンツ

そして、狼ライダーが剣先を分裂させた時、俺たちがデンライナーでそれを防いだ。

「危ねえじゃねえか、お前」

俺は、自分が降りた反対側のドアを開け、狼ライダーに言った。すると、狼ライダーは俺を見据えて、こう言った。

「俺の名は、ウルグだ。ディケイド・門矢士」

俺は驚いて半歩下がって、

「お前のことは知らねえが、倒すしかなさそうだな」と言っ
て、ディケイドに変身した。

『KAMENRIDE DECADE』

そこへ、ゼロライナーから出てきたらしい侑斗が来た。

「こいつは任せろ、門矢士」と言っ
て、侑斗はゼロノスに変身した。
『ALTIIFORM』

そして、ウルグに向かっ
ていく。それを嘲笑うかのように、ウルグは、持っていた剣を逆さにして、地面に刺した。

「五幻・変幻刀の三 桜散刀」
（おうえんとう）

ウルグのその声とともに、奴の剣は地面に吸い込まれ、代わりに、無数の剣が奴の周りを囲んだ。

そして、それはゆっくりと上の方から消え、桜のように侑斗の周
辺に行った。

「散り、刻め」

そのウルグの声を合図に、桜は侑斗を球体状になって飲み込んだ。
「ぐあああああああああ！……！」

侑斗は苦しみ、叫んだ。

やがて、桜が侑斗から去った。ゼロノスに変身した侑斗は、ボロボロで出てきて、変身が解かれた。

「侑斗！！」

と俺は叫んで、ウルグのほうへ走って向かった。

「ウオオオオオオオ！！！！！！」

それに対し、ウルグは、

「お前と戦うのは、久々だな」とだけ言って、先ほどの剣を構えた。そして、ブッカーを剣にして、ウルグに斬りかかる。

その瞬間、時が止まった。

ロードに変身した雄一郎が俺とウルグの間に立ちふさがったのだった。

「悪いね。邪魔するよ」

と雄一郎は言って、ウルグを見据えた。

「まさか、もう会えるなんてね、如月さん」

「洗牙でいい、などと、言っている暇はないだろう」

そう言って、雄一郎はウルグに向かって睨みを利かせた。

「まあ、いい」

とウルグは諦めたかのように、こう続けた。

「ロード、お前と戦うのはまだ早い。……さらばだ」

その言葉の後、如月洗牙・仮面ライダーウルグは姿を消した。

俺たちは、揃ってデンライナーに乗り、良太郎やモモタロス、侑斗の手当てをすることとなった。

3 ナツミカン

デンライナーで、大体見れた。

狼のような仮面ライダーは、モモタロスや良太郎さんを倒し、次に現れた侑斗さんまでも余裕で倒していった。そして、ディケイドに変身した土くんや雄一郎さんが現れたことで、そのライダーは忽然と姿を消した。

その後、土くんたちは変身を解除し、デンライナーに乗り込んで

きた。応急処置が早かったのか、雄図さんはとりあえず歩ける程度には回復していた。

士くんはモモタロスを、雄一郎さんは良太郎を担いできた。侑斗さんもデンライナーのほうに乗り込む。

デネブが侑斗さんの周りで、「侑斗、侑斗」と騒がしい中、侑斗さんはデネブを押しつけて、こう切り出した。

「お前たちの素性を効きたいんだが」

その言葉を払うかのように、腰を下ろしていた雄一郎さんはこう返した。

「いきなりで悪いが、2007年に戻る。そこでカイがモモタロスを倒そうとしている」

その言葉が発された直後、モモタロスが跳ね起きて言った。

「カツ、カイだとお！！！！」

図録によると、カイがほとんどのイマジンを統制している、とあった。

「そう。分岐点消去のために、カイは、お前たちが出会う直前に戻って、電王の存在を消すつもりらしい。つまり、過去の良太郎を殺すつもりなんだ」

雄一郎さんはそう言うのと、立ち上がり、士くんの前まで行って、言った。

「今回は、最後の方までいる。こっちでの仕事もとりあえず終わったから」

士くんは、その言葉を聞くと、クスツとほくそ笑み、言った。

「だいたい分かった」

その後の言葉に、みんな、興味津々の様子だ。士くんは短く、こう続けた。

「つまり、過去に言ってカイを倒す。あるいは、少なくとも過去の良太郎を倒さなければいいんだろ」

雄一郎さんは頷く。

「だったら、手っ取り早い話、お前と一緒に過去に行って、お前の

時間を超越する能力とやらで、カイを現代にまでひっぱりやあいつて話じゃねえか」

なるほど、と私は思った。

だが、――

「悪いけど、カイは特異点っていう、時間の影響を受けない存在だ。しかも、この電王の世界においては、飛び抜けてね。それに、奴には無数のイマジンが憑いている状態だ。僕のドアに入れないし、さっきのアタックライドは、一世界に1枚分しか使えないの。だから、奴を時間移動させることは、はつきり言って、無理なんだ」

土くんは目を丸くした。確かにカイが特異点ということも書いてあったが、イマジンは誤算だったらしい。

「とりあえず、2007年に行こう。あつちでカイを倒せば、問題は何かないんだから」

最終的に、みんなその結論に至った。

デンライナーは、2007年に向かって発進した。

4――???

「ここが2007年かあ。懐かしいなあ」

突然その公園に姿を現した青年は言った。赤い服を着ている。

俺は、我が家であるダンボールの中で、彼を見ていた。

「潰してえ、潰してえ!」

彼は、手に力を込めて、言った。

やがて、彼の足から砂が流れるように落ちて、その砂から妙な怪物が現れた。奴はこう言った。

「カイさんよあ、過去に戻ってくるのはいいけどよあ。何で俺たちを解放してくれねえんだよあ」

すると、青年は口を結び、その怪物を見据えた。

「お前らを……解放だあ?」

青年は、砂の怪物に向かって勢いよく蹴り上げた。

「ぐあつ!――!」

怪物は呻いた。青年は、その怪物に手を伸ばし、首を掴むようにして、上に掲げた。

怪物は、実体を現して、青年に首をつかまれたまま、足を宙に浮かせられた。

「てめえらは、俺がいることで存在してんだろ？……だったら、俺の言うこと聞けよ。嫌ならそれでもいい。俺がテメエらをまとめて消してやるからよお」

青年は怪物に向かってそう言った。

「……俺さあ、今すんげえ怒ってるよなあ。キレてるよなあ。そういう顔、してるだろ？」

そう言った青年の瞳は、黒澄んでいた。

怪物は、その目に圧されたのか、ゆっくりと頷き、

「わっ……分かったよお」

とかすれた声で言った。青年は手を離し、怪物は地面に落ちるとともに、砂になった。

そして、青年は手を広げ、空を見ながらこう言った。

「いいか、テメエら……まずは電王となる野上良太郎を潰せ。分岐点と特異点は、あとでゆっくりと俺の手で潰す。そして、”時の列車”であるデンライナーにゼロライナー、キングライナーは、俺たちが全て横取りすんだ」

その言葉とともに、先ほどとは違う無数の怪物が実体を出現させた。

「……行くぞ、テメエら。まずは手始めに、ここの一体をぶっ潰せ！……」

怪物たちは、——襲ってきた。

ダンボールは、見るも無残な状態となってしまった。俺はいち早く逃げたが、逃げ遅れた他の奴らは、怪物たちに殺されていった。

俺は途方もなく走り続けた。やがて、灰色の妙なボールを目前にし、立ち止まった。

このまま怪物たちをギリギリで振り切ろうとして、生き延びれる

かどうか……。

それを考えて、頭を振った。

——無理だ。

その結論にたどり着くと、俺は迷うことなくそのボールに体を突っ込んだ。

怪物たちは、そこで俺を追うことはなかった。前にも後ろにも、誰もいなかった。

5―良太郎

デンライナーは2007年——僕とモモタロスが始めてであった日で、動きを止めた。

「ついに来たね」と雄一郎さん。

「早いもんだな。案外」と土さん。

「とにかく、カイの奴を見つけるぞ」とモモタロスは言った。

僕たちは頷いた。

そのとき、4体の巨大なイマジンが現れた。全身が白く顔は金色で、上半身はコウモリと鳥の合成、下半身は蜂の腹部のような姿のイマジンや、金色の龍・牛に似た獣のような姿をしたイマジンだった。

それぞれ名前は、ギガンデスヘブン、ギガンデスハデス、ギガンデスヘルというイマジンらしい。

「なっ、なんですか、あれ?!」と夏海さん。

「こいつらは、一体……!!」と侑斗さんの問いに、

「なんのこっちゃねえ、暴走しやがっただけだ!」とモモタロスが答えた。

イマジンが暴走した姿など、僕だって始めてみた。

「いいクライマックスにしてくれそうじゃねえか! いくぜ、良太郎!」とモモタロスは僕を呼んだ。

「うん」と僕は頷き、ベルトを巻く。

侑斗さんも「デネブ!!」と呼んで、ベルトを巻く。

「はい、侑斗〜！」とデネブはデンライナーからでてきた。

「俺たちも行くか」と士さんも言い、雄一郎さんも頷いて二人とも、カードを出した。

「……変身！」「……」

『SORDFORM』『VEGAFORM』

『KAMENRIDE DECADE』『KAMENRIDE ROAD』

それらの音声で、全員、電王・ゼロノス・ディケイド・ロードに変身した。

そしていざ倒そうとしたところで、モモタロスは僕を引っ張って、デンライナーに乗り込んだ。

「どっ、どうしたの?!モモタロス!!イメージはあっちだよ!!」

「こんなデケエ相手には、デンライナーやゼロライナーでやったほうが効果的なんだよ!!」

という言葉に、デネブも侑斗さんを引っ張って、ゼロライナーに乗り込んだ。

「俺たちは、これでやるか」

と、士さんは銃をつかつてある程度応戦した後、カードを取り出したようだ。

「そうだね」と雄一郎さんも同意する。

士さんはバツクルに入れ、雄一郎さんは時計にかざした。

『FINAL ATTACKRIDE DE DE DE DECADE』

『FINAL ATTACKRIDE RO RO RO ROAD』

士さんは空高く飛び、宙に浮いたカードを突き抜けて飛び蹴りを決めた。ギガンデスへブンというイメージを倒した。

雄一郎さんは、右手でギガンデスハデスを指し、レールを引いた。そして、レールがハデスの前まで来ると、

「お前の道は、ここで終わりだ」

と呟いて、雄一郎さんは後ろを向いた。ハデスの方は、引っ張られるように雄一郎さんの方へ向かっていく。

そして、途中から走り、「ファイナルキック ロードブレイク」と雄一郎さんは呟いて、ハデスに回し蹴りをした。ハデスは一撃で爆散した。

そのころになって、ようやく僕と侑斗さんは爆撃の用意が完了した。

「行くぜ、行くぜ、行くぜえー！」とモモタロスは燃え上がり、「行きますよー！」とデネブも少なからず同調した。

そして、侑斗さんとデネブはゼロライナーを、僕とモモタロスはデンライナーを操作して、残っていた2体の巨大イマジンに総攻撃を仕掛けた。

ドドドドドドーンッ

ダンドンダンドンッ

ザンザンザンザンッ

ゴオオオオオオッ

グイイイイインッ

バスバスバスッ

デンライナーの”ゴウカ”は大砲を撃ち、”イスルギ”は飛行メカ・レドームを発進させ、体当たりをさせた。

”レッコウ”は斬撃をフリーエネルギーの刃にして飛ばし、”イカツチ”は、龍を模した先頭車両から破壊光線を放たせた。

同じくゼロライナーの”ドリル”が敵イマジンに突っ込み、穴を開けたところに、”ナギナタ”がフリーエネルギーの刃で切り刻み、文字通り粉碎した。

両者、大爆音であった。

そして、デンライナー・ゼロライナーから二人が出てきた。

「よくやったな」という土さんの言葉に、

「あ、ありがとうございます、土さん」とお礼を言った。

すると、土さんは不本意そうに僕を見て、言った。

「まったく……土、でいい。他の世界の奴にもそう言ってたしな」
「えっ、えっと。はい。わかりました、土」

土は少しだけ笑って「ああ」と言った。

モモタロスは「ヘッ」と鼻息を鳴らし、デネブは「いいですねえ」と感嘆した。

そこに、足音が聞こえた。

「いやあ、見事だ、見事だったよ、特異点ども」

煙から現れたのは、カイと——大量のイマジンだった。

6 - ハナ

なにやら周りも前も騒がしい、と思つて、客室を出ると、——外はまさに戦場だった。

大量のイマジンに紛れて、紫・黄色の得体の知れない電王みたいなのと電王・ゼロノスがイマジンと戦っている。

みな苦戦しているように見える。

そこでモモタロスが憑いたらしい電王は、面倒になったのか、

「一気にクライマックスに突入だぜ!!!」と叫んで、パスをバツクルにかざした。

『FULL CHARGE』

「俺の必殺技 バージョンX」

そう言つて、適当に一周デンガツシャーを振り回し、5分の1ほどを殲滅した。

紫の電王も剣で応戦し、黄色の奴は拳を使っている。

途中で、黄色の奴が言った。

「ねえ、土、もう解放するよ。彼ら」

「は？」と土と呼ばれた紫の奴はわけが分かってないらしい。

一体一体蹴り飛ばしながら「どういう、ことだ、雄一郎？」と聞く。

「ウラタロス・キンタロス・リュウタロス・ジークを一気に復活させるんだ」

電王の動きが一度止まり、雄一郎と呼ばれた黄色の奴の方へ、向かってくる敵を「邪魔だ邪魔だ」となぎ倒しながら、駆けていった。「「どうことだ、そりゃ」」と、ついには土と声が重なった。

「イマジンたちはもともと特異点の様に、時間の影響をよほどでない限り受けない。つまり、いまウラタロスたちは、消滅したのと同じ状態ってこと」

「それをどうやって復活させるつもりなんだよ?!」と敵を斬りながらのモモタロス。

「僕のドアで他のパラレルワールドからつれてくる」と雄一郎は言った。

「他のパラレルワールド?」とモモタロスは首をひねる。

「他の異世界からってことか?」と土。

「そう」と雄一郎は頷いた。

「じゃ、行くよ」と雄一郎はカードを取り出し、腕時計にかざした。
『K A M E N R I D E D E N O L O D A X E G U N W I
N G』

その音声で、黒いドアが地面から浮かび上がり、中から4人の電王が現れた。

そしてそれぞれ、イマジンたちに言い放った。

「君たち、僕に釣られてみる?」

「俺の強さに、お前らは泣いた!」

「倒してもいいよね? 答えは聞かないけど!」

「貴様等、よく見ておけ! 満を持しての、降臨だ!」

そして、計8人になった電王たちは、一気にイマジンたちに攻撃を叩き込んだ。

「俺の必殺技!」とモモタロス。

「デンライダーキック!」とウラタロス。

「ダイナミックチョップ!」とキンタロス。

「ワールドショット!」とリュウタロス。

「ロイヤルスマッシュ！」とジーク。

「グランドストライク！」とデネブ。

それぞれの必殺技も一気に炸裂していった。

その最中、「おいつ、良太郎、モモタロス！」と士はそこに至って、いきなりモモタロスに憑かれた良太郎を呼んだ。

「背中を向ける」と士は言い、カードを取ってバツクルに挿入した。

『FINAL FORM RIDE DE DE DE DENO』

その音声で、電王は見る見るうちにモモタロスに変身を遂げた。

「なっ、なんだ、こりゃ」と戸惑うモモタロスをよそに、

「デンオウモモタロスってとこだな」と士は自分に言い聞かせるように言い、頷いた。

そして、「んじゃ、必殺技と行くか」とまたカードを引いた。

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DEN』

〇

その音声で、モモタロスは、デンガツシャーを大きく構え、士も剣を構えた。

「俺の必殺技 デイケイドバージョン！！！」

そう言つて、モモタロスは、デンガツシャーを振り回し、残りのイマジンを一気に殲滅した。

それを見た、カイは一瞬目を丸くした後、俯いてクスクスと笑い始めた。

「いいぜ、いいぜ、イラつくぜえ……ホント、イラつかせてくれるよなあ、お前たちは」

「お前は、記憶つてものを知ってるか？」と士は言った。

カイは、「あん？」と聞き返した後、静かにこう続けた。

「知ってるぜ。知ってるに決まってるだろ。そいつのせいで、俺の未来も過去も消えちまった。他の奴らなんか、どうでもいい。俺は、時の列車を使つて、時なんか、ぶち壊してやる！！！」

「違う！」と士は斬った。

「こいつは、良太郎たちは、人のそれぞれの時間を、人の大切な記

憶を溢さないように戦ってんだ。記憶は人の存在理由だ。人と時によつてその記憶が生まれ、その記憶のおかげで、人は生きて行け、死ぬときも安らかなんだ。たとえお前がどんな理由で過去や未来を奪われたとしても、お前が人の過去や未来をメチャクチャにしている理由にはならない！」

士はそう言い放った。

カイは再び目を丸くし、「お前、誰だよ」と聞いた。士は、ゆっくりと、

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！！」と言った。

カイは一気に頭を天に向けて咆哮するように、こう言い放った。

「デメエらを全力でぶつ潰してやる！！！！こいつでなあ！！！！！！」

と、現れたのは、大きな鎌を持ったイマジンだった。

「行け、デスイマジン！！あいつらを、——潰せ」

デスイマジンは鎌を回して、ウラタロスたちを斬った。ウラタロスたちは押し負けて吹き飛んだ。変身は何とか保っているようだった。

「クソッ、どうすりゃいいんだ」とモモタロスが迷っていると、赤い携帯が光った。

「これは、ケータロスだね」と良太郎。

ケータロスは、ウラタロスたちが見つけたものだ。何かの役に立つだろうと思って持っていたらしい。

「モモタロス、一回出て」と良太郎はいきなり言い、

「なっ、どういうことだ、良太郎？！！」とモモタロスは少し抵抗したが、

「いい考えがある」とのこと、すぐに出た。

プラットフォームの電王になった良太郎は、知っていたのかいなののか、ケータロスは電王ベルトに挿入した。

そして現れたのは、剣型の武器だった。

「デнкаメソードか」と士は呟いた。

良太郎は、デンカメソードにパスを入れて、『RINERFORM』で、いきなり見たこともないフォームに変身した。

すると、倒れていたウラタロスたちもデンライナーにいつの間にか乗り込んでおり、いつのまにか、グリップのターンテーブル上に円陣を組んでいた。

「いつでもいいぜ、良太郎！」

「嘘が吐きずらいのは、気に食わないけどね！」

「とつととやろうかの！」

「そんじゃ、あーそぼ！」

とイマジンたちは口々にいい、良太郎はみんなに向けてか、「うん！」とだけ言った。

士は、良太郎に近づき、こう言った。

「最強フォームになったんだな」と。

「そう、みたいですね」と良太郎の精神のためか、少し不安げだ。

士は、その不安を払うかのように、

「しっかり構えろよ、良太郎！」と言った。

良太郎は、「はい！！」とだけ答えて、デスイマジンに向かう。

そして良太郎は剣についた電仮面を数回回し、士も剣を出して、構えた。

「……俺たちの必殺技！！！！」「……」

二体は大きく剣を振り下ろし、デスイマジンに一閃を放ったのだ。
った。

「お、おのれ、電王……デイクイドおおおお！！！！」

カイはそう叫びながら、デスイマジンとともに消滅していった。

時間は守られたのだった。四人の、電王とデイクイド、ゼロノスやロードの手によって。

7・夏海

「やっと、時間の旅が終わりましたね」

私は、デンライナーの中で士くんに向かってそう言った。

士くんは、「ああ」と短く答えるだけに終わった。

デンライナーには、オーナーに直美さん、ハナさんに良太郎、そしてモモタロスと復活した4人のイマジンがいた。

「それにしても、ここに来るだけで記憶が修復されるなんて、驚きだよな」と驚きを隠し切れないウラタロス。

「まあ、なんじやい、わしら、一回死んどったんやのう」と暢気なキンタロス。

「でも、どーせ僕たち復活する運命だったんだろうね」とこれまた暢気なりユウタロスである。

それを聞いていたモモタロスは、先ほどまで3人に背を向けていたのに、いきなり前を向いて、3人まとめて抱きついた。

「わっ、なにすんの！先輩？！」

「気持ち悪いわ！」

「きついよお！」

と口々に文句を言う3人——いや、この場合、3体というべきか——に、モモタロスは滝のような涙を流して、

「うるせえ、テメエらのせいで、こっちがどれだけ苦労したと思っ
てんだよ、このヤローども！！！」

そこに、離れていたジークはやってきて、

「なぜ私にはしないのだ、赤よ」というも、

「色で呼ぶんじゃないやねえ、このクソ大バカ手羽先ヤローが！！！」と
モモタロスは滝の涙を止めることなく言い放った。

その様子を薄く涙をためて、良太郎も見守った。

ハナは、途中で話を聞いていたのか、察したのか、温かい目で彼らと良太郎を見守り突如机に手を叩かせ、

「さあ、モモタロスたち、今日はおごりよ！直美ちゃん、特製のコー
ーヒー出してあげて！！！」

と直美ちゃんに指示した。

無論、このことをよく知っている良太郎は、

「でも、直美ちゃんのコーヒーって元々タダなんじゃ……」と突っ

込んだが、

「いいじゃない、そんなこと。おごりって言ったほうが、私への感謝も来るし」

とハナさんはそれを黙殺し、その予想通り、

「あんがとよお、今日だけは盛大に例を言ってやるぜ、ハナクソ女くー！！」と、モモタロスは滝の涙を振るってそう言った。

そして、そう言っている間に、直美さんのコーヒーが出てきた。既に用意していたらしい。私と土くんのもも来た。私のはピンクのホイップクリームが添われており、土くんのは黒いチョコのようだ。

「さあ、みなさんどうぞお」と直美さんはみんなにそれを配る。

すると、キンタロスがいきなりその場に立ち上がったのを皮切りに、漫才が始まった。

「そんなら、俺が音頭とるでー。えー、ホンマこの再会には泣けるでえ。そやから、」

「いや、ボークだよー！ここってホント面白いよね？答えは聞いてないけど！」

「いや、ここは僕が。えー、ここにおられる女性陣の方は本当に華やかだ。そして、」

「まあ、ここはこのプリンスが直々に音頭を取ってやるう」

と、そこでジーク以外のイマジン全員がジークの頭を掴み、「

「頭が高い！！」「」と、下に降ろした。

やがて、

「やつぱり先輩がやってよ。ここで一番の先輩なんだし」

「ハナちゃんや直美さん、オーナーを除いてじゃがの。ええんやないか？」

「僕もサンセー！」

「私も、まあ、かまわん」

と4人は、モモタロスを推薦した。

するとモモタロスは、滝の涙をぬぐって、「よし、わーったよ

お」と立ち上がった。

そして、

「いいか、テメェら、これで土とも別れらしいが、……っつーても、カメたちは分かんねえんだろ？、いいか、みんなクライマックスまで、互いの活躍を見落とすんじゃねえぞ！！じゃあ、乾杯！！」

カカカカカッカーン

イマジン5体と人間6人のグラスが、そこで一斉に鳴り響いた。

8―土

俺は、切り立った岩石を背に右肩を負傷して立っていた。俺の前にはスペードのような仮面をした敵らしきライダーがいた。

<終わりだ。デイクイド>

そう言つて、敵は剣から円状に十数枚かのカードを開き、二枚引いた。

<剣には、さすがに慣れていなかったようだな>

そういいながら、引いた二枚のカードを剣の読み込み部分に通した。

『SLASH』『THUNDER』

そして、<うおおおおおお！！！！>と咆哮しつつ、剣を地面に突き刺す。

『LIGHTNING SLASH』

剣が読み込みを済ませ、敵のライダーは雷撃を帯びた剣を俺に振った。

俺は死を覚悟した――が、奴の剣は何者かの銃撃により弾かれ、技は解除された。

銃弾の方向を見ると、離れたところに、青いライダーがいた。

そいつの周りには、ハート・クラブ・ダイヤの仮面をしたライダーがそれぞれ青いライダーを囲んでいる。

<じゃ、やるか>

青いライダーはそう言つて、バツクルからカードを引いて、銃に入れた。

『F I …… C K …… E N ……』

遠いせいか、所々が聞こえないまま、青いライダーは銃から大きな波動を出して、ハートのライダーを倒した。それを皮切りに、俺もカードを引く。

<俺は、絶対にお前を倒す>と言うと、

<やってみろ、悪魔!!!>とスピードライダーが言った。

スピードライダーも3枚のカードを引いて、剣に入れた。

『K I C K』『T H U N D E R』『M A C H』

スピードライダーは剣を地面に刺し、『L I G H T N I N G S

O N I C K』の音声で、キックの体勢に入った。

俺もカードを引いて、バツクルに入れる。

『F I N A L A T T A C K R I D E D E D E D E C
A D E』

二人は飛び上がり、両者渾身のライダーキックが放たれた。

決着の見えぬまま、またも記憶は途切れた。

新たな記憶を見終わって、起き上がり、デンライナーを出る際に、良太郎に写真を渡した。過去に言った直後に取った写真だ。

良太郎のバツクには、5体のイマジンたちが、和気藹々と良太郎と肩を組んでいるようだった。

「また現像して、コピーをとったんですか？」とナツミカンの問いかけに、

「そつだ」とだけ言つてやった。

一時は4体ものイマジンが同時に戦死したと聞いて、内心ひやひやしたが、なんとか復活してよかったと思う。まあ、正直雄一郎のおかげであることが少々悔しいのだが。

「これで、この世界ともさよならでしょうか」とナツミカンはさつきからそればかりだ。よほどこの世界が気に入ったのだらう

「ああ。お前がここに残りたいってのなら、止めないぜ。あのウラタロスにでも口説かれてろ」と言った。

するとナツミカンは目測どおり頬を膨らませ、「いいですよ、行きますから」と言った。

俺たちは、写真館のあるデンライナーの奥に向かっていた。どうせ宴会が長引くだろうから、と良太郎にだけ別れを言っ、俺たちは退散した。

写真館のあるところは、次だ。

と思いながら、扉を開けると、やはり同じ装飾だった。しかし、広さがデンライナーの中にあつたときとは違った。

「ああ、お帰り。夏海。土くん」と、じいさんはいつもどおりの迎えをしてくれた。

俺は「ああ。今帰った」といいながら、扉の方を見た。近くの窓を見る限り、すでにデンライナーの中にあるのではない、と悟った。

机の上にある図録で、次の世界を見ようとした。

しかし、見る必要はなかった。図録の隣には、片面は真っ黒で、片面にトランプのスペード・ダイヤ・ハート・クラブが一つの模様を成したカードがあつたのだ。

それを取って、俺は無意識にこう言った。

「次は……剣^{フレイム}か」と。

隣にあつた図録は、またもひとりでに、輝きを放っていた。

#10 電王の世界「俺たち、最強！」（後書き）

氷雲しょういち（以降”しょういち”）「氷雲しょういちと
士「小説登場人物たちの」

一同「デイクイド座談会」versionあとがき……！！」

しょういち「はいっ、はじまりました、デイクイド座談会」versionあとがき」。
『仮面ライダーデイクイドversion改』
第10話『俺たち、最強！』はどうでしたでしょうか？」

士「つつか、これ、何で第1話からやらなかったんだ、しょういち
？」

しょういち「いや、（やろうかなあ、どうしようかなあ）と思って
たら、構想がどんどんできて、いつの間にか3世界目まで引っ張っ
ちやいました」

しょういち以外のみんな「……おそいつ……！！」「……」
士「ちなみに、何人呼んだんだ？」

しょういち「一応、デイクイドメンバーである士さん、ナツミカン
さん、鳴滝さんと、各世界の主人公たちをパラパラと」

士「いつか崩壊しそうだな、それ。……ってか、俺と鳴滝の呼びは
分かるが、」

ナツミカン「何で私はナツミカンなんですか？！」

しょういち「すいません、こっちの呼びのほうが入りまして」
士「だよ、ナ・ツ・ミ・カ・ン」

ナツミカン「訂正してください……」

しょういち「はっ、はいっ……！！」（敬礼）

夏海「……それでいいです」

しょういち「はい。（こっえ……）」

鳴滝「ところで、作者くん、私の登場シーン、短すぎないかい？」

しょういち「安心してください。あなたの代わりに、ウルグを出し
まくります。（気に入ってるキャラだし）」

鳴滝「そうかいそうかい、それは——よくないだろう!」

良太郎「ノリ突っ込み……下手ですね」

モモタロス「お前は、俺が鍛えてるからな、良太郎」

良太郎「ハハハッ……」

雄介「思いつきり消極的になってますけど」

渡「気持ちは分かる気がします」

キバット「俺が鍛えてやろうか、渡」

渡「……遠慮しとく」

一条「で、それはそうと、雄一郎さんはいつ出すんですか?ここに
しょういち「いつか!」

士「ってか出すな」

雄一郎「いや、出るよ、士!なんか漫画のキャラで名前と性格の一
致性を考えて、付けられたんだから!僕の名前!」

士「マジかよ……」

しょういち「はい」

士「じゃあ、オリジナルは、大半そうなのか?」

しょういち「そう行くつもりですよ。各世界のレギュラーじゃない
人も」

夏海「……ちなみに、今頃な気がします、ディケイド本編のユウ
スケは出さないつもりですか?」

雄介「僕?」

雄介以外「……」「……」「……」

しょういち「えっと、一応今のところ、そのつもりです。この各世
界を回った後に、オリジナルで。。。やら。。。の世界とかも行かせ
るつもりですが、ディケイドの原典の方々は基本出すつもりがござ
いませぬ。各世界の原典に沿うように、という最低条件が崩れるの
はいやなので」

士「まあ、あいつは用なしな」

夏海「コラッ、士くん!」

鳴滝「ところで、結構グダグダになってきたが」

しょういち「あ、そうですね。あ、ここで感謝の弁を。」

お気に入り1件、お気に入りユーザーにイマジンカイザーさん、総合評価でも2ポイント入れていただきました方々、本当に」

「ありがとうございます……」

しょういち「また、ここまで読んでくださった方々もお疲れ様＆ありがとうございました。電王好きの方々には、（ほかの方々も）楽しんでいただけましたでしょうか？では、これにて」

一同「さよーならー」

前書きでも書きましたように、もうすぐうちの学校、試験の週でございますので、更新はたぶん遅くなると思います。また、ブレイドも未見ですし。

構想は、試験中だろうと考えときます！（↑試験は試験で集中せい！）

そろそろ、読んでくださった方々に感謝を抱きつつ、おわります。

なお、ディケイド座談会 ver.sionあとがきは、気が済むまで続けます！（笑）

また、感想・批判、レビュー他、いろいろと受け付けておりますので、気軽にどこからでもお書きください。

#11 剣の世界「スピード、ハート、そしてダイヤ」(前書き)

みなさん、こんにちは。氷雲しゅいちです。

本当に、お待たせしました。(ぺこぺこ)

中間があり、その後ぶっ倒れ、1週間近く寝込んでいたとはいえ、1ヶ月もあけてしまった。

しかも、アクセス数は12000、ユニークも、いつのまにか3000人を越えられ、驚きました。みなさん、ありがとうございます！

今回は(今回も)、やっぱり構想どおりに行きそうにないかもしれない。まだ本来の1話目の3/4のつもりなのに、もう1万字越え。すごい。

2話目、3話目、がんばります！

……つべこべ言っていないで、終われって言われそうですね。

では、久々更新の「仮面ライダーディケイド」version改」

第11話「4人目の適合者」、どうぞ。

#11 剣の世界「スベード、ハート、そしてダイヤ」

剣崎一真、彼は仮面ライダー剣^{ブレイド}に変身し、砂場を走っていた。

バイクのエンジンと、タイヤが砂を払う音があたりに小さな音を与える。

「剣崎君、目的地まであと少しよ。急いで」

彼らのナビゲーター役である女性・広瀬琴が無線をつなぐ。彼女の傍らには、剣崎らが所属する会社「BOARD」の所長・烏丸啓がいる。

しばらく走り、ようやく仮面ライダーギヤレンに変身した橘朔也の元へ着く。

橘の前には、コウモリを配下にしたらしい、異形の怪物がいた。

剣崎は、敵にバイクごと体当たりし、橘から放した。

「橘さん！」

「剣崎！」

「大丈夫ですか、橘さん！」

剣崎の叫び声がこだまする。その間でも橘は銃をとり、敵に銃弾を放った。

少しすると、怪物は洞窟から逃げようとした。

剣・ギヤレンに変身した二人は敵を追う。

そして、怪物を追い詰めると、剣崎は持っていた剣からカードを円状に出し、その中の一枚を取り出した。それを剣にあるカードの読み取り部分らしき場所にスラッシュする。

『TACKLE』

すると、カードの読み取り部分から紋章が出てきて、剣の胸に埋め込まれた。

そして、剣崎は怪物に突っ込んだ。——しかし、怪物はそれをもせず、弾く。

「お前の歯が立つ相手じゃない」

橘は、静かにそう言ったかと思うと、剣崎と同じように、銃から円状にカードを広げた。

そこから二枚引き、銃にスラッシュする。

『DROP』『FIRE』

その音声とともに、橘がカードを放ると、カードから紋章が飛び出し、ギャレンの胸に埋められた。

そして、橘は両足で飛び上がり、炎を纏った両足を怪物の肩から胸にかけて叩き落とした。

「ギャアアアーーーー！！！！」

怪物は叫び、腰に合ったベルトにあるメダルのようなものが割れた。

「カテゴリー8か。面白い」

橘はそう言うと、黒いカードを怪物の胸に投げた。

カードは怪物の胸に刺さり、彼から吹き出していた緑の何かがカードに吸収された。

やがて、怪物は一枚のカードを残して、消えた。

1 - 土

図録の輝きが終わると、俺は手に持っていたカードをポケットに入れ、図録を広げた。

「どうしたんですか？土くん」

とナツミカンが心配そうに俺の顔を覗き込む。

俺は、「大丈夫だ」とナツミカンの目を見てから言った。

「とりあえず、どうします？」

俺はナツミカンの問いに答えるため、図録に目を落とした。

『仮面ライダー^{ブレイド} 適合者：剣崎一真

西暦2004年のとある世界、人類基盤史研究所のBOARDにて。

ここは、「ヒトが地球を制した背景には、進化論では説明できない理由が存在する」との仮定に立ち、その理由を究明する為に作られた機関である。彼らは探求の末、不死の生命体を発見し、これらが様々な生物の祖であるとした。これらは“アンデッド”と名付けられた。数年前、アンデッドの大半の封印が解かれ、人間を襲い始めた。BOARDは所長・烏丸啓の指揮の下、アンデッドの封印を行うべく、アンデッドの能力を応用した特殊装備“ライダーシステム”を開発する。

BOARDの新人職員・剣崎一真は、先輩の橘朔也と共に、バットアンデッドの封印に当たっていた。だが剣崎「ブレイド」は、アンデッドの前にほとんど何も出来ず、橘「ギャレン」に助けられてようやく封印に成功する。そんな2人に、白井虎太郎という青年が唐突に取材を申し入れてきた。虎太郎は「仮面ライダー」という都市伝説を追っており、先ほどの始終を見て、剣崎達こそが「仮面ライダー」であると確信していた。突然の取材オフアに剣崎達は困惑する。その夜、BOARDはアンデッドの襲撃を受けて壊滅した。生き残った研究員・広瀬菜は、かねてから烏丸との間に確執のあった橘に疑惑の目を向ける。』

とあった。

「どうも、ここではアンデッドつつうモンスターが暴れてるらしいな」

そう言つて、俺はドアへ向かう。

「あ、土くん、もういいんですか？これ持って行かなくて」

俺は振り返り、「無理だろ」と言った。

「いいか、それは明らかに持ち運ぶにはデカ過ぎる」

そう言つて、図録のほうを指した。

「そんなに大きいですか？」

ナツミカンはそう聞いた。俺は、何をバカ言っているんだ、というふうに図録を見ると、図録は手帳サイズに小さくなっていた。

俺は顎が外れた気がした。これも、誰かの仕業だろう。そもそも、

図録が写真館にあつた覚えもないのだから。

俺は、はあ、とため息をつきながら、図録を手にとった。

そこへ、早いテンポの局が耳に入った。

その音の方へ目を向けると、じいさんがiPodを聞いていた。じいさんは、リズムに合わせているのか、指を指揮のように振っている。

「なんだよ、じいさん、iPodなんて持ってたのか」

と俺が言うと、じいさんはハハツと口で笑って、

「そりゃあ、若い者にも負けられんよ」

と言った。

そこでちょうど曲が切り替わる。

次の曲もテンポが速い。

なんとなく面白い曲だと思って、最後まで聞いてからドアを開けた。ナツミカンも後に続いた。

じいさんは足でリズムを取っていた。

2 - 夏海

土くんが出、私も写真館を出た。

その瞬間、何かに体を地面に叩きつけられた。

「痛い！」

私がそう叫ぶと、土くんが振り向いた気配がした。

私は背中に激痛を感じながら目を開けると、目と鼻の先に異形の化け物がいた。

図録で見た、アンデッドだ。

「出やがったな！」

土くんはそう言い、カードを取ったのが目に入った。

しかしその間を縫って、一人の青年が現れた。小型のバックルを持って。

「現れたな！アンデッド……！」

青年はそういいながら、バックルを腰にかざした。

すると、バックルから無数のカードのようなものが出てきて、ベルトのように腰に巻きついた。

そして、バックルのカードに手をかけ、

「変身！」

ひっくり返した。

『TURN UP』

青年は、スピードの頭をしたライダー・剣^{フレイド}に変身した。

剣^{フレイド}は青い剣を携えて、アンデッドに向かっていき、敵の胸に一閃を放った。

アンデッドは弾かれたように転がり、私は解放された。

「ナツミカン！大丈夫か？！」

それと同時に士くんが駆け寄ってきた。私はなんとか「大丈夫です」と言う。

士くんはそれを聞くと、安心した顔になり、二体の戦闘に視線を向けた。

「――剣^{フレイド}か」

士くんは、無意識にか、そう呟いた。

剣^{フレイド}は装備している剣・ブレイラウザーを必死に振るい、相手を弾くと、剣の柄辺りからカードを円状に並べ広げた。そこから2枚出し、ブレイラウザーの読み込み部分にスラッシュする。

『BEAT』『TACKLE』

その音声とともに、カードの紋章らしきものがラウザーから発され、剣^{フレイド}の胸に沈んだ。

その瞬間、剣^{フレイド}の胴と両腕に青白い光を纏い、アンデッドに突進した。そして、そのまま力を纏った拳を放った。

しかし、アンデッドは打たれた腹を庇いながらも、逃げて逃げた。そのスピードも速い。

「待て！」

剣^{フレイド}はそう言って再び2枚のカードを引き、スラッシュした。

『KICK』『THUNDER』『LIGHTNING BRUS』

「丁」

その音声が流れると、剣は唐突に^{フレイド}ラウザーを地面に刺し、飛び上がった。

そして、雷を纏ったキックがアンデッドの胸に叩き込まれ、腰の丸いバツクルらしきものは割れた。

キックを終えた剣は^{フレイド}カードを取り出し、アンデッドに投げた。

すると、アンデッドの周りに纏われていた緑の空気のようなものがカードに吸収され、アンデッドは封印された。

それを見届けてから、剣は^{フレイド}バツクルを戻し、変身を解く。

「ふう、やっと終わったか」と呟きながらカードのほうへ行き、拾い上げる。

「ハートの8か。あとで相川さんにやつとくか」

青年はそう言つと、手持ちのバツクにカードを入れ、こちらを見た。

「大丈夫ですか？」

尻餅をついたままの私はその言葉に「大丈夫です」と返そうとしたのだが、土くんはそれをさえぎつて、

「大丈夫だ。というより、お前が来なくても大丈夫だったろうがな」と言つた。

すると、青年は少し笑つて、

「安心してください、あんな化け物としょっちゅう戦つてる分際ですから。僕ら」

青年はゆつくりと歩きながらこちらに向かつてくる。

「あんな怪物が来たら、またすぐに駆けつけますよ」

と、私の手を取り、引っ張ってくれた。

それを見ながら、土くんは唐突にこう言つた。

「で、あんたが剣崎一真か」

その瞬間、青年は顔を強張らせ、土くんを見た。

「……なんで、あなたに僕の名前を知られているんですか？」

「そんなことはどうでもいい。それより——」

士くんはすぐ近くの林を指した。

そこには、もう1体のアンデッドが様子を伺っていた。

「あれは、上級のアンデッド?!?!」

そこに剣崎さんへ無線が来る。

「剣崎君、2体のアンデッドがあなたのすぐそこにいるわ!」

「分かってます!見つけました!」

剣崎さんは、再びバックルをかざしていた。しかし、

「――つて、え?!?!2体?!?!」

背後に隠れていたもう一体のアンデッドの手によって変身は叶わなかった。

バックルは遠くに飛ばされた。

「げっ!?!」

剣崎さんはお腹にアンデッドのパンチを受け、後ずさる。

アンデッドは、容赦なく追撃しようとした。

そこでようやく士くんは「仕方ねえか」と、バックルを取る仕草を示した。

しかし、実際に変身したのは、別の2体のライダーだった。

彼らは、剣崎さんが殴られて、間髪入れずに現れた。

「剣崎、俺がそいつをもらう!」と叫びながら走ってくる人と、無言で来る人がいた。

両者は横一列に並んで走り、同時に、

「変身!?!」

『Turn up』『Change』

彼らはそれぞれ、頭にハートとダイヤを示したライダーとなった。

彼らは打ち合わせがあったかのように別々のアンデッドと相対し、戦闘を始めた。

「ハートのカリス……ダイヤのギャレン、か」

士くんはそう呟き、バックルを少しだけ強く握ったようだった。

そのとき、ちょうど剣崎さんはバックルをつかみ、変身しようとした。

「いつ、行くぞ！」

と剣崎さんが腰にバックルをつけた瞬間、

「どけ！！」

ギャレンに飛ばされてしまったのだった。

そしてそのまま、剣崎さんは――

「気絶しやがったな」

と、土くんはあきれ、すぐにギャレンたちの戦闘に目を戻した。

そこで私は唐突に、「苦戦……してますね」と言った。

土くんは、視線を戻すことなく、こう言った。

「あいつらは、クラブの上級アンデッドだ。丸いバックルみたいなのが、金色だろ。それが証拠だ。いくらカリスやギャレンたちが強いとはいえ、上級アンデッドをそう簡単に封印できるわけではないからなあ」

しかし、そんなことを言っているうちに、ギャレンとカリスはそれぞれのカードを取り出し、カリスはベルトに、ギャレンは銃のリーダー部分にスラッシュした。

『CHOP』『TOLNADÉ』『SPINNING WAVE』

でカリスは竜巻の力を込めた鋭い手刀を構え、

『DROP』『FIRE』――『BURNING SMASH』で

ギャレンはジャンプした。

そのまま、カリスは手刀で一体のアンデッドを斬り、ギャレンは炎を纏った踵落しでもう1体に致命傷を与えた。

そしてカリス・ギャレンはそれぞれラウヅカードを放り、二体は封印された。

「クラブのQと……Kか」

ギャレンの人は言った。

「俺はいらん」

カリスはそう言って、クラブのQを地に放った。

それをギャレンが拾った刹那、また一体、アンデッドが現れた。

そしてラウヅカードを拾うために腰をかかめていたギャレン、背

を向けていたカリスは、そのアンデッドの急襲に即応できなかった。
二人は横に弾かれ、倒れてしまった。

アンデッドはそのまま、カリスとギャレンに殴る蹴るを繰り返した。

それを見ていた土くんは、

「いつちよ、手伝ってやるか」

と思い切り上目線でバツクルからカードを取り、いつものように前にかざして、

「変身！」

バツクルに挿した。

『KAMENRIDE DECADE』

そして土くんはディケイドに変身し、新手のアンデッド相手に苦戦していたギャレン・カリスの元へ歩いて向かった。

「不死身だったら、しっかり遊んでやるか」

そう言って土くんはまたカードを取り出し、バツクルに入れた。

『KAMENRIDE DENO』

「俺、参上！」

土くんはそう呟いたが、相手にした人は皆無だった。一応、アンデッドだけは土くんの存在を認めたようではあったが。

土くんは気まずそうに一つ咳払いをして、駆け出した。

『ATTACKRIDE DENGASHER』

土くんは走りながらカードを挿入し、デンガッシャーを掴んだ。

「俺の、必殺技！」

『FULL CHARGE』

土くんは叫びつつアンデッドに振り下ろした。

アンデッドはそれをまともに喰らい、緑の血を噴き上げた。
しかし、アンデッドの名の通り死ぬことはない。

カリスとギャレンは、その攻撃に啞然とした。

土くんは苦しむアンデッドを前にして、「次、行くか」と言いつつ、カードを取り出し、バツクルに挿した。

『FORMRIDE DENO AXE』
『AXE FORM』

その音声で、士くんは黄色のアックスフォームに変身した。

「俺の強さは、泣けるぜえ！」

そう言つて、士くんは斧に変形させたデンガッシャーでアンデッドを叩き割つた。

アンデッドは周囲を緑の血で染め、倒れた。

「ここまでやって死なねえとは、頑丈な奴だ」

と言つて、またカードを取つた。

『FORMRIDE DENO GUN』

『GUN FORM』

士くんは、ガンフォームの銃でアンデッドに止め（といえるかどうかは不思議なものだが）を刺した。アンデッドのバツクルも割れた。

「倒してよかったよな。まあ、答えは聞いてねえ！」

そついいながら、ブツカーに入れておいた、写真館にあつたラウズカードを取り出し、電王の変身を解いてから、アンデッドに投げた。

アンデッドは、さきほど封印された3体と同じように緑の血も吸収された。

そのカードは士くんの手に舞い戻つた。

「クラブのエースか」

士くんがそう呟いたと同時に、カリスとギャレンは跳ね起き、――士くんを襲つた。

3―剣崎一真

11歳のころ、オレは両親を火事で亡くした。

親の助けを求める声はまだ僕の胸にこだましている。その影響か、「人を助けたい」と強く想うようになった。

そんな中、ブレイドアーマーつてのに適合したからと、BOAR

Dに選定・スカウトされ、2ヶ月の訓練を受けることとなった。
そして、その訓練の後、ライダーシステムにより、^{ブレイド}剣となった。
初めて変身したとき、力がみなぎるのを感じ、しばらく戦った後、
ものすごいめまいを感じた。そのとき見た夢が、あれだ。

オレは、切り立った岩石の近くで、右肩を負傷した奴の前で立っていた。俺の前には、紫の奇妙な姿をした、ライダーのような奴がいた。

<終わりだ。デイクイド>

オレはそう言って、ブレイラウザーから円状に十数枚かのカードを開き、二枚引いた。その間に、こう続けた。

<剣には、さすがに慣れていなかったようだな>

オレは、引いた二枚のカードをラウザーの読み込み部分に通した。

『SLASH』『THUNDER』

そして、<うおおおおおおお!!!!>と咆哮しつつ、ラウザーを地面に突き刺す。

『LIGHTNING SLASH』

剣が読み込みを済ませ、敵に雷撃を帯びたラウザーを振った。

——決まった! そう思ったが、技は何者かの銃撃により弾かれ、解除された。

銃弾の方向を見ると、離れたところに、青いライダーがいた。

そいつの周りには、ハート・クラブ・ダイヤの仮面をしたライダーがそれぞれ青いライダーを囲んでいる。

<じゃ、やるか>

青いライダーはそう言って、バックルからカードを引いて、銃に入れた。

『FI……TACKRI……EN……』

遠いせいか、所々が聞こえないまま、青いライダーは銃から大きな波動を出して、ハートのライダーを倒した。それを皮切りに、紫ライダーもカードを引く。

<俺は、絶対にお前を倒す>と奴が言うと、

<やってみろ、悪魔!!!>とオレが言い放った。

そしてオレも3枚のカードを引いて、ラウザーに入れた。

『KICK』『THUNDER』『MACH』

オレは剣を地面に刺し、『LIGHTNING SONICK』

の音声で、キックの体勢に入った。

紫ライダーもカードを引いて、バツクルに入れる。

『FINAL ATTACKRIDE DE DE DE DEC
ADE』

二人は飛び上がり、両者渾身のライダーキックが放たれた。

決着の見えぬまま、そこで記憶は途切れた。

後に、この夢の中で出てきたハートとダイヤのライダーが、相川さんが変身するカリスと橘さんが変身するギャレンであることを知るのだった。

- - 襲われている！

そう思ったとき、俺はいつものようにアンデッドを封印し、女性を助けた。

でも、その後に現れた2体ものアンデッドは手に負えないものだった。

僕は、橘さんに飛ばされ、気を失った。

目覚めたとき、アンデッドたちに変わってそこで立っていたのは、紫のライダー - - デイケイドだった。

「うおおおおお!!!」

「まっ、待て！お前ら!!!」

ふと見ると、橘さんと相川さんはデイケイドに向かっていつているところだった。

相川さんは遠くから走りつつカードを引き、『ドリル』『トルネード』と2枚分発動した。

竜巻の中で、相川さんは蹴りの構えをした。

「スピニングアタックか?!」

ディケイドはそう叫び、一枚のカードをバツクルに納めた。

『ATTACKRIDE IMVISIBLE』

その音声とともに、ディケイドは姿を消し、相川さんの攻撃は不発に終わった。

『ATTACKRIDE BRUST』

そして、見えない敵・ディケイドは、銃か何かで相川さんを攻撃し始めた。相川さんの胸の付近で火花が散る。

そこへ橘さんが駆けつけ、カードをリーダーにスラッシュした。

『SCOP』

あれは、橘さんの探索能力を高めるカードだったはずだ。

しばらく相川さんの付近を見て、ディケイドを見つけたのか、もう1枚カードを引いた。

『SEEK』

その音声で橘さんは姿を消し、相川さんへの銃撃は突如、終わった。

「なんだ?!お前!!!」

ディケイドは叫び声を上げ、二人とも、互いの攻撃の影響か、姿を現した。

そして、銃同士で応戦している間に、橘さんは、またカードを引いた。

『FIRE』

その音声で銃からは威力の高い炎の玉が放出され、ディケイドは後ろの仰け反った。

そこへ、止めといわんばかりに橘さんは2枚のカードを取った。

『ROCK』

するとディケイドは、みるみるうちに足が石化し始めた。

「くそっ、――ロックトータスカよ!!!」

ディケイドはそういいつつ、銃を自らの足へと向けた。

ダダダダンッ!!!

ディケイドは銃で石化を解いた。だが、足の負傷は免れなかったのだった。

「終わりだな」

橘さんは静かにそういうと、本当のとどめを刺すように、カードを引いた。

『BARET』『FIRE』

橘さんはディケイドに銃を向け、炎の強化弾を打ち込んだ。

そしてディケイドは、地にひれ伏したのだった。

静かなときがほんの少し流れ、橘さんは、

「遺体くらい、回収してやるか」

といって、ディケイドの方へ足を向けた。

そこへ、

『ATTACKRIDE MAGIC』

『FINAL ATTACKRIDE DE DE DE DEC
ADE』

橘さんの後ろから、ディケイドは必殺技らしき蹴りを放った。

橘さんは吹き飛び、変身は解かれた。

- 倒れていたはずのディケイドは、鏡のように浮かび上がり、
やがて割れた。

「幻術って知ってるか？その類だ」

ディケイドはそう言った。

相川さんも、先ほどの攻撃のせいかな、いつの間にか変身が解けていた。

オレはそれを認識した瞬間、 - -
ガツキイイイン!!!

激しい金属音が響き、そこでようやく、ディケイドにラウザーを振り下ろしていたことに気がついた。だが、オレはその力を緩めずに左手でカードを広げた。

「オッ、お前、なにしゃがる！いつもこいつも、待てよ！」

ディケイドは叫んだが、オレは無視してカードを手にとった。

「黙れ！悪魔あ！！」

『KICK』『METAL』『MAGNET』

オレは3枚を同時に発動し、『KICK』の効果で脚力の上がつた脚でディケイドを弾き、『MAGNET』の効果で弾いたディケイドを引きつけ、再びキックを見せた。一応、『METAL』の効果で防御力も上がっているので、余程のことがない限り、オレは倒れることがない。

「クッソ！！！」

遊ばれるように蹴りを食らっていたディケイドは、しばらくしたところで、自らのカードを引いた。

『ATTACKRIDE ILLUSION』

その音声とともに、ディケイドは突如3体になった。

「どうせ、おまえの武器は剣だ。3人もいたら、間合いも何もねえだろ」

そう言うのと、ディケイドは1体を残して、オレの方へ駆けしてきた。

「おまえのマグネットの効果は、最初の1体にしか効かねえ！！」

そう言うて、『ATTACKRIDE SLASH』の音声で、ディケイドは次の2体目を使い、剣を止め、最後の1体で『ATTACKRIDE BREAK』の音声で放った拳を――オレの目の前で止めた。

そしてオレが敗北を感じたところで、やつは拳を戻し、イリユージョンも解いた。

「俺は話を聞きたいだけだ」

そう言うて、とうとう、変身も解いた。

現れた青年は、たしか、先ほど襲われていた女性とともにいた人だった。

青年はわずかにカメラをいじりながら、言った。

「おまえの目当ては、これか？」

と、1枚のラウズカードを見せた。

そこには、蜘蛛らしきものが浮かんでいた。そして、数字はスペード、スートはクラブだった。

「これ……いつ？」

オレが無意識にそう言うと、

「さつき、蜘蛛のアンデッドが襲ってきたんでな。片付けるついでに、持っていたこいつで、封印しただけだ」
と、青年は簡単にそう返した。

「あなたは、一体誰なんですか？」

そう聞くと、デイケイドだった青年は静かに言った。

「俺は、門矢士。悪魔で、破壊者で、通りすがりの――仮面ライダーだ」

4・夏海

戦場へ向かった士くんを見送り、私はアンデッドとライダーたちの戦いを眺めた。

そこへ、横の方で黒いドアが出現し、雄一郎さんが現れた。

「雄一郎さん！」

「やあ、夏海さん」

「どうしたんですか？こんなところまで」

「士くんの跡を追えつてのが、僕の第1使命だからね」

「第1使命？」

私が首を傾げると、雄一郎さんは、言葉を打ち消すように慌て、
「いや、なんでもないよ。なんでも」

雄一郎さんは、それっきり黙ってしまったので、私も士くんたちの方へ視線を戻した。

やがて、私は我慢できずに、

「やつぱり、士くんはライダーたちを倒す運命なんでしょうか？」
と聞いた。

すると、雄一郎さんは悲しげな目をして、

「その問いには、そうだとも、違うとも言えないね」

といった。

私は、核心をついたつもりなのに、結局謎を戻すだけの答えにがっかりした。

そして雄一郎さんは、士くんが最後のアンデッドを倒したところで、腰を上げた。

「どこに行かれるんですか？」

私がそう聞くと、

「ちよっとお仕事。この世界はあまり留めることができないみたいだから、士くんによろしく」

雄一郎さんはそう言って、またドアを出して帰ってしまったのだった。

私は、士くんが戻ってくるのを、少しハラハラしながら、待った。やがて、戦闘が終わったらしき二人がこちらへ歩いてきた。

「で、俺はおまえの話を聞きたい」

と士くんが言うと、

「わかりました。とりあえず、その喫茶店にでも寄りましょう」
とのんきなことを、しかし真剣に剣崎さんは言った。

そうして、少しだけ歩き、私たちが喫茶店と入ると、代わりに士くんと同じくらいの年齢らしき青年が出て行った。

「おっと、失礼。なまこの苦手な門矢士」

と青年が言った。

士くんと私は、「へっ？」と振り向いたが、すでに姿は消えていた。

私たちは、さらなる疑問符を抱きながら、喫茶店へと入っていった。

#11 剣の世界「スピード、ハート、そしてダイヤ」(後書き)

一真「いやあ、疲れたあ」

しゅういち「剣崎さん、士さんら一行ご苦労様です」

士「ああ」

夏海「お疲れ様です」

士「ってか、」

しゅういち以外「「「「遅っ！！！！」「」「」」

しゅういち「いや、あの、試験もあつたし、試験直後に1週間近く寝込みまして、おまけに小説打つためのイメージが完全に吹っ飛んじゃって。いちおう構想書いてたぶん、書けましたけどね。」

一真「あの、早速聞いておきたいんですが、しゅういちさん」

しゅういち「はい？」

一真「たしか、上級のアンデッドって、人間態があつたはずですけど……」

しゅういち「あ、それは、相川さんたちを出しやすくするためにアンデッド状態で登場させました」

士「おいつ、原作に従うんじゃないかったのかよ」

しゅういち「いや、たまに変えることはもちろんありますよ。時系列も少々狂ってるかもしれせんし」

士「穴だらけだな」

しゅういち「いえ、どれもこれも、士さんがその世界に来た影響だつてことになってます」

士「……………それと、俺のカード、増えてないか？それと、4人目の適合者って、題はどういう意味だ？」

しゅういち「まず、『アタックライド マジック』と『アタックライド ブレイク』ですね」

士「ああ」

しゅういち「『ブレイク』は拳に力・エネルギーを込めて放つ技で

す。『スラッシュ』や『ブラスト』があるから、いいかなあ、と。
で、『マジック』は、士さんの台詞通り、幻術みたいなのです。本
当は、もっと後に出そうかと思ったんですが、ギャレンに勝つ方法
が見当たらずに

士「クロックアップみたいなのはどうした」

しょういち「考えましたが、さすがに555かカブトの世界で出し
ます。それと、『4人目の適合者』ってのは、ブレイドの世界が4
つめなのと、現時点で、ブレイドの世界内でも4人目・ディケイド
現るってことで付けました。……ところで、士さん」

士「（こいつ、いきなり話を変えやがったな）……なんだ？」

しょういち「だいぶ後々で、ネガの世界みたいなのを出すつもりな
んですけど、誰かダーク系なライダーいません？」

雄一郎「だったら、リュウガとかG4とか、ダークカブトとかいる
じゃん」

しょういち「いや、そういうのでもなくて、映画や本編で出てきて
いない奴です」

しょういち以外「……いないだろ……!」

しょういち「いや、ですから、普通のライダーが悪のライダーにな
ったら、って場合があるじゃないですか」

鳴滝「面倒な設定だねえ」

しょういち「すいません。で、いません？」

士「だったら、良太郎とかはどうなんだ？」

良太郎「えっ、ぼっ、僕?!」

モモタロス「ネガタロスがいる。無理だ」

しょういち「ということで、読者の皆様に、このライダーを悪のラ
イダーっぽくしてほしいライダーを募集します!!!（例：電王の
「ゼロノス」から「ダーク・ゼロノス」など。なお、主人公ライダ
ー・元々悪役のライダーは事情により除きます）」

しょういち「どしどし感想の”一言”にでもお書きください。皆様
の意見をお聞かせください!もちろん、感想などでも受け付けてお

ります！」

栄次郎「そっぴゃあ、しょういちくん」

しょういち「はい？」

栄次郎「だいぶ前に、このストーリーを2部か3部に分割するって話を小耳に入れたんだが、あれはどうなったんだい？」

しょういち「あ、まだ決まってません。まだ1周目終わってないし。まだいいかなあ、と」

士「おいっ、待て！お前、この旅を2周もさせるつもりか？！」「しょういち「さあ、どうでしょう」

夏海「っていうか、2部にでも3部にでも分けられると、読者、大変なんじゃないんですか？」

しょういち「そうですねえ。どうしたらいいと思います？夏海姉さん」

夏海「なんですか？その呼び」

一条「俺は、1部でいいと思うが。読者数もそう割れずに済むし、更新するたびに、新しい読者も増えるだろう。少しは」

雄介「なんか、一条さん、キャラ変えました？」

一条「どこがだ？」

雄介「いえ……何も」

しょういち「じゃあ、一条さんの意見をとって、一部で全ての話」（たぶん80話くらい）をやったのけますんで、よろしく！」

士「で、これは？（手の中で輪を作る）」

しょういち「ギャラ……ですか？」

キバット「たぶんねえな」

士「なにっ！……！」

しょういち「じゃあ、そういうことで（急）！次回もよろしく願います」

なお、今週は期末がごいますので、また更新遅れるかもしれませんが、夏休みに、頑張りたいです！

それと、通常の感想もユーザー登録していない方でも感想を入れられるように設定しましたので、どうぞ、お待ちしています。
そして、遅れたにもかかわらず、多くの読者がいてくれて、心の励みになりました。ありがとうございます。

今後頑張っていく所存なので、よろしくおねがいします！

#12 剣の世界「4エースとジョーカー」(前書き)

……最初にお詫び申し上げます。

前回から、1ヶ月以上も滞納してしまい、申し訳ございません！私も、執筆に執念を燃やしていたつもりですが、どうも時間が取れず。

はい、これは言い訳である、と存じております。

そして、つきましては、すいませんが、今後も1ヶ月から2ヶ月近くかかる、と考えていただけると幸いです。正直、それ以上かけないと、無理です。

誠にそのことは申し訳ない、と思っていることを少しでも心に留めていただけると嬉しいです。

………

はい、言い訳は、ここで終えます。

さて、今回は、剣崎さんへの説得のために土と夏海が喫茶店に入ったところで終わりました。

今回は、初めに、彼を出してから、喫茶店ですので、読みづらく感じるかもしれませんが、ご了承を。

では、とつとと、『ディケイド改』第12話「4エースとジョーカー」を、どうぞ！

#12 剣の世界「4エースとジョーカー」

1-???

妙な砂の化け物から逃げ、変なボールを抜けると、メガネとコートを着た、男がいた。

彼は、男、というよりおじさん、というほうが似合っていたが、私もある程度な歳で、「おじさん」とは言われたくない、と思うだろうから、男、と呼ぼう。

彼は絶壁から、異様な、人間のような者たちの戦いを見ていた。

私が彼を見ていると、いきなり彼はほくそ笑み、言った。

「ここは、お前がはじめて来る、ライダー同士が戦う世界のひとつだ」と。

- -ライダー？

私は、その耳慣れない言葉に戸惑い、彼と、下にいた異様な者を見比べた。

「ライダーってなんですか？あの人たちは誰なんですか？」と、私はその声をかけてみたが、

「彼らの世界で行われているバトルファイトも、終わりが近い」

聞こえなかったようで、彼は再び、独り言を「ここが、」と続け始めた。

私は手を伸ばし、彼に触れようとした。

しかし、それを制す声が聞こえた。

『触れるな。今、あなたは非常に危険な状態だ。今君が何かに触れれば、君の魂は変化に戸惑って、崩壊するかもしれない』

私はそれを聞くと、急いで手を引っ込めた。

その瞬間、私の視界は一気にぐらつき、数秒で真っ暗になった。

視界の幕が完全に閉じる寸前、先ほどの彼がこっぴどくを聞いた。

「ここが、この世界が君の墓場となる - -ディケイド」

私が目を覚ますと、荒れ果てた土地のど真ん中にいた。

「そこは、明らかに廃墟と化した、地獄のような世界だった。」

21±

「……ってなとこだ」

すぐ近くにあった喫茶店「ハカランダ」に入り、俺は仮面ライダー剣の適合者・剣崎一真を前にして、俺たちの話を終えた。

一真は、しばらく黙り込んだ。

ウェイターの少女は、コーヒー牛乳を持ってきて、一真の前に置き、「はい、一真さん」と言った。

「知り合いなんですか？」

とナツミカンが聞くと、少女の方が、

「わたしのおじの、友達です」

と言って笑った。

「ところで、なんでコーヒー牛乳なんだ？」

と俺が聞くと、少女はこう答えた。

「わたしのおじが大の牛乳好きで、”ミルク姫”ってのをいつもストックを冷蔵庫に入れてるんですけど、あんまりにも多すぎて食材が入らないから、お客様にも出して消費してるんです」

俺は、「そうか」とだけ言って手を伸ばしたが、やっぱりやめて、「それでも、コーヒーをもらってもいいか？」

と聞くと、奥の方から「すいませーん」という女性の声が聞こえた。そして、声の主らしき女性が暖簾を抜けてこちらに顔を出した。

「今、コーヒー豆とかも切らしてて。後で買ってきますから。またお越しください」

と言って、後ろ髪を束ねながら女性は奥に戻った。

俺は仕方なくコーヒー牛乳を飲んだ。ナツミカンは、普通に飲んでいて。

じいさんがいればなあ、などと、こんな時だけ頼りに感じてみた。そこに至って、ようやく、一真が口を開けて言った。

「それで、別の世界から来たあなた達は、ただ襲われたから、アン

デッドを封印したつちえことですよね」

「「封印したつちえ??」」

「そして、今度は僕や橘さん、相川さんに襲われたから、仕方なきゆ、応戦したつてことでしゅか」

「仕方なきゆ??」「でしゅか??」

「そもでもつて、あなたが、門矢さんがディケイドとなつて、戦つたつつえことですね」

「「戦つたつつえ??」」

- -口を噛みまくつていやがる。

そして、二人で冗談だろうと思つて一応突っ込むも、一切動じていないようだ。

そこへ、ある程度若い男女二人の客が訪れた。しかし、客は俺たちの方へ一直線に歩いてきた。

「こんにちは。広瀬栞です。こっちは同居人で、」

「白石虎太郎です。久々に仮面ライダーのルポをさせてもらいます」と、二人は各々自己紹介をした。

そして虎太郎の頭の後ろ当たりから、パシッという音が鳴った。

彼の後ろには、先ほどの幼いウェ이터だった。

「何しに来たのよ、虎太郎。虎太郎の牛乳でこの人たち困ってるんだから」

「ミルク姫だつ、天音ちゃん」と幼いウェ이터・天音を小突く。

「あなたのお姫様は見つからないのお」と虎太郎を叩き返した。

それを冷ややかな目で見ていた栞は、虎太郎を一瞥し、一真の隣に座った。

そして再び一真が口を開いた。

「栞さん、電話で言つてた知らない贈り物つてなんですか?」

「それがね、これなの」と、小さな手紙を取り出し、封を開けた。

「えつと、じゃあ読むわね。ZECTっていう会社から。『親愛なるBOARD様。戦闘等ご苦労様です。この度、10周年の式典というものを耳にしました。我々も招待を受けてはおりませんが、行

「つてもよろしいのでしょうか？」ですって。ZECTって、私も知らない会社なんだけど、こっちが壊滅したこと、知らないみたい」
「榊はそう言うのと、封を閉じ、こちらを見た。」

「で、こちらは？」

「あ、こっちは光夏海さん、そこでこっちは門矢士さん」と紹介し終えたところで、

「ディーン、ディーン、ディーン、ディーン」

急にサイレンが店中に鳴り響いた。

「アンデッド?!」

と一真が叫んだのを合図に、榊は持つて来ていたらしいノートパソコンを急いで取り出した。

「虎太郎も駆け寄り、俺たちもパソコンの方へ行き、画面を見た。ポイントは、ここから1キロ、とあった。案外近い。」

「剣崎君、北西に1キロ。近いわ!」

「榊はそう叫ぶように言い、一真は、「行ってきます!」と叫んでコートに羽織った。」

「俺たちも行くか」

「俺はそれだけ言っつて、料金分だけ小銭を置き、颯爽と店を後にした。」

2 - 一真

「オレは店を出ると、バイクにまたがり、一気に目的地へ走った。」

「後ろからは、門矢さんが、後ろに夏海さんを乗せて、ついてきた。」

「またアンデッドを封印するんですか?」

「オレは隣り合っつて、門矢さんに聞いた。」

「門矢さんは、「いや、もうラウズカードは持つてねえ」と言っつた。そうですか」

「とオレが答えた後は、そのままバイクを走らせた。」

「目標地点に着くと、マンションの陰から、アンデッドが飛び出してきた。というより、吹き飛ばされていた。」

オレはすかさず変身し、門矢さんも変身した。

『TURN UP』『KAMENRIDE DECADE』

「よし、行くか」

という門矢さんの言葉を合図に、オレはカードを広げ、門矢さんはカードを取った。

そしてそれぞれのカードを発動させようとしたその時、アンデッドの胸に、ラウズカードが刺さった。

二人とも、いきなりのもので、動けなかった。

ラウズカードへの封印が完了した後、現れたのは金色と黒色で覆われた、クラブの紋章を持ったライダーだった。

そして彼の後ろには、“記憶”で見た、銃を持ち、ディケイドに似た青いライダー。彼は、僕らに向かって、こう言った。

「やあ、士。君の持っていたエース、使わせてもらったよ」と。

3・士

アンデッドを封印したのは、クラブのライダー・仮面ライダーレングルであった。

そして、レングルの隣に立つ青いライダーは、――

「誰、だ？」

俺がそう言うと、青いライダーはほくそ笑み、

「僕は、海東大樹」

と言って、変身を解き、

「いろんな世界のお宝を盗む、怪盗さ」

と言った。

その人間の姿には、見覚えがあった。

やつは、さきほどのハカランダですれ違った青年であった。

「お前、さっきの、」と俺が動揺するうちに、

「じゃあ、もう一度変身させてもらっよ」

と、銃にカードを入れ、

『KAMENRIDE……』

天に向けて――撃った。

『DEEND』

そうして、奴は、海東は再び青いライダー・ディエンドに変身した。

一真も俺も驚きを隠せず、変身したままとはいえ、無防備にも一切動けなかった。

「さて、動けそうにないところすまないけど、――はじめよう」

海東の一言を合図に、俺も一真もやっとな構えをとった。

そして自然と、俺対ディエンド、一真対レンゲルの構図になっていた。

「銃には、銃で戦ってやる」と言って、俺はカードを引いた。

『KAMENRIDE DENO』『FORMRIDE DENO』

GUN』

『GUN FORM』

こうして俺は、電王のガンフォームになった。

「俺がお前を倒すが、いいよな。答えは聞かねえがな――!」

「あのエースじゃ、お宝とは言えなかったんだ」

そういつて、互いに銃を構え、

――ダダダダダンッ!!!!

雪崩のように互いの弾を撃ち当てた。

「へえ、銃が主流の武器じゃないのに、よく僕の弾を打ち落とせるね」

と、海東は感心していた。

俺は奴に、「お褒めにあずかり、光栄だな」と言ってやった。

「いやいや褒めてないよ」と言いながら、海東は弾圧を突然上げた。
ダンッ!!!!!!

「ぐっ――!」

俺がひるむと、その合間を縫って、海東はカードを入れた。

『ATTACKRIDE DOUBLEBRUST』

その音声で、海東の銃は2丁になった。

「行くよ」

銃口は、まっすぐ俺に向いていた。

――ダダンッ！！！！！！

銃声は、鳴り止むことを知らなかった。

4 - 一真

オレは、クラブのライダーと向かい合っていた。

オレは剣を構え、相手は杖を構えた。

「まずは、こいつに変身してみるか」

とオレはカードを取り、スラッシュした。

『ABSORB QUEEN』 『FUSION JACK』

オレはこうして各部に金色のアームを装着し、胸には鷹が刻印されたフォームに変身した。

「ほう、ジャックフォームか」クラブのライダーはゆっくり言う。

「あんたは、誰なんだ？」と、オレは聞く。

「レンゲルだ」とクラブのライダー・レンゲルは端的に答えてきた。

「一気に倒す！」と、オレは意気込んだ。

「無理だな。とつと凍ってもらう」

と相手のクラブは言い、カードを取ってスラッシュした。

『BRESARD』

その音声で、杖から強大な冷気を発し、オレの足を凍らせた。

「うっそ！！」

「次で終わりだ」

と、大きく杖を振った。

「わっ！！！！」

「消えろ」

そして、杖の先にある刃がオレを貫いた。そう思ったとき、オレの目の前で、赤い光弾が弾けた。

「俺達3人で」と、橘さんが、

「お前を倒す」と相川さんが言った。

そして二人はカードを取り、それぞれのリーダーにスラッシュした。

『EVOLUTION』で相川さんが、

『ABSORB QUEEN』『FUSION JACK』で橘さんが、それぞれ金の装甲を付け、カリスやギャレンの強化された変身をした。

「ワイルドカリスに、ジャックフォームのギャレンと来たか」

レンゲルは杖を大きく振り回し、二体に向かっていった。

「あ、おいっ！相手はオレだ！！」

と、走っていかうとしたが、足が凍っていて、動けない。

「ああ、もうっ！！」と、オレはせつせとラウザーで氷を砕き始めるのだった。

その間レンゲルは、橘さんと相川さんと相対していた。

5・橘朔也

俺は、ライダーになることに恐怖していた。変身することに、体はいつも不調を訴えてきた。

俺はそれを急遽完成させたライダーシステムの弊害と思っていたが、実際には俺の恐怖のビジョンが体にまで影響を及ぼしているためだったらしい。

その原因の一つは、やはり、あのビジョンだ。

青いライダーに、俺、相川、そして目の前にいる黄色いクラブのライダーが向かっていつていた。

だが、3人が束になっても、いっこうに敵わず、敵は銃にカードを入れた。

『FINAL ATTACKRIDE DE DE DE DE
ND』

その音声で、青いカードに似た閃光とともに、俺達は一斉に片付けられた。

その時のやられっぷりに、恐怖した。

だから、もうやられるわけにはいかないのだ。

そう思っ、俺は今敵である黄色いクラブのレンゲルとの戦いに臨んだ。

『BARET』 『RABBIT』 『FIRE』 で、J・バーニングショットという、強化弾の高速連射を繰り出した。

アタックポイント

APの消費は少ないものの、攻撃力は確実に上昇しているはずだ。それにもかかわらず、レンゲルは、『SQURYU』 『BRESARD』 で、冷気を纏った槍型のラウザーを片手で回転させ、俺の弾球を弾いていた。

「貴様の弾ごとき、この程度で弾くことができるんだよ」というレンゲルに、

「お前の冷気、俺が吹き飛ばしてやるよ！」と俺は返した。

『CHOP』 『BIO』

どこからか、音声が響いた。

その直後、レンゲルは両腕に何かが絡まり、動きを一気に制限した。

「なんだ、これは?!」と驚くレンゲルに、背後からワイルドカリスとなった相川はこう言った。

「チョップバイオ。カリスアローから伸ばした触手状の鳶が絡まり、相手を引き寄せて手刀を喰らわすわざだ。だが、今は手刀はいらない」

俺はその声を合図に、

ダダダダダッ

- - 俺は通常の弾を連射した。

レンゲルはラウザーを使うこともできず、まともにそれらを喰らい、「だああああ!!」と苦しんだ。そしてその隙に、俺の背後で音声が聞こえた。

『SLASH』 『THUNDER』

音声の元からは、剣を構えた剣崎の気配がした。

「行け、剣崎!!!」

俺はそう叫び、『FIRE』で銃弾の威力を上げた。

「貴様等！！！！！」とレンゲルが、

「うおおおお！！！！！」と剣崎が叫んだ。

そして、剣崎は飛び上がり、レンゲルに振り下ろした。

一気に大爆発が起こり、俺は少しひるんで、銃撃を止めた。

「終わったか」と、俺は言い、

「……………」と、相川は黙ったままであった。

そうして俺は銃を納めた。

――しかし、

「まだだ！！！！！」と剣崎が叫んだかと思った刹那、

『SMOG』『REMORTE』

――俺は煙に包まれた。

「『GELGERY』で液体化して、剣の剣撃を無効化したのだ。^{ブレイド}

そして、お前達を倒すのは、俺じゃない。『REMOTE』で解放

されたアンデッド達だ」

そして一瞬のうちに、――数体のアンデッドによって、俺は倒された。

6・士

――真達が、一気に倒された。それを目で追えたところで、再び、あいつが銃弾を放った。

「どうやら、彼らが気になるようだけど、無理だよ。あいつは強い。僕が作ったんだしね」

と海東は言い、途中から2丁にしたディエンドライバーである銃で俺を牽制した。

「お前、あいつを作ったって、どういうことだ！！！」

「僕が、君からエースをもらって、それを使って復元しただけさ」

――復元？

俺はその言葉に疑問を抱きつつも、カードを使った。

『ATTACKRIDE IMVISIBLE』

そうして俺は姿を消し、背後から斬った。だが、それは受け止められた。戦闘を終えたレンゲルによって。

「驚いたな。ギャレンのカードを使っただけなのか」と俺が聞くと、俺は、最強だからな」と答えた。

海東は、レンゲルを見て、「ありがと。でも、手助けはいらなかったよ」と少し強がっていたようだった。

そして、海東はこう続けた。

「僕の相手は、僕の力で倒す」

そう言っ、カードをドライバーに入れた。

『KAMENRIDE ABIS』

その音声で、銃から一体のライダーがはき出された。水色の、鯨をモチーフにしたライダーだった。

「こいつは、アビスっていつてね。こういう風に、剣を使うんだ」

『ATTACKRIDE SORVENT』

その音声で、今度は2本の剣が吐き出され、アビスはそれを手にとった。

「鯨と戦ってのか。いいぜ。そんなら、」と俺もカードを取り、バックルに入れた。

『KAMENRIDE KUGA』 『FORMRIDE KUGA
DRAGON』

「鯨には海に潜む龍で叩き潰す」

俺はそう言っ、クウガ・ドラゴンフォーム専用のロッドを使っ、アビスの剣に対抗した。

なかなか良い勝負だ。

――これなら、行ける！

と俺が思ったとき、海東はさらにカードを入れた。

『ATTACKRIDE ADVENT』

「お次は、なにが出てくるんだ」

と悠々として構えていると、出てきたのは、

「鯨かよ?! しかも2体?!」

であつた。

俺は必死に逃げ、一度クウガの変身を解き、カードを入れた。

『ATTACK RIDE SLASH』

俺は剣を携え、鯨に斬りつけた。だがやはり、効いていないようだ。

「最後はこれだ」

と、海東はトドメを刺すかのようなことを仄めかし、カードを入れた。

『FINAL ATTACK RIDE A A A ABIS』

そこで出てきたのは、何もなく、――2体の鯨が突然と融合を始め、1体の巨大な鯨、アビソドンとなった。

「そいつは、アビスがアビソドンを操って相手を倒す必殺技だけど、今回は僕が操る」

と言つて、俺を指さした。と同時に、アビソドンは俺に襲いかかった。

俺は必死に逃げ、カードを入れた。

『ATTACK RIDE BREAK』

その音声で俺の足に力が溜まり、回し蹴りをアビソドンに放った。アビソドンは怯んだが、それでもなお向かってきた。

「くっそ。いい加減、これで終わらせる」

そう言つて、カードをまた挿入した。

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DEC ADE』

俺はアビソドンを避けるついでに飛び上がり、上空から必殺技・デイメンションキックをくりだした。

アビソドンは、ようやく爆発したのだった。

アビスも、同時に消滅した。

「これで、終わりか」と言つて、海東の方を向き、「あとはお前だな」と言つた。

すると、海東は余裕を感じているのか、

「まだ僕だけじゃないよ」

と言って、レンゲルを指した。

- - 忘れてた!!!!

レンゲルは、急に俺に向かってきて、杖を振った。そこへ、
ブウウウウン

あのボールが来た。出てきたのは、- - 見たことはなかったはずだが、直感で分かった。- - 目が青、全身は銀色のライダー・仮面ライダーサガだ。

奴はゆつくりとレンゲルの元へ近づき、言った。

「俺のものになれ、レンゲル」と。

レンゲルは無言でサガを見ていた。

サガはなぜか苛立っていたのか、こう続けた。

「いいか、お前と私が結託すれば、あのウルグにも対抗できる。そして、ゆくゆくは最強のライダー軍を率いることができる。俺が、王だからな」

それでもなお、レンゲルは無言だ。サガは最後の忠告だ、と言わんばかりにこう言った。

「もう一度だけ言う。俺のものになれ、レンゲル。さもなくば、ここにいる全員まとめて、お前も倒す」

そう静かに言っても、レンゲルは黙っていて、サガは、とうとうリコーダーのような武器を取り出して、鞭にした。

それを一気にレンゲルにたたき込んだ、かに思われた。レンゲルも、明らかに受け身の体勢を取っていたのだ。そこにいた全員が錯覚してもおかしくはないだろう。だが、攻撃が当たったのは、錯覚だった。

鞭は、剣に受け止められていた。

「勝手な行動は慎めと、言っただけだが」

剣は、- - あの剣だった。

サガの鞭は、一気に力を失った。いや、正確には、目の前の相手の力に圧倒され、戦闘意欲を、

完全に失っていた。サガは、相手を見上げ、ゆっくりと、こう言った。

「なんで、お前がこんなところにいるんだ……」

そう、目の前の相手とは、――仮面ライダーウルグだった。

ウルグは剣に力を込め、鞭を払った。同時にサガも後退する。

「なんで、俺がこんなところにいるか、だと？ 当たり前の話だ。俺は、地獄の統率者の一人。そしてお前は、地獄に堕ちた者の一人だからだ」

ウルグは静かに言いながら、

『ATTACK RIDE』

カードを剣に入れた。

『SORDVENT CLOUDS』

そこでようやく、剣・クラウツに力が加わった。

「お前を……処刑する」

サガは暴走したのか、「うおおああああ……！！！！」と叫びながら、武器を鞭から剣に転換し、振るった。だが、――

「最強の剣士に剣で挑むとは……終わりだ」

そう言って、ウルグは一歩前に出た。――と思った刹那、奴はいつの間にかサガの背後にいた。

「なっ……！！？」

サガは驚き、後ろを振り返ってから、地面を蹴り、間合いを取った。

その瞬間、

「無限一刀流 53の型 牙きは 王牙絶咬おうがぜつこう」

ザンッ！！！！

サガの肩にあった防具は、砕け、人間体の血が吹き出た。

「これが、”王牙絶咬”。自らの牙に見立てた刃で背中を裂く51の型・王牙と違い、”王牙絶咬”は、肩から神経ごと砕き裂く。お前の処分は、これでよからう。愚かな王よ」

そう言って、ウルグはクラウツを納めた。そのまま、レンゲルの

方に振り返る。

「これで邪魔はいない。始めよう、レンゲル。俺は――お前を倒す」
それまでほとんど無言だったレンゲルは、そこでようやく口を開き、言った。

「倒れるのは、お前だ」

ウルグはカードを取り出し、剣に読み込ませた。

「達者だな。口もカードも」

『ATTACK RIDE SORVENT WAKE』

ウルグの手に、青い剣が生まれた。

「行くぞ――斬り水」

ウルグは天高く水の混じった刃を上へと振った。レンゲルは、杖で難なく止め、弾いた。

「まだだ――水源発動」

その声で、辺りは一気に水に浸った。俺は飛ぶこともままならなかったが、この技自体は無害らしい。

レンゲルは、少々驚きつつ、ウルグを見据えた。

ウルグは立て続けに刃の端を水に叩きつけた。

「打ち水」

刃を叩きつけられたところから水が噴き出され、半ば滝のようにレンゲルを襲った。

だが、これもレンゲルに膝を付かせることすらできなかった。むしろ、

『BREASARD』

いつの間にやらレンゲルはカードをスラッシュしていたようで、レンゲルの杖に触れていた水は、一瞬で氷と化した。

「こんなものか、地獄の統率者とやらは」

ウルグは無言で、両腕でウェイクを持ち、頭を通って、後ろへやった。刃の先を再び水に浸す。

そして、レンゲルに向かって、振り下ろした。

「たきさめ滝雨」

まさに滝のようにレンゲルは襲われ、杖を使っても、『フリーズ』を使っても、効かない、いや、追いつけなかった。

レンゲルは怯み、必死にカードを取ろうとした。

その隙に攻撃に移ったのは、やはりウルグだった、

ウルグは自分が作った滝に刃をスツと沿え、そのままレンゲルに向かつて、駆けだした。

「――滝斬り」

斬った所から、膨大な水しぶきが吹き出る。ウルグの刃は一直線にレンゲルに向かい、水斬りよりも威力が上がった斬撃が、レンゲルに当たる直前まで奔り、斬られた。

ダンッ

ウルグの攻撃態勢を崩したのは、ディエンドの銃撃であった。

「そいつは僕が作ったものだ。彼を壊す気なら、君でも倒すよ。ウルグ」

ディエンドは静かにそう言い放った。

ウルグは、ディエンドに目を向け、静かにこう返した。

「良い度胸だ。相手になろう」

ウルグは一気にディエンドに詰め寄り、斬りにかかった。

それを寸前で阻止したのは、突然現れたキバだった。

『KAMENRIDE KIVA』

いや、正確には、ディエンドが召還したキバだった。

さらにディエンドは、キバを『FORMRIDE KIVAG ARURU』でガルフォームに変えた。

ウルグは、驚いた様子をあまり見せぬまま、カードを入れた。

『ATTACKRIDE SORVENT FOG』

その音声で地面から紫色の刃が出現し、ウルグはつかんだ。

「剣には剣で――当たり前の話だよ。同じ武器じゃないと、戦闘に余計な影響が出るからね」

ディエンドの言葉を合図に、キバは駆けだした。

ウルグはフォッグを横にして、言った。

「一幻 瞬幻」

その刹那、ウルグはキバの背後にいた。

それを認識したときには、すでにキバの剣はヒビが入っていた。

「これは、一幻の”瞬幻”。一瞬のうちに敵の背後に回れる超速度の歩法を用い、敵に斬撃を加える。最初、敵は攻撃されたことを認識できないが、俺が剣を鞘に戻すと、」

と言いつつ、フォッグを鞘に戻す。

その直後、胴には15本ほどの斬り傷を付け、剣も砕け散って、キバは両膝をつき、やがて――倒れた。

「このように斬撃の効果は2倍の威力を発して、敵を斬る。一瞬の幻を見た後に地獄へ堕ちる。そんな愚か者に使うときこそ、この技の力は冴え渡る」

ディエンドは、倒れたキバを一瞥し、カードを取った。

「まあ、いいさ」

『K A M E N R I D E K I V A D O G A 』

倒れたキバは立ち上がり、フォームが変化して、鎚を持ったフォームとなった。

「そこまで剣がダメなら、トンカチで打つ」

その声とともに、ドッガのキバは走り出し、打とうとした。だが、ウルグはヒュルリとそれを避け、「邪魔だ」

キバのお腹に、一閃を放った。

「一幻 瞬幻 無動斬^{むどうざん}」

ザンツツ

――?!!!

すると、キバはいきなり四肢を除いて、動かなくなった。いや、正確には動けないのだ。お腹の位置だけは変わらず、まるで水中でもがくようにキバは四肢を振り回した。

「無駄だ」

ウルグはそう言って、剣を振って、キバの首を斬った。

「この”無動斬”は、通常の”瞬幻”のように、斬った後に鞘に戻

せば2倍の攻撃量を発揮する。しかし、それに加え、斬った箇所を動かすことができなくなる。まあ、お前には鞘に戻すまで、一切のダメージは感じられないし、俺は斬った初撃後、20秒以内に鞘に収めなければ、効果も斬撃のダメージも無効になる欠点がある」

そういつて、剣を鞘に戻した。

バキンッ

キバの肩と首もとの装甲が砕け散り、キバは消えた。

「へえ、さすがだ。彼のレベルを2連続で倒すなんて」と海東が褒めると、

「電王のやつは、3体連続だ」

ウルグはそれをさらりと言い放ち、海東は驚きを見せた。

その時、

『BRESARD』

レンゲルの攻撃が再開された。

ウルグはそれを高速移動で避け、フォッグを右手に持ちつつ、左手で柄に触れた。そして、刃に手を添えながら、

「二幻 二幻刀」

手を通し、抜いた。

すると、左手にもう一本のフォッグの刀身が、柄が、剣全体が現れた。――フォッグは2本になった。

「この二幻刀で、貴様らを斬る」

そういつて、ウルグはディエンドに刃を向けたが、レンゲルが杖で剣を振るい、ウルグの二本の刃を払い、互いに武器を操り合った。ディエンドは、何を思ったのか、黙っており、ふと、下を向いて、なにかカードを取った。

ボソツと何かをいつて、ウルグを見た。

そして、銃を向ける。

「さあ、始めよう。ここも、もうすぐ終わりそうだ」

海東がそういつたところで、俺は感じた。

――戦闘が、激しくなる。

直感がそう言った。俺も海東にやられたし、一真達もレンゲル一体であそこまでやられていたのだ。この三体の戦いの中には、入る隙もなく、ただただやられてしまう。

逃げる、という選択肢が浮かぶと、俺は歯を強く噛み、一真を探した。

一真は、ギャレンのやつと一緒にいた。カリスは見当たらなかったが、仕方がない。

- - こいつらとだけでも逃げなくては。そう思い、また逃げてしまった。俺は、

- - 強くならなければ。
と感じていた。

俺は、変身を解いて、駆けだした。
そして、一真とギャレンだったやつを掴み、逃げた。

ディエンド・レンゲル・ウルグの戦いは、やはり激しいものであった。
周りには、緑の血が散っていた。

7 - カリス

- - ドックンドックンドックン
胸が鳴る。理由は分からない。

- - ドックンドックンドックン

やつと、レンゲルと戦った直前からそうだ。

おかげで、本領が発揮できなかった。

- -
つくそう。

俺は都会を歩いた。緑の血を垂らしながら。
その途中、声を耳にした。

「ねえ、相川さんには特別な牛乳買ってあげよ！虎太郎のためじゃなくて」

「そうね。ミルク姫以外に、何があるかしら」

「えっと、ミルミルク、どう？」

「それ、子供用じゃない。相川さん、飲むかしら」

「飲んでくれるわよ。あたしが注いであげるんだもん」

俺は、二人の声を聞いて、少しだけ、歩く力を足に込めた。

――二人の所へ行き、喫茶店に帰ろう。

そう思った。

俺には、緑の血が流れている。アンデッドの血だ。

アンデッドに、自我はない。俺の自我も、ヒューマンアンデッドによってもたらされた。

――だが、まだ愛というものを、俺は知らない。

数ヶ月前、俺は栗原晋とともに、雪山に上っていた。その最中、ギラファンアンデッドが現れ、襲われた。そして、栗原は、致命傷を負い、俺に家族写真を渡してすぐ、死んだ。

俺は、事切れる寸前に自分の命ではなく家族を想う彼の気持ちが理解できず、その後半年をかけ栗原親子の住む喫茶店「JACAR ANDA」へと現れ居候するようになった。

そこで出会ったのが、栗原に渡された写真に写っていた天音と遙香だ。

俺は2人を守るために、戦いに身を投じた。

そのうち、俺は人間の心を少しながらも理解することとなり、他の人間も守ろうとするようになった。

剣崎とも、友情らしきものを結ぶこととなった。

相川始という人間となつて以来、ジョーカーに戻る事を忌まわしく感じるようになり、アンデッドを封印したベスタの力でその本性を抑え込み、そして人間としての生活を通して次第に「ジョーカーとしての本能」を「人間の心」が上回っていった。

全ては、俺が勝ち取ったものでもあったが、なによりも、栗原家の二人のおかげだと、俺は思う。

俺は少しだけ遠くにいる2人の会話に耳を傾けていた。

俺はゆつくりと頷き、二人に叫んだ。

「逃げる！！！！！」と。

天音は必死に頷いてから、遙香の手を取った

驚く遙香に天音が必死にこういったのが聞こえた。

「大丈夫！あの人、私を何度も助けてくれたもん！」

二人の足音が耳に入ってくる。それを遮るように、アンデッドが口を開いた。

「俺を、覚えているか、カリス」

俺は頭に疑問符を乗つける余裕もなかった。俺はすでに倒れるの一手前だ。視界も霞んできた。

アンデッドは、俺を無視して、話を進める。

「俺は、以前お前と剣崎を相手にした、トライアルF。お前のハートのKの力を持つ者だ」

俺は足下をふらつかせつつ、トライアルFの方へ視線を送った。

トライアルFは、少し話したあと、さげすんだ目で俺を見た。

「お前、動けないらしいな」

俺は確かに動けずに腕から血を流していた。

「動けぬやつを叩くのは退屈だが、仕方ない」

そう言ってやつは右腕に装着していた、三枚のカッター式の刃を振ってきた。俺は、すかさず弓を振るう。

だがやはり、刃のほうが、アンデッドのほうが、勢いは上だ。

金属音が鳴り響き、俺はその度に、後退していった。

「どうした、カリス、足もまともに動かんか？」

俺は無言で弓を振るい、必死で刃を弾いた。

そして、続いて足を後退させつつ刃を避け、矢を放った。

それはトライアルFを怯ませるだけに終わった。

「俺を封印することができないのは知っているか？」

ザンニンツ

「俺は、その身を消滅させるほどの、ある程度強力な破壊力を持つて挑まなければ、俺は倒れない」

ザンンンッ

「さあ、貴様の全力を見せてみる!!!」
ザンンンンッ

俺は幾度と斬られながら、その身を引いた。自分でも無様だと思
いながらも、地を這うように足を引きずった。

やがてトライアルFは右腕にあった3枚の刃から左腕のフィンに
持ち替えた。威力も増した。

「ぐああああ!!!」

俺は、その攻撃に胸を深く傷つけられ、吹き飛ばされた。

「どうやら、己の戦闘力の半分も使えんらしいな」

そう言っ、奴は左腕を俺に向けた。

「俺のビームで、焼け死ね」

一言そう言っ、奴は腕先から光を溜め始めた。

俺は、難しいと分かつていながらも、回避方法を頭を回転させた。

・・・どうすれば……。

そう考えながら頭に浮かんだのは、栗原家の二人に関してだった。
そして無意識に1枚のカードを取り出し、弓にスラッシュした。

『WILD』

そして弓矢の方向をトライアルFに合わせた。風の力を溜め、弧
をできるだけ引いた。

「終わりだ!!!」

「……消える」

俺とトライアルFは言い合い、互いの波動を放った。

ドオオオオオン

とてつもない波動がぶつかり合い、深く膨大な煙が戦場に吹き荒
れた。

そして煙が晴れ、まず現れたのは、右腕を欠いたトライアルFで
あった。

「くそ、カリスめ、こんな力を……未だ残していたとは」

次に現れたのは、カリスであった。彼の装甲は、顔以外、原形を

留めていなかった。

「どうやら、反動もあつたらしいな」

とトライアルFは言い、再び左腕の向けた。

「次で確実にしとめる」

そう言うが早いのか、カリスが唐突に立ち上がった。そして、ライダーステムの装甲が肩、腕、胸、足、と、次々砕け落ちていった。その姿を見て、トライアルFは左腕を下げた。勝利を確信したのではない。むしろ、勝気を失ったのだ。

トライアルFは、息を呑んだ。

「貴様は、……」

ザンツツツツツッ……！！

そのあとの言葉は、カリスの変貌した姿の者による攻撃で掻き消された。

だが、俺にだけは聞こえていた。奴はこう続けていたのだ。

「ジョー……カー？」

俺は、ブーメランを武器とし、異様な触覚を持つ、黒く醜きアンデッド……ジョーカーとして、歩みを始めた。

俺の意識の中には、すでに相川始の意識は、消えていた。

俺の歩みと 동시에、各地では、黒く俺に似たアンデッドらしき生物が大量に出没したらしい。

だが、そんなことは、どうでもよくなっていた。

俺は、相川始でも、カリスでもなく、アンデッド・ジョーカーとして、歩み始めたのだった。

感想の方へお寄せください！ユーザー登録なしでも書けるようにしておきますので、どなたでもどうぞ！では、帰ります！！（汗と急）

中間座談会1（前書き）

総ユニーク数は5000人、総PVが20000アクセスを突破いたしました！（これは処女作のため、感動です！）

そんなこんなで、なんとなく書いてみました。ウラ設定。みたいな。考察好きの方にはおもしろいとおもいますよ！
では、とりあえず、どうぞ。

中間座談会 1

氷雲「しょういち（以下、しょういち）」「はい、仮面ライダーディケイド、version改、中間座談会……！」

一同「……」おおおおおお！！！！」「……」

門矢士（以下、士）「ようやく、こんな時が来たか」

光夏海（以下、夏海）「えっと、どんな時ですか？」

士「説明してやれ、しょういち」

しょういち「はい。（まさか、士さんも分かってないんじゃないか）……えっと、僕のまともな処女作である、この”仮面ライダーディケイド”version改が、なんと、総計5000人、20000アクセスを達成しました！！ハイ、拍手……！！！」

一同：シーン

しょういち「あの、どうしました？」

士「せめて、1万人か、5万アクセスになってから呼べ。俺は帰る」
しょういち「ちよつ、ちよつと、士さん？！！」

海東「同感だ。僕も帰る」

しょういち「待ってください、海東さんも！だいたい、海東さん、まだあんまり喋ってないんだから、”ディケイド”未見の人には、わからないでしょ、性格等」

士「適当。生意気。傲慢。わがまま。盗人。その他負のイメージ」

海東「盗人以外、間違ってるじゃないか」

雄一「いや、お前はこんなもんじゃないか？」

夏海「”ディケイド”での海東さんは、こうでした」

海東「適当なこと言わないでくれよ、ナツメロンくん」

夏海「ナツミカンです、じゃなくて、夏海です！」

雄一「そこまで間違われるのか、夏海さん」

夏海「……はい」

士「それはともかく、今回は、どんな話をさせる気だ？」

しゅういち「この作品について、語っていただきます！」

士「長い」

夏海「更新が遅い」

雄一郎「描写が曖昧」

海東「誤植が多い」

しゅういち「いや、なに悪口ばかり言ってるんですか?! 読者が逃げますって!!」

士「逃がす。こんなに長い作品からは逃がす」

夏海「もつと良い作品、いっぱいあるじゃないですか」

しゅういち「いや、だから、この作品について、です」

士「だいたい分かった。じゃあ、こっちから、お前に質問するぞ。しゅういち」

しゅういち「過激なネタバレでなければ、ある程度は答えます」

士「ぶっちゃけ、新ライダーは、あと何体の予定だ？」

しゅういち「簡単に言うなら、3体くらい。新フォームも入れるなら、結構あります。ダークライダーも、除いて、3体くらいです」

士「あと3人も乱入するのか」

しゅういち「あ、忘れてました。あと、地獄のも数体オリジナルを。元手はありますが」

士「どこのだ？」

しゅういち「それは秘密です」

雄一郎「じゃあ、世界の順を教えてください」

しゅういち「いや、雄一郎さん、あなたの使命があるから、分かりますが」

士「使命？」

しゅういち「そう、使命。あなたや、雄一郎さん、海東さんにもありますよ。一応。夏海さんも、あとあとで、しっかりとした役割ありますから、お待ちを」

雄一郎「それはともかく、世界の順は？」

しゅういち「えっと、ブレイドの次は、3人のライダーが主軸とな

る世界です。イレギュラーが1体いるらしいですが、それを入れるかはまだ未定」

士「イレギュラーの奴どころか、その世界の構想どころか、その世界への導入のための”記憶”がまだなんだろ」

鳴滝「キバの時みたいに、あとから記憶を入れたらどうだい？」

士「そんなことは、俺がさせん」

しょういち「いい加減、次の世界行こう、破壊してくださいよ！」

士「してるだろ！お前の作った台本通りに行ってるだろうが！！」

しょういち「いや、そっちの破壊も頼みますけど、次の世界を無くして、一気に0の世界に行かせてください！！構想、あっちのほうが先にできちゃったんで！」

海東「それ、あと三つも世界飛ばすことになるよね」

士「そうしろ。どうせ、俺は破壊者だ。事象の全てを破壊する」

しょういち「いや、それは、別の人にやってもらいますから！」

士「別の人？誰だ？」

しょういち「秘密です。重要事項なので」

海東「で、僕は知っているという設定なんだね」

しょういち「あと、雄一郎さん、鳴滝さんもね」

士「そいや、鳴滝もウルグの奴も出てないが」

しょういち「一応敵なので、それに、本当は締め切りすぎてるんで、キャラ増やしちゃうと、ね」

士「面倒か」

しょういち「少し」

一同「」「ダメな作者だな」「」

しょういち「では、そろそろ」

士「なんだ、今日は早いな」

しょういち「ようやく執筆に戻る気になったので。話し相手、ありがとうございます」

海東「まあ、いいよ。どうでも」

雄一郎「ちゃんと進めてくださいね」

夏海「というか、私の出番、少なすぎませんか？」

士「ってか、オリジナルは気をつけるよ。あと、早くしろ！」

しょういち「はい。では、今回の記念をステップに、また執筆がんばりますので、どうぞ読んでみてください。」”デイケイド改”の

13話（「運命の切り札」の予定）は9月中には執筆終わらせますので、乞うご期待！」

中間座談会1（後書き）

がんばります！以上！！

#13 剣の世界「運命の切り札」(前書き)

……最初にお詫び申し上げます。

今度は、実質2ヶ月以上も滞納してしまい、申し訳ございません！！私も、執筆に執念を燃やしていたつもりですが、どうも時間が取れず。真夜中にしようにも、宿題に追われたり、母がPCの前で寝てやるにやれなかったりも多く。

また、今回は、次の世界の記憶を投入する際、全然ビジョンが浮かばず、苦労しました。これを思いついたのが、座談会登校から数日後。

そしてyoutubeも見れないかも、となり、情報収集の方法に悩んでいた頃、最終世界のアイデアも次々出てきて、頭を整理するのに困り、果ては、この13話の、ブレイド編決着の構想も、二転三転してありました。そして、最終決定の結末は、これです。

では、「仮面ライダーディケイド」version改」第13話「運命の切り札」をどうぞ。

#13 剣の世界「運命の切り札」

1 - 土

まさか、君達も残るとはね。——それも、本当に、たった3体で海東、ディエンドがそう言った。

何度も死んで、何度も生き返るなんて、不死身かい？君ら

雄一郎、ロードが言った。

俺は目の前の3体を見、ゆっくり言った。

それでも人は死ぬものだ

それを合図に、海東は緑の凶暴そうなライダー、雄一郎は青い機械のライダー、俺は3人のリーダー・長の1人であるライダーと相手をすることとなった。

俺と雄一郎は、まずまずの戦闘を繰り広げた。だが、海東のやつは、敵の触手に苦戦した。

撃つても撃つても生えてきて、まるで生きているようだ。

緑のライダーは、悠々と海東の銃弾を眺めていた。

そんなものか、ディエンドの銃撃はくっ

海東は苦い顔をして、2枚のカードを引き、挿入した。

『KAMENRIDE W』

『FORMRIDE FANG JOKER』

その音声で、白黒のライダーが現れた。

『FANG』『JOKER』

野獣には、野獣でね

仮面ライダーWは緑のライダーに向かっていき、手の爪や腕そのものを駆使して、触手を切り捨て、相手に迫った。

緑のライダーも手の爪を伸ばし、肘の突起も使ってWの胸を突き、飛ばした。

それでもWは何度も緑のライダーに向かっていった。

さすがに面倒だな。偽者とはいえ、長のライダーが相手となるともなると

と緑のライダーは言った。

同感だよ。こいつの相手は、大変だったと思うよ。まあ、相手をしたのは別の奴だけだね

海東がそこまで言い終えると、銃に一枚のカードを挿入し、Wに向けて、発砲した。

『ATTACKRIDE ARMFANG』『ATTACKRIDE SHOULDERFANG』

すると、Wの肩や腕から刃が出現し、Wは緑のライダーに一閃を加えた。

調子に、乗るな!!!

緑のライダーがそう言うと、彼なりの最大限であろう触手がWを襲った。だが、Wは怯むことなく肩の刃・シオルダーファングを取り、投げた。

そして、それは全ての触手を切り裂いた。

なん……だと

緑のライダーが啞然とした隙に、海東はもう一度銃を放った。

『FINAL ATTACKRIDE DADADAW』

『FANG MAMUMDRIVE』

そしてWは飛び上がり、脚の刃・マキシマムセイバーで緑のライダーを蹴り切り裂かせた。

くっそおおお!!!!!!

緑のライダーは、辛うじて反応したが、さすがに必殺技には耐え切れず、爆散した。

メカのライダーは、彼の死に動揺し、銃弾を撃つ手を一時的に止めてしまった。

どうした？さすがに動揺したのかな

メカのライダーはゆっくりと雄一郎を見据え、先ほどとは比べ物にならないほどの爆撃を放った。

うわっ、まだこんな力を残してたの?!!

雄一郎は驚きながらも、悠々と足のローラーを使い、爆撃を避けた。

この出力が、本気だ

メカライダーはそういうと、大きな大砲のようなものを手に、弾丸を放った。

えっ!!!?

雄一郎は、最高速度でそれを避けようとしたが、間に合いそうにないものであった。雄一郎が、負傷を覚悟したその瞬間、

『ATTACKRIDE BIGSHOT』

海東のあたりから電子音が聞こえ、大きな波動がメカライダーの砲弾を包んで、他所へ飛ばした。

なに?!!

メカライダーは海東のほうを見やった。海東はフツとほくそ笑み、ファイナルアタックライドほどじゃないけどね。これくらいで、何とか吹き飛ばせるものさ

そこまで言うてから、銃をメカライダーに向けた。

でも、君を倒すのには、使ってあげよう

『FINAL ATTACKRIDE DE DE DE DE
ND』

そして海東のドライバーの銃口から青く、カードの模様が浮き上がった先ほどより大きな波動が、メカライダーを襲った。

ぐああああ!!!!!!

メカライダーの体は粉々に砕け散り、——消滅し、カードになった。

2人の敗北を一瞥して、3人のリーダー・長であるライダーは、俺に赤き拳を放った。

どうした?拳圧が弱くなったぞ。さすがに動揺したのか?

と俺は挑発して、『ATTACKRIDE』の『BRAKE』で強化した拳で胸を打つ。

相手のライダーは、それを手で止め、ブーメランに近い剣を取り出し、斬りかかった。

俺はすかさず、

『ATTACK RIDE SLASH』

ブッカーを剣にして、それを受け止めた。だが、相手の剣圧の方が上回っており、俺は吹き飛ばされた。

ディケイド……お前は、お前達は生かしておけん

相手は剣を振り上げ、言った。

消える

と。

その剣を受け止めたのは、雄一郎でも、海東でも、ましてや俺の剣でもなかった。

目の前には、黒いライダーが立っていた。なぜか見覚えがある奴だった気がする。

おっ、お前は、……

長のライダーがそう呟いたところで、俺の記憶は途切れた。

「あ、土くん、気がついたんですね」

目が覚めると、目の前にナツミカンがいた。どうやら、倒れて寝ていたらしい。

頭には、濡れたタオルがあつた。ソファで寝ていたようだ。

「俺は、いったい……」と起き上がりながら言う。

「土くんは、剣崎さんを抱えてここに、虎太郎さんの家まで来て、そのまま倒れたんです」

俺は呻きながら脚を下ろした。

前の椅子には、一真が座っていた。俺たちが持ってきていたライダー図録を読んでいた。

「なっ、お前、なに読んでんだ?!」

「あ、土さん、やっと気づいたんですね」

と、相変わらず呑気だ。

「いや、土さんのいろいろ世界を巡っているって話、本当だったんだなあって感心してて」

俺はあきれながら、一真を見やった。

「一真、お前、どこ読んでる？」

「もちろん、自分のとこだけです。俺が主体だなんて、思いもしませんでしたけど」

俺もだよ、と言ってやりたい。

「へえ、俺の最強フォームって、スフィンクフォームって言うんですね」

「キングフォームな」

「でも、全アンデッドを封印ってすごいですね。スフィンクフォーム」

「だから、キングフォームな」

そろそろ突っ込む気もなくしてくる。と思いながら、辺りを見回した。

そこでようやく橋がいることに気づいた。

「よう、お前も連れてきてたんだったな」

「ディケイドである貴様の力など借りたくはなかったが、今回は仕方ない。レンゲルでさえ、圧倒されたのだからな。それより、あのウルグやディエンドとかいうやつらは、もっと、か」

「意識はあったのか」

「ああ。鮮明ではなかったが、目も返ろうじてな。声で生きてるかくらいは判別がつく。レンゲルと互角以上だったようだな。あのウルグだったか」

「そつだ。もつとも、俺もともに戦闘したことは、まだない」

そこまで言い終えると、俺は立ち上がり、神妙な顔で読んでいた一真の手から、図録を取り上げた。

「あつ、ちよつと！」と一真が不平を言ったが、無視して、開いた。

「どうやら、この図録に出さえ、俺や雄一郎、海東にウルグのデー

タは載っちゃいない。サガのデータは更新されたがな」

「サガ？」と橘が問う。

「サガってのは、本来キバって奴の世界で会うはずだった。だが、そこでは会わず、ここで会った。ウルグの奴いわく、地獄の奴らしいが。そういう出会い方をした奴は、出会ってから存在を認識されるようだ。まるで、俺やナツミカンが会おうに応じてな」

「そう、彼は、サガはいわゆる悪い側のライダーだったからねえ。で、地獄に送られた。キバの世界で会わなかったのは、僕らやディケイドである君が、その世界に介入したことで、次元や時間の流れが狂い、そもそも出現すらしていなかった場合が多い。そういうやつらも、案外いるものさ」

と、聞きなれない声のほうを見ると、ディエンドに変身していた、海東であった。

「海東、だったな。お前、何でここへ来た」

「みずくさいなあ、土。僕は、君のために、一つ情報を届けに来たつて言うのに」

「言い訳はいい。とっとと出て行け」

「情報はいいのかい？」

「お前に頼る気は一切ない」

「なら、勝手な独り言だと思って聞き流してくれたまえ」

と言って、勝手に話し始めた。

「君は、この世界の、バトルファイトってのを知っているかい？」

「あ、だいぶ前に、アンデッドが言っていました。バトルファイトがもうすぐ終わるだのなんだの」と、なぜか一真が反応する。

「そう、バトルファイトはもうすぐ終わる。いや、正しくは、もう終わったも同然。なぜなら、ある一体を除いて、全アンデッドは封印されたからね」

そこで橘と俺が息を飲んだ。一真は、首をかしげている。

「どういうことですか？」と一真はこれまた呑気に海東へ質問を投げた。

「バトルファイトとは、簡単に言えば、アンデッドのサバイバルゲーム。そこにライダー達がアンデッドを封印していき、アンデッド同士も戦うことで、生き残ることが勝利の条件だ」

と海東が言い終えたところで、

「そして、そのアンデッドの大半が俺たちに封印され、残るは一体になった。そういうことが」

と橘が口を挟んだ。

海東は少しだけ驚いて、「君までもが知ってるとは思わなかったよ」と橘に言った。

「所長に少し聞いたからな。……で、残った一体には、バトルファイトでどのような報酬が、賞品が得られるんだ？」

「今回残ったアンデッドは、ジョーカー。彼は全スートに入っておらず、特殊なことが発動される。彼が生き残った場合、全生命のリセットが開始されるとされているんだ」

海東が静かに言うのと、周囲に恐怖がいきわたった。

「そのリセットってのは、どういうことになるんだ？」と俺が聞き、海東が、「それは……」と言いかけたとき、ドアが開いた。

「やあ、橘朔也。剣崎一真」

出てきたのは、少し髭を生やした、中年の男性であった。

「所長……！」と、彼に飛びつくように行ったのは、一真であった。

橘も背もたれから離れ、所長が橘に視線を送った時、一礼した。

「どうやら、まだ2人とも無事だったようだな」

と所長はホッとしたように言った。

俺は何か立ち上がり、座りなおした。

「どうしたんですか？ 烏丸さん」と橘が聞く。

すると、「うん」と言つて、ドアの奥へ手招きをした。

「君らは、レンゲルと言うライダーの存在を知っているか？」と烏丸所長は聞いた。

海東以外の全員が息を呑んだ。そのライダーは、先刻激闘を繰り

広げ、ジャックフォームとなった、剣・ギヤレン・カリスを仕留め、ウルグとも戦闘をしていたとても強いライダーである。

各々が激闘を思い出していると、烏丸所長は気にせず続けた。

「彼は、レンゲルは、その海東君にもらった、クラブの1、スパイダーアンデッドのカードによって完成した」

それを聞いて、いつせいに海東のほうへ視線を向けた。すると、海東は弁明するわけでもなく、こう言った。

「僕は、土が持っていたカードを盗^とって、それを利用して、彼を作り上げた。もつとも、もとのライダーシステム・カードが強力だったから、誰かを入れれば、あれくらいになるさ。でも、どうやら烏丸所長は、別の、正式な人材を捕まえたらしいね」

海東がそういったところで、皆、烏丸署長に視線を戻した。

「そして、さまざまな検索と実証を重ねた結果、彼がレンゲルの最高適合者であるという判断に至った」

そこで招かれたのは、どこにでもいそうな10代の少年だった。

「彼の名は、上城睦月。高校生だ」

「こっ、高校生?!」と一真が叫ぶ。

皆も同様に驚いていた。橘は、相当顔をゆがめていた。

「そんな若者で戦闘は、いや、精神面は大丈夫なのですか？」と橘は問う。

それに烏丸所長のかわりに神妙な顔をした睦月が自らこう答えた。

「ぼっ、僕、本当は、戦いとか、争いとか、したくありません」と。

俺や橘は、半ばホッとして、胸をなでおろした。こんな若造を戦闘にやっては、無駄に命を落とすだけだ。いくら烏丸所長でも、そんな無謀なことはいらないだろう、と。

だからこそ橘は、睦月に向かって言った。

「だったら、君のような覚悟が未完成な者にはライダーは、ましてやレンゲルは向かん。ただでさえ、あいつの能力は高い。俺たちも戦っている。あいつを操るのは、相当な覚悟が必要だと……」

と言いかかったところで、睦月が突然、「でも、」と続けた。

「僕はレンゲルバックルを手にしたとき、全身の脈動が一気に早くなったのを感じました。レンゲルに変身したとき、とてつもない力がみなぎってくるのが分かったんです」

烏丸所長も含め、皆が睦月に驚きを隠せないでいた。

睦月是不気味な笑顔を浮かべていた。そこから一気に恐怖を感じたような表情に変わる。そして、睦月は言った。

「それでも、戦闘が好きになってしまっても、アンデッドって言うやつ呪縛に飲み込まれそうになっても、心の奥底で暗い闇に怯えている自分がいるんです」

睦月はそこまで言うのと、所長の上着をつかんだ。

「烏丸さんは、すごい人なんですよ。助けてください。僕を、助けて」

と、叫ぶように睦月は言った。

すると、次の瞬間、

——バチンツツツ

と大きな音を立て、橘が睦月の頬を叩いていた。

「脈動が何だ！力が何だ！呪縛が何だ！暗い闇が何だ！……お前は自分の力に溺れそうになっているだけだろ！しかも、仮初めの、アンデッドという化け物に依存した力だ！そんなこともしかりと理解していないで、自分が溺れて死にそうだから助けてくれたと……甘えるな！！お前は、戦士となるもの、レンゲルとなるものだろ！！上城睦月という男だろ！！お前は戦うべきと導かれたんだ！！！！ここまで来たなら、そこまで依存したことを口にするな！！！！お前の覚悟は、そんなものか！！！！」

と、橘が一息にそう言った。

俺は心の中で拍手を送った。橘はいつの間にか、肩で息をしていた。

橘は、何物かも分からぬ恐怖から、ライダーシステムに不具合を起こし、体を蝕んでいた時期がある。睦月の悩みと、少なからず近いものを感じたのだろう。

だからこそ、あいつは昔の自分を叱責するように、彼に激を飛ばしたのだ。

睦月は啞然としたままであった。

そこへ、けたたましい警笛が鳴り響いた。栞のパソコンからだつた。

「剣崎くん、橘くん、そして上城くん、——アンデッドよ！数は1！南西30キロ付近」

そう言われ、一真が最初に飛び出した。

次に橘が出る。その間際、橘は睦月に2枚のラウツカードを手渡した。

「これは、ある奴から倒せ、といわれ、さっき倒したばかりのラウツカード。クラブのQとKだ。^{クイーンキング}それに少しはヒントが隠されてるかもしれない。行く途中にでも、見つけ出せ」

と——俺からすると、明らかに無理難題なことを——言つて、橘もバイクにまたがる。俺も、一真が走るのを追う。途中から、睦月もついて来ていたようだった。

スートは——揃った。

2「夏海

私が、土くん、剣崎さん、橘さんを見送ると、睦月くんが駆け出した。

どうやら、行く気になったようだ。私は、いつてらっしゃい、と彼を見送った。

睦月くんは、はい、と真剣な顔で一言そういうと、バイクを加速させた。彼らは、走り去って行った。

「ところで、海東さんは行かないで良いんですか？」と、海東さんに質問を投げる。

「僕はそんな面倒なこと、する気がないからねえ。バトルファイトにルールや憲法、法律があるように、この世界にはこの世界なりのルールがある」

と言って、銃を取り出した。私は、ほんの少しだけ緊張する。実際、会うことさえ初めてなのだから。

さきほどは、土くんの知り合いだったようなので、気安くはしてみたが、雄一郎さん同様、侮れない。とはいえ、雄一郎さんには、電王の世界で助けてくれたなどの恩はあるのだが。

「海東さんには、”第一使命” ってあるんですか？」と、率直に聞いてみた。

すると、海東さんは少しだけ驚いて、ニヤけた。

「どうしてそんな言葉が出てきたのか分からないけど、——まあ、土じゃないだろうから、雄一郎が口を滑らせたんだだろうけど——僕のは、『盗る』ことだよ。あらゆる世界の貴重なものを盗って回るのさ」

銃口を私に向け、「邪魔する奴は倒すけどね。僕が作ったライダーで」と言った。

銃口を上に向け、こう続けた。

「たとえばレンゲルの変身条件であるスパイダーアンドッド。あれは土から盗ったもの。あれは僕には使いこなせないタイプさ。あれにはモンスター・アンドッドが封印されてるだけだからね。そして、

と、ポケットから、一枚のカードを取り出す。ラウツカードだ。

「このスピードのK、^{キング}僕がもらったままなんだ。さっきレンゲルに倒させてね」

そっくり終えたとき、烏丸所長が目を見張って言った。

「まさか、それが最後のラウツカード……か？」

「正解」

と海東さんは指を銃の形にして向け、言った。

「だけど、土に返すよ。どうせ、そうしなければ、士たちに勝ち目はないだろうしね」

海東さんの不吉な発言に目を見張り、「どういうことですか?!」と叫ぶように言った。

「ジョーカーは、ジャックフォームでは勝てない。おそらく、今の士も太刀打ちできないと思うよ。それに、ジョーカー一体と彼らの戦いならまだしも、ダークローチがいるからね」

「ダークローチ？」

「全生命を一掃するのに、ジョーカーだけでは時間がかかる。だから、その補助として利用されるのが、ダークローチ。彼らも、——彼らだけは消滅させられるとは言え、——かなり強い。大量生産性だから、相当な神風でもなければ、全滅は免れないよ。けど、彼が決心できているかどうか……」

と海東さんは神妙な顔で言い終えた。

「彼つて、睦月さんのことですか？」

と私が聞くと、無視を払うように手を振って、後ろを向いた。

「そこからさきは、烏丸所長に聞くといい。僕より、この世界に、この力に詳しい彼にね」

私は烏丸所長に目をやった。所長は手を組み、ソファの背もたれに寄りかかっていた。

「僕は、これを届けに行ってくる。じゃあね」

とだけ呟くように言って、海東さんは行ってしまった。

私は流れるように烏丸所長のほうを向いた。所長は、それを見、ゆっくりと口を開いた。

「君たちが使うライダーシステム、確かディケイドといったか……その構造は知らんが、こちらが扱っているトランプ状態のラウツカードを駆使して戦闘を行う我々は、ラウツカードから力を得ると同時に、モンスターとしての力まで流動してしまう性質がある。だが通常の戦闘において、一度に2枚……最高でも3、4枚までのラウツカードしか使用・発動・支配することはできん」

烏丸所長は立ち上がり、窓のほうへ歩む。

「しかし、ジャックフォームは、一度に10枚近くのラウツカードの支配を可能とした。そして、最高峰は、今のところスピードのライダーシステム、剣のライダーシステムでのみ稼働できるキングフ

オームだ。あれは、一度にスペードのスイート、13枚全てを支配することができるんだ」

窓を目前にして、立ち止まった。

「しかし、あれはまだ未完成なシステムでもある。実験的にキングフォームが稼働できるようにした、とも言えるな。だから、ラウツカードに封印されたモンスターを支配するために必要なエネルギーが、不十分ではある。そして、13体全てを支配することは、ジョーカーの性質に酷似している。したがって、強制的な変身、連続での無理をした変身をすれば、ジョーカー化してしまう恐れがある」
私はその辛辣な言葉に対し、叫ぶように言った。

「でも、ジョーカーは剣崎さん、橘さん、睦月くん、あと、相川さん、そして土くんが束になっても敵わないんですか？」
すると烏丸所長は、ゆっくりとこう言い放った。

「我々の最後の敵、ジョーカーの正体は、仮面ライダーカリスの適合者——相川始だ。一真は、親友と世界を秤にかけなければならなくなってしまったんだ」と。

3—士

『剣崎くんたち、大変——！アンデッドの数が、どんどん増えるの。今カウンターは、……？！……50を超えたわ——！』

俺たちは、イヤフォン越しの広瀬さんの声を聞いた。まだ当初の目的地に着く前に、黒いアンデッドが現れた。

『剣崎くん、前にアンデッドが——！』

「来ました——」

一真はそう言つと、バイクを停めた。

ほかの者も一真にならう。

「アンデッドは、倒したはずじゃ」と一真。

「ジョーカー以外な」と俺。

「だけど、ジョーカー以外に40以上のアンデッドが現れているっ

ていうのは、おかしすぎます」と焦る一真。

「ああ。ジョーカーの能力かもしれん。あるいは、俺たちが封印してないはずのアンデッドが現れている可能性もある」と橘。

「どういうことですか？」と睦月。

「俺や相川は、前回の戦闘の前に強化態を手に入れたが、そのために必要だったアンデッドがラウヅカードに封印されていた。誰も封印しているはずがないアンデッドが、な」とゆっくりな口調の橘。

「でも、これはダークローチっていう倒すことができるアンデッドです。ジョーカーが出すって書いてました。士さんが持ってきた図録に。だけど、ここまで大量のダークローチを出せるなんて」と一真は依然うろたえる。

そこで俺は、「倒すしかないだろう」と言っつて、バックルを取り出した。だが、

「ここは、俺がやる」と、橘が手で制した。

「倒せるのなら、全員に分がある。俺とお前なら、確実にお前のほうが強いだろ、ディケイド。それと、」

「オレも行きます！！」と、今度は一真が名乗りを上げた。

橘は、一真のほうへ振り向かず、言った。

「お前の武器は剣。オレの武器は銃。明らかにリーチさでは俺のほうが勝る。こんなに大量の奴は、リーチでまとめて倒すほうが楽だ。この調子だと、もっと現れそうだしな」

一真は、でも、と言い寄ろうとしたが、橘は無視して言う。

「それと睦月！おまえは来い！」

一真も俺も、睦月も驚いていた。

「お前の力は未知数。いきなり大ボスと戦わすのはなんだ。ダークローチ片付けるのを手伝え」

と橘は言っつて、バックルを取り出す。

「はっ、はい」と睦月は焦りつつ、バックルを出した。

「行くぞ！！」「へ、変身！！」

『TURN UP』『OPEN UP』

2人はバツクルを展開し、ギャレン・レンゲルへと変身した。それと時を同じくして、その場にダークローチが大量になだれ込んで来た。

「敵もやる気ってことか」

そう言つて、銃を構え、『FIRE』で強化した火炎弾を撃ち放った。

連続で5発放つて、ようやく1体が消滅した。ダークローチは、減少の兆しを見せない。

「やはり、簡単には行きそうにないな」

橘は次のダークローチに狙いを定め、
ダンッッ

火炎弾を放つ。

「ぼっ、僕も」

そう言つて、レンゲルとなつた睦月は、ダークローチの群れの中に突入し、ロッドを振るい次々と消滅させていった。

『BREZARD』

睦月はロッドに氷の力を纏い、1周目で氷漬けにし、2周目で氷ごと粉碎する戦法をとつた。

俺たちがいても、お釣りが来るだけだろう。

「いくぞ、一真」

俺は一真を呼び、自分のバイクに乗つた。

「で、でも、」

一真は未だおどおどとしている。

「こいつらダークローチは、橘と睦月に任せろ。俺たちは手っ取り早く、ジョーカーのところ行くぞ」

一真は、動こうとしない。そこへ、橘が叫んだ。

「俺たちを信じろ！！！」

さらに振返り、

「行け、一真。……ジョーカーを頼む」

そう言つて、再び前を見据えた。

一真は、はい、と短く答えてバイクに飛び乗った。

俺たちは無言のうちに、エンジンをふかし、遠回りをして、ジョーカーの元へと向かった。

闇のアンデッド——そう形容するにふさわしいアンデッド、ジョーカーは崖の近くに立っていた。

誰かを、いや、何かを待つかのよう。

俺はバイクを降り、ジョーカーに言った。

「お前が、ジョーカーか」と。

ジョーカーは顔を向け、やがて体ごとこちらに向けた。ゆっくりと。

そして呟いた。

「デイクイド……と、剣崎」

その刹那、奴の背後からダークローチがスッと現れた。

それを見て、俺は叫んだ。

「あいつら、くそつ、橘の奴ら何やってんだ！」

「たしか、ダークローチっていうのは、二つの出現方法があるって書いてました！」

「てめえ、どつからそんな話を?!」

「ライダー、ずもく！」

「はっ、一真、お前、そんなとこまで読んでたっのか!!」

「悪いですか!!」

「悪い!!!」

「そんな、酷過ぎ……!!!」

一真が”ですよ”と言いかけたようだが、それをさえぎるようにダークローチが向かってきた。

俺たちは変身しようとしたが、ダークローチの接近速度は予想を超えて速かった。

俺たちは生身のまま、腹に蹴りを受けた。

俺も一真も飛ばされ、ジョーカーは一步步歩み始めた。

「剣崎、お前は友達ってどうできると思う」

ジョーカーはそう聞いてきた。

一真と知り合いのようだ。

「一真、こいつのこと、知ってんのか?!」

「相川さんです!カリスの相川さん!!!」

俺は素手を使い、ダークローチをギリギリで応戦していた。だがやはり、やつらも強い。

一撃一撃が、重い。

それにしても、こんな状況下で敵とはいえ、相手がいないとはいえ、あんなのんきに言われると、なんかキレそうだ。

「おい、ジョーカー……いや、相川、友達だあ?!!んなもん、いつの間にか、なってるもんだろ!!!」

俺は目の前にいるダークローチを蹴り飛ばし言った。

「俺たちだってそうだ。共闘して、話して、」

「そんなもの、利害の一致に過ぎない」

「利害の一致を超えて、互いに信頼しあえれば、仲間だって、友達だって思えるだろうが。お前だって、海東と闘ってた時、お前だって、一真や橘とも共闘してただろ!!!お前達、もう仲間なんだよ!!!」

向かってくるダークローチを蹴飛ばす。ある程度強い分、一撃一撃がきつい。

「いいか、仲間ってのは、友達ってのは、きつかけなんていらねえ!!!理屈じゃねえ!!!気づいたらなってるモンなんだよ!!!!そういうもんだろ!!!」

相川は少しだけ怯んだ様に、言った。

「お前、いったい何者なんだ、ディケイド?!」

「俺は、通りすがりの仮面ライダーだ!!!」

俺はそう言っで、カードをバツクルに挿入した。

『K A M E N R I D E D E D E D E C A D E』

「おっ、俺も!!!」と一真もカードをスラッシュした。

『TURN UP』

一真の前に紋章が現れ、ダークローチを弾きながら、一真を仮面ライダー剣に変身させた。

「行くぞ、一真!!!!!!」

「はい!!!!!!」

俺たちが意気込んだ時、ブッカーが光った。

中から2枚のカードが飛び出した。俺は迷わず片方を挿入する。

『FINAL FORM RIDE BU BU BU BLADE』

その音声で、一真は巨大な剣・ブレイドブレードに変化し、俺はそれを片手に持った。

そして開いた手でもう一枚をバツクルに入れる。

『FINAL ATTACK RIDE BU BU BU BLADE』

「いっちょ、景気よくぶった斬ってやるか」

俺はブレイドブレードを使用した巨大な斬撃・デイクイドエッジを繰り出した。

そうして、俺たちの周りにいたダークローチを一体残らず斬り倒した。ダークローチは封印しないで倒せるらしく、消滅していったが、いつもどおり、発動できるのは一撃分だけらしい。

一真はブレイドブレードから、ライダーに戻った。

「よし、こいつを倒すか」

俺がそう言くと、一真は一瞬黙って、手で俺を制した。

「いや、……ここは僕に戦わせてください」

「お前、どういう……」

そう言いかけたとき、顔の隣でカードが飛んだ。そして後ろからあいつの声も飛んできた。

「これ、またお宝じゃなかったよ」と、海東だ。

「海東?! お前、何でここへ、」

「士さん、——そのカードを、ください」

一真は、真剣な顔をして、少し睨むようにして、そう言った。

俺は、睨み返し、言った。

「何を焦ってたんだ、一真」

一真は少し黙ってから、ゆっくりと口を開く。

「オレは、今から、そのカードを使ってキングフォームに変身します。——スピードのアンデッド全てを支配します」

「そして、その状態でジョーカーとの戦闘を経て、ジョーカーになる。彼は終わらせるつもりなんだ。バトルファイトをね」

と海東が口を挟んだ。

俺は驚きを隠せず、眉間の皺が取れた。

「本当か……一真」

俺が言つと、一真はさらに焦るように激しく言った。

「オレは、オレが止めなくちゃいけないんです！！土さんの持っていたライダー図録にも、書いてあった！！オレがジョーカーとなり、ジョーカーが2体存在することで、バトルファイトを止める。それしかこの無益な戦いを止める方法は、人間を護ることはできないんです！！」

一真は俺の肩を掴み、さらに詰め寄った。

「オレは11歳の頃、親を火事で亡くしました。あの時、オレは何もできなかった！！親を、大切な人を護ることができなかったんです！！でも、今はもうそれほど非力じゃない！！オレはみんなを救えるんだ！！土さんを、夏海さんを、橘さんを、睦月くんを、虎太郎を、みんなを、救えるんです！！！！オレの決心を、オレの誓いを貫かせてください！！！！オレに任せてください！！！！オレに……オレに、みんなを救わせてください」

バシッツツッ！！！！！！

俺は、一真の頬を力いっぱい張った。

「お前なんかに、自分独りで全てを勝手に解決しようとするような奴に、本当に大切な奴の心まで護れてねえやつに、俺たちが心から救えるか！！！！！！」

俺は叫ぶように一真を叱咤して、ジョーカーを見据えた。

「ジョーカーを、割る」

「……………なに？」

「割るって、どういうことですか、土さん?!」

俺は一真を一瞥し、続けた。

「あいつは、ヒューマンデッドがジョーカーに飲まれた姿なんだろう。だったら、アンデッドとしてのジョーカーと相川としてのヒューマンアンデッドを分ける」

「でも、そんなこと、どうやって、」

焦った一真をよそに、「海東!」と俺は叫んだ。

「お前、なにかカードねえか、剣はあるが、分ける能力がない。いい案はねえか?!」

すると海東は少し黙って、言った。

「一か八か、存在を拒絶する形でならできるよ」

海東はそう言って、カードを投げた。

俺は、パシッ、と紐に巻かれたカードを掴んだ。

そこには、「ゾーンライド?」とあった。

「ああ。その”BRAKE”を入れてから、アタックのスラッシュを召喚してみてくれ。あとは、君の計画通りにやってみな。僕は、そろそろ行くよ。面倒だからね」

そう言つと海東は、ボールが来て、どこかへ消えた。

俺たちは全員固まり、やがて俺は一真に^{キング}Kのカードを放った。

「これでキングフォームになれ。変身方法は覚えているだろう」

「……………はい」

一真は頷いて、『ABSORB QUEEN』『EVOLUTIORN KING』をスラッシュした。

そして、一真は剣のキングフォームに変身した。肩や胸では、金色の装甲が輝いていた。

「一真、ロイヤルストレートフラッシュを発動してくれ。少しダメージを与えたところで、俺が割く」

ジョーカーは淡々を俺たちを見やり、唐突に駆け出した。

「何をするつもりか知らんが、手を出させてもらっ

「ゲッ、来やがった……」

「相川さん……」

俺たちは急いでそれぞれ、カードを使った。

『SPADE TEN』 『SPADE JACK』 『SPADE
QUEEN』 『SPADE KING』 『SPADE ACE』
『ROYAL STRAIGHT FLASH』
『ZONERIDE BRAKE BRAKER』 『ATTACK
RIDE SLASH』

俺たちは、それぞれの剣に光を宿した。一真は金色の波動、俺はマゼンダの波動であった。

「はああああ」 「うおおおおおお」

俺は右に立つて左手を軸に剣を持ち、一真は左に立つて、右手を軸に剣を持った。

「だああああ……!!」

一真の前には4枚のカードの像が浮かび上がり、剣撃を飛ばした。少し大きなその波動は見事ジョーカーに命中し、ジョーカーは怯んだ。

そこへ、俺が「であああああ!!」と頭から叩き斬った。

その瞬間煙が立ち込め、一瞬、俺の視界はさえぎられた。

煙が晴れた時、ジョーカーは、——ジョーカーと、相川に分離させられた。

それと同時に、『剣崎くん、アンデッドの反応がどんどん消えてく。……あ、2体まで減った』と無線から稗の声がした。バトルフアイトは存続され、人類の掃除は終わったらしい。とりあえず、ホッとする。

——これで、とりあえずはおわったか。

そう思った刹那、ジョーカーが走り去った。さすがに勝機がないと悟ったのだろう。

いくら死なないとはいえ、ダメージは受ける。それに、混乱もし

ているのだろう。奴の意識には、もう相川の精神はないはずだ。

相川は、デッキを握っていた。一真を見、奴の目には、（おそらく初めてであるう）涙がこぼれた。

「ありがとう、一真」

「こちらこそ、始さん」

一真と相川は、そう言っ互いに向かい合い、手を握り合った。

——戦いは、終わった。

「お疲れ様です、土くん」とナツミカン。

「まあ、終わったが、またジョーカーが襲ってきたら、どうするつもりだ？」と俺が言くと、

「とりあえず、ジョーカーより先に相川を封印しなけりゃいいんだろ。簡単な話だ。今はまだ人を襲ってないようだが、襲い始めたらジョーカーを即刻封印しに行く。俺や剣崎、睦月に相川、全員で行けば、まず大丈夫だ」と橘が言った。

「そうですね、橘さん」と睦月。

相川は、無言で一真を見ていた。橘の話を聞いていた一真は、視線に気づき、相川を見る。

「あ、そうそう、さつき土くんが隠し撮りで4人を取ったんですけど、」とナツミカンが言くと、

「かつ、隠し撮りか」と橘は怯んだ。

そう、ジョーカーが去り、虎太郎の家についたとき、ちょうど橘と睦月も立っていたので、この際、と思い、4人を1枚に収めたのだ。雄介のことがあったので、早めに渡そうと、ナツミカンにこそり言っ、ジョーカーとの戦いの話をしているうちに、現像してもらっていたのだ。

改めて、写真を見る。一真が半分無理やりに相川と肩を組み、一真の右に橘が腕を組み、奥で睦月が微笑んでみている構図だ。

——まずまずだな。

そう思い、俺は一真に写真を渡した。

一真は微笑み、それを受け取った。

「ありがとうございます、土さん」

一真は、ニツとはにかんで、手を軽く上げた。

「世界巡るの、頑張ってくださいね」

俺もそれを合図に上げ、

「裏切られても護るつてのは、俺にはできねえ。お前もがんばれよ。相川たちと、しっかり支えあって行けよ」

そう言っつて、ハイタッチをした。

俺の役目は、終わった。

写真館に戻ると、いつものじいさんの「夏海、土くん、おかえり」が聞こえた。

都合よくコーヒーも準備済みだ。

図録を出した。輝くのを待つつもりだ。

だが、10秒ほど待っても輝かず、ナツミカンに「どうしたんですか？」などと言われた。

「なんでもない」

と返し、図録を見るのをやめ、海東に渡されたカードを見ることにした。

破壊、水、炎、雷、風……10枚のカードが揃っていた。

——今度、いくらか試してみるか。

そんなことを考えたところで、テレビから女の声が聞こえた。

『G3のシステムは完璧です。これで、彼とともに未確認生命体を排除してくれるでしょう』

——G3、つてなんだ？……つて、

「未確認生命体?!?!」

ナツミカンと声が重なり、一瞬テレビが聞こえなかったが、テレビに映っていた女性警官らしき人は、こう言った。

「今回、G3の装着者が、改めて、正式決定しました」

「また装着不可能ですぐに要員待ちになるのでは？」とテレビの記

者が突っ込む。

「彼は、G3システム装着のため、あらゆる訓練を重ねたいわばG3の適合者と言っても過言じゃないくらい鍛え上げました。そうそうのことでは逃げないでしょう」

そこまで話が繰り広げられて、ようやくナツミカンが口を開いた。

「G3って、なんでしょ」と。

俺は、「知るか」と答えた。

だが、目測はもちろん付いている。おそらく、剣の次の世界のライダーだ。

そう思ったところで、ようやく図録が輝いた。

目次を見る。そこにはじいさんが読んでいた新聞の表紙にも載っていた名前、「アギト」という名が刻まれていた。

#13 剣の世界「運命の切り札」(後書き)

剣崎「終わったーーーーー!!!!!!」

睦月「お疲れ様です」

橘「お前もよくやってたよ」

睦月「ありがとうございます、橘さん」

相川「俺も、ジョーカーから脱出か」

士「そいや、一応台本通りであやったが、たしか、相川って、本体ジョーカーで、ヒューマンアンドッドのカードを使って、相川の体が生まれたんじゃないかってつけ?」

ナツミカン「じゃあ、士くんが真つ二つにしても、出てくるのは、ジョーカー一体ってことですか?」

士「そのはずだが」

剣の世界ご一行「……えっ?!!!」

海東「そういうところは気にしないでくれ。ここは、一応原作に沿って入るが、かなりご都合主義だからさ。それに厳密に言えばそうだけど、あまり変わらないだろう。あまり突っ込まないでくれたまえ。作者が焦って、台本がめちゃくちゃになる」

雄一郎「それに、士のせいで捻じ曲がってる、という設定にしてるらしいよ。ね、作者さん」

士「お前、またか」

しゅういち「すいません」

ナツミカン「だいたい、実質2ヶ月って、開けすぎですよ、しゅういちさん」

しゅういち「はい。今回、アギトの”記憶”が、かなりかかったんです。剣編の結末も結構迷ったし。ほら、本家『剣』は、一真さんがアンデッドになって、ジョーカーが2体になり、それによって、バトルファイトが継続されたって結末でしょ。あれは哀しすぎる、と考えて、最初はハッピーエンドに、ジョーカーを倒しておしまい

にしようと思っただんですけど、——日が経つにつれ、あれもあれでよかったと思つて、相川さんにもひどいし、やっぱり本家に沿つてと思つてたんです。でも、やっぱり剣崎さんにもひどいと思つて、落しどころがこんなのでした」

モモタロス「つてか、本当に無理やりだよな」

キバット「ほんと、やけ起こしたんじゃないかと、途中、ハラハラしたぜ」

渡「でも、しょういちさん、やる人だと思つてましたよ」

しょういち「ありがとうございます、渡さん!!」

一条「で、アギトの世界で出てきた」おつ、お前は、”の相手は誰なんだ？」

しょういち「一条さんといえど、それを明かすのは、まだです。次の世界の台本、今から作りますから、それ読んで、納得してください」

一条「あ、ああ」

士「そいや、”ダークネスワールド” だったか？そこで使う予定のダークライダー、見つかったのか？」

しょういち「ダークネスワールドは、今のところの仮名です。変わる可能性大です。——で、主人公・映画で使われるライダー・もともと地獄などで使われそうなほどの悪ライダー以外で、悪のライダーに仕立て上げたいライダー、ですね。まだ、カブトの”ガタツク”しか案がないんですよ。この部分は、読者の人の案をなるべく使いたいんですが、まだ案がなく。どうぞ、案があったら、どしどし」

士「まあ、次回にとりあえず期待、か」

しょういち「あ、でも、家庭の事情でいまyoutubeが使えなくて、まともな情報収集源がwikiとHPだけで。だから、またかかりますよ。まあ、大筋はできてます。口調とか、詳しい設定とかを調べる時間ください」

士「頼むから、がんばれよ。まだまだ行く世界あるんだろ。戦いも

いっぱいありそうだし」
しょういち「はい。では、そろそろ次のアギトの世界をお楽しみに
！」

#14 アギトの世界「光と闇の開戦」(前書き)

みなさん、3ヶ月ぶりを超お久しぶりな氷雲しよういちです!!

なぜしばらく無理だと言っていたのに突然更新したかというと、

・ただいまインフルA型にかかりまして、ようやく治った時に急に執筆意欲が沸いたから。

・執筆友達に即刻抜かれそうだと思いました。ので、負けず嫌いでいいです。(笑)

つてな2点が理由です。

つてところで、温めていた(?)けど、まあ、がんばりましたデイクライド改第14話、どうぞ!!!

#14 アギトの世界「光と闇の開戦」

とある海岸で、大きな何かが流れ着いていた。漁師達はそれを分別していた。

子供が何かに気づいて走り出す。その子供の父親が追う。

子供が興味を示したそれは、大きなねじがいくつも付いた、謎の巨大な機械のようなものだった。一部の人はそれをパズルのように呼んだ。

ねじは回り、時も巡った。

1—士

『今回、G3の装着者が、改めて、正式決定しました』と、テレビに出ている女性警官は言った。

『どなたなんですか?』とテレビの記者が突っ込む。

『氷川誠——未確認生命体対策班の一員です』

『氷川氏?!すでに装着者に決定とされていた北条氏はどうなるんですか?!』

『彼には既に諸事情を報告しています』

『また装着不可能ですぐに要員待ちになるのでは?それに、北条氏の功績は偉大だ。HyperG2として、彼に任せたままのほうがいいと思われませんが』

『氷川はG3システム装着のため、あらゆる訓練を重ねたいわばG3の適合者と言っても過言じゃないくらい鍛え上げました。そうそのことでは逃げないでしょう』

『彼の、G3なる者の戦闘能力は未確認生命体を倒すにいたるのでしょうか』

『今までのG1やG2でも、本来の機能では未確認生命体に引けを

とりませんでした。しかし、装着者が幾分その動きについて来れず、スパークする形に陥り、倒すにいたりませんでした。Hyper G 2は自滅することがなくなったものの、未だコントロールに難があり、未確認生命体の殲滅ほどの戦闘力の発揮には至りません。しかし、G 3は、装着者の動きと完全連動する形となり、暴走することはありませんでした。また、氷川氏なら、十分な能力を発揮できると考えられています」

『それでも、G 3の本来の能力、理想論の動きが可能な装着者が見つからなかった、ということですか？』

『そうです。しかし、ついに見つけました。それに最も近いと思われる人材を。我々警察は、彼に訓練をさせ、とうとうG 3の本格的装着へと至った次第です。もっとも、彼は装着して間もない。本来の動きにいけるかは分かりませんが、少なくとも未確認生命体の排除には大きく貢献できるはずですよ』

『では、未確認生命体からの被害は、以後、激減するという見方です。よろしいでしょうか』

『かまいません』

女警官は堂々とそう言い、テレビの画面は切り替わった。

「G 3……この世界のライダーでしょうか」とナツミカンは呟いた。「おそらくな」と俺は答える。

そこへじいさんが言った。

「G 3？ああ、G 3つてのなら、ここに書いてるよ。ほら」

じいさんは新聞の記事を俺たちに渡した。

『謎の戦士・アギト現る！？——G 3他の警察と未確認生命体たちの戦いが未だとどまるところを知らない現在、昨日、G 3の装着者交代が宣言された。今回の装着者も、警察の1人から採用されたとのことである。この装着者交代の宣言は、去年に起こった未確認生命体処理の任務中、前装着者が、伝説の未確認生命体4号と酷似した謎の戦士と出会い、戦士が未確認生命体を倒し、G 3装着者はボロボロで帰ってきたことがそもその発端である。装着者は謎の戦

士——装着者曰く、戦士は”アギト”と名乗っていたらしい——にやられたものと考えられた。そこで、G3のプロジェクトの一員である八代刑事により警察から1名の装着待遇者を警察内で極秘に選抜。以後、訓練を重ねていたらしい。新装着者の実力が如何なほどかももちろん気になるが、伝説の未確認生命体4号に似た謎の戦士・アギトの情報も、ぜひとも欲しいものである。』

——だそうだ。

「未確認生命体4号って、」

「どう考えても、クウガ——雄介さんのことですよね」

俺は頷き、俺もそう思う、と言ってから、おもむろにライダー図録を手にとった。

『仮面ライダーアギト（適合者：津上翔一）

西暦2001年、未確認生命体が滅んでから2年の月日が流れた。沖縄の孤島海岸に人知を超えた謎の遺物・オーパーツが流れ着いたときを同じくして、各地で人間には絶対に不可能な殺害方法を用いた猟奇的連続殺人事件が発生する。警視庁はこの事件の犯人を、かつての“未確認生命体”とは異なる謎の生命体・アンノウンと命名し、未確認生命体対策班（SAUL - Squad of Anti Unidentified Life forms）に専属捜査を命じた。

SAULに配属された若き特務刑事・氷川誠「仮面ライダーG3。瀕死の重傷後、変容していく自らの肉体に恐怖を抱く大学生・葦原涼「仮面ライダーギルス。記憶喪失でありながらも、本能の赴くままにアンノウンを倒していく家事手伝いの青年・津上翔一「仮面ライダーアギト。この3人の若者の物語を交差させ、やがてひとつの巨大な流れへと昇華していく。』

読み終えて、図録を閉じた。

「今度は、どんなライダーが出てくるんですって？」

「基本的に、アギト、G3、ギルスってやつだ。あとは面倒くせっ」
そう言っ、図録をナツミカンのほうへ投げ、そろそろ行くか、

とも言わずにドアへ向かう。

「あ、待ってください、士くん」

いつものやり取りで、俺たちは外を出たのだった。

2―夏海

私は士くん連れられ、――いや、正確には置いて行かれそうになって、ドアを開け、写真館を出た。

「とりあえず、警察署、だな」

と士くんは言い、バイクを探した。

「どこに放置したんですか？」

「放置とか言っな、置いといたんだ」

「つまり、放置じゃないですか」

「うるさい」

士くんは問答を続けつつ、探す。

私はやれやれ、と思いながら、遠くの爆音を耳にした。

――ズッガンツ

「待て、未確認生命体！」

「オイッ、待て！」

「くっ、また消えたか。――ユウスケくん、緑の姿で探索だ!!」

「はい、氷川さん!!」

「――小沢さん、はい、また未確認生命体が消えました。ええ、ユウスケくん緑の姿になってもらい、補助してもらってます」

「氷川さん、いました!! あっちのほうです!!」

そんなやり取りとともに、2人のライダーらしきものが姿を現した。

その刹那、私は身動きをやめた。いや、身動きができなくなった。「キャッ……」

そこでようやく士くんは異変に気づいたようだ。

だが、少し遅い。私は何かに捕まったらしい。

士くんが攻撃しようとした時、

「ユウスケくん、君は彼女を助けてください！——八代さん、”G M-01 スコーピオン”の使用許可、お願いします！！」
という声とともに、誰かが遠くから駆けて来る。

——”雄介”？

聞き覚えのある名前に疑問符を抱き、その姿を確認しようとする。
だが、何かに振り回され、視界がはつきりしない。

誰かは、私の動きを制止する何かに拳撃を加え、私は解放された。
「ナツミカン！」

士くんが駆け寄る。

その時、誰かは、

「氷川さん！！僕らの背中のはうです！！」

と叫び、続いて私たちを一気に押し倒した。

「背後で銃撃をします！！動かないで！！！！」

ダダンッダダンッダダンッ

その言葉通り、銃撃が始まった。

そして、顔を上げたらしい士くんは、私たちを押し倒した誰かに
叫んだ。

「お前は、——クウガ！！！」

私も視線を上げ、彼の顔を見る。

その顔は確かに、少し前の世界で出会ったはずの、赤いマイティ
フォームのクウガの姿であった。

3—士

俺は、自分の目を疑った。

写真館を出た直後、襲い掛かってきた何かからナツミカンを救っ
た者が、クウガだなんて。

クウガの世界は、確かに救ったはずだ。この手で。そして、その
世界からは完全に脱したと思っていたのに。

そのはずなのに、目の前にいるのは、紛れもないクウガだ。

俺は我慢できず、すぐそこが戦闘中ということを忘れ、クウガに

聞いた。

「お前、……」雄介「か?!」

「えっ、何で知ってるんですか?! うわっ」

そこにいたクウガは、雄介、と名乗ったも同然の返答をした。

だが、戦闘が激しくなり、それ以上の問答が出来ない。

俺も氷川さん、と呼ばれた青いライダーの銃撃に思わず顔を伏せた。

やがて、氷川は銃撃を突如やめた。

「くっ、また消えたか!!」

氷川が唸ると同時に、ダンツと鈍い音を立てて、氷川が倒れた。

「氷川さん!!!」

”雄介”は氷川を見て叫び、ペガサスフォームに変身してから、敵を目指して駆け出した。

そして、俺たちには見えない敵と戦闘をした。が、やがて時間切れらしく、”雄介”はペガサスフォームからグロウイングフォームになり、なにやら、一撃にひれ伏した様である。

「雄介!!!」

俺は叫んでから、バックルを取り出した。

「未確認生命体か……久々だしどこにいるかわかんねえが、とつと倒してやる。——変身」

『KAMENRIDE DE DE DECADE』

変身音とともに俺はディケイドに変身し、いつものように新しいカードをバックルに挿した。

『ATTACKRIDE SEARCHER EYES』

そして俺は特殊な目で敵の姿を把握した。たしかに未確認生命体の姿であった。おそらく、己の姿を消せる特殊能力を持つのである。

「一気に倒してやる!!」

そう意気込み、カードを追加する。

『ATTACKRIDE SLASH』

剣を召喚して敵を斬りつけた。

すると、敵である未確認生命体は、案外素早くはあったが、一撃で消滅した。あつけないものだ。

「手応えのない奴だ」

そうぼそりと言った後、俺は辺りを見回した。二人の無事を確認するためだ。だが、やはりというかなんというか、二人は俺を襲いにかかっていた。

「……………またか」

俺はいつものように半ば落胆し、再び剣を握った。

4―ユウスケ

オレは、自分の目が信じられなかった。オレが未確認生命体から助けたのは、そして、今オレや氷川さんを助けたのは、あの、ディケイドであった。

あの”記憶”にあった、オレの記憶に眠っていた”過去の戦闘らしき記憶”に出ていたマゼンダのライダー、仮面ライダーディケイドであった。

悪魔と断じていた、戦士であった。

「ディ……………ケイド」

オレが啞然とする間に、氷川さんは立ち上がり、「お前は……………ディケイド……………」と叫んで、駆け出した。

『氷川くん、氷川くん！どうしたの、氷川くん……………』

氷川さんは珍しく殺気立って、最高出力の出る銃・”GG-02 サラマンダー”を手を取った。

「ああああああ……………」

『ちよつと、氷川くん、GG-02のアクティブ、まだ許可取ってないわよ……………！一体どうしたって言うのよ、氷川くん……………！』

氷川さんは、オレも持つ無線での小沢さんの声にも耳を貸さない。『氷川さん、どうしたの？！氷川さん？……………！』――ユウスケ、氷川さんを止めて……………！』

そう言われている間に、氷川さんはデイケイドに銃を手刀で弾かれ、攻撃を与えられていた。

「オレは一瞬躊躇したが、やられている氷川さんを見てみると、記憶”の中で倒されていった者たちと重なり、恐怖を感じた。」

「おのれ、デイケイド」と怒りに震える自分に似た戦士たちは、自分の前で、デイケイドの手によってなぎ倒されていった。しかも、ほとんど全てが一撃で地に伏した。

記憶にいたオレは、無力感からか、彼らを見送ることしかできず、動くこともできなかった。

記憶は、オレの周りにいた戦士たちが全員倒されたところで消えた。——オレの姿は見たことのない、黒い姿であった。

そして、記憶を思い出し、無意識のうちに叫びながら駆け出した。「うおおあああああ！！！！」

『ユウスケ?! どうしたの、ユウスケ?!!!』

オレはデイケイドに拳を振るった。だが、デイケイドは氷川さんを軽々と蹴り飛ばし、俺の拳を容易に掴む。

オレは一瞬固まったが、また叫んで両腕を用いて拳を投げる。だが、デイケイドは全ての攻撃を受け止め、やがて俺の両腕を取り、「うるせえよ!」と言ってから腹を蹴った。

そしてオレが起き上がろうとすると目の前にデイケイドの拳があった。

氷川さんも肩を支え、ややボロボロである。

「いい加減飽きてきたんだ、このやり取りも。とっとと変身を解け。殺すつもりはない」

俺はそう促され、そのまま変身を解いた。

するとデイケイドも剣を降ろし、変身を解いた。その姿は、やはり先ほど助けた青年であった。

「君は……」

オレは何かを喋ろうとした——が、

『腹部、胸部、頭部、およびバッテリー故障。戦闘を離脱して! 氷

川くん!!」

小沢さんの悲鳴のような命令で氷川さんの方に目が行った。

氷川さんは倒れこみ、動かなかった。

「氷川さん!!!」

——戦闘は、一時休戦となった。

5―士

「ダメね、胸部、頭部は問題ないし、バッテリーも使いすぎだけで故障は何か……でも、腹部の故障は免れなかったそうよ。数時間かけて直すって修理班」

そう男勝りな女警官、小沢澄子は言った。氷川の着ていたG3の視点から、氷川と戦ったデイケイドの正体を知っているので、暗に俺を責めているのだ。

「……………」

「士くん、謝ったらどうですか?」

ナツミカンはそう言うが、

「俺はただ正当防衛しただけだ。今までだって、こっちが仕掛けてきたわけじゃねえのに、とてつもない怒りを込めて攻撃してくる奴らばかりだ。いい加減、正当防衛の術も慣れたってもんだ」

「そんな、」と助手らしき男・尾室隆弘が言いかけ、”雄介”も「はあ?!」と訝しげに反論しかけたが、その抗議の声は、小沢の机を叩く音でかき消された。

「ガチャガチャ言ってるじゃないわよ、氷川くんがやつとG3をまともに扱えるようになって、表舞台にも堂々出れるようになって、ちょうど10戦目の記念だったのに、いきなり乱入してきたクソガキに助けられて、氷川くんの自我崩壊しちゃって、制御もできず結局やられて、もちろんのごとく修理でまたブランクができて、面倒だって言ってるのよ!!!いい、アンタ、加減してもんがあるでしょ!!!いくら勢いよくあんたにぶつかって来たとはいえ、未確認生命体53号と交戦し終えたばかりで傷が癒えてない中での戦闘よ!!!

ちよつたあ、加減してくれたって良いじゃないのよ！！こつちの都合とか、そういうのもつと考えなさいよ！！！」

オレは、いや、ここにいるほぼ全員が引いた。八代と呼ばれていた刑事だけは平然として立っている。

やがて、その八代が口を開いた。

「だいたい、なんでユウスケまで狂ったように戦い始めたの？」

「えっ……えつと、いや、その、」と雄介は口ごもった。

「そいつらは、俺が”ディケイド”だったから、襲いにかかったんだ」

「”ディケイド”って、なんなの？」

「いや、それは、」

と雄介が口を開こうとしたが、対策班のドアが開き、制された。彼は、ディケイド。私や彼は、敵と認識したんです。ほら、私が初めてG3で変身した時、恐ろしい映像を見た、と言ったでしょう。その映像で目にした、G3に似た戦士です。そして、ユウスケくんも言っていたでしょ、恐ろしい記憶のことを」

”雄介”は、「はい」とだけ言った。

俺たちは、まだ黙っている。

「まあ、ちょうど、ある程度未確認生命体の情報を得られたから、ちよいと強化できるでしょうけどね」

と言つて、小沢は席に着く。

そこへ、河野と書いてあった刑事がドアを開けて現れた。

「よお、氷川、八代、小沢に尾室、あと——」

「ユウスケです。小野寺ユウスケ」と、雄介は答えた。

「ほら、前に言ったじゃないですか、河野さん。記憶喪失の少年を預かったって。彼ですよ。小野寺ユウスケ」

ということらしい。クウガに変身していた青年は、雄介は”ゆうすけ”でも、小野寺ユウスケ”らしい。俺たちがクウガの世界で出会った五代雄介とは、全くの別人だ。

「ああ、小野寺君ね。で、八代、小沢、氷川に小野寺君、今から会

議だ」

「あなたたちG3システムの存続についてね」と嫌味つたらしく言葉を発して、河野の後ろから現れたのは、北条。元G3システムの装着者。氷川に敵対意識があるとか何とか。

「この前までは、どうもありがとうございました、小沢さん」

「何の嫌味かしら、北条君」

「いえ、僕の変わりにこんな方をG3システムに起用するとは、全く恐れ入ったとしか言いようがありませんからね。それに、あなたのおかげで良い経験ができました。私は、一気にあなた達をねじ伏せて見せますよ」

北条と呼ばれた男はそう言うと、足早にそこを後にした。

「おいっ、北条待てよ」

と唯一河野だけが彼の姿を追った。他の者たちは、各々ゆっくりと腰を上げた。

「俺たちも行つたほうが良いかもな」

俺はそう呟いて、ユウスケや氷川達の後を追った。

会議の議題は、やはりG3システムの存続と俺たちの正体、ユウスケの処遇等のことだった。

「ですから、小野寺君は実際に未確認生命体との戦闘もでき、功績があります。4号と酷似しているのは目を瞑るべき、いや、むしろ世間へのアピールには相当都合ではないですか。4号が帰ってきて、また昔のように未確認生命体を倒してくれる、と」

「しかし、こちらにはすでにG3システムがある。氷川君に全てを任せても、十分任務を果たしてくれると思うがね」

「いえ、お言葉ですが、氷川さんの功績は十分賞賛に値すると我々も思っています、近距離戦が得意な未確認、または素早い未確認ですと、氷川くんでも苦戦してしまいます。そこで4号である小野寺くんの近距離戦法を用いれば良い。逆に小野寺くんの持つ、遠距離に向く姿、緑の姿は時間制限があり、遠距離戦法は全くではないとはいえ、少々不向きかと思われます。でしたら、足してちょうど

よいバランスとなる氷川くんと小野寺くんのコンビで未確認生命体に挑むべきです」

と八代と小沢は絶妙なコンビネーションを見せ、会議をねじ伏せた。会議室を出ると、北条が待ち構えていた。

「こんにちは、八代さんに小沢さん。それと氷川さんに、ユウスケくん。あとは門矢さん、でしたっけ？」

八代は冷たい目で、氷川とユウスケは礼儀正しく会釈した。が、小沢に限っては無視をして、素通りしていた。俺はそれを眺めていた。

「あなたがた、私からHyperG2の地位を剥奪してどうも気分が良さそうですね。そこまで氷川さんが気に入ってますか」と北条がからかうと、

「ええ、人命救助を優先しないあなたより、氷川くんの方がよっぽど良いわ。」と八代。

「さきほど、4号に似たユウスケくんをアピールに使えばなどと言っていた者の発言とは思えませんね、八代さん」

「あなたこそ、未確認生命体の力に怯えて退却し、ユウスケくんのおかげで助かったものの台詞とは思えないわね」と小沢。

「口が過ぎますよ、小沢さん。HyperG2、G3の開発のおかげでSAULに配属されるほどの急昇進を為したとはいえ、あなたは八代さんの次の地位。このなかでは一番下なのですよ」

小沢は怒りに身を任せて北条を殴ろうとしたが、氷川が小沢の右手を制し、首を振って見せた。

小沢は無言でムツとしたまま腕を下ろし、北条は面白そうに小沢を見る。

その時、いきなり、

ブーブーブーブー

警報機が作動した。

「おやおや、おでましですよ、未確認生命体」

そういうと、背中を向けて手を振りながら去っていった。

小沢は、「誰かあたしにあいつのバカ頭がち割る権限くれないかしらね」と呟いたが、皆あえて無視して対策班へ戻った。

Gトレーラーの中では慌しく装着作業が行われていた。

脚部、腕部、胸部、頭部。最後に腰へバッテリーらしきものが装着された。

「行くわよ、氷川くん」

「はい」

会話しながら、氷川は自らのG3用のバイク・ガードチェイサーに跨り、小沢はGトレーラーを開いて、バイクの発車を促した。

そうして氷川のバイクはGトレーラーから出て、俺とユウスケの間に来た。

「ユウスケくん、門矢さん、そろそろ変身しといて下さい。近いらしいです」

「いや、悪いが俺は今回は見学させてもらうぞ。お前らがまたダメになったときには助けてやるが」

「……ユウスケくん、変身を」

「えっ、はい！変身！」

ユウスケはバイクに乗りながらクウガに変身した。

そして数十分後、夜となつてしまつた現場に到着すると、

「死体が、木に刺さつてる……」とユウスケ。

確かに現場とされる地点のあたりに2、3人刺さっていた。

氷川が刺さっている人の手首の脈をみる。

「やはり——遅かつた」

「でも、なんなんですかねえ、未確認生命体、木に人を刺す奴なんていましたっけ？」とユウスケ。

「コンクリートにめり込まずくらいなら何度もあつたんじゃないか？」と俺。

「コンクリートにめり込まずのは、確かに何度かありました。でも、ああいうのは力任せにやれば、強い人なら人間でも人を投げてめり

込ますことは出来る人はごくごく稀にいます。簡単に言えば、今までの未確認生命体は、超人的運動能力で人間を圧倒していたんです。でも、これは少し違う。確かに殺しは力任せかもしれませんが。死んでから刺さっているようなので。でも、木に刺すという行為はまず出来ません。今までの未確認生命体は、そういう能力を見せたことがありませんでしたから」

そこまで言い終えたところで、突如無線が耳を突いた。

『氷川くん、小野寺くん、門矢くん、後ろ！！』

3人同時に背後に目をやった。一瞬遅れて”未確認生命体”1体が現れた。

俺としては、普通に戦う相手なので、素手でなぎ払い、ユウスケたちに送った。

すると、

「なっ、なんだ、こいつの力?!」

「くっ、半端ない!!」

と言って、俺の予想に反して苦戦した。いや、圧倒されていた、というほうが近いであろう。

クウガとなったユウスケは軽々と背後をとられ、背を蹴り飛ばされた。

そしてG3となった氷川は胸に拳を一発浴び、一撃でバッテリーも吹き飛んだ。

『何よ、コイツ?!!!——戦闘を離脱して、氷川くん!!!!』

そう叫ぶ小沢たちの声が痛いほど分かる。

氷川は辛うじて起き上がろうとしたが、相手は氷川の右足を踏み、やはり折った。氷川は激痛から叫び声を上げた。

『右脚部損傷!! 骨折しました!!!!』

『氷川くん!!!!』

2人は悲鳴に近いような声を上げたが、もちろん敵には届かない。そんな時、ユウスケがようやく起き上がり、タイタンフォームで”未確認生命体”を斬り伏せようと雄叫びを上げて駆けてきた。

”未確認生命体”は、それを見てか見らずにか、頭上に円を浮かばせ、そこから細長い、先に剣が付いた杖を出し、振った。

そこでようやく、俺は気づいた。

「おいっ、八代！！小沢！！こいつは未確認生命体なんかじゃない！！——アンノウンだ！！！！ユウスケはともかく、氷川はまともに戦えねえ！！！！俺も変身して、こいつを——」

倒す！！と言いかけたところで、木の間から、光が見えた。一筋の、大きな光だ。

タイタンフォームからいつの間にかドラゴンフォームに変わっていたユウスケも、その光に目を奪われ、敵のアンノウンも然りであった。G3の仮面を取った氷川もその光を見つめた。

「なんだ……あれは………」

氷川とユウスケが同じようなことを言った後、

「……………アギト」

とアンノウンは呟き、杖でクウガを払って光へ向かっていった。

すると、光からシルエットのようにライダーらしき姿が浮かび上がり、そいつはアンノウンを互角以上に戦いを繰り広げた。

そして光のライダーによる手刀・拳撃が幾度かすると、アンノウンはぐったりと離れ、光のライダーは左手を腰にやり、右手をゆっくり右から目前にやって飛び上がって、アンノウンを蹴り貫いた。

アンノウンは爆散した。

光の戦士は、ただただ周囲を見据えるだけであつた。

6ー???

そこは、病人以外誰もいない、病室だった。水泳で溺れた人がそこで寝ているらしい。例によって、私は誰にも見えないし、誰にも聞こえない。

茶髪の一見ヤンキーに見えなくもないこの青年は、誰なんだろう。ひと時見たあの醜い酷い世界に近い者なのだろうか。あの地獄絵図の創生者だろうか。

なぜ、私の魂はまだ存在しているのだ？

いつそ、この彼に触れて碎けてしまおう。

そう思ったとき、後ろから少年の声がした。

「ダメだよ」と。

10歳にも満たない少年だ。

「君が死んでは、全ては始まらず、全ては終わらない。君はキープ
ーソンなんだ」

それだけ言うと、少年は病人の青年の手に触れ、目を閉じた。

そして微かに微笑んで、手を離して去って行った。その直後、青年は目を覚ました。苦しみ始めた。悶え始めた。もがき始めた。私の体を何度も手がすり抜けた。

「うがああああああ！！！！！！」

彼は目覚めた——緑の野獣として。

#14 アギトの世界「光と闇の開戦」(後書き)

翔「おお、ついに始まりましたかあ」

士「お前、まだ登場してねえだろう。まだ引っ込んでろ」

翔「だって、待ちくたびれましたよ、3ヶ月も。それに、一応出ましたよ」

士「光の戦士、としてな」

し「ういち「はいはい、士さん、そこらへんで会談止めてください。まだ会ってないんですから」

士「お前が書くペース遅すぎて会ってないだけだろうが！」

し「ういち「違いますよ、ちゃんと区切りを考えた結果、会えなかったんです！」

士「せめて途中で翔一と会わせる機会あったろ！ユウスケや氷川との初対面時とか！」

し「ういち「そんなシーンを挿入したら、小澤さんに修理遅れるってキレられますって！！！」

氷川「大変なんですネ……」

ユウスケ「怖いでもんね、小澤さん」

士「それにしても、ユウスケは、原典ではディケイドクウガの世界でのキャラじゃねえか。」アギト”は、アギト・G3・ギルスの3体だけだろう！何入れてんだ！」

士「ちゃんと意図ありますって！！」

渡「なんか、士さん怖いよお」

キバット「ああ、よしよしワタル」

良太郎「そんなことより、1話目の冒頭変えたんですってね」

し「ういち「そうなんですよ。どうも冒頭は処女作とはいえ納得行かず、考えあぐねた結果、こうしました」

士「大して変わってないな」

夏海「でも、映像として想像しやすくなりましたよ」

しょういち「そうですか！」

雄一郎「まあまあよかったんじゃないですか。ところで、みんなアルファベットのなに、”ザコーゾ ザコーゾ”って……」

しょういち「いや、あれ、英語表記が見当たらなかったんですよ。

ローマ字読みも良いのかどうなのか迷って、あれだけ。本当は、映画の鳥系コンボでも良かったんですが」

士「何の話をしてるんだ？」

しょういち「えっ、士さんが回らない世界のライダーの話」

雄介「えっ、行かないの？！オレたちのところ散々ぶち壊しておいて、行かないところあるの？！」

一条「それはそうだ。最新のライダーは拾いきれん。だから最初に10の世界、と銘打ってたんだ」

海東「だから、僕たちが行くのは、クウガ・アギト・龍騎・555・剣・響鬼・カブト・電王・キバ・Wの10の世界だ」

士「で、”ザコーゾ”ってのは？」

しょういち「オーズってのの世界です。実は、ちょっと迷ってることがあって……」

鳴滝「まさか、外伝が何かで出そうって気じゃないだろうね」

しょういち「いや、外伝でオーズ以降のライダーも巡らせられたらな、というのはとくに考えてるんですけど、——ほら、本家ディケイドでは、”ディケイドの世界”はさすがになかったですが、”ディエンドの世界”ってのはあったでしょう。ああいう風に、ディエンド・ウルグ・ロード、あと2人のオリジナルのライダーのウラ設定ならぬウラ世界見たいなの作ろうかなあと思ってるんです」

一真「めんどろなことをするんすね」

しょういち「それと、最終世界の章で、ロードやディエンドたちにもオリジナルの地獄のライダーと戦ってもらいます。もちろん幹部その幹部を混ぜた話を作りたいな、と思ってるんです。ウルグともう一人のウラ世界の世界観みたいなのは、頭の中でもう出来てます。一応、メモには書き起こしましたよ」

士「ってか、入れるタイミングがなくなね？」

しょういち「はい。ディエンド・ロードはともかく、ウルグは敵の状態だし、他2人は最終章開始まで出す気があまりないし」

士「で、どうしたいんだ？」

しょういち「はい、一応、外伝じゃないですけど、ほら、劇場版って時系列狂ってるじゃないですか。ああいう風な解釈してもらって、ダークネスワールドの直後に入れようかと。もしかしたら、流れよく本編から行けるかもしれませんけど」

夏海「要は、無理やりキャラの存在性をアピールするため、時系列も無視して世界をねじ込もうって訳ですね」

しょういち「そこまでボロクソ言わないでください……で、読者様にお聞きしたい！」

・この作品に登場するウルグ・ロード・ディエンドらのオリジナルの世界を作るのは決定してるのですが、ダークネスワールド（1周目終了後、32〜34話）の直後に入れるべきか、全て終わった後にウラ設定・外伝的な話としてあとから載せるか。どちらがいいか、選んでください。僕の本命は、全て終わった後かなと思います。

・もうひとつ。2、3話前から言ってるのですが、あまり票が来ないので。ダークネスワールドでのダークライダーはどのライダーを起用して欲しいか！（主人公・元々悪役・映画のみのライダーは除く全ライダー指名可です！）

この二つのなかで、意見が言いたくなったら、どうぞ、感想のほうへ。感想（この作品の感想はあってもなくてもいいです！）の一言に意見・票を書いてくださるだけで結構です！！

皆さんのご意見ご感想もお待ちしております。また、誤字脱字の指摘もありましたらどうぞ

士「長い終わり」

しょういち「いいでしょ、ほら、礼しますよ。みなさん、僕はしばらく休載すると思います。（とか言いながら、ちよくちよく執筆していくんだろうが）まず更新はないと思います。というのも、もう

受験生になりますので。勉強で。大学受験、頑張ります!!!」

士「その前に留年危機だな」

しゅういち「それ言わないで下さい……あ、この作品はもちろんまだ連載し続けていきますし、完結するまで終わる気はありません!!!執筆やそもそも生活もの糧となる感想・メッセージ等も出来る限り応対したいです!!!では、また更新できるその日まで!!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4600k/>

仮面ライダーディケイド～version改～

2011年9月17日20時50分発行